

東京喰種:re cinderella

瀬本製作所 小説部

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

CCGに所属する喰種捜査官 佐々木琲世一等捜査官

彼には誰にも言えない友達がいた

その友達は彼の本当の過去を知るシンデレラたちであった

この作品は東京喰種 CINDERELLA GIRLSの続編です。

東京喰種：reをベースに書いていきます。

※この作品は東京喰種とアイドルマスターシンデレラガールズのクロスオーバー作品です。

投稿予定日： 5月12日（木） 12時

目次

1章 夢の中

大切な人	1
snake	22
Bell	33
眠る彼	48
執徒	60
自我	67
苦惱	88
内心	96
scent	106
継情	112
Redoubt	122
偽り	132
影の存在	142
nostalgic	158
狐	170
Touched by the Rhyme	182
嫉妬	189
presentiment	200
望み	212
嵐の前の静けさ	220
ironical・stranger	227
misrun	238
Caring Feeling	245

黄昏	461
Cheshire Cat	454
打明	444
幸せが遠ざかる道	430
あなたのことばかり	425
relation	418
いけないこと	411
偽心	403
猜疑心	397
interests	391
情緒不安定	381
不幸な私	367
本当の姿がわからない会話	357
side deals	349
命の水	340
我が主人	332
前半と後半	325
聖なる夜	315
dawn	305
境目	297
凍りつく	288
いずれ、死	278
現実に叩き落とす	271
混乱する彼	262
瀬戸際	253

秘密の協力？	630
取引の条件	624
破局通知	617
加速する、亀裂	608
f i s s u r e	604
突然現れる	597
自分で歩け	586
彼に関する聞き出し	581
ヒガンバナ色の糸	573
あなた	567
2章 目覚め	
隠し、微笑む	557
A w a k e K	548
すれ違い	543
”終夜”	537
異様さ	530
さよならの前	524
報告書	518
楓	510
隔無	505
夢の終わり	489
L a L u n e	483
C h o c o l a t e C o s m o s	475
N o . 6	469

1章 夢の中
大切な人

僕がこの世に生まれて初めて訪れた春

冬とは違い自然の暖かさに心地よく感じた

今まで冷たい牢獄に閉じ込められた僕にとって心も暖かくなる心地よい季節だ

そんな初めて感じた春の時、思わぬ出来事が起こったんだ

それは僕に大切な友達ができたんだ

都内のとある花屋さんに訪れたら、3人の女の子に会ったんだ

彼女たちは普通の女の子ではなく、皆が知っているトップアイドルであつた

4月24日の夕方

今日は笑顔がいい彼女の誕生日

僕は今年もまた誕生日会をやるあのお花屋さんに向かう

彼女たちと会い、誕生日の彼女を祝うために

――――

東京 1区 CCG本局

夏の暑さがまだ残る9月の始め

僕はCCG内にある各班の元に顔を出していた。

それは挨拶で訪れているのではなく、謝罪で訪れているのだ。

僕が所属している班はまだ聞こえる蝉の鳴き声がとてもイライラしてしまっただけの問題を抱えていた。

(全く… 今日忙しい…)

僕の名前は佐々木琲世。

喰種対策局で働く喰種捜査官。

僕はクインクスのメンター(指導者)として班内の4人の新人捜査官を纏めているのだが…

(今日も勝手に何処かに行ってるな…)

本当ならば喰種捜査官は単独行動をするのはダメなのだが、僕が指導している子たちは離脱することが日常茶飯事となっていた。特に

4人のうち2人は他の捜査官が捜査している喰種を勝手に捜査をしているため、毎回他の捜査の迷惑に僕は頭を下げることが当たり前になりつつあった。

今年の4月から一緒に共同生活に入ったのだが、皆が帰る時間はバラバラでたまには出会う日がない時がある。

言い訳をするつもりはないけど、一人一人が個性が強すぎるから指導に苦労してしまう。

僕が問題に頭を抱えながら歩いていると…

(…ん?)

するとポケットにあった携帯が鳴った。アキラさんからの連絡かと思いい画面を見ると、意外な人物からの連絡であった。

(か、楓さん…)

電話の画面を見ると楓さんからメールが着ていた。

メールを開くと『時間開いてる?』と言う返事であった。

(今、時間があるから話そうかな…)

時計を見るとちょうどお昼時間であった。

今謝罪すべき班はなくなり、今のところ手は空いていた。

僕は返信メールを打ち始めた。

『どこに行けばいいですか?』

『いま場所教えるね』

数十秒後に届いたメールを開き、表示された地図に頼りに僕は待ち合わせ場所に向かった。

—————

CCG本部から少し離れたところにある喫茶店。

僕はその喫茶店の中にあるテーブル席に座って待っていた。

すぐに来ると思っていたが、席に座ってそろそろ10分が経とうと
していた。

頼んでいたコーヒーは暖かさを失い、生緩くなっていた。

楓さんが来ないかそわそわしていると、見覚えのある姿が喫茶店の窓に映った。

まさかと心の中呟くと喫茶店の扉が開いた。

「どーも、佐々木くん」

僕の名を呼ぶ女性がお店の入り口から姿を表した。

その方の名は高垣楓。

346プロダクションでアイドルをしている女性で、現在29歳。

僕より7つ年が上の女性だ。

「こんにちは、か…楓さん」

僕は彼女の名を言う前に周りを見渡し、小さな声で楓さんと言った。

それにはちゃんとした理由があつた。

「どうして僕を呼んだんですか？」

「ええ、ちよつと時間が空いたてたから佐々木くんとお話しようか
なつて」

楓さんは世間では大きく名が知られているため伊達メガネに帽子
を着用している。

いつも僕は楓さんと話すときは周りに注意深くしなければならな
い。

楓さんは席に席に着くとお店の店員さんにオリジナルブレンド
コーヒーを注文をした。

「それにしても楓さんが選んでくれたこのお店が出すコーヒーは美味
しいですね」

「佐々木くんが喜んでくれてよかったわ。ここの喫茶店が出すコー
ヒーは高品質（こーひんしつ）のコーヒー豆を使つてると聞いたわ」

「…」

楓さんの言葉を耳にした途端、僕は少々呆れた様子になつてしまつ
た。

「どうしたの？佐々木くん？」

「今、ダジャレを言いましたね？」

「さすが佐々木くん、気づくのが速いわ♪」

楓さんはそう言うのと待つてましたと言わんばかりに小さくパチパ
チと拍手をした。

世間では楓さんをこうして話し合えることに高嶺の花と考えるかもしれないが、僕はそう感じない。

実際こうして話してみるとテレビや雑誌を見る楓さんはミステリアスであるけど、結構天然でダジャレを息をするように言うのだ。

少々空気が悪くなつた僕たちが座るテーブル席に楓さんが頼んでいたコーヒーが机に置かれた。

「いつも佐々木くんは私のダジャレを聞くと不機嫌そうになるよね？」

「別にダジャレを使うのはいいんですけど…台無しになると言うか…。」

「なんか否定されているように聞こえるわ」

楓さんは先ほどの不機嫌になつた僕を真似するように視線をそらし、頼んでいたコーヒーを飲んだ。

「いや、ダジャレを使うのを否定するつもりはないですよ！その…使うタイミングですよ！」

「ふふつ、もう佐々木くんたら。そこまで慌てなくて大丈夫よ」

慌てて言葉を返していた僕を見た楓さんは不機嫌そうな顔つきから、笑顔に戻った。

「先ほど私のダジャレのタイミングは少しダメかもしれないけど、佐々木くんの方も改善すべきところもあるじゃない？」

「不機嫌そうなところ…ですね」

「正直でよろしい☒」

相変わらず楓さんは少々面倒くさい方だ。

僕をからかったり不機嫌になつたりと、クールな一面とは裏腹に子供っぽさが現れる。

「それで…話すことはありますよね？」

「ええ、まだ話すことはあるわよ」

「もしかして、今度居酒屋で飲み会するから同行しろと言うわけじゃ」「いやいや、しばらくは瑞樹さんや早苗さんはお仕事で忙しくなるからしばらくはないわ」

僕は何度か楓さんたちが集まる居酒屋に同行したことがある。

最初同行した時の僕はワクワクしていた。

楓さんと同じアイドルの瑞樹さんや美優さん、早苗さんに心さんなど会うことができるし、出会った「最初」は良かった。

だが楓さんたちがお酒を進めるとワクワクしていた僕の心が一変した。例えるならば天国から地獄に変わったと言ってもいいぐらいに酷い有り様だった。

一体どんな状況なのかそれぞれの本人たちに影響するため、読者皆様のご想像にお任せしたい。

それ以降、楓さんから居酒屋のお誘いを受けると僕は真っ先に受け入れず、抵抗をするようになった。

「最近、卯月ちゃんとか会ってる？」

「いやあ…それが最近部下の指導で手がいっぱい…」

僕がそう言うのと少々ため息をし、先に頼んでいたコーヒーを口に入れた。

先ほど言った通りだが今僕が指導するのはCCG内では問題児と化している。

去年までは会う時間があつたのだが、今は時間が欲しくなる程ない。

「それは大変ね…もしかして佐々木くん一人で指導を？」

「いえ、他に手伝ってくれる人はいますが…ほとんど僕がやってますよ」

僕の上司であるアキラさんも手助けをするが、他の仕事も持っているため僕一人がやっているみたいない状態だ。

「まさに猫の手も借りたいと言つてもいいぐらいですよ…」

「猫の手も借りたいですか…もしよければキャキャツとしている私はどうかしら？」

「いやいや、楓さんは喰種捜査官ではなくアイドルですし…って今ダジャレをいいましたよね？」

「さすが佐々木くん。鋭いわね」

楓さんは僕をからかうように笑った。

楓さんとの会話はいつもダジャレが出てくるせい、僕にもダジャ

レの影響が出てきている。

前にアキラさんにダジャレをノリで言ったところ、冷たく返されてしまった。

「卯月ちゃんは佐々木くんはずっと会いたがってるわ」

「わかってますよ。ちょうど今朝に連絡がきましたよ」

「ふふっ、やっぱり卯月ちゃんは♪」

楓さんはそう言うのと微笑ましく笑った。

島村卯月。

彼女は楓さんと同じく346プロダクションの人気アイドルであり、僕より二つ年が下の女の子だ。

「前に卯月ちゃんから聞いたわ。メールばかりで電話はまったくしてくれないってね」

「前までは一人暮らしだったからできたんですけど、今は共同生活してるので安易に電話はできないですよ。しかも卯月ちゃんとの電話はとても長くて…。」

前に電話した時間は四時間ぐらいで、今まで卯月ちゃんが保っていた未央ちゃんとの話した時間の二時間半と言う記録を抜いたのだ。

さすがの長すぎることもあって、電話をした翌日は寝不足気味だった。

「あれ？もしかして一緒に住んでいる子たちには知られてない？」

「まあ…多分知らないんじゃないですかね。知られるとまずいじゃないですか」

今のところ僕が卯月ちゃんと知り合っているとわかっているのはCG内では有馬さんとアキラさんしかない。

もし広まってしまえば大変なことが起こり変えねない。

楓さんは持っていたコーヒートをテーブルに置くと両肘をテーブルにつけ、両手の甲を顎に乗せた。

「で、卯月ちゃんとはいつ会うの？」

「実は…明日なんですよ」

「明日？」

「実はお互い空いている日は明日しかなくて…」

どうやら卯月ちゃんはこれから忙しくなるらしく、その前に僕に会うため明日に会うことが決まった。

「普通だったらダメですよね？いきなり明日出会うとかは」

「いいんじゃないの？別に付き合っただけじゃないでしょ？」

「た、確かに付き合っただけじゃないですけど…。」

僕は楓さんの言葉に戸惑ってしまった。

アイドルと恋愛だなんて夢物語に過ぎない。

僕が卯月ちゃんと付き合うなんて…

「アイドルと恋愛… 確かにそれはいけないことかもしれないけど、佐々木くんと卯月ちゃんならいいんじゃないかな」

「え？それはなんで？」

「さあ、どうしてなんででしょうね？」

楓さんは少々微笑みながらコーヒを口に入れた。

また楓さんが僕をからかった。

「でも、佐々木くんが元気そうにしていたからよかったわ」

「ええ、こうして話すのはここ最近ありませんでしたね。でも楓さんの方がよく出会っていると思うのですが…？」

「もしかすると卯月ちゃんよりは会ってるかもね」

楓さんは卯月ちゃんより仕事を多く携わっているが、会う頻度は楓さんのほうが実は多い。

多くは昼休みや仕事終わりに楓さんからメールが来るため会うタイミングが掴みやすい。

楓さんとしばらく話していると、ふと見た時計の針の位置に話していた話題を止めた。

「あら？どうしたの？」

「もうそろそろ仕事に行かないといけないので」

「もしかして佐々木くんが指導している子たちの元に？」

「ええ、ほとんどはそうですね」

謝るべき班はなくなり、謝るきっかけを作った二人の元に行かなければならない。

「生徒がお待ちしていますよ？佐々木先生♪」

「恥ずかしいですよ…… 楓さん」

僕は自分が頼んだコーヒーの代金を楓さんに渡し、席に立ち上がった。

「あ、そうそう佐々木くん」

「ん？」

すると行こうとした僕に、突然楓さんはなにかを思い出した仕草をし呼び止めた。

「もし今度時間があつたら、私が淹れたコーヒーを飲んでくれないかしら？」

「楓さんが淹れたコーヒー？」

「私こう見えて腕には自身があるの。もしかしたら佐々木くんが驚いちやうかもしれないぐらいにね」

楓さんはそういうと誇らしげに鼻を鳴らした。

「本当ですか？僕の舌はこう見えて辛口ですよ？」

「ええ、わかっているわ。だけど私も同じく辛口だと言うことは忘れないでね」

楓さんはお酒好きで知られているが、以外にもコーヒーも同じくらいに好きだと言うことはあまり知られてない。

僕は本を読むぐらいしか趣味がなかったのだが、たまたま訪れたとある喫茶店で楓さんに出会ったことで僕はカフェ巡りが趣味になった。

あの出会いがきっかけで今でもこうして話し合える仲になった。

「じゃあ、行きますね」

「また会いましょう、佐々木くん」

僕は楓さんに手を振られ、CCGへと向かった。

楓さんは僕にとっては数少ない知り合いの一人で、今までCCGしか話し合える人がいなかった僕に何気無い話から相談に乗ったり乗られたりすることができる大切な人だ。

テレビや雑誌で見る姿とは違い少々面倒臭い人なのだけど、一緒にいて楽しく感じられる「姉」の存在に近いと言ってもいいぐらいの

人だ。

—————

——— 翌日

今日は久しぶりに彼女と会う日。

最後に会った時よりも時間が経ち、嬉しさと緊張がする。

流石に身だしなみもちやんとしないと彼女に失礼だから、いつもよりは気を使う。

少し早く待ち合わせの公園に向かった、僕。

もう少し家に居ても良かったのだが、どうやら僕の体と心はじっとしているのが嫌になったらしい。

いつもは何時間ほどでもじっとしてられるけど、やはり今日はいつもとは違うとわかる。

午後12時55分

約束の公園にたどり着いた、僕。

公園にある時計を見ると約束の時間の5分前。

周りを見渡すが、彼女らしき人物は見当たらない。

彼女を探していた僕の胸は心臓の心拍音が聞こえるほどドキドキしていた。

見つからない時間が長引くほど、さらにドキドキとする。

約束の時間が経った時、僕はある人物に目を止めた。

その人物はベンチに一人座っている女性であった。

僕は胸の中で『彼女だ』と確信をした。

彼女の姿を見つけた僕は微笑み、彼女の名を呼んだ。

「卯月ちゃん」

僕がそう言うのと彼女は振り向き、僕と目が合うと笑顔になった。

「あー！こんにちは、佐々木さん！」

透き通るような肌に素敵な笑顔をする左に髪を結んだ女の子。

彼女の名前は島村卯月。

346プロダクション所属するアイドルだ。

「ずっと電話ができなくてごめんね…」

「いえ、謝らなくて大丈夫ですよ！私も同じく忙しかったので大丈夫です！」

卯月ちゃんが怒るのはそうそうないが、逆に怒らそうとは考えない。

挨拶をし終わった僕は卯月ちゃんの隣に座った。

「最近お仕事が忙しいと聞いたのですが？」

「うん、最近手がいっぱいだね…はは…」

僕は少し苦笑いをしたのだけど、流石の笑ってられないほど問題の深刻なんだよね…

「そうなんです…どんなこと？」

「新人の捜査官の指導をしているんだ。卯月ちゃんと同じ年の子達でね」

「そうなんですか！何人ほどですか？」

「4人だね」

僕がそう答えると、卯月ちゃんは『4人ですか!』と驚いた。

僕が指導している子たちは大体19、20歳で、卯月ちゃんと同じ年頃だ。1人目は瓜江^{うりえ}久生^{くいき}、2人目は不知^{しらず}吟士^{ぎんし}、3人目は

六月^{むつき}透^と、最後は米林^{よねばやし}才子^{さいし}だ。

「僕はその4人を指導しているけど…」

「指導をしているけど？」

「中々言うことを聞かないんだよね…」

「言うことを聞かないんですか？」

「うん、今の所一人ぐらいしかね」

「…え？」

瓜江くんと不知くんはそれぞれ勝手単独捜査をして喰種を駆逐す

るし、才子ちゃんは仕事はせずに家に引きこもっている。今のところ僕の言うことを聞くのは六月くんだけだ。

「だから指導するのが手がいっぱいだったから、去年までは何度か会えたけど、今年の4月から忙しくなったね」

「そうなんですね。やっぱり休日も同じくですか?」

「うん、たまに安らげる時もあるけど、卯月ちゃんとか会えるかと言うと…… 時間がないね」

たまに落ち着いてくれる時もあるが、時間はたくさんあるわけではない。

「卯月ちゃんは最近忙しい?」

「ええ、もしかしたら佐々木さんと同じぐらいかもしれないですね。私も同じくたくさんのお仕事が来まして、中々会えませんでしたね」

卯月ちゃんは一時期大学受験でアイドル活動を休止をしていたが、活動を再開すると一気に仕事が増えて忙しくなった。特に今年の四月からテレビ出演が多くなり、さらに忙しくなったと耳にした。

「卯月ちゃんは大学はどう?」

「大学生活は満足してますよ?高校よりは堅苦しくなく、学ぶことが楽しいです!」

卯月ちゃんはアイドルだけではなく、大学に通っている。

今は大学二年生であり、大学の講義が終わると仕事先である346プロダクションに向かうのが卯月ちゃんの日課だ。

「大学生活に十分に慣れたんだね」

「はい!佐々木さんは大学の頃はもうどうでしたか?」

「そうだな…… 僕の方は大学じゃなくてCCGアカデミーと呼ばれる喰種捜査官になるための学校に行ってたよ」

喰種捜査官は大体はCCGアカデミーと呼ばれる喰種捜査官養成学校に最低18歳で入学することができ、それから2年間の教育期間を過ごし喰種捜査官となる。

だが僕は大学とCCGアカデミーが一体どんな雰囲気なのかまったく知らない。

「CCGアカデミー?あ、そうでしたね…… 佐々木さんは大学じゃな

いんですね…。」
(ん?)

すると卯月ちゃんは僕の話聞いた後、どこか暗い顔になった。まるで何かに気がつき、落ち込んだように。

「… そういえば卯月ちゃん？ 大学で気になる人はいるかな？」

「… え!?! き、気になる人ですか!?! さすがに私はアイドルですから、いませんよ!」

卯月ちゃんはそう言うと言と手を横に振った。

先程まで暗かった顔は少々ながら笑顔に戻った。

その後卯月ちゃんから聞いた話だけど、以前に大学の友達から合コンに誘われたことが何度かあったらしいけど、もちろん全部断っている。

卯月ちゃんが大学内で歩いていけば、注目のマトになるのは間違いないし、好意を持つ男性もいると思う。

だけどそう考えると僕はなぜか胸の奥から嫌な気分が生まれる。別にお互い付き合っていないのに嫉妬らしき感情を抱く。

「あ、そうだ」

すると僕はあることを思い出し、ポケットからあるものを取り出した。

「この前の誕生日会にもらった肩叩き券を使うよ」

僕が出したのはうづきの肩たたき券だ。

これは卯月ちゃんの誕生日会でもらったもので豪華20枚つづり。

卯月ちゃん曰く、島村家では評判がいいと言う。

「え!?! い、今ですか!?!」

「あれ? ダメなのかな?」

「あ… えっと…」

僕は卯月ちゃんとは頻繁に会うことのないため、今のような貴重な状況しか使えない。

ちょうど僕は肩が凝ったこともあり、この券を持ってきた。

卯月ちゃんはいきなりのお願いだつたため少し躊躇したが、しばらくすると心に決めた仕草をし、

「い、いいですよー！」

卯月ちゃんはそう言うのとベンチから立ち上がり、僕の後ろに回った。

「では、いきますよ」

「お願いします」

僕が言うのと卯月ちゃんは僕の肩を叩き始めた。

前までは手をぐっとして肩を叩いたのだが、卯月ちゃんが今やっているのは肩を揉むようにしてやっている。

「あれ？いつもと違うね？」

「はい！ずっと同じじゃダメかなって思って、違うやり方でやってます！」

卯月ちゃんがやる肩たたきは年々と良くなっていくらしく、この肩たたきは小学校からやっているのと耳にしている。

「それにしても佐々木さんの肩、硬いですね」

「やっぱりそう？疲労が溜まってる証拠かな？」

喰種捜査官はただデスクワークやパトロールをするだけではなく、喰種と戦うのだ。

僕は戦闘の疲れと部下の指導も入っているため通常よりも疲労が積み重なっている。

「佐々木さんは喰種捜査官ですよ？今更ですが、喰種と戦うことは・・・」

「もちろんあるよ。そうじゃないと喰種捜査官と言う職業はないことになるからね」

卯月ちゃんは僕が喰種捜査官だと言うことはわかっている。ちなみに卯月ちゃんだけではなく、凜ちゃんや未央ちゃんも知っている。

「喰種は人とは違って人以外の食べ物には口にはできないから、戦うのは必然と言ってもいいね」

「そ、そうですね・・・戦って亡くなることはあるんですよ・・・」

「うん・・・目の前で亡くなる人はいるけど・・・あの卯月ちゃん？」

「・・・はい？」

「ちよつと話題を変えない？」

「… ええ、そうですね」

僕はそれ以上喰種のことを話すことをやめた。

卯月ちゃんにとっては刺激が強い話のため、別の話題を変えた方がいい。

僕もその喰種を戦う喰種捜査官だからいつ死ぬかわからない。

彼女の頭に僕の死を考えて欲しくはない

「……よし！これで十分ですか？」

「大丈夫かな？ありがとうね」

話を切り上げた途端、肩たたきは終わった。

卯月ちゃんにやってもらったおかげで、硬かった僕の肩が柔らかくなった。

自分の肩を触っていた僕はあることを思いついた。

「卯月ちゃんもやる？」

「え？私ですか？」

「うん。今度ライブに出るんだよね？」

前に卯月ちゃんとメールしていた時に、『もうそろそろライブなんですよ!!』と言う返信をもらったため、もしかしたら疲労が溜まっていると思う。

「そ、そうですね！では佐々木さん、肩たたきおねがします」

「わかったよ、卯月ちゃん。ちよつと待っててね」

僕は卯月ちゃんと場所を交代する感じに僕はベンチの後ろに周り、卯月ちゃんはベンチに座った。

「じゃあ、いくよ」

「はいー！お願いしますー！」

僕は肩たたきを始めようと彼女の肩を触ろうとしたその時、卯月ちゃんの肩から数センチのところでピタリと手を止めた。

(・・・本当にいいのかな?)

僕は両手を卯月ちゃんの肩に置くのを躊躇ってしまった。

今更だけど女の子の肩に触るなんて、とても緊張してしまう。

(で、でも・・・止まったままじゃダメだ！)

僕は自分に言い聞かせるように心の中に呟き、そっと彼女の肩を触れた。

いつも才子ちゃんや六月くんに行っているのに、卯月ちゃんになると別格だ。

僕は『これはいつものことだ、これはいつものことだ』と胸の中で唱えるように呟いた。

「ど、どうかな・・・？」

「うん、大丈夫ですよ！佐々木さんは上手ですね！」

「そうかな？卯月ちゃんも肩が硬いね」

喰種捜査官は喰種と戦うため、体を管理をすることが大切だ。

鍛えることもそうだが、疲労をいち早くなくすのも必要だ。

「や、やっぱりそうですか？最近はレッスンを続きで、もしかしたら疲れが溜まっていたと思います」

「レッスン？次のライブの？」

「ええ、今度はちよっと難しい動きもあつて覚えるのに苦労していますよ」

「確かにダンスって真似しようとする結構難しいよね。僕もやろうとしたら全然できなくて疲れちゃったよ」

よく動画サイトでミュージックビデオのダンスが投稿され、僕にもできそうだなと思って実際にやってみると、ぎこちない動きになつて全然できなかつた。

「そういえば、佐々木さんは凜ちゃんと未央ちゃんに連絡をしていますか?」

「メールはするけど、やっぱ会うとなると余裕がないよ」

凜ちゃんと未央ちゃんは今年の卯月ちゃんの誕生日以来会ったことはなく、メールしか返事ができない。

「そうですよね。私も事務所でもそんなに会う回数はなくて、メールか電話しかできないです」

「そうなんだね。346プロでよく会っているイメージがあつたんだけどな...」

同じ事務所に所属していると聞くと、いつでも会えると考えていたが、実際はそうでないと聞くと意外に感じる。

「それでしたら、今度凜ちゃんと未央ちゃんに声をかけてますよ!」

「ありがとうね、卯月ちゃん。もう肩たたきはいいかな?」

「はい!もう大丈夫です!ありがとうございます!」

卯月ちゃんのその言葉を耳にした僕は、彼女の隣に座った。

「あ、そうそう!つい最近面白いことがあります!」

「面白いこと?」

「はい!この前にですネー」

僕はいつも卯月ちゃんと会々と話だけで終わることがほとんどで、決して特別なことはせずこうして会話をするのがいつものことだ。

他者がこの光景を見たら『足りなくない?』や『もっと攻めろよ』と考えるかもしれない。

だけど僕にとってはそれ以上にいらぬ満足であり、卯月ちゃんも同じく十分に満足している。

こう言った何気ないことが、過去を知らずに記憶を失った僕にとって幸せだから

「ーそうなんだ… あ、もうそろそろ僕は帰ろうかな」

「え？帰るんですか？」

「うん、もう時計の針があそこまで進んでいるよ」

公園にある時計を見ると、針がだいたい四時間ほど進んでいた。

「もうこんな時間ですか… 時間が経つのが早いです…」

話だけでこんなに時間が進むのは驚くかもしれないが、そのぐらい充実した時間を過ごせたとと言える。

「…」

「… 卯月ちゃん？」

すると卯月ちゃんは何も言わずに僕の服の袖をぎゅっと掴み、離れさせようとはしなかった。

「… また会えますよね？」

いつも世間に映る彼女は笑顔なのだが、僕の目の前にいる彼女は寂しそうな目をする。

まるで別れを惜しむように僕を見るのだ。

「また会えるよ、卯月ちゃん」

僕が言うのと卯月ちゃんは笑顔に戻り、

「はいーまた会いましょうー！」

卯月ちゃんは僕の返事を耳にした瞬間、彼女の象徴である笑顔に戻った。

それを見た僕は、抱えていた不安が取り除かれたように安心をした。

彼女は暗い顔ではなく、笑顔が似合うのだから。

いつも彼女は僕と別れる時、悲しそうな顔をする

一体どうして悲しそうな顔をするのか僕は聞こうとするが、彼女の笑顔を見ていつも聞きそびれてしまう

だけどそれでいいかもしれない

僕にもそれ以上追求したくない理由も持っているのだから

9月後半の夕方

僕はCCGから出て、僕が指導している子たちと共同生活をしているシャトーと呼ばれる建物へと向かっていた。

(色々痛いところつけられたな...) (色々痛いところつけられたな...)

今日行われた捜査会議では自分が所属している真戸班に痛いところを指摘された。

例えば他の班が捜査している喰種を横奪したとか、前に捕らえた喰種をなぜ殺さないなど自分の班の問題点が大きく示されてしまった。

それで僕たちの班は優秀と呼ばれる平子班の三分の一以下の成績を出し、CCGの恥と言われてしまっている。

(今日は帰って、ご飯を作らないと...)

少し肩を落とし、そのままシャトーに帰ろうとうしたその時...

(うぐっ...!)

突然、後ろから何か叩かれたような衝撃が背中に伝わった。

(な、なんだ...?)

あまりにも不意だったため、僕は大きく姿勢を崩してしまい膝を地面につけてしまった。

一体なんだろうかと僕は後ろを見ると、ロングヘアの女子が立っていた。

「久しぶり、佐々木さん」

「...っ!」

僕ははっと目を開いて驚いた。

目の前にいた彼女は見知らぬ人ではなく、知っている人であった。

「凜ちゃん...!?」

その人の名前は渋谷凜。

彼女は卯月ちゃんと同じ346プロダクションのトップアイドルで、僕より3つ下の19歳だ。

「相変わらず、佐々木さんは鈍いね」

凜ちゃんは姿勢を崩した僕に少々笑った。

「ま、まさかここで出会うなんて..」

僕は突然現れた彼女に驚いてしまい、言葉が出なかった。

なにせ凧ちゃんとは卯月ちゃんの誕生日会以来久しぶりに会うからだ。

いつか会おうと聞いたのだが、まさか今だなんて考えもしなかった。

凧ちゃんは「ほら、立ち上がって」と僕に手を差し伸べ、僕は立ち上がった。

「佐々木さんは本当に喰種捜査官なの？それじゃ喰種に負けるよ」

「ははは... 情けないところを見せちゃってごめんね」

凧ちゃんは美しくかつこい女性だが、僕の目の前にいる彼女は結構攻撃的。

最初は敬語で丁寧だったが、時間が経つにつれて敬語からタメ口になり、厳しく接することがぽつぽつと雨のように現れた。

そのため凧ちゃんに仲良くすることに憧れる人や好きな人に申し訳ないけど、凧ちゃんと仲良くするならいい面だけを見るだけではなく、悪い面を見る覚悟をした方がいいと僕は思う。

「もしかして仕事帰り？」

「うん、ちょうど終わって帰るところだよ」

僕にはクインクスのみんなにご飯を作る役目がある。

このまま家に帰ろうとしたのだが、凧ちゃんは僕にある提案をした。

「ちよつとどこかで少し話をしていかない？」

「少し？ん... うちの子の晩飯作らないと...」

「少しだけならいいでしょ？」

「...」

どうしようか考えた。

凧ちゃんとはそもそも会う機会はそんなにない。

多分、僕が断ったら無理やり連れて行かれそう。

僕は少し考え、頷き。

「...じゃあ、行こうか」

「うん、行こう」

凜ちゃんの誘いを受け、僕は彼女に連れられるようにどこかに向かった。

—————

僕は凜ちゃんに連れられたのはファストフード店であった。

「何でここで…?」

「外だと夏の暑さが残っているし、あとお腹が少し空いてね」

凜ちゃんが話していると、彼女が頼んでいたフライドポテトがきた。

「前までは加蓮と奈緒とよく一緒に行ったんだけど、最近はまったくないよ」

「もしかして仕事で?」

「うん、まあしようがないことだね」

凜ちゃんはそう言うのと熱々のポテトを一本掴み、口に入れた。

僕は加蓮ちゃんと奈緒ちゃんとは一度も会ったことはないが、なぜかどこかに出会ったような僕の記憶がある。

凜ちゃんは「佐々木さんはどう?」とポテトを差し出したが、僕はお腹が空いていないため断った。

「それで凜ちゃん、大学生活はどうかかな?」

「まあ、楽しいよ。授業中うるさい人はいるけどね」

凜ちゃんは今は大学1年生だ。

アイドルとしてデビューしたのは高校一年生で、今年で4年目になった。

「大学受験をして入学はすることはできたけど、全く勉強してない人を見るとちよつと不愉快を感じるんだよね」

「凜ちゃんって確か推薦やAO入試じゃなくて、一般入試だったよね」

「そうだね。私が合格した時に電話で聞こえた佐々木さんの反応は面白かった」

「あれは本当に喜んでたからね… ははは」

凜ちゃんは一般受験をした一人で、自分の力で大学に入ることがで

きた。別に凜ちゃんは推薦入試ができるほどの学力を持っていたが「簡単に大学に入りたくない」と一般入試を選んだ。ちなみに僕は凜ちゃんが大学受験に合格した時CCG本局で仕事をして、合格の知らせを凜ちゃん本人から電話を耳をし、局内で思わず一人声で上げるほど僕は喜んだ。

「凜ちゃんが入った大学って、理系の学部だっけ？」

「そうだね。佐々木さんは理系は得意？」

「さすがに僕は理系に関してあまり得意じゃないよ..」

僕はある程度なら数学はできるけど、発展問題や応用問題になると今までの公式が狂ってしまい、真っ白になってしまう。でも凜ちゃんは僕とは正反対に数学が得意。

「でも凜ちゃんが高校三年生の時のテスト勉強は懐かしいね」

「もうやめてよ... 恥ずかしいから思い出させないでよ」

でも凜ちゃんは現代文と古文などの国語系科目に対しては苦手な傾向があった。

国語の問題はだいたいがなんとなく答え、問題があつてたり間違つたりすることがある。

それで僕は何度か凜ちゃんのテスト勉強を手伝った。

「あの時の佐々木さんはまるで学校の先生みたいで分かりやすかったよ」

「役に立ててよかった」

僕はCCGアカデミーに何度か顔を出し、将来捜査官になる子達に指導をしていた。

「だけど今指導しているクインクスの子たちは今まで指導した中で一番困っているけど..」

「それでさっきご飯を作らないと言ってたけど、佐々木さんって料理上手いの？」

「そりゃ上手くなきゃ料理なんかできないよ。今日はカレーを作る予定だね」

先ほども言ったけど、僕は基本シャトーでもご飯は僕が担当をしている。

別の他の子が作る場合もあるが、大体が僕だ。

だけど一度も味見はすることはないけど

すると凜ちゃんはあることを思い出した仕草をし、

「この前に卯月にあったよね？」

「そうだけど…？どうして？」

「この前に卯月に言われてね。それで何か卯月に危害を加えることはしてないよね？」

「え？いやいや、流石に危害を加えるとかないよ」

凜ちゃんはいつも僕に「卯月になんかやってないよね？」と聞いてくるのだ。一体どうしてそんなことを言うのかと聞くと「なんとなく」といつも返す。

「卯月になんか変なことをしないでね」

「うん、わかったよ」

変なことと言っても、流石に肩たたきは許されるよね…？

そう考えると凜ちゃんは机に伏せる感じに僕を見て、

「大学って本当に自由だよね」

「ん？どうしたの？」

「あれだよ。高校とは全然厳しくないし、授業も自分で選ぶようになったから、本当に自由だなんて思ってる」

凜ちゃんが通っていた高校は別にピアスを開けても厳しく言わない学校だったけど、やはり大学とは別格らしい。

「あと凜ちゃん、大学生になったとは言えまだ未成年だからお酒とかタバコはしないでね」

「なに？いつから私を指導するようになったの？」

すると凜ちゃんは睨むように僕を見た。

まるで逆鱗に触れたかのように僕を厳しく見る。

「い、いや……ちよつとね……心配してるから」

「……」

凜ちゃんは何も言わずに僕をじっとみる。

僕は何度か彼女を怒らせてたことがあるから、もしかしたらこれの一つかもしれない。

そう心の中でつぶやくように言うと……

「……ふふっ」

「？」

すると僕をじっと見つめていた凜ちゃんは、だんだんと微笑み。

「からかったただだよ」

僕は「なんだ……」と少しホッとした。

どうやら怒らせたのではなく、からかっていたようだ。

「わかってる。もう飲んでる人や吸っている人もいるけど、流石に私はやらないから安心してよ。アイドルだし」

「それは良かった……」

凜ちゃんはただの大学生ではなく、トップアイドルだ。

もし何か不祥事を起こしたら、今後の道に影響しかねない。

(凜ちゃんが変な道に行かないでほしい……)

凜ちゃんが不良になるのは、僕のとって願いたくもない望みだ。それに凜ちゃんは誰もが魅了する女性であるため、影から、よろしくな

い人”が近づくのは間違いない。

そう考えると、どこか嫌な気分になる。

「さすがにもう高校生じゃないから、そこまで心配しなくていい」

「でも凜ちゃんは社会人としては一年生だから、ちよつと心配しているよ」

凜ちゃんは高校生からアイドルをしているが、その時から社会人だと考えにくい。

高校生はある程度親に守られているが、大学生だと親から守られることが少なくなり、自己責任になる場面が多く接する。だから僕はまだ大学一年生の凜ちゃんに心配をしてしまう。

「そうなんだ… 確かにまだ私は高校に出たばかりだしね」

凜ちゃんはいつも僕に厳しい態度をするが、それはいつもとは限らず真面目の素直の受け入れてくれる一面もある。

「もし何か問題があったら僕でも相談をしてね」

「んー、もし相談するなら佐々木さんは最後かな」

「え？さ、最後…？」

「冗談だよ、流石に家族しか相談できないことあるじゃん」

「ああ、そうだね…」

いくら仲が良くても、なんでも話せるとは限らない。

例えば僕は”まともな人間”ではないとか。

「あ、そうだ。志希なんだけど」

「志希ちゃんから？」

「最近佐々木さんと会えないことにイライラしてるって」

僕はその知らせを耳にした瞬間、「まったく志希ちゃんは…。」とため息を漏らした。

志希ちゃんは凜ちゃんと同じ時期にアイドルになった子で現在21歳。

おそらく僕が指導しているクインクスの子たちよりもはるかに問題児と言ってもいいほどの子だ。

「もしかしてまた失踪をしている？」

「うん、ここ最近頻度が多いよ」

「相変わらず志希ちゃんらしい……」

志希ちゃんはトップアイドルなのだが、あまりにも自由すぎて仕事先や事務所でも迷惑の声が卯月ちゃんたちに聞かされる。

「今度事務所に行ったら？」

「いやあ……僕は気軽に入れないよ」

346プロダクションほどの企業よりも喰種対策に力を注いでおり、事務所の入り口にゲートを設置したり正社員や派遣社員、それにライブで雇われたアルバイトの人までも喰種ではない証明を求めるほど徹底している。

でもだからと言って喰種捜査官は気軽に346プロに入れるとは限らない。入る方法は13区に所属しているぐらいしかない。

「いくら喰種捜査官でも入れるわけではないんだね」

「うん、僕は別の仕事を持っているから入る余裕はないよ」

ちなみに13区には何度か面識のある鈴屋班が所属しているが、事務所に訪れることはなく、喰種捜査に徹底している。

僕は少し店内の時計を見ると、大幅に時間が進んでいたことに気づき、

「もうこんな時間か……そろそろ帰らないと」

「もう帰るの？」

「さすがにみんなのお腹空かせたままじやだめだし」

おそらくは瓜江さんと不知くんはシャトーには帰ってはいないと思うけど、六月さんと才子ちゃんはこの時間なら帰っている。

「もう帰るんだ……私はまだここに残るよ」

「わかった。あ、あとあんまり夜はうるちよろしないでね」

「もしかして喰種？」

「うん、ここ最近事件が増えてるからね」

アオギリの樹と呼ばれる喰種の集団が勢力を伸ばしており、喰種に対して知識が乏しい人でも名を知ることが多くなっている。凜ちゃんには僕の言葉に受け入れ、

「わかった。しばらくしたら、そのまま家に帰るよ」

「じゃあ、またね凜ちゃ」

「待って」

僕するどが帰ろうとすると凜ちゃんは僕を呼び止め、手を少し上げだ。

「なんか忘れてない？」

「え？」

「ほら、いつもやってるあれだよ」

「…ああ、てっきり忘れてたよ。僕というやつは…」

いつも僕と凜ちゃんが別れる時やることはハイタッチだ。

凜ちゃんが考えてくれたことだが、なぜやり始めたかはわからない。

「はあ…まったく、もう」

凜ちゃんは忘れていた僕にわざとらしいため息をした。

「ごめんね、凜ちゃん。これでいいかな？」

僕が手のヒラを見せると、凜ちゃんは僕の手にはハイタッチをした

「またね、佐々木さん」

凜ちゃんじゃさういうと手を振った。

僕は凜ちゃんに見送られながらファーストフード店から出て、シャトーへと帰っていった。

凜ちゃんとは短い会話だったけど、会えたことには嬉しかった。

また凜ちゃんとはメールだけの生活に戻ってしまうが、次も会えることに楽しみにする。

—————

シャトーについた、僕。

僕が「ただいま」と玄関で言うと、一人だけ顔を出した。

「先生、おかえりなさい」

僕の元にやってきたのは六月くんだった。

僕が指導しているクインクスの一人で、右目に眼帯をしたおとなしい男の子だ。

「あれ？六月くん一人？」

「まだ帰っていないです。先日の“喰種”が『トルソー』じゃなかったから・・・息巻いて行っちゃいました・・・」

それは先日の夜のことだ。

クインクスの一人“瓜江くん”は勝手に単独捜査し、その時に対喰種兵器クインケを喰種に破壊されてしまった。

本来ならばクインケなしでの捜査は自殺行為だが、僕たちクインクスは違う。

僕たちは他の捜査官とは違い、常に体内に喰種的能力を持っているのだ。

その能力は喰種が戦う時に表す赫子かくねを僕たちは発動させることができる。

喰種は人間以外口にすることができないのだが、僕たちは人間のままだから普通に食事を取ることができる。

だがいくら赫子かくねが使えるとはいえまだ実験段階だ。

乱暴に使用すると暴走が起こるかもしれない。

それを聞かされたにも関わらず瓜江くんと不知くんは赫子を使用している。

「今から晩御飯を作るよ」

僕はキッチンに向かい着ていた白いジャケットを脱ぎ、エプロンを手にとった。

そのまま料理を作ればいいのだが・・・

「・・・」

「どうしたんですか？」

「あ、い、いや・・・なんでもないよ」

僕は六月くんを見て何かを感じた。

別に顔には何もついてはいないけど、違和感と言うのが僕の胸の奥に現れた。

その原因はなんだろうかと野菜を切っていくと、ふと答えが頭に現れた。

(あ、六月くんは凜ちゃんと同じ身長だったね)

その違和感の正体は身長だった。

六月くんの身長は165cmで凜ちゃんと同じだ。

つい先ほど会っていて、同じ身長だったから違和感を感じていたんだ。

「そういえば先生？」

「ん？」

「今日は少し遅かったですね」

「ああ、ちよつと寄り道をしてね」

「寄り道ですか？」

「うん、喫茶店に行ってたんだ」

「また喫茶店ですか？」

六月くんがそう言うところか困った顔になった。

僕が喫茶店に行ったのはもちろん嘘だ。

僕がトップアイドルの凜ちゃんと知り合っているだなんて言えない。

だけどずつと秘密にしていたことがまさか知られているだなんて、あとからわかってくるんだ

Bell

凜Side

夜の街で一人歩く、私。

先ほどまで佐々木さんと話していたんだけど、『晩御飯をつくらないと』と言うことで長く話すことができず、佐々木さんは私より先に帰ってしまい、私は一人になってしまった。

それから何もすることなくポテトを食べ終え、ファストフード店から出た。

(…まるで”あいつ”みたい)

佐々木さんと話すたびに感じることは、相変わらず”あいつ”に似ている。

”あいつ”とは、かつて私が会っていた三つ上の男性。

佐々木さんは”あいつ”の声や顔も似ていて、いつも佐々木さんと別れた時に”あいつ”を思ってしまう。

佐々木さんと会うたびに、”あいつ”の頼りなさや優しさが懐かしく感じる。

(…もう二年か)

そういえば”あいつ”と最後に会ったのはちょうど今月で二年が経った。

”あいつ”と初めてで会ったのは私の家でもありお店である花屋さんだった。

その時に同じく卯月に出会った。

今思えばあの時の出会いが私の人生が変わった。

もし二人と出会ってなかったら、私はアイドルをやっていない。

(卯月は佐々木さんのこと、どう思っているのかな?)

卯月は私よりも佐々木さんに何度か会っていて、いつも佐々木さんにどんな話をしたか私と未央に話す。

まるで佐々木さんを”あいつ”のように卯月は話してくる。

それを表す出来事が卯月が佐々木さんと初めて会った時に現れた。

卯月は佐々木さんの姿を見た瞬間涙を流し、佐々木さんに抱きしめた。

その時の光景は今でも明確に覚えていて、まるで「あいつ」が帰ってきたみたいだった。

(……)

私がいつも「あいつ」を考えると、明るかった思い出に影が現れる。

なぜなら「あいつ」が私たちの元から姿を消したきつかけを私が作ってしまったんだ。

『それだったら……もう私たちの前で現れないで』

久しぶりに私の前に現れた「あいつ」に涙を流して言ってしまった言葉。

「あいつ」は私が高校一年生の冬の時、突如いなくなってしまったのだ。

一体どうして姿を消してしまったのかわからず日々を過ごしていたら、突然「あいつ」が現れたんだ。

前の会った時はどこか頼りない黒髪の男性だったけど、別人になっていた。

髪と肌が白く染まり、同じ人間とは思えなかった。

最初は突然現れたことに驚き、嬉しい感情がだんだんと現れたのだけど、「あいつ」は『僕はみんなを守らないといけない』や『凜ちゃんたちを危険な目に遭わせたくない』など理由がわからない発言をし、苛立ちが生まれた。

そして私は「あいつ」の頬を打ったんだ。

もしあの時に戻れるなら、私は“あいつ”に本当の理由を聞きたい。
い。
どうしていなくなってしまったかを聞きたい。

もし私があの時、頬を打たなかったら

もし私が“あいつ”に『もう私たちの前に現れるな』と言わなかったら

もし私が――――

(∴考えるのやめよ)

私は変えることのない出来事を考えるのをやめた。
過ぎ去ってしまった出来事を思い返しても、結果は変わらない。

“あいつ”は生きているかどうかわからなし、考えたくもないけど
亡くなっているかもしれない。

いくら後悔しても過去の出来事は変えることができず、変えること

ができてても結局嘘をつかなければならない。

最後に「あいつ」を姿を見たのは卯月で、それ以降誰も「あいつ」を見た人はいない。

(まさか佐々木さんが「あいつ」とかだったりして……)

私がそう考えると……

(ん?)

すると私の横に二人の男性が通った。

普通なら別に気にすることは無いのだけど、雰囲気からにして危ない人たちに見えた。

一人は目つきが悪く、イアホンをしていた男性で、もう一人は同じく目つきが悪くツナギを来ていた男性だ。

(なに、あいつら)

私はその二人が過ぎ去った後、佐々木さんの言う通りにすぐに家に帰ることにした。

ここ最近喰種の事件が多く耳にするようになり、東京も物騒になった。

今まで喰種の情報を書く耳がなかった私だけど、佐々木さんに出会ってから喰種に関して詳しくなった。

それでこの前、佐々木さんから聞いた話だけど「アオギリの樹」と呼ばれる喰種の集団が都内の治安を悪化させると聞いた。

一応伝えるけど、喰種と言うのは人間の姿をしているけど、口にすることができるのは人間しかない化け物だ。

私は直接見たことがないが喰種の特徴は目が赤黒く染まり、体から赫子と呼ばれる触手か何かを出し、攻撃をするらしい。

その後私は何事なく家に帰ることができた。

瓜江Side

俺の名は瓜江久生^{うりえくき}。

喰種対策局に務める二等捜査官であり、現在佐々木一等が指揮するクインクスに所属している。

さつき隣を通り過ぎた女性がこちらを警戒した様子で見っていた。

俺だけならば全く気にすることはなく通り過ぎるかもしれないが、今回は俺の隣にもう一人いた。

「班長、水臭いっすよオ。つかチームで行動しろってサツサンも言ってたろ?」

雰囲気が悪くしている原因は、不知吟士^{しらすぎんし}三等だ。

不知三等は俺と同じ喰種捜査官だが、スーツを着ておらず、つなぎを着ている。

ヤツは俺と同じくクインクスの一人だが、なんども金を欲している発言をする。

三等というのは喰種捜査官の階級の中で最底辺であり、コイツは特に能無しだ。

「俺は佐々木一等の下にいるつもりはない。さつきと昇進して『S3班』に行く」

「誰だよ、Sさんって」

「(馬鹿は)知らなくていい」

「あ、そういやサツサンはアイドルが好きって才子から聞いたんだが」
「知るか(どうでもいい)」

俺はとある喰種を突き止めるために単独捜査をしているのだが、そのたびに不知三等はついてくる。

こんなバカといると捜査に支障が出る。

佐々木が手の届くことのない人物に好きになるとはバカバカしい。

妄想をするぐらいなら、せめて仕事に専念しろ。

俺は喰種が活動しやすい誰もいない路地へと入った。

「とにかく不知三等は、俺の足を引っ張るな」

「ア？テメエに指図される筋合いねえんだけど？ここでやつちまうか」

不知三等は俺の言葉に苛立ったのか、右目が赤く染まる。

喰種特有の赫子を出す準備をしていた。

俺が所属しているクインクスのメンバーは初めから喰種ではなく人間だ。

喰種の体内から赫子を出す器官かくほう（赫包）を取り出し、人間の体に入れることにより喰種能力を得られる。

（『筋合い』あるだろう、俺が班長だろうが無能め）：構わないけど俺は不知を止めるのではなく、排除をする。

これ以上捜査を妨害するなら消したほうがいい。

ただ殺すではなく、『赫子が暴走し、やむ得ずに駆逐した』という理由で殺す。

俺が赫子を出そうとしたその時だった。

「瓜江捜査官だよね？」

すると誰いはいはずの路地に俺の名を呼びかける誰かの声が聞こえた。

声が聞こえた方向に顔を向けると、

「私『堀ちえ』っていうんだ！君たち『トルソー』って”喰種”を追ってるんでしょ？情報は要らない？」

そこにはカメラを持った小さな子供がいた。

—————

俺たちはその”トルソー”の情報を持っているホリに詳しく話を聞くため、回転寿司に入った。

彼女の名は堀ちえ。

初め彼女を見た俺たちはただの小さく子供ではないかと疑ったが、運転免許証を見ると歳が5離れていた。

彼女はフリーカメラマンをやりながら情報屋として情報を売っていた。

本題に戻るが、俺がトルソーと言う喰種に反応を示した理由は、俺が捜査している喰種だったからだ。

その喰種に捕食された被害者の多くが若い女性で事件現場の残されるのは首と手足しか見つからず、胴体は行方を眩ましており、胴体を残さないことからその喰種を”トルソー”と呼ぶようになった。

彼女は報酬を要求した。

それは金銭か佐々木琲世の私物だった。

金銭だと100万円であり、容易ではない。

だが佐々木一等の私物だとすぐに手に入りやすい。

それで俺たちはホリに佐々木琲世の私物を渡す代わりに、トルソーの情報を俺たちに提供する約束をした。

その後、俺たちは店から出ようとしたその時だった。

「ちなみにもう一つ情報があるけど?」

「情報? (今度はなんだ?)」

「今度報酬を渡した時に伝えるけど、佐々木琲世に関しての情報だよ」

「サツサンに関しての情報?」

堀ちえはどこから情報を得たか知らないが、佐々木琲世と俺たちのことを知っている。

俺たちは一般人に知られるような真似をしていないのだが、彼女はなぜか俺たちを詳しく知っていた。

「佐々木琲世の友達だよ。君たちにはわかってるか知らないけど、佐々木琲世の友達結構特殊なんだ」

「とくしゅ?」

「あれ? どうやら君たちの反応からしてみれば、本当にわかっていないみたいだね」

「佐々木一等に関してはすべてわかっているとは限らない (からかっているのか?)」

佐々木琲世の知り合いなど知る価値はない。

俺はその情報には全く聞く耳はなかったが、不知三等は違った。

「サツサンの知り合いって、もしかして昔同じく通っていた学校のやつ？」

「いや、そんな単純な人じゃないよ」

”タンジユン”じゃない？どういうことだ？」

不知三等は彼女が言った佐々木琲世の情報を知りたがっていた。

俺は不知の行動に呆れた。

佐々木の友人など今の俺には全く必要はない。

さっさと終わってくれないか待っていると、

「瓜江捜査官」

俺がその情報に無関心だと知ったのか、堀は俺を声をかけた。

「なんだ？」

「この情報は知った方がいいと思うよ」

「なぜ？（しつこいな）」

「それはおそらく今からじゃなくて、あとから使えるよ」

「あとから？」

「うん、きつといつか使える話だよ。これは今の所、広く知られてない情報だよ」

ホリはまっすぐと俺を見ながらそう言った。

さっきトルソーの時とは雰囲気は違っていた。

それは俺たちが欲するトルソーの情報よりも重要だと示している。

その後ホリは俺たちよりも先に店から出て、それから俺たちは外に出た。

俺はしばらくホリが伝えた佐々木一等の友人に疑問を抱えた。

別に不必要な情報なのだが、なぜか俺の頭から離れなかった。

なぜそれほど重要にしたがったのか、あとから知る

—————

夜が終わり始める早朝

僕はベッドで寝ていたのではなく、机に寝ていた。

読書をしていて寝たのではなく、昨日不知くと瓜江くんがミーティングの時に勝手に離脱したことに怒りを感じ、徹夜で資料を集めていたのだ。

(…?)

意識が徐々に取り戻すと、だんだんと僕の携帯の着信が聞こえてきた。

今日は別にCCGに急いで行く必要はないのだが、なんども携帯が鳴り続ける。

(誰だろう…?)

僕は少し疑問を持ちながら、鳴り続ける携帯に出た。

「もしもし」

『おっはよ!!』

「!?!」

電話から聞こえたのは怒号に似た元気のいい大声であった。

「お、おはよ…」

『どうしたの佐々木さん!?!なんか声が死んでいない!?!』

僕は電話から聞こえた大声にあまりにもびっくりしすぎて、どう対応すればいいのかわからず動揺した声で挨拶をしてしまった。

電話から聞こえたのは聞き慣れた女性の声であった。

「ちよつと徹夜をしてたんだよ… 未央ちゃん…」

その声の人物は本田未央。

凜ちゃんと同じ大学一年生で、346プロダクションのトップアイドルだ。

『徹夜って、もしかしてなんかいけないことしたの?』

「い、いけないことって…！さすがにそれはしてないよ!!」

僕は未央ちゃんの甘い口調で言った言葉に少し顔が赤くなった。

『冗談だよ！冗談！それで未央ちゃんの元気な声は良かったかな？もしかしたら目覚まし時計の代わりにはいいかも？』

「さすがに声が大きすぎるかな…。」

『え〜！なんかそれを聞いてショック！』

電話から未央ちゃんの残念そうな声が聞こえた。

確かに効果的だと思うが、これを毎日やられたら僕は確実に疲れる。

未央ちゃんはハキハキした元気な女の子で、こうした会話がいつものことだ。

「それはごめんね未央ちゃん… あ、あと急に朝から電話してどうしたの？」

未央ちゃんから電話がくるのは今年で初めてだ。

僕は未央ちゃんとは卯月ちゃんの誕生日会以来メールしか話していない。

それに朝っぱらから電話と言うのは何かあるに違いない。

『あ、ああ、急にごめんね！朝から私から電話が来るなんて驚いたからもしれないけど…。』

すると未央ちゃんの元気な声が耳から消え、少し間が生まれた。

いつもなら陽気な雰囲気途切れることはないけど、今回は違った。

『…最近佐々木さんと会ってないし、あと久しぶりに声を聞きたかった』

未央ちゃんは落ち着いた声で僕に伝えた。

先ほど元気な声に対し、久しぶりに声を聞けて安心したような落ちついた声だった。

『私たちって普段会うことないじゃん？去年までは月に何回か会ってたけど、今年はメールぐらいしか話してないじゃん』

「確かにね… 僕も会いたい気持ちはあるけど、仕事がね…。」

未央ちゃんはアイドルもやっているが、ソロ活動で舞台俳優をやっ

ている。

今年から舞台の仕事が多く入り、会う時間は卯月ちゃんや凜ちゃんよりも少ない。

「……最近やっている舞台はどうか？」

『舞台は学べるのがたくさんあって面白いよ？ だけど、やっぱり多くの仕事を掛け持ちしてるから疲れるよ。佐々木さんはどう？』

「僕はうちの子に悩まされてるかな」

『もしかして“ウリウリ”と“シラギン”が？』

「コラコラ……そんな名前で言わない」

『いいじゃん！もしかしたらどこかで会えるかもしれないし！』

未央ちゃんは瓜江くんや不知くんなどのクインクスの子を知っている。

知っているとんでも未央ちゃんは瓜江くんたちとは会ったことはないけど、卯月ちゃんの誕生日会で僕とクインクスみんなと写真を撮った写真を未央ちゃんに見せた時に、あだ名をすぐに考えたのだ。

瓜江くんのことをウリウリで、不知くんはシラギン、六月くんはむっちゃんや才子ちゃんはさーちゃんだ。

ちなみに僕はあだ名がつけられそうだが、未央ちゃんは佐々木さんと僕にあだ名をつけない。

なぜなのかは今もわからない。

「そういえば、今日は大学あるよね？」

『うん！今ちようど着替えてるんだ！』

「え!? き、着替えてるの!?!」

『あんまり時間がないから、時間を有効活用しないとね。あ、今からテレビ通話する?』

「いやいやいや!! しくなくていいから!!」

『はははっ、もう佐々木さんは恥ずかしがり屋だから!』

ちなみに以前に未央ちゃん本人からセクシーさに憧れていると耳にしている。

だから僕に恥ずかしがるような言動や行動をする。

まるで以前の美嘉ちゃんに似ているような…？
そう考えると…

『あ！そういえば、この前しぶりんと会ってたでしょ！』

「え？もしかして凜ちゃんが言ったの？」

『うん！あの時ちようど近くにいたのに〜』

未央ちゃんは悔しそうな声で僕に言った。

「そうなんだ… 未央ちゃんと話したかったな…」

『でも今こうして話しているから、今の私の気分は嬉しいよ！』

「そ、そうなんだ… それはよかった…」

未央ちゃんは結構ポジティブな子だ。

よく僕がネガティブなことを言うとき未央ちゃんは僕を励ましたり、プラス思考的な考えを言ったりするなどいい子だ。

未央ちゃんとかうしてしばらく話していると…

『ーそれで… おっと!!もうこんな時間!!』

「ん？もしかして授業に？」

『そうそう!!流石に高校よりもゆるくても、サボってはダメだからね
!!』

未央ちゃんは焦った様子でそう言うと、カバンを背負うような音がした。

『それじゃ、佐々木さん！次もまた電話しようね!!』

「うん、また今度ね」

『うん、約束だよ!!じゃあー!』

未央ちゃんがそう言うと、電話が切れた。

テレビや舞台上で映る未央ちゃんは自信に溢れ、元気な子として映っている。

だが僕の前での彼女はそうでもなく、仕事や私生活など辛かったことを伝える人前では見せない小心者の一面を持つ。

僕はなんとも未央ちゃんの相談や悩みを聞き、彼女を助けてきた。

流石に僕が”一番抱えている悩み”は未央ちゃんたちには言えないけど

静まるシャトーの中、密かに起きていたのは佐々木だけではなく、もう一人いた。

(∴ 未央ちゃん?)

その人物の名は米林才子。
クインクスの一員でシャトーで暮らしているが、仕事はせずに自分の部屋に引きこもっている。

いつもならお昼頃に起きるのだが、今日は偶然に早朝に起きていた。

(∴ もしかして、アイドルの∴?)

才子はシャトーに住み始めた時から、佐々木が346プロのアイドルと交流があると知っている。

そのきっかけは洗濯カゴからなぜか”うづきの肩たたき券”と書かれた紙切れが一枚見つかったのだ。

(それにしても、どうしてママンは知り合ってるんだ?)

佐々木琲世はCCGの関係者以外に関係を持っていることは全く知られておらず、しかも知り合っている人物が高嶺の花であるトップアイドルと交流を持っているとなると、明らかにただ事ではない。

才子は自分携帯のSNSを開くとある人物からの返信が来た。

(おっ！久しぶりに”センパイ”と遊べるじゃん！)

センパイは私がCCGのアカデミージュニアスクール（高校みたいな所）で通っていた時、SNSで偶然に出会った同じ乙女で、私の誕生日（9月4日）の2日前に誕生日を持つ一つ上の先輩だ。

交流し始めた時はゲームのマッチングで一緒に戦いをする仲間だったけど、なんどもマッチングする回数が増えて遂にはリアルで会う仲間になった。

リアルで会うと知った時、本当は女性ではなく男だったというネカマパターンではないかと疑ったが、私と同じ女性だった。

それからセンパイとゲームや物販などを買ったり、一緒にゲーセンで遊ぶなど楽しい一時を過ごしたのだけど……

そんなある日のことだった

私がセンパイとファミレスにいた時に起きたのだ

『ねえ、さいこ』

『ん？なんすか、センパイ？』

『私、アイドルをやるよ』

『アイドルっ!!??』

あの時の私はとても驚いた。

まさかセンパイがアイドルをやると言ったのだ。

アイドルをやる理由は『アイドルとして成功すれば印税で暮らせる』とセンパイの口から聞かされ、アイドルを始めたのだ。

センパイは今やトップアイドルとなり、私と一緒にゲームをする時

間はなくなってしまうた…

(睡眠を取らねば…)

私は再び寝ることにした。

クインクスの皆は外に出ると思うが、私は部屋の中でやらなければならないことがある。

ば
センパイとゲームをする体力を作るために、こうして休みを取らね

眠る彼

球世Side

日に光が消えた夜。

僕はシャトーに戻り、静まったりビングで一人資料を見ていた。

(…タクシーか)

僕はトルソーの捜査を進めるため、喰種が收容されているコクリアにある喰種の元に訪ねた。

その喰種の名は”ドナート・ポルポラ”、SSレートの喰種だ。

SSレートは喰種につけられる脅威度で2番目に高い。

どのぐらいの脅威かと言うと複数の特等捜査官が対処するほどで強力な喰種だと言われる。

だが彼は危ない喰種だから收容されているだけではなく、情報提供者としてCCGは利用をしている。

(ドナートと聞くと、アーニヤちゃんのことを浮かぶんだよね…)

ドナートがコクリアに収監された要因は喰種捜査官が頑張った探したのではなく、意外な人物の発言がきっかけであった。

その人物とは346プロダクションのトップアイドル”アナスタシア”だ。

彼女は小さい時にドナートと接触していた。

アナスタシアちゃんがドナートと接触した場所は彼女の生まれ故郷である北海道で、

彼女の発言によってドナートが喰種であると証明され、捕らえられた。

だがアナスタシアがドナートを捕らえたと言う事実はCCG内では知る者は少なく、

僕が把握している時点ではアキラさんしか知らない。

おそらくアナスタシアちゃんは誰もが知る人物になっているためかその情報を知る人は謹んでいるか、

もしくはあまり知られていないかもしれない。

(彼は今も収監され続けているのは、CCGにとっては必要な存在……)

ドナート・ポルポラはコクリアで収監されている喰種の中では最も長く収監されており、

ほとんどの喰種は処分か対喰種兵器のクインケにされている。

彼が処分されないのはCCG側としては情報提供者として生かされる。

もしCCGが彼が不必要になれば、彼はいつかは消される。

だから彼は自分がいかに有益な存在なのかを証明し続けたいといけない。

『……「君」もだろ?』

「…え?」

僕しかいないはずのリビングに誰かの声が聞こえた。

いや、リビングからじゃない

僕の中からだ

『君だって、ドナートと一緒にだ』

『目の前に転がっている自分の存在価値にただ飛びついている』

『そうしないと自分を保てない』

『いずれは使えなくなるか壊れるかしてしまえば、お払い箱だって言うのじゃ』

『ねえ？』

『ハイセ』

「っ!!」

「また”あいつ”か…」

時々、僕の中からあいつが僕の耳元にささやくように現れる。始まりは去年の5月からで、何が原因なのかわからない。

ただわかることは、そいつはもう一人の僕。

僕が知らない20年間を持つ”前の僕”だ。

(…ん?)

机に置いてあった携帯を見るとメールが届いていた。

僕は携帯を取り出し画面を見ると、ハッと驚いてしまった。

(…文香さん?)

そのメールの主は文香さんだった。

鷺沢文香。

346プロダクションでアイドルで、僕より一つ上の友人だ。

黒髪のロングヘアで青い目をした美しい女性だ。

彼女は僕と同じく本が好きで、いつも本の話で時間が早く過ぎてしまふ。

(それにしても彼女からメールが来るのは珍しいな…)

普段は僕からメールをすることが大半だが、今回は文香さんからだった。

『お久しぶりです、佐々木さん。カフカ短編集をお借りしたいのですが、よろしいでしょうか?』

そのメールの内容は本であった。

(カフカか…)

僕はそのメールの内容に少し頭を傾げてしまった。

文香さんが住んでいるところは古本屋で、カフカが置いてもおかしくはないが…

(カフカ短編集は有馬さんに貸しているんだよね…)

カフカ短編集はちょうど有馬さんに貸しているため、すぐには用意

はできない。

僕はメールを打った。

『すみませんが、カフカ短編集は他の人に貸しているの、もう少し待ってくれませんか?』

メールを送信すると、数分後に返信が届いた。

『そうですか... 他の人に貸していたなら仕方ありませんね。もし用意ができましたらお返事をお願いします』

文香さんは卯月ちゃんや凜ちゃんなどの子と比べるとメールの返事は早く返ってくる。

未央ちゃん曰く『ふーみんはメールの返信は遅いはずなんだけど...』と普段は返信が遅いらしい。

(有馬さんはいっつ本を返してくれるのかな...)

正直、カフカ短編集がいつ返してくれるかはわからない。

アキラさん曰く、有馬特等は直接僕に返すらしい。

だが有馬さんはじっくりと話すことはないし、彼は常に喰種を駆逐している。

だからいつ返ってくるかははっきりと言えない。

(やして...)

僕は気を取り直し携帯を机に置いて、資料に目を向けた。

犠牲者がさらに増える前に、僕はトルソーの正体を探さなければならぬ。

今日も長くなりそうだ...

—————

夜の都内。

日が昇っていた時より暗く、人工の光がちらほらと光っている。

その夜の街に一人の少女が歩いていった。

年齢は大体高校生ぐらいで本来ならば都条例で外出禁止を受けてもおかしくはない年だが、彼女は平然と歩いていた。

(… あれだ)

すると少女は道路に走るタクシーを手を挙げて止め、その止めたタクシーの中に乗り込んだ。

「ーどちらまで」

「… まっすぐ走ってください」

少女がそう言うと、運転手はタクシーを走らせた。

タクシーに乗った少女は只者ではない。

”樹” から言伝です『トルソー』さん」

タクシーに乗り込んだ彼女の名はヒナミ。

人間ではなく、喰種だ。

喰種は人間の姿をしているのだが、人間しか口にするにできない化け物だ。

身体能力は人間より何倍も高く、嗅覚も感覚も優れており、

能力を使う時は目を赤黒く染める^{かくがん}赫眼が発生する。

『トルソー』さん、あなたは喰べすぎです。白鳩^{はと}から目をつけられているようです」

白鳩^{はと}とは喰種捜査官のことで、喰種の天敵である。

彼らがつけている胸章が鳩の形をしていることから喰種たちは白鳩^{はと}と呼んでいる。

今運転しているタクシー運転手は何人のも女性を殺し、

胴体だけを行方を眩ませていることから喰種捜査官は彼を「トルソー」と呼んでいる。

「クインクスという名前を耳にしたことは？」

「いえ…」

「私も詳しくは存じ上げませんが… 彼らは喰種の能力を用いるとの噂があります」

クインクス

喰種の敵であるCCGが新たに創りだした喰種捜査官のことで、

今まで喰種捜査官はクインケと呼ばれる、喰種から赫包を取り出して作り出した武器で戦っているのだが、

それだと例え良いクインケを持ったとしても人間の体には限界がある。

そこで喰種の能力をそのまま武器にするのではなく人間の体内に入れる新たな方法を取り入れた。

そうすることで喰種の能力を使用することが可能になり、喰種と同様に身体能力も高くなった。

ヒナミはクインクスを知った時、ある人物が浮かんだ。

その人物は人間から喰種に変えられた男性で、ヒナミを救ってくれた人。

彼は知識に乏しかったヒナミに本を通して色々教えてくれた。

ヒナミは彼を考えるともう一人自然と頭に浮かぶ。

(… 卯月ちゃん)

ヒナミには憧れていた人間がいた。

テレビや雑誌、広告などで見かける人気アイドル島村卯月だ。

一見無縁と思われるかもしれないが、かつてヒナミはその卯月と出会っていた。

だが居場所をなくしたヒナミは卯月に何も伝えずに彼女の前に去り、アオギリの樹に自分の居場所を移した。

卯月ちゃんは舞台上で輝き、誰もが知る有名人になっているのに対し、

私は人間にとって脅威の存在として生きている。

彼女にもう一度会うなんて、きつと叶わぬ夢。

過ぎていく街の灯を見ながら、私が乗るタクシーはアジト近くへと向かった。

—————

美嘉 Side

太陽が綺麗に照らす夕方。

アタシは帽子と伊達眼鏡をつけ、病院に出た。

(やっと怪我が治った。)

アタシの名は城ヶ崎美嘉。

今は大学三年生で346プロでアイドルとして活躍をしている。

レッスンしている時に怪我をしたためアタシは病院に何度か通院して、やっと今日怪我が治った。

まだ少し傷があるのだけど、ある程度したらなくなるとお医者さんは言った。

(お?ちょうどいいところにタクシーがあるんじゃない♪)

アタシが病院から出て、ちょうど目の前に一台のタクシーが止まっていた。

アタシはその後に事務所に向かうところだったため、そのタクシーに乗り込もうとしたら...

「す、すみません!」

すると突然、誰かが横入りをした。

「のっ、乗ります。!!」

「えっ?ちょよ、ちよつと!」

その横入りした人を見ると右目に眼帯をした緑髪の子で、どこか急いだ様子でタクシーに無理やり乗り込み、

横入りをした人が乗ったタクシーは行ってしまった。

(今日はなんかついてないなあ...)

怪我から治ったのに、早速嫌なことが目の前に起こった。

あの横入りをしたヤツなんなの?

アタシは苛立った様子でため息をした後、仕方なくプロデューサーに迎えに来てもらおうと電話しようとする。

「あれ?美嘉ちゃん?」

すると誰かが私に声をかけた。

アタシは普段変装していてファンなどに声をかけられることはないのだけど、

その声は明らかにファンの声でもなく、346プロの関係者の声で

はない。

まさかと思い振り向くと一人の男性が立っていた。

「あー！佐々木さんじゃんー！」

その男性の名は佐々木さん。

アタシの友人だ。

—————

琲世Side

僕は病院周辺に見渡していると、思わぬ人物に出会った。

「あれ？美嘉ちゃん？」

メガネに帽子をかぶった女性がいた。

一見誰かはわからないが、僕にはもうわかっていた。

その人物の名は城ヶ崎美嘉。

ピンクの色をしたロングヘアをし、綺麗な黄金色をしたトツプアイドルだ。

「あー！佐々木さんじゃんー！」

「ひ、久しぶり、美嘉ちゃん。まさかここで出会うなんて…。」

しばらく美嘉ちゃんとは会っていなかったため、驚きは隠せなかった。

そんな僕の姿を見た美嘉ちゃんはからかう様な目をして、

「な〜に驚いてるのよ？佐々木さん？もしかしてアタシと会えて嬉しいの？」

「そうだね… 長くは会ってないからね」

「そうだよね。ありがとう★」

美嘉ちゃんはそう言うとき『えへへ』と笑った。

「それで美嘉ちゃんがここにいてってことはこの前の怪我で？」

「うん、正解だよ★」

前にレッスン中に怪我をしたと美嘉ちゃんからメールで来たため、僕は少し心配していた。

「それで… 怪我は治った？」

「傷はまだあるけど、ある程度したらいつも通りにできるよ。心配してくれてありがとう★」

みんなは美嘉ちゃんのことを色気があって軽い人だと言ったり強気の男が好きそうなど思うが、

僕はなぜかそう感じられない。

「この前の広告の写真、結構かっこいい女性って感じによかったよ」

「そう？ 実はあんまり自信がなかったやつだけどね」

「え？ うまく決まっていると思っただけど…」

「怪我の影響でポーズを決めるのが辛くてね」

美嘉ちゃんは見えた目が派手な衣装をきたり、肌を多く露出する衣装をするためか誤解を招かれやすいが、

中身は真面目で良い子だ。

だから僕は美嘉ちゃんを軽い人とは考えられない。

「そうなんだ… あ、そういえば、志希ちゃんはイライラしている？」
「うん、最近態度が悪い感じはあるよ… フレちゃんは今仕事で違うところにいるし、いつも志希が絡むアイドルは別のところで仕事だから」

「フレデリカさんがいないのは大きいよ…」

志希ちゃんはいつも飛鳥ちゃんやありすちゃんなど絡むが、どうやら絡む相手がいないようだ。

間違いなく志希ちゃんは結構ストレスが溜まっていると思う。

「うちの事務所に行かないの？」

「ん… さすがに事務所には気軽に入れてないよ。いくら喰種捜査官でも入るのは… ちょっとね」

前にも凜ちゃんに言われたことだがまた同じく言うが346プロに入る時間はないし、行く機会がない。

そうして美嘉ちゃんと話していると、あることを思い出した。

「あー！ そういえば、眼帯の子見なかった？」

「眼帯の子？」

僕は六月くんとは別々に病院の周辺に捜査をしていたのだが、

先ほどから六月くんの姿はなく、どこに行っただのかわからない。

「どんな感じの子？」

「その子は緑の髪をした子で、右目に眼帯をしている男の子なんだけど…。」

「ああ、さつきタクシーの中に入ったよ」

「タクシーに…？」

「そうそう、アタシがタクシーを乗ろうとしたら急に横入りされちゃったんだ。せつかく事務所に向かおうとしたんだけど…もしかして知り合い？」

「そうだけど、どうし…っ!？」

「さあ、わからないよ。あとで叱って欲…どうしたの？」

僕は嫌な予感が脳裏に浮かんだ。

タクシーに急いで乗った理由がわかったのだ。

「もしかしたら、そのタクシー運転手は喰種かもしれない！」

「は!?!喰種?!？」

この前にドナートが話したことだ。

トルソーは人間社会に溶け込んでいる喰種で、周囲の人間を騙しながら企業に属している喰種だと。

その例えで出てきた職種がタクシー運転手だ。

まさか六月くんはトルソーが運転しているタクシーに乗り込んだかもしれない。

「なんでその運転手が喰種？」

「今ちようど捜査対象の喰種なんだ…そのタクシーの番号は覚えてるっ。」

「ば、番号は覚えてない…。」

美嘉ちゃんという言葉を目にした僕は、頭をくしゃくしゃとさせた。

このままでは六月くんが危ない。

あの子は喰種の戦闘には慣れてはいないだから、もしかしたらトルソーに殺されるかもしれない。

僕はそう焦っているとー

『——付近で一台のタクシーが暴走中、運転手は喰種である模様。』

付近の捜査官は至急応援せよ』

するとCCGから通信が入った。

そのタクシーは今僕がいたところから近くにいた。

もしかしたら六月くんが入っている可能性がある。

「そのタクシーの居場所はわかったの？」

「うん、さっき通信でそのタクシーが見つかったよ」

僕は近くにパトロールしているCCGのパトカーを手配し、合流場所を指示した。

「突然慌ただしくなってごめんね」

「別に大丈夫だよ。それより早く眼帯の子を助けてあげて！」

「うん、わかった！じゃあ、またね！」

「き、気をつけてね！佐々木さん！」

僕は美嘉ちゃんの前にすぐに去った。

僕を見送る美嘉ちゃんの心配した目であった。

一刻も早く六月くんの元へ

執徒

未央Side

都内が赤くオレンジ色に染まった夕方。

私は舞台のレッスンを終わらせ、建物から出た。

(レッスン終わったなー)

私は手首を伸ばし、きつかったレッスンを終えたことに達成感を感じていた。

私の名前は本田未央。

トップアイドルをやっている大学一年生。

高校一年生でアイドルのオーディションを受かり、アイドルをやってもう4年間が経った。

4年と言うと結構長いように感じるけど、私にとってはあつという間を感じるんだ。

(あーそうだ！)

私はカバンから携帯を取り出し、ある人に電話をかけた。

「もしもしー?」

『どうしたの?未央?』

その人物は私の大切な友人でもあり、同じアイドルの子。

名前は渋谷凜。

私は渋谷凜のことをしぶりんと呼んでいる。

前までは一緒にお仕事をしたのだけど、今は別々に仕事をしていて電話かメールなどで連絡をするほど会ってない。

「ねえ、しぶりん!この前に佐々木さんに会ったんだよね?」

『また佐々木さんのこと言うの?』

「だってしぶりんって佐々木さんのこと好きなんですよ?」

『うるさいなあ... 未央は』

電話から聞こえるしぶりんの声はどこか照れを隠したような声。

しぶりんは佐々木さんのことをいつも蹴ったりするけど、心情では好きなんだよね。

だって”あの人”に似ているからだと思っただ。

佐々木さんは本当に”あの人”と似ている。

声も顔も何もかもが似ていて、もしかしたら”あの人”ではないか
と感じてしまう。

「ねえ、その時は何話したの？」

『あんまり話したくないよ…… 恥ずかしいし』

あの方は私としぶりんより3つ上の男性で、今は姿を消してしまっ
た。

理由は全く分からず私が高校三年になった時、

”あの人”とそっくりな人が私たちの元に来たんだ。

その人の名前は佐々木琲世。

喰種捜査官だ。

佐々木さんと出会った時、私たちはそれぞれ確信したんだ。

”あの人”だ

“あの人”が帰ってきたんだ

私たちの元へ再び姿を表したんだ

「別に話してもいいじゃん♪それでー」

しゅりんと話していると、隣の道路に2つの乗り物がすぐに過ぎ去っていた。

「ーえ？」

普通の道にも関わらずエンジン音を響かせながらもものすごいスピードで飛ばしていた。

一つはタクシーで、もう一つは原付バイクだ。

普段道路を気にすることなく見ていない私でも、

明らかに異様だと判断してしまうほどの光景であった。

私はその過ぎ去った二台を見てあることに気がついた。

(あの原付に乗っている2人って…?)

タクシーを追いかけるように早く走っている原付を見ると、その乗っていた人はどこかで見覚えのある二人だった。

一人は金髪でギザギザの歯をした男性と二人目は紫髪の日を尖らせた男性。

どこかで見たことがあるのだけど…

『どうしたの？未央？』

しづりに電話をしていたことを忘れていた。

「…… あ、ああ、ごめんねしづりん！ちよつとぼーつとしちゃって」

『ぼーつと？未央にしては珍しいね』

「私でもたまにはあるって！あ、そうだ！この前にあーちゃんね」

私は目の前に起こったことをしづりに隠し、次の話題を変えた。

別に話しても構わないことだったのになぜ私は話題を変えようとしたのだろうか？

それに先ほど原付に乗っていた人はどこかで見覚えがあった。

私はそりぶりんと話をした後、原付にに乗っていた二人が一体誰なのかと考えながら駅に入っていた。

電車にしばらく揺られていた私はだんだんを思い出ししてきた

もしかしてあの人たちって——

瓜江Side

日が沈み暗闇に染まる街。

車で封鎖され道の真ん中に立っていた俺と不知は、赫子を体から現し、

止まっていた一台のタクシーからターゲットを待っていた。

先程シラズの原付で追いかけ、やっとヤツが乗るタクシーに追いつ

いた。

「貴様がトルソーか」

俺たちが追いかけていたタクシーの中から現れたのは、
着ていた服で顔を隠す哀れな格好をした痩せ型の男であった。

その男こそが俺が探していたトルソーという喰種だ。

以前出会った情報提供者のホリチエに佐々木の私物を交換条件に
トルソーの情報を得た。

その結果行き詰まっていた捜査が順調に進み、今ヤツの前にいる。
ヤツの戦闘能力は推定レートAと高い位置に設定されていたが、
俺たちが使用する赫子とヤツの準備不足なのか容易攻撃を入れやすかった。

このままいけば功績が佐々木ではなく俺たちに来る。

俺は一刻も早く佐々木の元から離れ、それよりも上の部隊 “S3”
に行く。

(佐々木一等の友人：：)

俺たちが最後にホリチエと接触した時、おまけとして彼女は佐々木
一等の友人について話した。

『佐々木球世の友人は、346プロのアイドルだよ』

『アイドル?』

『その一人が島村卯月。知っているよね?』

『ああ、名は聞いたことある(興味はない)』

島村卯月。

346プロダクション所属のアイドルで、今や誰もが知る芸能人。
アイドルと聞くと恋愛や異性との交流に制限をかけられるイメージ
があるのだが、島村卯月は佐々木と知り合っていた。

島村卯月と聞くと二年前に20区の作戦を思い出す。

20区に最高レートSSSの喰種が潜んでいる情報があり、区ごと
封鎖する大規模な作戦であった。

20区内は一般人を退避させ、喰種と喰種捜査官しかいないはず
だったのだが、島村卯月が区内に取り残されたと一ノ瀬志希の発言に
より発覚した。

最終的には有馬特等が率いる0番隊によって救出された。

世間では喰種捜査官によって救出されたと報道されたが、噂には喰種によって救われたという嘘らしい情報がごく稀に耳にする。

それにしても週刊誌に載っていないのは確かにおかしい。

芸能人の私生活に喉から手が出るほど欲しがる記者が取り上げてもおかしくないのだが、何か意図があるのか？

「鱗赫か……ウリ公……あいつは相当再生速えぞ」

「……攻撃を緩めるな、シラズ」

俺たちがトルソーに戦闘をしている中、タクシーの中からトルソーにより負傷した六月が姿を表したのだが、

全く赫子を出す気配がしない。

やはり六月は赫子を出すのはまだ時間がかかる。

俺はトルソーに赫子を向け、

「……一気に畳み掛けて確保する」

そのまま攻撃を加えようとしたその時だった。

「はっ」

すると突然、道路を塞いでいた車両がヘビのような巨大な触手によって一気になぎ倒された。

その触手はヘビのマスクをかぶった喰種によって生み出されていた。

「その確保、中止」

その喰種の名はオロチ

トルソーよりもレートが高い凶暴な喰種が突然俺たちの前に現れたのだ

自我

球世Side

夜の都内。

皆が職場から家へ帰っている時間帯だが、僕は急いで現場に向かっていた。

現場は地下トンネルに入る道路だ。

(…壊滅している)

たどり着くと騒然とした光景になっていた。

地下トンネルに続く道路を封鎖していたはずの車があちらこちらに散らばって、バリケードの役割を無くしていた。

それは事故ではなく、1体の喰種がやったのだ。

その喰種の名はオロチ。

Sレート以上の凶暴な喰種だ。

トルソーが乗るタクシーを見つけたが、肝心のトルソーの姿はなく、逆にオロチが現れていた。

(あれは…！)

周りを見渡すと道路の真ん中に人影を見つけた。

僕が指導する瓜江くん、不知くん、最後に六月くんの姿を確認ができた。

(このままじゃ危ない…！)

だが瓜江くんたちはこれ以上戦闘をするのは不可能に近く、オロチの強さに圧倒されていた。

(危ないっ!!!)

僕は即座に瓜江くんたちの前にたち、即座に出したサーベル型クインケ”ユキムラ”でオロチの赫子を切り裂いた。

「サッサン！」

「先生…！」

あともう少しでオロチの攻撃を受けていた。
ぎりぎり間に合った。

「僕の部下に、手を出すなっ!!!」

僕はオロチに接近し、持っていたクインケを振った。

だがオロチは僕の攻撃を全て避け、僕はオロチに攻撃を加えられた。

僕は攻撃で吹き飛ばされ、すぐに体勢を整えたが……

「……ぐはっ!」

あまりにも強い一撃だったため、口から血が吐き出された。

(さすがSレート……)

今、僕が戦っているのはオロチだ。

ヘビのマスクに、ヘビの体に似た巨大な赫子。

ヤツのレートが高い理由が身を染みてわかる。

(今のクインケじゃ、歯が立たない……)

このままじゃヤツに勝てない。

たとえ攻撃を加えても、僕のクインケじゃすぐに再生をする。

僕はどうすれば……

『弱いね、ハイセ?』

「っ!!」

誰かの声を耳にした瞬間、僕は道路の真ん中ではなくモノクロの床に周りが真っ暗な空間の場所に立っていた。

その空間にはオロチや瓜江くんたちの姿が消え、僕と彼しかいなかった。

「……黙ってる!!」

僕は一喝を入れると、元の世界に戻った。

僕は六月くんたちの方に顔を向け、

「六月くん、アキラさんに連絡を」

「……は、はい!!」

僕は六月くんにそう伝えると着ていた白いコートを脱ぎ、ネクタイを緩めた

「……アキラさん

「……有馬さん

僕に

「……勇気を

卯月Side

撮影が終わり、私は事務所から出ました。

(今日もがんばった……!)

今日は毎週放送しているドラマの撮影で、私は脇役として出ました。

私はアイドル活動だけではなく、ドラマ撮影やバライティに出演などの活動をしています。

とは言ってもまだ主演ではなく、一回限りの役ばかりです。

でも何回かドラマ撮影などのお仕事を受けたことで、ここ最近だと俳優のお仕事も悪くないと感じ始めました。

今回のドラマは今話題の小説を映像化したドラマで、視聴率は結構高いと聞きます。

私は撮影前に原作の小説を軽く読みましたが、中々全部を読むのはきついです。

私はそのことを思い出していると、ある人を浮かびました。

(そういえば・・・文香さんとはあまり話さないなあ・・・)

文香さんは私と同じアイドルで、本を読むことが好きな方です。

前までは何度かお会いする機会がありました。

ここ最近お互いお仕事に忙しいせいからお話をする機会がありません。

文香さんは優しい方なのですが・・・

(何度か事務所で姿を見かけるんだけど・・・)

あまり文香さんに悪くは言いたくはないですが、あちらから避けているように思います。

始まったのは私がアイドル活動を再開した時からだと覚えていません。

私が話しかけようとすると、文香さんは早歩きで去ってしまいます。

他の子からは文香さんが私を嫌っているとは聞きませんが、何か変だと感じます。

(それにしても、なぜ奏ちゃんがあのことを言ったんだろう?)

この前、奏ちゃんとお話をしてたら『文香にあまり佐々木さんのことを伝えないでね』と忠告のようなことを言われました。

どうしてなのかは聞けませんでしたが、疑問が募るばかりです。

私はそう考えながら、私が住むマンションへと帰って行きました。大学に入るまでは家族と一緒に家にいましたが、私の知名度が上るにつれて家族に迷惑をかけないようにと一人暮らしを始めました。離れて暮らしていると言っても、毎月にママが私が住むマンションに上がってきます。

文香さんは一体どうしたのだろうか？

私を嫌っているの？

嫌っているなら、どうして？

――――
ハイセSide

僕は気を狂わせた。

最初はオロチの攻撃を受けるばかりであった、僕。

だが逆転をさせた

『… 僕の事なんか知らない方がいいと思いますー』

『ーーーよ？』

親指で指を鳴らした後、赫子を一齐にオロチに向け、攻撃をした。さつきまで出せなかった動きを出し、容赦無くオロチの体に突き刺し、

道路に投げ捨て、オロチは道路に叩きつけられるように倒れた。

僕が赫子を使うのは久しぶりだ。

いつもはクインケで喰種を駆逐していたのだが、有馬さんの元にいた時以来初めて赫子を使った。

『… はあゝゝゝ死ぬ死ぬ… てか？』

倒れていたオロチの顔を見ると、仮面がなくなっていた。

どんな素顔だろうかと僕は近づいた。

「どこまで行っても救われねえのな…」

僕はオロチの素顔を見た瞬間、

『カネキ』

彼の顔を見た僕は静かに驚いた。

「西尾…先輩…？」

って誰？

「っ!？」

僕が誰かの名を言った瞬間、頭に激痛が走った。

(僕は…今なんて言ったんだ?)

目の前にいるのはオロチ。

本当の名を知るわけがないのに、僕は見知らぬ名を言った。

「うっっ?!!」

僕の頭の中に生まれる痛い

それは何度か味わった痛み

その痛みはただの痛みなんかじゃない

記憶を思い出した時の痛みだ

一つは暗い牢獄に閉じ込められた時

これで暴走をしたのは何回目だろう

僕はまたみんなに迷惑をかけてしまった

せつかく駆逐できそうだったのに、僕は逃してしまった

僕は完全な人間ではなく、半喰種だ

他の捜査官がまともな人間ではないと言うのはそういうことだ

ああ

僕はここで戦っているのだろうか？

――

真夜中

人々がゆっくりと眠る頃

ベッドで寝ていた私は何度か眼が覚める

自然と体が私を目覚めさせる

私はぐっすりと言が昇り始めるまでに眠れない

どんなに眠ろうとしても、私は再び夜に起きる

原因はわかっている

私は彼のことを無意識に考えてしまうのだ

その人は私がアイドルになったきっかけを作った人でもあり

私がアイドルになったことに後悔を作った人でもあります

彼との出会いは私の叔父がやっている古本店でした

私はそこに働きながら上井大学に通っていました

彼と出会った時、私はいつも通りにお店番をしていました

いつもと変わらずに本を読んでいた、私

そんな時、彼はお店に訪ねていました

普段学生が入ってくるような場所ではないのに

彼はお店の奥に来たのだ

私と彼はその出会いをきっかけに、交流をするようになりました

(…彼は優しい方でしたね)

彼を思うと私はじっとしていられず、枕にぎゅっと抱きしめる

彼を抱きしめているように

私の元から離れないでほしいと願って抱きしめる

彼は今何をしているのか心配

もしかしたらもう一度姿を消してしまうだろうかと安心していら
れない

彼は私になにも言わず、去ってしまったのだから

その事実を知った時、私は喪失感を味わった

どうして自分はアイドルをしているのか分からずに日々過ごして
しまった

なぜ自分はアイドルをやっているのだろうか
と心の奥で葛藤して
2年後

私の元に、彼に似た男性が現れました

その人の名前は佐々木琲世

私は佐々木さんを見た時、あまりにも嬉しさに涙を流し、抱きしめました

名前は違うけれど、何もかもが彼にそっくりでした

(∴ もう二度と離れて欲しくない)

私は彼を失いたくない

ずっと私の横にいてほしい

私はそう考えていると自然と眠る

彼が横にいないのに、考えるだけで眠れるなんておかしい

私は彼なしには生きていけない

誰にも渡したくない

苦悩

琲世Side

一夜を明けた翌日。

お昼休憩になった時、僕は外の空気を吸いにCCG本局から出ていた。

いつもなら外の空気を吸いに行くことはないのだが、今日は全く気分が上がらずに視線が下を向いていた。

(明日に有馬さんと会うことになるのか…)

それは昨日の出来事が原因であった。

一つ目は有馬さんからの呼び出しだ。

きつと暴走について話さなければならぬと思われる。

僕が最後に暴走したのは有馬さんの元にいた時だから、きつと何か聞かれるだろう。

そう考えるだけでもさらに背けたくなる。

(…昨日)

そして二つ目はクインクスの班長を変更したことだ。

今までのクインクスの班長は瓜江くんだったが、行動がよろしくないと判断し、指導者である僕が解任させた。

瓜江くんは確かに優秀なのだが、他の人とは不協力で無断で単独行動する。

それに完全に不利な体制だったにも関わらずに戦おうとした。

一見良いことをしたと聞こえるかもしれないが、逆に言う逃げなければ殺されていた。

それで瓜江くんを解任し、次の班長は不知くに決定した。

あの時はすらつと次の班長を言えたのだが、今思えばよく言えたなと後悔に似た感情が僕の中に漂う。

あの判断は合っていたのだろうか？

僕は正しいことをしたのか？

胸の中で考えていると――

「こんにちは、佐々木くん」

すると聞き慣れた声が僕の耳に入り、ぴたりと足を止めた。

僕は下と向いていた視線を上げると、メガネと帽子を被った綺麗な女性が立っていた。

「…楓さん？」

僕はその人を見た瞬間、一体誰なのかわかった。

目の前に現れた女性は楓さんだった。

「久しぶり…という程度じゃないわね」

楓さんはそう言うと、うふふつと笑った。

あまりにも突然だったため僕は動揺が隠せなかった。

いつもならメールで事前に連絡をして会うのだが、今回は楓さん自身が僕の元に来てきたのだ。

楓さんは動揺している僕を見て、「ふふつ、驚いちゃったでしょ？」と笑った。

「…え、ええと…どうして僕の元に？」

「今、時間は空いているかしら？」

楓さんはそう言うと手首につけていた腕時計に指を指した。

今回もまたいいカフェを見つけたらしい。

「…少しならいいですよ？」

ちようどお昼休みということであったため、僕はお誘いを断ることなく、

楓さんに連れられるようにカフェへと向かった。

まったく晴れていない心のままで

—————

楓さんに連れられた僕はCCG本局から少し離れた場所にあった喫茶店へと入った。

僕たちはテーブル席に座り、コーヒーだけ注文をした。

そのお店は大通りに面しておらず、小さな路地にひっそりと構えていた。

店内は昭和のレトロさがお店の雰囲気を作り、心地よさを作ってくれる。

それにここのお店が出すコーヒーは豆の味をよく活かしている。

「おいしいですね…このコーヒーは」

「でしょ？やっぱり選んで正解だわ♪」

楓さんはそう言うと言った。頼んだコーヒーを飲み、嬉しそうな顔をした。

今回も楓さんはいいお店を見つけてくれた。

「そうそう、この前に瑞樹さんからこんなことを言われてね」

「そ、そうなんです…」

だが楓さんが話す話題は、僕の頭に中々入らない。

それと昨日の出来事が思い出して気分が晴れず、コーヒーの深い味わいやお店の雰囲気が素直に楽しめない。

僕がこうしてゆったりするのがどうも居心地が悪い気がする。

昨日のシビアな空気から一変した状況が忘れられずに今思い出す。そう考えた僕はコーヒーを一口飲んだ後、止めてしまった。

「どうしたの佐々木くん？ずつと暗い顔になっちゃって？」

すると楓さんは僕のおぼつかない反応に気がついた。

僕は楓さんに「… あ、なんでもありません」とぎこちなく言葉を返したのだが

「そうかしら？私にはそう見えないのだけど…？」

楓さんはそう言うと言いつつ顎に手をつけ、僕をじつと見つめた。

僕を見つめる彼女の目は引き下がる気はないと言っているみたいであった。

「… やっぱりそう見えていました？」

「ええ、もちろん。今日佐々木くんと会った時からそう思ってたわ」

「… すみません、楓さん」

「そう謝らなくてもいいのに、まったく佐々木くんは」

楓さんは頬に手をつけてテーブルに肘をつけ、どこか安心した顔でため息をした。

「別に責めているわけじゃないし、それにせつかく佐々木くんが気に入りそうな喫茶店に来ているのに、楽しんでくれないのは私は悲しいかな」

「… そうですね。ここのお店は雰囲気もいいし、コーヒーも美味しいのですが…」

「もしかして何か悩み事でも？」

「…」

僕は再び口を閉ざしてしまった。

さすがに楓さんはCCG関係者ではないため、赫子を出して暴走をしただなんて言えない。

また僕が口を閉ざした姿を見た楓さんは、

「もしかして同僚の人から嫌味とか… いや、そうじゃないみたいわね」

楓さんは僕が抱えている悩みの原因を呟くように言っていて

た。

同僚の嫌味は別に深く気にすることではないけど、それよりも大きい悩みがある。

「わかっていていると思いますが… CCGは機密主義の仕事場ですが…」

「ええ、もちろんわかっていているわ。だけど、どうやら佐々木くんの悩みはその機密の中にありそうわね」

「はい… 内容は言わないですが… いろいろと迷っています」「うんうん、迷っているのね」

楓さんは小さく頷いた。

「それで自分は どうして戦っているのか… わからなくて」

「… なぜ自分は戦っているか… ね。確かに喰種捜査官は喰種を倒す仕事だったわね」

楓さんはそう言うのとコーヒーを自分の口に運んだ。

「それで僕はみんなに迷惑をかけて… 本当に自分はここにいていいのかわからないんですよ」

僕が暴走したことにより、僕たちが捜査していたトルソーを逃し、あと一歩で倒せたはずのオロチも逃してしまった。

もしあの時暴走をしなければ喰種を確保でき、捜査に協力してくれたみんなに迷惑をかけなかった。

「そうなのね… 私も同じく考えた事あるのよ。私が昔モデルをやっていたことは知っているよね？」

「ええ、アイドルになる前はそうでしたよね？」

楓さんは卯月ちゃんとは違い、モデルからアイドルになった珍しい経歴を持っている。

「モデルになりたての時にことなんだけど、その時の私はあんまりうまくいなくてね。仕事場の人に何度も何度も迷惑かけて、それでどうして自分がここにいいのかわからなくなった時があったのよ」

「… はい」

以前楓さんに聞いたことだが、その時は一人で上京したばかりで何もかもが不安で仕方なかった。

それにモデル一筋で生活をするのは厳しく、親の仕送りでは生活を賄うのは足りなかった為、

アイドルになる前まで喫茶店でアルバイトをしていた。

「それでバイトをしていた喫茶店の店長さんがそんな私に気がついてね」

楓さんはそう言うところか懐かしさを持った顔をしてこう話した。

「店長さんが私に言ってくれたんだよね」

『自分を成長するには、迷惑をかけることも大切だよ。ただ迷惑かけないようにしてたら、自分の為にならない』

そう言った楓さんの顔は懐かしむように目を細め、笑った。

「だから迷惑をかけても、また前に向いてもいいと私は思うわ」

「…そうですよね」

ここ最近クインクスの子達の迷惑を見て僕は悪いイメージしか持たなかったのだが、

楓さんの言葉に考え直された。

僕は少し笑みを浮かべ、

「ありがとうございます…楓さん」

「いえいえ、佐々木くんが元気になってくれたら私は嬉しいわ」

心の中にあつた重い何かが軽くなり、気分が少し晴れた気がした。

楓さんはいつも僕をからかうのに、こんな時に限っては真面目に聞いてくれる。

何回も話しているのに今回は特別な日だと僕は実感した。

「それで気分転換に今度、瑞樹さんたちと飲み会にー」

「さすがに行きませんよ!」

僕は楓さんの言葉を耳にした瞬間、不安そうな状態から慌てた状態になり、真っ先に断った。

そんな僕の姿を見た楓さんは笑いながら頭を傾げ、

「あれ〜?少し上の先輩たちのお話を聞けるの〜?」

「お話って... 大体騒いだりするだけじゃないですか!」

楓さんが言った飲み会はただお酒を飲むだけではなく、騒いだり変なことをするまさに地獄絵図と言ってもいいほど最悪だ。

飲み会に参加する僕は水しか口にしないため、まともな人間は僕しかいない。

一体どんな状況なのかと言うと、例えばまだ若い僕に将来のことを嫌々に相談されたり、

お酒に酔って泣きつかれたりするなど、

お酒に酔った楓さんたちは僕に休む時を与えてくれない。

「佐々木くんもその年になったらわかるわよ。だからその練習で来たらしいじゃない」

「いくら練習でも、まとめて相手するのはちよつと...」

あの人たちは容赦がないほど僕に話しかけたり、攻撃したりする。それにいくら何でも女性しかいないところで男である僕一人はきつい...

僕は楓さんになんとか飲み会のお誘いを断ろうと話していると、あることに気がついた。

「... あ、もうそろそろ局に戻らないと」

「えー?もう少しお話をしたかったのに」

楓さんはそう言ううちえつと不満そうな顔をした。

時計を見るとあと10分ほどでお昼休憩が終わる頃で、

しかも僕たちの会話は最高潮の時だった為、区切りが悪かった。「あんまり話しているとアキラさんに怒られるので...」

「別にこうゆう迷惑もいいんじゃない?」

「それはダメでしょ!」

理由はともかくもし遅れてしまえば、アキラさんから間違いなく腹

に拳がくる。

「もお、佐々木くんたら…： 今度また話しましょう？」

「ええ、そのときはメールでお願いしますね…： そういえば、今日は何で本局に来」

「そんなこと言ったら、遅れるわよ？」

「ああ、そうでした！」

僕は慌ててそう言うと言席から立ち上がり、喫茶店をあとにした。

いつも僕は楓さんにコーヒーのお代を支払ってもらっている。

しかもそのお代は返さなくてもいいと楓さんは言っている。

流石に楓さんに支払ってばかりじゃダメだなど思い、一度だけ僕がお代を払おうとしたら、

『佐々木くんは払わなくてもいいわ』と結局僕が払わずに楓さんが払ってしまった。

どうしていつも払ってくれるのかと聞くと楓さんは『さあ、どうしてでしょう？』と理由を教えてくださいません。

本心ではもう少し楓さんと話をしたかった

例えば楓さんがかつて働いていた喫茶店のこととか

内心

琲世Side

111区 CCG本局

翌日の昼。

僕は有馬さんに呼ばれ、会議室にいた。

普通ならば席に座り、話し合うと思うかもしれない。

だが僕たちはそんな常識的なことをしていない。

「ま…参りました」

僕は有馬さんから蹴りで机の上から激しく落ち、有馬さんが僕の目元にペンの先が向けられた。

一体どんなことが行われたかと言うと、ただ座って話すのではなく会議テーブルの上で手合わせをしながら話していたのだ。

僕たちがやる手合わせは、もちろん手加減はしない。

蹴りや殴りをするのだから、下手すれば怪我は免れない。

それでこの手合わせで、僕は有馬さんに負けていたのだ。

「悪くないよ、琲世。だが、もつと速いはずだ」

目の前にいるのは、有馬貴将。

白い髪にメガネをしている男性だが、CCGでは最上級の特等捜査官であり、

彼があげた功績は数多く、最強と賞賛される無敗の捜査官だ。

あまりにも強いため、僕は一度も手合わせには勝ったことがない。

「あの…有馬さん？」

床に倒れていた僕は、手合わせして乱れた自分の服を整えながら立ち上がった。

「僕を呼んだのは先日の件では…？」

僕がその話題を話すと、少し下に視線を落としてしまった。

有馬さんが呼び出すのは何かあるに違いないと僕は考えていた。

つい最近僕の暴走してしまい、追跡していた”トルソー”と平子班が捜査していたオロチを逃してしまった。

「こんな失態…平子上等に…申し訳が…」

僕が話していたその時だった。

「これ、借りてた本」

僕が話している途中、有馬さんはある本を持っていた。

「ありがとう。短いけどカフカの『雑種』が気に入った。あとタケは気にしないと思うよ」

「あ…あれはカフカのどこか閉鎖的なユーモアが感じられる、いい短編ですよね…」

その本は僕が前に有馬さんに貸したカフカ短編集だった。

「またその本を貸す時もあるかもしれないから、その時は声をかけるよ」

「ええ、でもしばらくは他の人に貸すので…」

——僕がそう言った瞬間だった。

「もしかして、卯月？」

「…え？」

有馬さんの言葉に、僕は思わず声が裏返った。

「い、いや、卯月ちゃんじゃなくて！」

僕はあまりにも有馬さんの言葉に驚いてしまい、不自然な返事で返した。

まさかここで聞くだなんて考えもしなかったからだ。

有馬さんは僕の慌てて返した言葉を耳にし、

「そうなんだ」と何も気にせずに静かに一言を返した。

「卯月をシャトーに連れてこない？」

「シャトーにつて…！なに言っているんですか!？」

「別に連れてきてもいいと思うけどな…」

有馬さんはCCG内では最強と言われているが、副産物なのか性格は非常に天然だ。

その天然さは楓さんよりもはるかに上だと断言できる。

先ほど有馬さんが言ったシャトーはあくまで共同生活をする所であり、他の人に知られてはならない場所だ。

何せそこに住んでいる捜査官はただの人ではなく、喰種のを能力を持った人たちが住んでいる。

卯月ちゃんを連れてくるだなんて…

「ハイセは最近、卯月と話した？」

「ええ、もちろん話していますよ。ついこの前に会いましたよ」

「そうなんだ。どんなこと？」

「例えばお互いにあった出来事や面白いこと、あとは仕事のことを話したぐらいですね」

いつも卯月ちゃんと会うときは会話ぐらいいしかせず、テープマークとか遊ぶような場所には行かない。

むしろそのぐらいで十分楽しめている証だと僕は思う。

ちなみに有馬さんは一度だけ卯月ちゃんに会ったことがある。

それは3年前の20区討伐戦の時だ。

喰種捜査官と喰種しかいなかった20区内に取り残された卯月ちゃんを、

有馬さんが指揮する0番隊が救出したことはCCG内では知られている。

でもその時の卯月ちゃんは意識が朦朧していたため、有馬さんは卯月ちゃんと話したことがない。

「それでハイセは卯月のことをどう思ってる？」

「…えっ？卯月ちゃんですか？」

あまりにも唐突だったため、僕は少し赤めてしまった。

卯月ちゃんは僕の友達だけど、異性だということは忘れてはならない。

そう考えるとすぐに答えがでなかった。

僕は少々恥ずかしさを抱えながらも、躊躇で固かった口を開いた。

「……卯月ちゃんは僕にとってかけがえのない大切な友達です」

僕は過去20年間の記憶を知らずに、2年間生きてきた。

記憶を失いつつ生きるのは辛いかもしれないが、僕には嬉しいことがあった。

それは卯月ちゃんと出会えたことだ。

まるで白黒の絵が、鮮やかな色に染まったみたいに明るくなったんだ。

「今まで僕はCCG関係者以外の人と知り合う機会はなかったのですが、卯月ちゃんと出会ったことで狭かった僕の世界が広がったんです。だから僕は彼女には感謝しきれません」

僕はふと気がつくのと表に出ていた恥ずかしさはなくなり、

自然と笑顔になっていた。

有馬さんは僕の話に少し微笑み、

「琲世はいい友達を持っているよ」

「……ありがとうございます」

僕は有馬さんの言葉に嬉しくなった。

僕にとって有馬さんは例えるなら僕のお父さんで、アキラさんは僕のお母さんだ。

本当の親を知らない僕にとって二人は親の存在に近い。

そういえば卯月ちゃんと初めて出会ったのは、

有馬さんが誕生日祝いで少し早く退局させたことだ。

あれは偶然だったのだろうか？

何か意図的な何かはあるのかな？

そういえば、僕には今でも疑問に浮かぶことがあるんだ

卯月ちゃんと初めて出会った時、彼女が流した涙は一体なんだろう？

卯月ちゃんが僕を見た瞬間、突然が涙を流し、抱きついた記憶

そんなことをした彼女は僕のことを、本当にどう思っているのだろうか？

—————

卯月Side

太陽が少し傾き始めたお昼頃。

先ほどお仕事が終わって事務所に帰ってきた、私。

(今日のお仕事は終わったー！)

今日やるべきお仕事が終わりに、私は手を伸ばしていた。

久しぶりに早くお仕事が終わったため、あと自分がやることはお家に帰るだけです。

(ん…このまま帰るのはちよつと…)

でも今日はいつもより早く終わったせいか、何か物足りません。

どうしようか考えていると、後ろから誰かが私の横を通り過ぎました。

その人を見た私はハッと気づき、とつさに声をかけました。

「あーお久しぶりですー！プロデューサーさんー！」

その方は私がアイドルになったばかりの時に担当してくださったプロデューサーさんです。

私が後ろを向いていたプロデューサーさんに声をかけると、こちらを振り返り、私と同じくハッと驚きました。

「あ、島村さんお久しぶりです」

プロデューサーさんはそう言うで一礼しました。

プロデューサーさんは高身長でスーツが似合う黒髪が似合う男性ですが、よく初対面の人から顔が怖いと耳にします。

確かに私も初めてプロデューサーさんと会った時は怖かったです。

でも今では私にはその怖さはなく、真面目で優しい人と捉えることができます。

今の私は別のプロデューサーさんにプロデュースしてもらっていて会う機会は少なくなりましたが、

会うたびにこうして楽しくお話します。

「お仕事の方はどうでしょうか？」

「ええ、頑張ってますよ！つい先ほどお仕事が終わって、この後帰ろうかなって考えていました」

プロデューサーさんとは先ほど伝えた通り、久しぶりに話します。

プロデューサーさんは今はシンデレラプロジェクトを担当している、

他のスタッフから聞いたお話ですが、346プロダクションのアイドル部門の中ではかなり上の人だそうです。

「そういえば、島村さん」

「はい？」

「最近、佐々木さんにお会いしましたか？」

「…へえ!？」

私は変な声が出ちやいました。

プロデューサーさんが思わぬ話題をあげたからでした。

「さ、さ、佐々木さんですか!？」

「そうですが…驚かすようなことを言ってしまう、申し訳ございません」

「い、いえ、まさかプロデューサーさんの口から佐々木さんのことを聞くなんて思いませんでした」

プロデューサーさんは佐々木さんのことを知っています。

もちろんお会いしたこともあります。

「なんで佐々木さんのことを？」

「先日、高垣さんとお話した時に佐々木さんのことが話題に上がりまして、それで卯月さんはよく佐々木さんにお会いしていると思いましたのでお聞きしました」

「楓さんがですか？」

「ええ、よく私にお会いするたびに言うんですよ」

今思うと楓さんは私より佐々木さんに会っている回数が多いです。

佐々木さんとはお昼の時間帯によく会うと聞きます。

「それで島村さんは最近佐々木さんにお会いしましたか？」

「はい！会ったんですけど・・・その時は何時間も公園でお話ししただけでしたけどね」

「公園でお話ししただけ？他の場所は行かなかったのですか？」

「気がついたらずっと公園にいたんですよ」

そう言った私は、思わず笑ってしまった。

普通ならばおかしいことだと思うけど、いつも私と佐々木さんはふと気がついたらお話しだけで終わってしまう。

別に話す以外に何か他にあると思うかもしれないけど、私は佐々木さんとはお話するだけでもすごく嬉しいです。

佐々木さんはとても優しい方です

いつも私のお話を聞いてくれたり、私を気にしてくれたりします

ここまで仲がいい異性は、今は佐々木さんしかいません

でも佐々木さんと会うたびに、私は自然に金木さんと比べてしまう

佐々木さんは金木さんにとっても似ている

声も顔も背の高さも本当に同じに見える

まるで金木さんとお話しているみたい

もし金木さんが私と佐々木さんが一緒にいる光景を見たら

きっと悲しくなってしまうかもしれない

だから私は佐々木さんと別れる時、辛くなるんだ

本当に佐々木さんともっと仲良くしてもいいのかなって

S c e n t

球世Side

CCG本局

真戸班 捜査室

「……すごい。直接“トルソー”に絡む情報はないけど。」
「ああ、この情報があれば、かなりヤツの行動範囲を推測できた……」

僕はアキラと共に情報が書類を見ていた。

まどあきら
真戸暁上等捜査官。

僕の指導者であり、CCG内では数少ない女性捜査官だ。

僕が書類に書かれている情報を見ると、

「それにしても、ハイセ」

「はい？」

「お前、最近やけに調子がいいな」

「そ、そうでしょうか……」

アキラさんが突然僕の調子のことを聞いてきたのを妙に不自然に感じた。

確かにあの暴走が起こって一時期気分が落ち込んでいた僕なのだが、今は明るくなっているのは事実だ。

「ああ、そうだ。今日会った時からお前はどこか調子がいいみたいだ」

「ええ、もしかしたら昨日有馬さんにあっただからと思いま」

「だがその気分の良さは、有馬特等に会っただけではなさそうだな」

「え？」

するとアキラは僕の言葉を遮った。

「また高垣楓と会ってたのか」

「……えっ!?なんでわかったのですか!?!」

アキラさんの勘は見事に当たっていた。

僕はなぜわかったのかアキラさんに聞いたのだが、

アキラさんは「勘だ」ときつぱりと言った。

アキラさんの勘は信じられないほど本当に当たる。

「お前は卯月や凜などの346プロのアイドルと何度か会っていて、よく週刊誌に載らないな」

「そ、そうですよね…。結構会っているのになぜなんでしょう?」

アキラさんの言う通り、芸能週刊誌に載ってもおかしくはないほどの情報なのだが、

運がいいのかそれとも気がつかれていないのかまったく耳にしない。

「それでまた喫茶店で話したのか?」

「はい、いつも通りに喫茶店に連れて行かれて、お話を…」

「まったく…。だがお前を元気にさせたことには認めるが、会うのはほどほどにしてくれ」

「…はい」

アキラさんは少しため息をし、僕に伝えた。

その言葉を耳にした僕は少し嬉しかった。

アキラさんはいつも僕が卯月ちゃんたちに会うたびにまた会ったのかと聞いてくるのだが、

注意をするというよりは何をしたか聞きたいというのが近い。

ちなみに以前に楓さんから『その琲世くんが言うアキラさんと一緒に飲みたいな』と言われたが、

僕は楓さんの提案を聞いた瞬間、真っ先に断った。

理由はアキラさんの酒癖はものすごく悪いからだ。

仕事ではきつちりとこなすのに、お酒の席になると性格が逆転する。

「ところでアキラさん、トルソーの住居の調査はいかがだったでしょうか?」

「…ああ、トルソー宅は現在下口班が洗っている。やはりヤツの部屋は例の胴体だらけだ」

アキラさんの話によれば、トルソーが住んでいた部屋には多くの女性の胴体が発見されており、

あるものは悪臭がひどいものから、つい数日前に殺害された女性の胴体までもが部屋に置かれていた。

話を聞くだけでも背筋が凍るのだが、

現在その部屋を捜査している捜査官は胴体がずらりと並べられている光景を目の当たりしているのだから、

きつと気分を損ねる人はいるかもしれない。

「そうだ、ハイセ」

「はい？」

「今度の捜査なんだがー」

アキラさんが話そうとした途端、突然携帯が鳴りだした。

その鳴り出した携帯はアキラさんの携帯であった。

アキラさんは「すまん、電話に出る」と話すのをやめ、自分の携帯を手に取り電話に出た。

「真戸だ」

『真戸上等ッ！緊急連絡です…トルソー宅を調査中の下口班です
がッ…』

電話をかけてきた人物は今トルソー宅を捜査していた下口班の捜査官であった。

電話から聞こえる声はどこか荒立たしく聞こえる。

まるで何かに追いかけていて切迫した声であった。

『アオギリの樹 SSレート”ラビット”に襲撃されー！！！！』

次の瞬間、電話から断末魔が響き渡った。

—————

瓜江Side

CCG本局付近

先ほど本局にいた瓜江は用事を済ませ、シャトーに戻っていた。

本局に訪れたのは捜査のことではなく今使用している赫子の強化

について尋ねにきたのだ。

瓜江は赫子を使いこなしているため、より力を引き出すためにクインクスに主治医である柴 遼次郎の元に尋ねた。

クインクス一同は現在5段階のフレームの中でフレーム2に設定されており、

瓜江はその上のフレーム4に上げようと願い出た。

フレームのレベルが上がれば上がるほど強力な赫子を使用できるが、

その代償に喰種になりかねないデメリットが大きく表に出ると考えられている。

しかし瓜江は赫子の強化にリスクなど関係なかった。

(あとは佐々木の同意だけだ…)

瓜江は後日、フレーム解放の施術の同意書を受け取ることにになり、あとはクインクスの指導者である佐々木琲世に施術の同意書にサインするだけだった。

(さっさとシャトーに戻るか…)

瓜江はポケットからイヤホンを取り出し、耳につけ、曲を流そうとしたその時だった。

「おっとー！」

「っー！」

すると突然瓜江の目の前に一人の女性がぶつかってきた。

瓜江は避けようとしたが、その女性は真正面にいたため避け切れなかった。

(…なんだ?)

瓜江はそのぶつかった女性の行動に眉をしかめた。

明らかに避け切れたのだが、どうもその女性は偶然にぶつかったのではなく、

意図的にぶつかったに近かった。

「いたたた…」

その女性はぶつかったあと、どうもわざとらしく地面に倒れた。

「大丈夫ですか? (ふぎけているのか?)」

「別に大丈夫だよ」

倒れた女性は陽気な声で答え、服を軽く手で払って自分で立ち上がった。

その女性は「では、さいなら」と言い、すぐに瓜江の前から去った。

(なんだあいつは?)

瓜江はその女性の行動に、苛立ちを覚えた。

今日はまったくついていない日だと、瓜江は心の中でつぶやいた。

—————

志希 Side

(あれがササハイさんが指導している子か…)

あたしの名前は一ノ瀬志希。

346プロでアイドルをしている21歳の不思議な女だよ

今はアイドルをしているだけで、大学には行ってないよ

(やっぱりふっの人は違ってた。匂いが違うし、あといじるのは楽しそうなんだなあ…♪)

さつきぶつかった人はササハイさんが指導している一人の瓜江久生という男性だ。

あたしはその人にわざと変な行動をしたら、嫌な目で見られた。

なんでわざとぶつかったかって?

ただ単におもしろそうだったから。

あたしは変な目で見られるのは別に気にしないけど、

あの瓜江という人はツンツンしているみたいで、いじると楽しめそう♪

(んーでも、いじるならやっぱり、ササハイさんの方がいいや♪)

そう考えたあたしはなぜか嬉しい感情がみえると湧き上がった。

あたしが言うササハイさんは、佐々木琲世という男性だ。

彼とは長く会っていないから、ここ最近結構イライラして日々を過

ごしている。

フレちゃんや美嘉ちゃん、文香ちゃんに卯月ちゃんなどイライラを減らそうと絡んでいるけど、

絡んで感じる面白さは人それぞれあって、本人じゃなきや心が満たされない。

先ほどのツンツンとしたササハイさんの子は絡んだら面白そうだけど、

ササハイさんの方がアタシにより興味を湧かせてくれる。

だってあの匂いは、消えてしまったカレと同じだからね

継情

球世Side

「襲撃をした喰種はアオギリのSSレートのラビットですか..」

「ああ、比較的若い喰種だと思われるヤツだ」

翌日、僕とアキラさんは下口班の班長である下口上等が運ばれた病院に訪れ、

彼から当時の状況を耳にし、僕たちの班の捜査室がある本局に車で戻っていた。

「下口さんは大丈夫でしょうか..」

「部下を全員失い、自分だけ生き残ったわけだからな」

下口班は僕たち真戸班と同じくトルソーの捜査をしていたのだが、ある喰種によってたった数時間で下口班長以外の捜査官たちが亡くなってしまった。

その喰種の名はラビット

アオギリの樹に所属するSSレートの喰種だ。

その喰種はアキラさんが言った通り若い喰種だと言われており、過去に多くの捜査官を殺害した。

「ラビット言えば、過去に20区の捜査官殺しや7区の准特等狩りで知られていますよね」

「ああ、あと私の父呉緒くれおもラビットとフエグチにやられた」

そのラビットに殺された捜査官にアキラさんの父である真戸呉緒まどくれお上等もその一人であった。

僕は彼には会ったことがないが、有馬さん曰く優秀な捜査官だったといわれ、

彼からクインケの手ほどきを受けたといわれている。

「フエグチもラビットと同じくアオギリの樹に所属.. それに行方をくらましたトルソーはおそらくアオギリの樹と接触しているのだと

思われるでしょうね」

「ああ、ここ最近アオギリの樹の影響は一般市民にも伝わるほどだ」
確かにアキラさんの言う通り、喰種に対して知らない一般人でもアオギリの樹の存在を知るようになっていった。

それは僕の知り合いである卯月ちゃんたちにも知るほどであり、安易に安心はできると考えてはならない。

「… そういえば、アキラさん」
「ん？」

「この前に僕に伝えたいことありましたよね？」

「ああ、言い忘れていたな」

それは昨日のことだ。

僕とアキラさんがトルソーに関連する書類を調べていた時、アキラさんは僕に何か伝えようとしていた。

しかしアキラさんが話そうとしたその時に下口班からの電話が来たため、詳しくは聞けなかった。

「今度、お前たちに向かって欲しいところがある」

「向かってほしいところですか？」

「ああ、もちろん次の捜査のために13区支部に向かうと思うが、そのついでなんだが…」

「そのついでに？」

「今度向かって欲しいところは——」

—————

夜の東京

夜の風がなびく誰もいないビルの屋上で一人の男が立っていた

彼の名は霧嶋絢都きりしまあやと

彼は人間ではなく、喰種だ

彼はアオギリの樹に長く所属しており、喰種捜査官である白鳩ハトからSSレートと狂暴な喰種だと目をつけられ、

白鳩からはラビットと呼ばれている

(今回はいつもより楽に済ますことができたな…)

アヤトはそう思うと、ビルの端に座り込み、小さなため息をした
つい先ほど、アヤトはトルソーが住んでいたアパートに捜査をして
いた白鳩に攻撃を与え、仕事を終えたのだ

今回はアオギリの樹の情報提供者として人間社会に溶け込んでい
た喰種トルソーの証拠を隠滅するために、

トルソーが住んでいた部屋を捜査していた白鳩を殲滅をした。

(まったく、ヒナミの忠告を受けてないのか?)

情報提供者だったトルソーは殺害した女性の胴体を集めていたこ
とに白鳩に目をつけられてしまい、

ついには喰種だと特定され、人間社会で生きていくのが困難になっ
てしまった。

その後、孤立していたトルソーの元にアヤトがアオギリへ入るよう
勧め、

トルソーはアオギリの樹に所属することになった。

(…)

最近、アヤトには気になることがある

それは同じくアオギリに所属しているヒナミのことだ

(ヒナミのやつ…なぜあの人間にこだわるのか?)

ヒナミは白鳩からフエグチと呼ばれ、アヤトと同様凶暴な喰種とし
て目をつけられている

だか彼女は敵であり、自らの糧でもある人間の中に憧れを抱く人物がいた。

(確か名は… 島村卯月だっけ?)

ヒナミが読む雑誌の中に、よく見かける人物がいた

その人物に名前は346プロダクションアイドルの島村卯月だ

島村卯月は世間ではトップアイドルとして知られており、

人間社会に興味がない喰種でもあることで知られている

(346プロか…)

島村卯月が所属している346プロは喰種対策を徹底している企業として喰種の中ではよく知られており、

特に喰種の敵である白鳩とは関係が強く、かつてプロダクションが置かれている13区はアオギリの樹が指揮する場所だったが、

今では喰種が存在しないほど白鳩に守られている

(… なぜヒナミはそんなに島村卯月を見るんだ?)

別に他の女性を見てもおかしくはないのだが、

どうもヒナミは彼女にこだわっているらしい

アヤトはなぜヒナミが卯月を好む理由を考えていたのだが…

(まあ… あんま考えても仕方ないな)

アヤトは考えるのをやめてしまった

ヒナミは未だにアオギリの樹には慣れていない

むしろヒナミは組織に所属することはまったく向いていない

そんな不慣れの中で島村卯月を好むのは、きっと心の拠り所として好んでいるだろう

アヤトはビルの屋上から去り、夜の街へと消えていった

彼もまた好んでアオギリの樹に好んで所属しているわけではない

守るべき人をかばうために

—————

球世Side

日が沈み始めた夕方

僕は不知くと六月くと本局から出ていた。

「……んで、サツサン……シラズ班の新たなミッションはどんなのよ？」

不知くんはメガネをつけて人差し指で少し上にあげ、どこかエリートな雰囲気を出していた。

「新しい対象は“ナツツクラッカー”。レートは判定中」

僕は次の捜査対象の喰種が書かれている書類を見ながら、不知くんがかけているメガネを取り上げた。

不知くんが使っていたメガネは僕のものだったからだ。

「Fuck! 格好から入ろうと思ったのに……!」

「はは……」

悔しがっている不知くんの姿に六月くんは少々笑った。

「先生、そのナツツクラッカーってなんですか？」

「ナツツクラッカーはくるみ割り機の意味だけ……その喰種は男性のこうがん辜丸を潰すのが趣味らしいからそう呼ばれる」

「ウゲツ……男のあそこを潰すんすか……」

「い、痛そうですね……」

不知くと六月くんはナツツクラッカーの話に顔を青ざめた。

二人がが背筋を凍りつくものわからなくもない。

喰種は人間しか口にできないため捕食のために人間を殺すのだが、ある喰種は捕食目的ではなく遊びとして殺したり、人間を無残に殺害する喰種も存在する。

例えばかつて存在して13区のジェイソンはボロ雑巾のように人間を殺めたといわれている。

「今回僕たちは捜査のサポートとして13区の鈴屋班の元で捜査するよ」

「鈴屋班？ 鈴屋さんってあの？」

六月くんは鈴屋くんのことを耳にすると、ピンつと反応をした。

「うん、あの人はナイフは一流だから六月くんは教えてもらったらいね」

鈴屋くんは主に使用する武器は大鎌型のクインケ 13、s ジェイソンだが、

ナイフ型クインケサソリ1/56も使用するため、同じくナイフ型クインケを使用する六月くんにとってはいい機会だ。

「そういえば、サツサン」

「ん？」

「サツサンって、女はいるんだろう？」

「…えっ？」

あまりにも唐突な言葉だったため、僕は困惑をした。

「お、女って…？」

「俺ら、知っているんすよ。サツサンには女がいるって」

不知くんはそう言うと、何か企んでいるような顔をした。

「シラズくん、流石に今聞くのは…」

「今じゃなかったらいつ話すんだよ、トオル？」

「そ、そうだけど…」

不知くんが言う女はきつと彼女ことだと思われるが、

まず僕には別に付き合っている女性はいない。

そう考えていると可能性のある人が頭に浮かんだ。

(まさか…)

僕が言おうとしたその時だった。

「サツサンはあの島村卯月と知り合ってるんスよね？」

「…え!？」

思わず声をあげてしまった。

僕が言おうとした人の名前を、シラズくんが言ったのだ。

「な、なんで知ってるの!？」

僕はクインクスみんなに卯月ちゃんと知り合っているとは伝えてはおらず、

どうして知られてしまったのかまったく心当たりがなかった。

すると不知くんは「これスよ」とあるものを僕に見せた。

「これって…？」

「洗濯物の中にあったんスよ」

不知くんの手にあったのは卯月ちゃんの肩叩き券だった。

それを見た僕は声を詰まらせてしまった。

まさに決定的な証拠を見せつけられた容疑者の気分だった。

「…本当に先生は知り合っているんですか？」

「うん…大きな声で言いたくないけど…そうだね」

「本当ですか!？」

「マジすか!？」

僕が卯月ちゃんと知り合っていると認めると、不知くと六月くんは驚愕をした。

あのトップアイドルの島村卯月と知り合っているのだから、二人が驚くのは間違いない。

「先生はいつから卯月ちゃん知り合っていたんですか？」

「…実は去年から」

「去年って、なんで俺たちに伝えなかったスか!？」

「いや…流石にアイドルと知り合っているとすると話しづらいし、あとみんなに伝えないといけないことがあるんだけど…」

「なんだ？もしかしてサツサンは卯月ちゃんと付き合うのか？」

「ち、違うよ!？まったく別のことだよ!？」

不知くんの言葉に僕は思わず動揺してしまった。

流石に卯月ちゃんと付き合うのではない。

「346プロダクションに行くことになった」

「はっ!?あの346プロに!？」

それはアキラさんから言われたことだった。

僕たちが13区支部に向かうということで、突然言い渡されたのだ。

本来ならば13区に配属されている一部の捜査官しか入れないところなのだが、

なぜ了承を得られたのかはわからない。

「346ってあのアイドルがたくさんいるところスよね..?」

「うん、346プロはCCGと喰種対策に協力する企業だからね。普通なら13区に所属する捜査官が事務所に行くんだけど.. どうしてだろう?」

当初は他の支部に所属していた捜査官でも行くことができたのだが、

喰種捜査官になれば346プロのアイドルに会うことができるというデタラメな噂がどこからか流れてしまい、

その情報が346プロの美城副社長の逆鱗に触れてしまい、13区支部に配属されている一部の捜査官しか入ることができなくなった。

ちなみにその一部の捜査官は鈴屋班のことである。

「今回はゲートのチェックと、あとは346プロの人に資料の提出だね」

「本当に俺たちは346プロに行ってもいいんですね..」

346プロダクションは一般人でも寄せ付けない場所だから、

誰もが憧れるん場所でもある。

「まさかサツサンはそのつながりで、さっさんは卯月と出会ったんすか?」

「いやいや、彼女とは違うところで出会ったんだよね」

「え?じゃあ、先生はどこで会ったんですか?」

確かに346プロとCCGはお互い協力関係が成り立っているが、

僕はそのおかげで卯月ちゃんと知り合ったわけではない。

「渋谷凪ちゃんってわかるよね?」

「ああ、わかるけど、もしかして知り合ってたりにして?」

「うん.. あんまり言いたくなけど、凜ちゃんも知り合ってるよ」

「嘘だろ!？」

「先生... どれだけ知り合っているんですか?」

「おかしいよね... ははっ...」

考えてみれば、僕はいろんなアイドルと知り合っている。

普通の人から見れば考えられないことだ。

「その凜ちゃんの親がやっているお花屋さんで出会ったんだよ。ちよ
うどお花屋さんの奥で卯月ちゃんの誕生日会がやっていて、その時僕
はお店の中に来たんだ」

「まるで漫画やドラマみたいな展開ですねえ...」

六月ちゃんが言う通り、卯月ちゃんの出会いは突然だった。

テレビや写真で見るトップアイドルである彼女が、凜ちゃんの家で
あるお花屋さんの中で出会ったのだ。

その出会いが僕と卯月ちゃんたちと知り合うきっかけであった。

「サツさんは卯月ちゃんのことをどう思ってるんスか?」

「卯月ちゃんは優しい子だよ。いつも話していると、気がついたら
あつという間に時間が過ぎるんだ。一緒にいると安心できる人だし、
それから...」

「あの先生?」

「ん?」

「進まないんですか?」

六月くんが僕にそう指摘すると、話に夢中だった僕は我に返った。
気がつくと歩いていたはずの僕たちは卯月ちゃんの話題で足を止
めてしまった。

「ああ... ごめん。じゃあ、シャトーに戻る前に少しお茶して話して
から帰ろう」

「オゴリ?」

「うん、オゴリ」

僕がそう言うのと不知くんはよっしやとガツポーズをした。

今日は時間があつたため、僕の趣味である喫茶店巡りをすることに
した。

もちろん先ほどの卯月ちゃんのことを話すために喫茶店で行くの
だが、

僕の中では訪れた喫茶店のコーヒーを味わうために行くのが一番
の楽しみだ。

しばらく僕たちが街中に歩いていると、不知くんはある喫茶店を見
つけた。

「あーる… いー?」

「り… ですかね?」

その喫茶店の名前はreと書かれており、なんて読むのかはわから
ない。

だが僕にはその喫茶店に興味が生えていた。

それはお店の雰囲気もそうだが、言葉に表せないものを感じたの
だ。

僕は「じゃあ、入っていこう」と不知くと六月くんに言うと、

僕たちはreと書かれた喫茶店に入って行った。

Redoubt

球世Side

僕がお店のドアを開くと、カラッとお店のドアにあったベルが店内に程よく響いた。

僕たちはそのreと書かれた喫茶店に入ると、僕はドアにあったベルのようにピンつとあることに気がついた。

「このお店は絶対に美味しいコーヒーを出すところだよ…！」

お店の中に入った瞬間、コーヒーのいい香りが僕の鼻にすっと受け止めた。

この店内に漂うコーヒーは数々の喫茶店に訪れている僕にとってはただのコーヒーを出すところではないとわかった。

「僕の鼻赫子がそう言っているよ！」

「鼻赫子…」

不知くと六月くんは少々興奮気味の僕にあははつと苦笑いをした。

鼻赫子は存在しないものだが、そのぐらいに店内に漂うコーヒーの香りはよかった。

「サツサンってカフェにくるのが好きなのか？」

「うん、二等捜査官時代から趣味なんだ」

流石に不知くと六月くんには伝ええないが、僕に喫茶店巡りを趣味にさせてくれた人がいる。

僕に喫茶店巡りを趣味にさせてくれた人はトップアイドルである高垣楓だ。

彼女と初めて出会ったところは喫茶店であり、その出会いがきっかけで僕は喫茶店巡りが趣味になった。

(それにしても、なんでここを見つけれなかったのだろう…?)

いつも楓さんは僕が訪れたことのない喫茶店を連れて行くのだが、今訪れている喫茶店は初めてだ。

むしろなぜ見つけれられてなかったのかと不思議になるほど綺麗な

場所であり、いいコーヒーの香りを出すお店だった。

これは僕の推測だが、おそらく楓さんはこの喫茶店には訪れたことはないと思う。

「もしかしてあのお兄さんはお店のオーナーかな？」

六月くんが指を指した先には、カウンター越しに一人の男性がいた。

銀色の髪に少々生えたあご髭をした渋いお兄さんなのだが、

僕たちがお店に来ているにも関わらず、気がついていなかった。

「あれ？オレたち無視されてね？」

「まさか…一見さんはお断りのな…」

「先生、それだとコーヒーは頂けないんじゃない？」

僕達がこそこそと話している…」

「…ちよつと兄さん！お客さんが来たら挨拶をしてって何度もー」

お店の奥から一人の女性が僕達の前に現れた。

「ー!!!」

すると突然、僕は目をハッと開き、何かに打たれたかのように胸の中に衝撃が走った。

(…)

それは驚きというか、

僕達の前に現れた彼女はショートカットで右目を隠すように前髪がかかっていた人なのだが、

なぜか僕はその人を見た時、驚愕に似た感情が生まれた。

しばらく僕は理由を考えていたら、その店員の人が「どうされましたか？」と心配そうに聞いてきた。

「あ、い、いえ…なんでもありません…席は…どこに」

「こちらの席へどうぞ」

「ありがとうございます…あと、コーヒーを3つお願いします」

僕はぎこちなく彼女に話したが、彼女は僕の話し方に気にすることなく笑顔で対応してくれた。

僕達はその店員さんに誘導され、指定された席に座った。

「…すごい可愛い店員さんだね」

「なく、確かにさっきの人は可愛いな」

「あれ？シラズくんはアキラさんじゃなかったけ？」

「ちげえよ！アキラさんはCCGの聖母的な存在だから」

「不知くんと六月くんはワイワイと会話が進んでいたのだが…」

「そうですよね、先せ…」

「…」

僕は二人の会話にまったく頭に入らず、先ほどの店員さんが気になつていたので。

「どうしたんですか？先生？」

「ああ、いや… なんでもないよ」

あの店員さんとは初めて出会ったはずなのに、何か引つかる。

その何かが一体わからない。

まるで理由が濃霧に染まる森の中に隠されているみたいによくわからないんだ。

僕がそう考えていると、不知くんがあることを思いついた。

「もしかして、卯月ちゃんと比べていたんスか？」

「え？そ、そんな失礼なことほしないよ…」

「先生はそんなことしないよ…」

流石に不知くんが言った通りにあの店員さんと卯月ちゃんを比べるのは頭には浮かばなかった。

確かに二人が先ほどあのショートカットの店員さんのことを可愛いと話していた。

だが僕はあの店員さんについては可愛いとか綺麗だなどを考えていたんじゃない。

「それでサツサンはいつ卯月ちゃんと付き合うんだ？」

「い、いや、だからなんで僕が卯月ちゃんと付き合うことになつてるの！？」

なぜか不知くんは卯月ちゃんについてぐいぐいと聞いてくる。

「シラズくん、流石に先生をこれ以上困らせるのは…」

「ほら、トオルも何かサツサンに聞けよ」

「えっ!?!お、俺も...!?!」

僕を少々かばっていた六月くんだったが、不知くんに「もつと聞こうぜ」と促し、ついには不知くんの味方についてしまった。

「えっと... 先ほど先生が話していたお話の続きなんですけど、そのお花屋さんで卯月ちゃんと出会ったんですよね?」

「うん、そうだよ?」

「それでしたら、他の有名人だったら少し会話して終わりつと云うのが普通じゃないですか?」

「まあ、確かに...」

六月くんの言う通り、有名人はそう簡単に連絡先とかを教えるわけがない。

卯月ちゃんは世間ではまさに高嶺の花の存在であり、僕は彼女とは頻繁に連絡しあっている。

一般的に考えてみればありえない事例だ。

「先生は何か卯月ちゃんにしたんじゃないですか?」

「...」

僕は思わず口を硬く閉ざしてしまった。

心当たりがすぐに頭に上がったのだが、そのことを二人に伝えるのは抵抗があった。

それ以上卯月ちゃんのことを伝えると何かめんどくさいことに巻き込まれそうで怖かったのだが、

不知くと六月くんはじつと僕を見つめてくる。

(... 仕方がないかな)

僕は少しため息をし、話す決意を固めた。

ついに僕は二人からの圧力に負けてしまい、口を開くことにしたのだ。

「えっと... あまり広めないでね?」

「は、はい... わかりました」

「ああ... いいスよ」

僕がそう伝えると、二人は静かに頷いた。

まるで何か重大発表を待つ人たちみたいはどこか緊張があった。

「… 僕がそのお花屋さんに入った時、ちょうどお店の机に一人の女性が生が座ってたんだ。僕は知らず彼女に声をかけたら、その人はとっさに立ち上がって僕に視線を向けると、突然その人は僕に抱きついたんだ。その抱きついてきた子こそが卯月ちゃんだったんだ」

「えっ!?!」

二人は僕が話した内容に疑うように驚いた。

「ど、どうして卯月ちゃんがサツサンを抱きついたんスか!?!」

「それが今でもよくわからないんだ… 僕には全く心当たりがないし…」

「せ、先生、もしかして何かのドッキリとかじゃないですか? よくあるテレビの企画で」

「最初にテレビの企画かなと思ったけど、そんなことしてないって卯月ちゃんは言ってたよ」

普通に考えてみれば、赤の他人から突然抱きつかれるのは異常ではないことだ。

考えらることならテレビの企画とかの意図的のものが浮かぶのだが、僕の場合はそんなものはなかった。

「その後にお店の奥に凜ちゃんと未央ちゃんが顔を出してきて…」

「え!?!じゃ、じゃあ、サツサンはニュージエネと知り合っていることですよね!?!」

「え?… あ、そ、そうだね… 未央ちゃんも同じく知り合ったよ…」

不知くんの言葉で気がついたのだけど、未央ちゃんのことを取り上げていかなかった。

彼女には申し訳ないと心から反省をしないと…

「それで先生は、その卯月ちゃんたちと知り合っただんですか…」

「… そうだね。それで今に至るってわけ」

「なんか、不思議な出会いスね…」

僕の話聞いていた六月くんと不知くんは何度も驚き、うんうんっと関心をした。

さすがに二人は広めるような真似はしないと願う。

「おまたせしました」

するとちよūdō僕達が座る席に、あのショートカットの店員さんがコーヒーを持ってきた。

彼女が持つトレイの上には熱々の湯気が立ち昇っていた3つのコーヒーがあった。

僕達は自分の目の前にコーヒーが店員さんによつて置かれると、そのコーヒーを手に取り、それぞれ口に運んだ。

「わ…美味しい…」

「本当にうめえな！さすがサツサンの鼻赫子も伊達じゃねーな！なあ、サツサン！」

「うん、美味しー」

僕はコーヒーを口にし、その味を楽しもうとしたその時だった。

「…あれ??」

突然、僕に異変が起きた。

自然と涙が流れていたのだ。

「あれ?どうしたんだよ、サツサン?」

「ど、どうしたんですか先生!?!」

二人は突然涙を流した僕に驚いた。

「いやあおかしいな…なんだろうコレ」

僕にもわからなかった。

味わおうとした瞬間に勝手に涙が流れたんだ。

どうしてなのかわからず僕は涙を手で拭いていると、ショートカットの店員さんはそつとハンカチを僕に渡した。

僕は涙を流しながら「すみません」とハンカチを受け取ると、流れる涙を優しく拭き取った。

「… おいしいです… 本当に」

僕が彼女にそう伝えると「… ありがとうございます」と、どこか哀しそうに微笑んだ。

なんだろう、この感覚？

それは哀しいという感情ではなく、暖かい感情に包まれたみたいに心地よかった。

まるで卯月ちゃんに抱きしめられた時と同じ暖かさだった。

言葉に表せないぐらいに暖かく安心できるものだった

僕はショートカットの店員さんを再び見ると、最初に見た時よりも違ふと気がついたんだ。

彼女は本当に美しい人だなんて、そう、思った。

—————

それは突然のことだった

日が沈みかけてた夕方に起きた出来事だ

いつもならヨモさんはお客さんが来た時は挨拶をするのに

今回はお店が開いた時に鳴ったベルの音しか聞こえなかった

一体どうしたのだろうかと私が前に出ると

あいつが私たちの元に突然やってきたのだ

私は思わず疑ってしまっただが、あいつに気づかれないよう接客をした

しばらくあいつを見てみると、やはりあいつにしか見えなかった

声も、目も、顔も、まさにあいつそのものだった

だが、あいつは私のことに気がついていなかった

もしかしたら、ただの赤の他人だっと思っていただけ

あいつが私が淹れたコーヒーを口にすると、あいつは涙をした

その姿を見た時、私は確信をしたんだ

この人は、私たちの元から去ったあいつだカネキと

偽り

球世Side

「な．．なあ．．サツサン？」

「どうしたの不知くん？」

「ほ、ほんとうに行くんだよな？」

先ほど僕達クインクスは13区支部で鈴屋班と今回の捜査する対象の喰種の打ち合わせが終わった後、僕たちはあるところに向かっていた。

「ほ、本当に行くんですよね．．．先生？」

「うん、もちろん仕事だからね」

不知くと六月くんは13区支部に出てから緊張しっぱなしで、特に卯月ちゃんのことをグイグイと聞いてきたはずの不知くんはその面影がないほど緊張で震えていた。

「おやおや、お二人ともはだいぶ緊張してますなあ〜」

「だ、だ、だつてよっ!!今入るとこは346プロダクションだろ!?!しかもなんで才子は全然緊張しねえんだよ!？」

僕達が入っていく重厚な造りをした建物。

その建物はまるでシンデレラで出てくるお城を思わせ、一般人ですら立ち入ることができない所。

そこは大手芸能プロダクションの346プロダクションだ。

「シラギンにはわからぬものを私は持っているんだよ」

不知くと六月くんが緊張している中、才子ちゃんはまったく緊張しておらず、緊張する二人を見て余裕を見せていた。

米林才子ちゃんは僕達クインクスの一員なのだが、今日久しぶりに仕事をしたのだ。

今までシャトーに引きこもっていたのだが、不知くと瓜江くん、六月くんのおかげで才子ちゃんは再び表に出られた。

ただど久しぶりということで、先ほど鈴屋班の顔合わせの時に大きいびきをかきながら居眠りをしていた。

「そういえば、なんでママンは緊張しないの？」

「さあ… なんでだろうね？」

僕がそう言った瞬間、「サツサンは卯月ちゃんとか会ってるから慣れてるだろ!!」と不知くんは緊張で震えた声で反論をした。

不知くんの言葉は間違っではないなかった。

僕は卯月ちゃんや未央ちゃん、凜ちゃんだけではなく、346プロ所属のアイドルの中に何人か知り合っている子がいる。

「マジか!? ママンは卯月ちゃんと知り合ってるの!?!」

不知くんの言葉に耳にした才子ちゃんは興味を抱いた目で僕にぐいぐいと近づいた。

確か才子ちゃんはアイドルに興味を持っていた。

「ここから、話はあとで伝えるから、まずは仕事に集中集中！」

僕は少々興奮気味だった才子ちゃんの肩をぽんぽんと叩き、落ちつかせた。

もし美城副社長見られてしまったら、クインクスのイメージが悪化しかねないし、あとCCGとしてはマイナスになりかねない。

そんな僕達が346プロダクションに行くことになったのは、鈴屋班の班長である鈴屋什造くんに理由があった。

什造くんは見た目は女の子と間違えるほどの中性的な男性なのだが、喰種捜査官としては天才といってもいいほどの実力を持っており、今現在什造くんが担当する13区は喰種が存在しないといわれている。

そんな什造くんが率いる鈴屋班の活躍により、346プロの美城副社長は鈴屋班を346プロに入ることができ数少ない喰種捜査官に選ばれたのだ。

「それにしてもよ、どうしてウリボーがいねえんだよ！」

「瓜江くんは柴先生の元に行ったよ。確か… 検査を? しに行ったね」

「検査ってあいつはいつも行かねえだろ！」

瓜江くんは13区支部までは一緒に行動をしていたのだが、『やる必要がありますので、本局に行ってください』となぜか僕達クインクス

の主治医である柴先生がいる本局に向かった。

僕たちは346プロへと中に入った。

「や、やべえ…：なんだよこは…：？」

「本当に入ったんだよね…：？」

僕たちが346プロの中に入ると、まず最初に目が入ったのはホルの真ん中にあつた階段だった。

まるで王子様が降りてくるじゃないかと思わせるような豪華な造りで、僕たちは思わず見とれてしまった。

346プロといえばシンデレラガールズと呼ばれるアイドルが活躍していると知られており、まさにここはシンデレラで出てくるお城だと考えさせてしまう。

「お待ちしました、佐々木さん」

するとホールを見とれていた僕たちに、誰かが重みのある声で僕の名前を呼んだ。

僕が聞こえた方向に振り向くと、背が高く、黒い髪に瓜江くんと同じ目をした男性が僕達の前に立っていた。

「あー！こんにちは、プロデューサーさん！」

「お久しぶりです、佐々木さん」

彼はアイドル部門を担当するプロデューサーさんだ。

今はプロデューサーの仕事はあまりやらないのだが、僕は彼のことを名前で呼ぶのではなくプロデューサーさんと言っている。

彼は3年前にシンデレラプロジェクトを取り仕切り、今はシンデレラプロジェクトだけではなく、アイドル部門全体を担当するほどの腕を持つている。

「今回は鈴屋班の方ではないのですよね」

「はい、代わりに僕たちが仕事を受けましたんですよ」

僕がそう伝えると、「まさか佐々木さんとお会いするとは思いませんでした」とどこか驚いた様子で言った。

什造くん曰く、いつも書類を受け取りに来る人はプロデューサーさんだ武内と聞いていたので、僕は少しホツとした。346プロの職員は喰種捜査官に対してはあまり良い印象を持つ人がい

ないと捜査官の間で知られているため、プロデューサー^内さんだが担当している耳にした時、僕は安心をした。

「鈴屋さんはいつもここに来るたびにどこか退屈そうにしています」

「やっぱり鈴屋く…いや、鈴屋準特等は喰種の駆逐に専念したほうがいいんですよ…」

いつも什造くんのことを鈴屋準特等と言わないのだが、今いるところは346プロのため、階級的に鈴屋準特等と言わないといけない、僕は一瞬思い出し、改めて言い換えた。

鈴屋班は美城副社長が指定する事務所に訪れることができる捜査官なのだが、什造くんにとってはこれは退屈な仕事だと本人は言っていた。

実際僕も何度も什造くんと捜査で一緒にやってきたため、什造くんはこう言った事務的なことよりも、喰種の駆逐に専念したほうがいいとわかる。

「あ、そうでした。プロデューサー^内さん、こちらの書類をどうぞ」

「ありがとうございます」

僕がカバンから厚い封筒を取り出し、プロデューサー^内さんに渡した。僕が渡した厚い封筒の中にはCCGが今調べている危険な喰種の情報や、今後捜査方針、あとは346プロが置かれている13区についての喰種の情報などが書かれている書類があるのだ。

以前はメールで報告書を渡していたのだが、何者かのハッキングによって情報が流出してしまい、今はこうして手渡して報告書を出している。

「前まではパソコンのメールでできたのに、今はこうして手渡すのは面倒くさいですね」

「ええ、これは仕方がないことだと私は思います。事件を起こした犯人は未だに見つかってはいませんですし、やむをえないことです」

ちなみにこうして手渡して報告書をする要因を作ったハッキングした犯人は喰種ではなく、人間だと言われている。

「今回の346プロダクションからの報告書はこちらです」

プロデューサー^内さんは僕が渡した厚い封筒とはかなり薄い封筒を僕

に渡した。

「ありがとうございます。今回も異常はなかったんですね？」

「ええ、もちろんプロダクション内で喰種が侵入した記録もありませんでしたし、職員にも喰種はいませんでした」

346プロは他の企業とは違い、喰種対策に徹底している。

例えばプロダクションの入り口に喰種を侵入させないようにするRc検査ゲートが設置していたり、プロダクションの清掃員やライブで雇うアルバイトの人までに喰種ではないことを証明する診断書を要求するほど喰種に対して厳しい企業だと世間ではいわれている。

「佐々木さんはこの後、13区支部に戻られるのですか？」

「はい、そうですね。まだ時間があるんですよ」

腕時計を見ると次の仕事までにはだいぶ時間があつた。

346プロと13区支部の間は数百メートルの距離のため、まだ時間の余裕がある。

「もしよければ、カフェに立ち寄ってはどうでしょうか？」

「カフェですか？もしかして346カフェのことですよね？」

346カフェは関係者以外に立ち入ることができないカフェであり、そこに出すコーヒーはとても美味しいと楓さんが前に僕に言ってくれた。

「じゃあ、僕たちはそこでお茶をしますね」

「ええ、ごゆっくりどうぞ。それでは、先に失礼します」

プロデューサー^{武内}さんはそういうとしっかりと頭を下げ、僕たちの元から去って行ってしまった。

「……ん？どうしたの、六月くん？」

僕がプロデューサー^{武内}さんを見送ると、後ろにいた六月くんは物凄く怯えていた。

「先生……さっきの方、怖くないですか？」

「そうかな？プロデューサー^{武内}さんは優しい人だけど……」

初めて会った時には僕には恐怖というものはなかったのだが、他のみんなは怖いと同じく言う。

プロデューサー^{武内}さんは真面目で優しい人なのに、どうして怖いと抱

くのか僕にはわからない。

「たくよお・・・さっきのおっさん一瞬裏の人間かと思ったぜ」

「いやいや、そういう系の人だったら流石にここにはいないからね？」

僕がそう話していると・・・

「あら、佐々木さんじゃない」

すると久しぶりに聞いた声が僕の耳にすつと入った。

同じくして不知くと六月くん、才子ちゃんたちはある方向を見て驚いていた。

一体誰だろうと僕はその方向に振り向くと、ある女性が立っていた。

「あ、久しぶりだね、奏ちゃん」

僕達の前に現れたのは速水奏ちゃんだ。

彼女は346プロのアイドルとして活躍しており、人気アイドルの一人だ。奏ちゃんは僕を一通り見ると、ふふつと小さく笑った。

「佐々木さんは本当に喰種捜査官なのね」

「やつと信じてくれてよかったよ。僕は大学生じゃない」

僕はそういうとやつとわかってくれたと少しため息をした。

いつも奏ちゃんと会う時、僕の服装は私服のため、奏ちゃんから『今日の大学の講義はもう終わったの？』と僕をからかう。

「年齢的にはそうじゃないかしら？』と僕をからかう。あれ、後ろの方々は？」

すると奏ちゃんは僕の後ろにいる不知くんたちに気がついた。

「ああ、僕の部下たちだよ」

「部下？22歳で部下って、佐々木さんは捜査官としてはかなり上方じゃない？」

「いやいや、部下といっても先生と生徒みたいな感じだけど・・・」

僕はクインクスを指導をするメンターなのだが、部下とは言いにくい。

「この子たちが佐々木さんの子たちなのね」

「よ・・・よろしく・・・おねが・・・します」

奏ちゃんは不知くんをじっと見つめるが、不知くん自身は完全に緊

張でぎこちなくなっていた。

「奏ちゃん、僕の部下をいじめないで」

僕がそう伝えると奏ちゃんは『はいはい』と言い、不知くんから離れた。

「それで今日は遊びに来たの?」

「いや、仕事で書類を渡しにきたんだ。あ、そういえば、文香さんはいる?」

「文香?」

実は僕は前日に文香さんに346プロに訪れるということで、文香さんが頼んでいた本を渡しにきたのだ。

今の時間帯だとそろそろくるはずなのだが…

「文香は今はここにいないわ。つい先ほどいたんだけど」

「あれ?文香さんはもう仕事に行ったの?」

奏ちゃんの言葉に僕は少し疑問を抱いた。

文香さんから前日のメールで仕事前には受け取りに来ると聞いたのだが、もう仕事に行ってしまったらしい。

「もしかして文香にプレゼント?」

「いえ、プレゼントと言うか、貸す本を渡しに」

僕は一冊の本が入っている小さな袋を奏ちゃんに見せた。

「文香に渡す本ね… 代わりに私が文香に出すわ」

「え?いいの?ありがとう、奏ちゃ」

「その代わりに、私の頬にキスしてくれないかしら」

すると突然奏ちゃんは僕の顔に気が付き、頬に人差し指を指した。

「ま、マジかよ…」

「せ、先生…!」

「ほ、ほお…こ、これが噂のキス魔なのか…」

後ろにいた不知くんたちは奏ちゃんの突然の思わぬ行動で動揺していた。

しかし僕も同じくそうなのかというと、実はそうではなかった。

「…冗談だよな?」

「ふふっ、冗談よ」

僕はドキツとして顔を赤くしていたのではなく、呆れた様子で彼女を見ていた。

「目の前で困惑させる行動をしないでって、前に伝えなかったっけ？」

「ええ、言ってたわね、今思い出したわ」

奏ちやんは男性をどきつとさせる行動を僕に何度もしていたせいか、僕には耐性が自然とついていた。

そんな少々呆れた僕は文香さんに貸す本を奏ちやんに渡した。

「入っている本は、カフカじゃない」

「文香さんがカフカの本を読みたいと言ったからね」

「ふーん… 文香も結構暗い本を読むのね。古代文学も読めばいいのに」

「別に悪くはないけど、僕は近代文学のほうが面白いと思うんだけどな…」

「あら？ 私に宣戦布告？」

「いや、勧めているんだよ？」

奏ちやんはどこか不穏なオーラを出しながら笑った。

僕と奏ちやんの間に嫌な空気が生まれた。

奏ちやんは僕と同じく本を読むのがだ、読む本に対してはよくこういった対立をする。

文香さんの時は別に対立は起きないのに、どうしてか奏ちやんの時によくケンカをする。

「まあ… 奏ちやんとあんまりケンカをする気はないけど… 本をよろしくね」

「ええ、わかったわ。あ、そうそう」

奏ちやんはとポンと手を叩き、何か僕に伝えることを思い出した仕事をした。

「佐々木さんにフレデリカと周子からそれぞれお誘いがあるのだけど？」

「…」

僕はそのお誘いを耳にした瞬間、少し険しい顔になった。

「その… 内容は？」

「フレデリカからはショッピングの同行で、周子からはラーメンのお誘い、あとそれから私から映画のお誘いよ」

「…全部断るよ」

「あら？それはなぜかしら？」

「今こっちは遊ぶ時間がないし…それになんで奏ちゃんのお誘いをちやつかり入れてるの!？」

フレデリカさんと周子ちゃんとは一緒に遊んだことがあるのだが、ものすごく疲れる。

フレデリカさんは重い荷物を持たされたりよくわからない発言をするのため、志希ちゃん並に疲れる。

周子ちゃんはだいたいは飲食店なのだが、皆はわかると思うけど僕が口のできるものはコーヒーと水ぐらいしかない。

だから周子ちゃんは『シユーコより全然食べないじゃん!』とよく言われ、よく奢らされる。

「ふふつ、やつぱり佐々木さんは面白いわ」

「まったく…奏ちゃんは大人っぽい人なのかと思いきや、さりげなくお茶目なところもあるよね」

「それが女じゃないかしら？」

「まあ…そうだね」

奏ちゃんは最初に会った時は綺麗な人かなと思ったが、今ではお茶目な一面もあることを知った。

「私はもうそろそろ戻らなきゃ」

「うん、じゃあね」

僕がそう言うのと奏ちゃんは僕達の元から離れていった。

「あ、あの…サツサン？」

「ん？」

「あの速水奏が…ま、マジすか!？」

不知くんはあまりにも緊張で話が見えてこない。

「奏ちゃんがなに？」

「サツサンは…あの奏と…知り合ってたんですか!？」

「うん、連絡先は知らないけど、よく会うよ。奏ちゃんは大人な女性だ

けど、会うたびに僕をからかうんだよね」

奏ちゃんとはメールとからやり合う機会はないのだが、なぜかよく会うのだ。

「とりあえず、カフェでゆっくりしてから行こう」

「ママン、あとで話しして」

「ああ、そうだね。才子ちゃんにも卯月ちゃんの事言わないとね」

僕がそう言うのと、僕達は346プロダクション本館にある346カフェに向かった。

文香さんは直接僕に会う約束をしたのだが、なぜ受け取りに来なかったのか疑問が残っていた。

僕はしばらく文香さんに会っていない。

いつも会う約束をして向かうのだが、だいたいは奏ちゃんとありすちゃんが文香さんは来ないと報告してくる。

文香さんは僕を嫌っているとは考えにくい。

あまりにも偶然すぎるように思う。

僕はその疑問を抱えたまま、346カフェへと向かった。

影の存在

球世Side

それから僕たちはプロデューサー^{武内}さんが勧めてくれた346カフェに向かっていた。

「先生、346カフェってそんなに人気のあるところなんですか？」

「うん、346プロのことを知る人からこの出すコーヒーは美味しいと聞いたんだ」

346カフェは一般人が立ち入ることができない346プロ内にあるカフェのことで、そこに出されるコーヒーやデザートはかなり力が入れてあつて、346プロの社内ではかなり好評の声をよく耳にする。

「サツサン、それって卯月ちゃんが言ってくれたのか？」

「いや、先ほどのプロデューサー^{武内}さんが以前に伝えてくれたから、ずっと気になってたんだよ。卯月ちゃんは残念ながらコーヒーが飲めないんだ」

僕の口ではプロデューサー^{武内}さんが346カフェを教えてくださいましたと言っているが、実は最初に346カフェを教えてくださいましたのは楓さんだ。でもさすがに不知くんたちに楓さんと出会っていると言うと大変なことになりかねないため、あえて嘘を伝えた。

僕がそう話していると目的地であつた346カフェが見えてきた。お昼が過ぎていたのかカフェに訪れていた人は少なく、テーブル席は多く空いていた。だけど今日は天気がいいため、僕は店内の席に座らずにテラス席に座ることにした。

僕たちは先にお店に立ち寄り注文をした後、席に座ると最初に六月くんが「先生、先生」と僕に質問をした。

「さつき奏ちゃんと話してた時、先生は不機嫌でしたよね？」

「やっぱりそうだった？奏ちゃんと本のことを話し出すとお互いに譲れないところが出るからね。もしかして六月くん、怖かった？」

「はい……怖かったです」

六月くんはそう言うのと、不安な顔をしながら小さくうなずいた。確かに僕と奏ちゃんの会話と一緒に居合わせた人たちからはいつも同じく『怖かった』と言う。

「別に本当にお互いを嫌っているわけじゃないから、そこまで怖がる必要はないよ」

「そうですか…：よかったです」

六月くんは僕の言葉を耳にすると、ほっと息を漏らした。

奏ちゃんとは本のことになると自然とピリピリとした空気になってしまう。でも他のことはあのピリピリ感が嘘のように仲良く話しているんだけど、やはり本のことになると空気が一変する。

ちなみに僕と奏ちゃんの言い争いで怖がる人は多いのだが、周子ちゃんだけは怖がることなく仲介役として僕と奏ちゃんの熱を冷めさせるなどお世話になることが多い。

六月くんと話していた僕は「そうそう」と何か言おうとしたことを思い出した。

「この346カフェには美味しいコーヒーが出ている以外にいくつかのエピソードがあるんだよ」

「エピソード？ ママン、もしかしてアイドルのこと!？」

才子ちゃんは僕の話を目にした瞬間、目を輝きながら僕をじっと見つめた。

才子ちゃんはゲームも好きだが、アイドルも同じく大好きだ。

「このエピソードって、なんかあるんスか？」

「そうだね、どれもだいたい前の話なんだけど、例えば安部菜々き…：ちゃんがバイトしていたり、みくちゃんが他のアイドルと一緒にストライキ起こしたとか耳にしたことがあるよ」

そのことはもちろんプロデューサーさんから聞いたことだ。みくちゃんが起こしたストライキは実際に僕はその場にいなかったのかわからないが、結構な大事おかしだったらしい。

「ストライキって…：先生、みくちゃんは何でやったんですか？」

「その時のみくちゃんは裏方の仕事やレッスンばかりでアイドルらしい仕事ができないことに不満が爆発して、346カフェでストライ

キを起こしたんだ。ちなみに一緒にストライキを起こしたアイドルは莉嘉ちゃんと杏ちゃんだって」

「え!? センパイが!」

すると突然、才子ちゃんが椅子から立ち上がり、ガタツと大きく音を鳴らした。

「え...? どうしたの才子ちゃん?」

「どうしたんだサイコ?」

僕と六月、不知くんは才子ちゃんの突然の行動に静かに驚いた。状況に気がついた才子ちゃんはハツと我に帰り、

「... あ、い、いやあ... 私が知るオタクのコミュニティの間では知っている情報だから... ハハッ」

才子ちゃんはそう言うと言と苦笑いをした。

しかし僕は才子ちゃんの言葉に疑問を抱えた。

でもこのストライキの話は346プロ内しか知られていないのだが、どこから情報が漏れたんだ?

(... まあ、ネットならその情報は流れかねないかな...?)

僕はそう結論付けると才子ちゃんに言及することをやめた。

ちなみにみくちゃんは僕のことを何故か知っている。

実際に会ったことはないのだが、卯月ちゃんとプロデューサーさんの口からよくみくちゃんが僕に伝えたいことを伝言でくるのだ。

みくちゃんとは直接会ったこともないし、話したこともないのでうしてだろうか?

僕が話しているうちに、頼んでいたものが店員さんによって届けられた。

今回僕たちが頼んだのは白いコーヒーカップの注がれたオリジナルブレンドコーヒーで、才子ちゃんのカップだけは砂糖が入ったスティック2個とコーヒーフレッシュがあつた。才子ちゃんのカップを見た不知くんは「おめえはコーヒーをかなり甘くするだろ?」と聞く、「ふふふ... 我には大切な補給源なのだ...」と言いながら暖かいコーヒーに砂糖を2個同時に入れた。

戻っていった店員さんの姿を見た僕はあることを思い出し、口にし

た。

「奈々ちゃんは前々でここで働いていたと聞くと、僕は少し信じられないと思うよ」

「奈々ちゃん？奈々ちゃんって永遠の17歳っていう子だよな？もう絶対に17って嘘じゃ」

「ここら不知くん、そんなことを言わないの」

これ以上奈々さんの年齢に関して掘り下げようとすると、彼女自身には申し訳ないし、彼女をプロデュースするプロデューサーさんたちにも申し訳ない。

彼女には触れてはいけないうところもあるのだから、そこは敢えて触れない方が望ましい。

口にはしないがひとつだけ奈々さんに言えることは、奈々さんは僕よりは年上だと言うことだ。

(そういうえば、あの時なんでいたんだろう?)

僕は奈々さんの話をしていたら、あることを思い出した。

前に楓さんたちと居酒屋にいた時、奈々さんがさりげなくいたのだ。

その時はウーロン茶やオレンジジュースなどソフトドリンクしか頼まなかったのだが、なぜ居酒屋に参加したのかわからない。

「サツサン、コーヒー飲まねえの?」

「え?」

前の居酒屋のことを考えていたら、不知くと六月くん、才子ちゃんはずでにコーヒーを頂いていて、僕だけコーヒーを一口も飲んでいないことに気がついた。

「危ない危ない、コーヒーが冷める前に飲まなきゃね...」

僕がそう言うと、手前に置かれたコーヒーを口に運んだ。

口に入れ、舌の上に現れたコーヒーを味わい、静かに喉に移動させた。

「先生、このコーヒーはどうです?俺は美味しいです」

「確かにプロデューサーさんの言う通り、美味しい...」

コーヒーを味わった僕は、小さく驚いた。

プロデューサー^{武内}さんの口には間違いないほどこのコーヒーは本当美味しいと驚いていたのだ。

しつかりのコーヒー豆の味が感じられ、雑味がしない。

最初346カフェのコーヒーを耳にした時は半信半疑で興味を抱きにくかったが、プロデューサー^{武内}さんや楓さんから何度も耳にしているうちにだんだんと興味を抱き、やっと今こうしてこのコーヒーを口にして本当によかったと心の底から感じられる。

そのぐらいにこのコーヒーは美味しいのだ。

僕はコーヒーの味に感動していたら「サツサン、このカフェか、あのreのコーヒーとどちらが美味しいんだ？」と不知くんがコーヒーの世界にいた僕を元の世界から戻すように尋ねてきた。

「え…？あ、ああ、コーヒーといっても、さすがに一つに絞り込むのは僕はできないかな…。」

不知くんの言葉に、僕は少し悩んでしまった。

たしかに346カフェのコーヒーは美味しいのだが、かといって前に訪れたreのコーヒーと比べられるのは僕にはできない。

あちらはあちらで美味しいし、どこか味では表現できない特別な感じがある。

「ママン、卯月ちゃんのこと聞かせて」

「ああ、そうだったね。才子ちゃんには伝えていなかったね…えつと…」

僕が卯月ちゃんのことを話そうとしたその瞬間、不知くんが何か慌てた様子で『サツサン、サツサン』と慌てた様子で僕に小さな声でちよんちよんつと肩を叩いた。

「急にどうしたの不知くん？」

「あそこにいるの、卯月ちゃんじゃね？」

「え？」

まさかと思い不知くんが指を指した振り向くと、一人の女性が歩いていた。

よく見ると歩いていた女性は間違いなく卯月ちゃんだった。

今、僕たちのことを気がついていない。

「なあ、話しかけないのかサツサン？」

「いや．．．こっちから声をかけるのはちよつと．．．」

もしかしたらこれからお仕事に向かっているかもしれない。

ためらっていると、卯月ちゃんと目が合ってしまった。

「！」

目が合った瞬間、僕はハッと驚き、固まってしまった。

卯月ちゃんも同じく驚き、『何でここにいるの？』と言っているかのようにならないうちを見つめていた。

「ホホ．．．あれはモノホンの卯月ちゃんか．．．」

「本当にマジの卯月ちゃんじゃねえかよ．．．」

不知くんたちがそう言っていると、卯月ちゃんが僕達の元に少し早歩きで近づいた。

「こ、こ、こんにちは、佐々木さん！」

卯月ちゃんが嬉しそうに僕を見た。

最後に会った日とはそんなに離れていなかったが、まるで何年振りに会ったかのように嬉しそうにだった。

「こんにちは、卯月ちゃん」

「まさかここで会えるとは思いませんでした！」

卯月ちゃんとは今日会えるだなんて僕も考えられなかった。

文香さんとは前日に連絡をしていたのだが、卯月ちゃんには全く連絡をしなかったため本当に驚いている。

「佐々木さん、隣にいいですか？」

「うん、いいよ」

僕がそう言うと、卯月ちゃんは隣のテラス席にあつた椅子を一個取り、僕の隣に置いて座った。

そのまま僕との会話を再開するかと思っていたら、卯月ちゃんは不知くんたちの方に体を向けた。

「えっと、みなさんこんにちは、島村卯月です。みなさんは知っていますか、アイドルをやっています」

卯月ちゃんは不知くんたちに礼儀正しく挨拶をした。

「よ、よろしくお願ひします」

「また志希ちゃん失踪した？」

「そうなんですよ。もうそろそろレッスンのお時間なのに全然いなくて・・・」

僕は卯月ちゃんの言葉を聞くと、頭に手を乗せ、はあっとため息をした。

「あの・・・ サツサン。志希ってあの一ノ瀬志希のことっすか？」

「うん、志希ちゃんはよく失踪するって耳にしたことあるよね？」

「ああ・・・ 確かこの前のラジオで逃げ出したもんな」

志希ちゃんの失踪は彼女の癖であり、初めは批判があったものの今は段々と定着しつつある。

「今ちようどフレデリカさんがお仕事でいないんですよ・・・」

「フレデリカさんがいないのは大きいな・・・」

「先生？フレデリカさんがいないって？」

「だいたいはフレデリカさんの元に行けば、すぐに志希ちゃんを見つくれるんだけど・・・ これじゃあ見つけれないよ」

「すぐに見つからないんですか？」

「彼女はそう簡単に見つけれないんだよ・・・」

志希ちゃんの失踪はそう簡単には見つからない。

以前の放送では一人のスタッフだけではなく総出で搜索したほど難しいのだ。

僕が何か最適な策がないか考えていると、卯月ちゃんはある提案を上げた。

「佐々木さんならすぐに見つかりますか？」

「え？ぼ、僕が？」

僕はそう言うとうちに指を指した。

「どうかな？さすがにフレデリカさんほどじゃないけ」

僕が話していたその時だった。

「やつほ—————!!!」

突然、僕の横から誰かが突っ込むように現れ、飛びついてきた。

僕は「うぐっ!？」と変な声をあげ、椅子から倒れた。

一体誰だろうと思っていると、不知くんたちは『マジかよ・・・!?!』や

『嘘っ…!?!』と何か驚いていた。

「久しぶり〜ササハイさん〜♡」

突然現れた人物はギュツと抱きつきながら、僕の頬をスリスリしていた。

その人を見ると癖のあるロングヘアーに他の香水では嗅げないような心地よい香りをする女性。

僕に抱きついてるのは一ノ瀬志希だった。

「まったく、志希さんは!」

「はははっ、ごめんごめん♪文香ちゃんからササハイさんがいるって聞いたから急遽飛び出しちゃって」

志希ちゃんはそう言う、『にやははっ』と笑い、僕から離れ、倒れていた僕を立ち上がらせた。

僕は「ありがとう」と言おうとしたが…

「いつも皆さんに迷惑をかけて反省もないんですか!?!」

「だからごめんって、卯月ちゃん」

「前のラジオの時はひどかったじゃないですか!」

卯月ちゃんのお説教でありがとうと言えなかった。

ここ最近卯月ちゃんは志希ちゃんのお世話をするようになりつつあると未央ちゃんから聞いている。

まさか目の前で見れるとは思わなかった。

「あ、あの…卯月ちゃん?」

「ん?」

「お説教もいいけど…レッスンに遅れない?」

流石にお説教が長引くと先ほど卯月ちゃんが言っていたレッスンにもっと遅れるのではないかと僕は少し心配していた。

僕の言葉を聞いた卯月ちゃんは「そ、そうですよね…。」と志希ちゃんに説教をやめた。

「志希ちゃん、レッスンにはちゃんと行くんだよ?」

「さすがにササハイさんと卯月ちゃんに言われると、行かざるをえないね♪」

「ほら、行きましょう」

志希さんは「はい♪」と卯月ちゃんとともに僕達の元から去って行った。

すると突然『ハッ!』と才子ちゃんが何かに気がついた。

「どうしたんだ?サイコ?」

「サインをもらうのを忘れてた!」

アイドル好きの才子ちゃんにとっては致命的なミスであった。今日に出会えたアイドルだけでもかなり有名の子たちばかりのため、サインを取ってもらうのは適切だ。

でも今日会ったアイドルたちは僕の知り合いだから「また今度ね」と僕はひどく落ち込む才子ちゃんにそう声をかけた。

僕たちは346カフェで少しゆっくりした後、13区支部に戻っていった。

—————

卯月Side

私は志希さんを捕まえ、レッスルームに向かっていました。

私が志希さんを捕まえるようになるきっかけは同じくレッスンを受ける予定だったのではなく、ちょうどレッスルームの横に通りがかったらトレーナーさんに「志希を探して欲しい」と言われたため、そのまま家に帰るはずだった私は志希さんを探すことになってしまいました。

「まったく… また失踪して、ダメじゃないですか」

「ごめんごめん、まだ時間があるからいいじゃん♪」

志希さんそう言うとき、スリスリと頬を擦りました。

志希さんの言う通り、失踪していた割にレッスンが始まる時間までにはまだあります。

「それに、あたしを探しに回ったことでササハイさんに会うことができたじゃん」

「そ… そうですけど… 志希さんは失踪しすぎじゃないですか!」

私は志希さんの失踪についてまだ取り上げていたが、捜索したことによって佐々木さんに会えたのは凶星だった。

「今日会えたことは嬉しいんじゃないの〜?」

「そんなことないですよ。」

私は恥ずかしそうに言葉を返した。

でも志希さんの言葉は間違いじゃなかった。

志希さんは子供っぽさがよく現れるのだけど、私より大人っぽさを出すこともできる人だ。

「それにしても、あの眼帯の子、なぜぎゅつと手を握ってたんだろう?」

「え?」

「あ、いやいやただの独り言〜♪」

私は志希さんの言葉に少し頭を傾げました。

志希さんはたまによくわからないことを言い出すため、私にも理解ができない。

「将来、卯月ちゃんに養ってほしいな〜」

「やめてくださいよ...もう」

私と志希さんはこうした会話をするのが日常です。

初めは金木さん経由で知りましたが、だんだんと会っているうちに仲良くなり、今ではこうして探しては捕まえたり、時には志希さんに相談に乗ってもらったりしています。

志希さんを連れ出した私は無事にレッスンルームに連れ込むことができ、予定通りにレッスンをすることができました。

先ほど志希さんが呟いた、眼帯の子。

佐々木さんが指導する一人で緑の髪をし、右目に眼帯をした女性に似た方が同じくテラス席に座っていた一人でした。

なぜその人を今取り上げるのか言っていると、志希さんの言葉に少し疑問が浮かんでいました。

手をぎゅつとしていたとは気がついていなかったもので、志希さんに言われるまでわかりませんでした

本当にぎゅつと握っていたのなら、なぜしていたんだろう？

奏Side

琲世から本を受け取った奏は、ある人物の元に向かっていた。

その部屋に入った奏は部屋の真ん中に置かれたソファアームに座って本を読んでいる黒髪のロングヘアをした女性を見つけると、奏は「文香」っと声をかけた。

「……はい？」

奏に振り向くと、前髪で隠れ、その前髪の先には綺麗な青い瞳をした彼女。

彼女の名前は鷺沢文香

奏と同じくアイドルだ

文香は奏が持っていたものを見て、

「あれ……？奏さん、それは？」

「佐々木さんが届けに来たわ」

「え……？佐々木さんが？」

文香ははっと目を開き、静かに驚いた。

「佐々木さん自身が届けてくれると耳にしたのですが……」

「佐々木さんはちよつと急いでいたから私が代わりに届けに来たのよ、あと文香はそろそろ次の仕事先に行くでしょ？」

「ええ……そうですが……」

文香はそう言うと、視線を落とし、残念そうに口を少し曲げた。

(…… やつぱり、会いたかったのね)

文香の姿を見た私は、嫌悪感がにじみ出るように胸の中に現れた

私は佐々木琲世に対して憎しみのような感情を浮かんでしまう

彼は文香に会わせてはならない人物だ

彼と初めて出会った時を鮮明に覚えている

その時文香とありすちゃんど都内の喫茶店でお茶をしていて、気ままに楽しく話し合っていた

いつものように楽しく会話が終わると思っていた

志希がとある男性を連れてくるまではそう考えていた、私

志希が突然連れ出した男性こそ佐々木琲世だ

私は最初彼を見た時、前に一度出会った金木さんを思い出した

金木さんは今でも行方不明になっていると耳にしていたため、まさか彼が帰ってきたのではないかと驚いたのだが、名前と職業、髪の色が違っていたため彼が金木さんではないと驚いた感情はだんだんと静まった

しかし私の隣にいた文香に異変が起きた

文香は佐々木を見ると手を震えさせ、だんだんと涙を流したのだ

『あなたですよね… あなたなんですよね…』

文香の異様な行動を見た私は、心の中で確信をしたんだ

文香は金木さんのことを好きなんだつと

以前に文香に異変を引き起こした出来事が二回あった

一つは文香が最初にステージに立った定例ライブ

二つは金木さんが行方不明と知った時だ

どれも同じ状態であったため、原因も同じものではないかと私は考えてしまった

彼と会って以降、文香の様子がおかしくなった

文香と会話すると必ず佐々木琲世についての話が当たり前になりつつあった

文香は彼に対して強い依存を抱いている

佐々木琲世は、イブに真実の果実を渡したへビの存在だ

彼は文香が今まで積み重ねたアイドルという世界を欲望で壊させる存在

佐々木琲世と文香は会わせてはいけない

日が空の真ん中に昇ったお昼頃。

本局から出た僕はあるところに向かっていた。

(久しぶりに訪れるな……)

僕の胸の中に生まれた変な緊張が、一步一步と歩きたびに後ろから迫るように現れていた。

なにせ僕はある人の家に向かっていたのだ。

その人は世間では名の知れたアイドルであるため、注意深く行かないと危険なことになりかけない。

僕は普段その人とは別に特別な思いもしないし緊張もないのだが、今回はその人は本当に有名人だと自覚されたかのように緊張が僕の体に張り付いていた。

しばらく歩いてみると、僕は訪れるマンションを見つけ、『ああ、目的の場所に着いてしまった』とため息をし、頭に手を置いた。

(仕方ないよね……自分で言ったことだし……)

僕がその人の家に訪れるきっかけはただ単に会うのではなく、仕事上に理由があった。

その理由は彼女無しにはできないこともあった。

僕はマンションの共同玄関にあったインターホンにその人が住んでいる部屋の番号を間違えないようにゆっくりと入力をした。しばらくするとインターホンから「はい」と綺麗な女性の声が聞こえた。その声を耳にした僕は「僕です。佐々木です」とインターホンに近づき言うと、「ふふ、佐々木くんね。今開けるわ」とインターホンから笑い声をした瞬間、共同玄関のドアの鍵がガチャッと音を立てて開いた。マンションの中に入った僕はエレベーターに入り、その人が住んでいる階に上がり、住んでいる部屋のドアの前に立った。ドアの横のインターホンをすぐに押せばいいのだが、躊躇さが僕を邪魔をする。今日会う人は何気なく会っているのに、どうしてその人の家を訪れるだけでもこんなに気が小さくなるのだろうか。しばらく考えていた僕は勇気を振り絞り、インターホンを人差し指でぐっと押した。

押して約5秒後、玄関の扉から現れたのはショートボブの女性。

「いらつしやい、佐々木くん」

その人の名前は高垣楓さん。

僕は誰もが高嶺の花と考えるだろう彼女の家に上がるのだ。僕は「お邪魔します」と少しぎこちなく部屋に入り、家に上がった。

「佐々木くんが私の家にあがるのは久しぶりじゃない？」

「ええ、だいぶ時間が空いてますよね」

「確か…… 3月の時ぐらいかしら？」

「ええ、そうですね」

楓さんの家上がるのは今回で3回目だ。

1回目は今回と同じ目的で、2回目は酔い潰れていた楓さんを運んだ時である。

「それで佐々木くん、今回は最初来た時と同じ目的でいいかしら？」

「はい、安全面に関わることなのでまたお願いします」

「安全面って…… 女装をすることが安全に繋がるかしら？」

楓さんはそう言うのと、頭を傾げた。

今回僕が楓さんに会うことになったのは、僕を女装させるの手伝わせるために来たのだ。僕が女装になるきっかけは今僕たちクインクスが捜査対象している喰種ナツクラーターを追跡していた時だった。僕たちクインクスはちょうどカフェにいたナツクラーターのあとを追っていたのだが、その時の不知くんは才子ちゃんを必死に起こして生まれた疲労のせいか、ナツクラーターに気がつかれてしまい、顔を覚えられてしまった。そこで僕が考え出した次の作戦が女装して近づくことだった。女装についてはクインクスのみんなには各自で変装にするようにと伝えているが、瓜江くんだけは「赫子のごとで参加できません」と女装をした潜入捜査を辞退した。

「ええ…… 安全面に関わるんですよ」

「安全面にね…… 佐々木くんが言う感じには本当みたいね」

それで僕は今回も楓さんをお願いをして、家に上がらせてもらっている。もし男性から女装するから手伝ってと女性に言ってしまうと、間違

いなくその女性は拒否をし、こんな男と二度と会ってたまるかと感じてしまうだろう。

しかし楓さんは違った。

「今回もその… 僕を女装させるのを手伝ってください」

「ええ、問題ないわ。佐々木くんを女装させるの結構面白いからね」

楓さんはそう言うのと全く嫌がる顔もせず、むしろ喜んで承諾してくれた。楓さんにこうして女装をするのを手伝うきっかけは去年のことであった。その時いつものように楓さんと喫茶店巡りをしていた。喫茶店で話していると僕が「捜査で女装することになって、どうしたら女性らしさを出せるでしょうか？」と楓さんに聞いたら、「なら、私がメイクさせる？」とやる気満々だった。その結果、楓さんは僕を女装させ、男性と思わせないメイクをしてくれた。

「佐々木くんは女性っぽいところがあるから、私的にはやりやすいんだよね」

「そうなんですか？例えば…？」

「そうだね…：：：一番やりやすいのは顔かな」

「顔ですか…：：：あんまり自覚はないんですが…：」

「佐々木くんが女装をしていることを、今度卯月ちゃんに伝えようかしらっ？」

「そ、それはやめてください！」

女装しているととなると流石に知り合うに伝わると誤解を受けかねない。

「本当に楓さんはお酒好きですよね」

「お酒は切つても切り離せない存在だもの」

楓さんの部屋には日本酒の瓶やワインのボトル、あとはビールの缶が並べられており、この部屋を見るだけでお酒好きだと大きく主張しているように十分に聞こえる。

僕は楓さんの部屋を見渡していたら、楓さんは「あ、そうだ」と手をパツと叩き、何かを思い出した。

「メイクをする前に、佐々木くんに頂いてほしいものがあるわ」

「え…？まさかこの部屋のお酒ですか？」

「いやいや、別に今お酒を飲んでも構わないけど、お酒よりも飲んで欲しいものがあるわ。前にも佐々木くんに伝えたはずよ」

「ま、前にですか…？」

僕は楓さんが言った前にも伝えた言葉を、僕の記憶の中に探した。思い当たることが頭の中上がった。僕は「もしかして、コーヒーですか？」と恐る恐る楓さんに聞くと、「正解」と楓さんは満足そうに笑った。

「今からカフェに行くんですか？」

「いや、私が作るのよ」

「え？楓さんが？」

僕は楓さんの言葉に驚いてしまった。

「本当に楓さんが作るんですか？」

「私が作ったら、泥水のようなコーヒーが出来上がってしまうのが怖いのかしら？」

「い、いえ…そんなことじゃないですけど…」

彼女の顔を見た僕は少々背筋が凍りついた。

なんだか笑う楓さんが怖く感じた。

僕はこれ以上怒らせまいと大人しく椅子に座った。

「大丈夫よ、ちゃんと豆から選んでいるしコーヒーミルもあるし」

楓さんはそう言うときツチンの方に移動して、早速コーヒーを作る準備をした。まずは事前にブレンドしていたコーヒー豆をコーヒーミルに入れ、手回しでコーヒー豆を砕く。

「豆ってどこのを選んでいるんですか？」

「選んでいるというか、自分でブレンドをしているから明確には言えないかな」

「え？それって秘密ですか？」

「ええ、このコーヒ豆は『まめ』に分量を調節してるからね」
「…」

「あら？急に黙ってどうしたの？」

「今、ダジャレを言いましたよね？」

「さすが佐々木くん、すぐに気づくわね」

楓さんは美しい人だけど、ダジャレを言うと雰囲気は壊れる。

やっぱり楓さんはダジャレを言わなきゃ美しい人だと思っただけ
ど……

そして楓さんは粉碎したコーヒー豆をペーパーフィルターに入れ、
コーヒーカップの上に置いた。

「お湯を入れるときはゆっくり焦らずに、平仮名の『の』の字を描く
ように……」

「……？」

すると僕は楓さんの言葉にピンつときた。

「楓さん、今の言葉は？」

「ん？今の言葉って？」

「今、平仮名の『の』の字って……」

「ああ、今のは前にアルバイトをしていた喫茶店の店長から教わった
ことなのよ。こうしてやると美味しいコーヒーが出来上がるのよ」

楓さんはそう言うとうふふつと笑った。

でも僕にはどこか引つかかる。

どこかで耳にしたことのある言葉なのだ。

どこかで聞いたか考えていると「ほら、コーヒーが出来たわ」と楓さ
んが僕の前に置いてくれた。

僕は「ありがとうございます」とコーヒーを受け取った。

「……匂いがいいですね。本当に美味しいコーヒーを出す時の匂い
です」

「そう言ってくれるのはありがたいわ。腕にはかなり自信あるから」
楓さんが淹れたコーヒーを頂くのは初めてだった。

僕は熱々のコーヒーが注がれたコーヒーカップをゆっくりと飲ん
だ。

「私はアルバイトで喫茶店をアイドルになるまでやっていたの。喫茶
店の店長から美味しいコーヒーの作り方を学んで」

「……」

「それで私は何年もそこで学んで、店長が出すコーヒーと同じぐらい
に美味しいコーヒーを出せるようになったの、それか……どうした

の佐々木くん？」

すると楓さんは自分の話を止め、黙っていた僕をみた。僕は楓さんの話を聞く余裕なんてなかった。

なぜなら、涙を流していたのだ。

「ど… どうしたの!？」

楓さんは涙を流した僕を見て、大きく驚いた。

「… な、なんでだろ… どうして…」

涙が止まらない。

なぜ涙を流したのかわからない。

だけど、この感覚は前にもあった。

楓さんは慌ててタオルを持ち出し「どうしたの佐々木くん？」と僕が流す涙をそつと拭いた。

「す、すみません… 楓さん…」

「佐々木くんが謝る必要はないわ。それより急に佐々木くんが泣き出しなんてただ事じゃないわよ。私、何か変なものを入れたかしら…？」

「違うんです… 楓さんが淹れたコーヒー… 本当に… 美味しいです」

「美味しいって… 本当に… ?隠してないよね？」

「ええ… 本当です」

僕が言っていることは本当だ。

楓さんの淹れたコーヒーはどこよりも美味しく、そしてなぜか懐かしい。

まるで以前に訪れたreとまったく同じコーヒーだった

卯月Side

大学から出て、事務所に向かっていた、私。
今日の授業も終わり、あとはレッススが待っていた。
今日のレッスンは次回のライブに向けてのダンスレッスンで、特に
今回は激しいところで、体に叩きつけないといけない。

しかし今の私の感情はレッスンに向けての心構えはしていなかった。

(私：： ちゃんとした恋はしたことないなあ)

私がそう考え始めたきっかけは、大学の友達の話だった。

『卯月ちゃんって彼氏作ったことある？』

その一言を耳にした私は、思わず口をつぐんでしまった。

しばらく答えを出せず、友達の一人から『卯月ちゃんはアイドルだから、流石に恋愛のことはNGだよ』と言ってくれたことでこれ以上の恋愛を聞かれずに済んだ。

アイドルと恋愛はまさに触れてはいけない同士だ

まさに人を殺してしまう化学薬品みたいに危ない存在

私はアイドルになる前までは恋愛など無縁の存在だった

アイドル以外のことは考えもしなかった

しかし、アイドルになった後、初めて恋愛に対して考え始めた

そのきっかけは、金木さんと一緒に遊園地に遊びに行つた時だ

あの時はお互い緊張していたんだけど

だんだんと緊張が打ち解け一緒にいるのが楽しくなり

ついには彼のことを友達以上の存在だと気がついた

だけど夕日が沈んだ時、金木さんに異変が起きたんだ

彼は遊園地で楽しんだことを忘れてしまったように泣いたんだ

その時の私はなぜ彼が泣いたのかわからなかった

だけど彼と別れた後、私は知ってしまった

彼は私の前に姿を消した本当の理由、
“喰種” になってしまったこと
とを

彼と最後にあつたのは20区

建物の陰で隠れていた傷だらけの私の前に彼が現れたんだ

そして彼は姿が変わっていた

黒い服に、白い髪、そして左目は赤黒く染まっていた

私は最初みた時は恐ろしさのあまり震え上がった

他の人から見れば、バケモノだと言うはず

私も最初はそう感じた

だけど徐々にその感情は薄れていき

私は彼を王子様だと感じたんだ

金木さんは私にとって命の恩人でもあり、私の王子様だ

いなくなってしまうた人を好きになり続けるのはどうなんだろう？

それって本当にいいことなのかな？

――――
志希 Side

日が心地よく感じる昼。

あたしは研究室に閉じこもることなく、散歩をしていた。

今日はお仕事もレツスンもない日。

いつもなら家に閉じこもるのが当たり前。

だけど今日はどうも違うらしい。

別に散歩をするのがいやでもないため、あたしはそのまま感情に任せるように外に出た。

外に出るとカーテンで日の光が遮断された研究室とは違い、心地よい風と自然の光が私の肌に触れる。

あたしは近く公園前で散歩をしようとし始めたら、ズボンのポケットにあつたスマホから着信が来た。

画面を見るとあたしは思わず大きなため息をした。

(また、あいつらか…)

届いたのは一通のメール。

そのメールが来るのは初めてじゃなく、今週で数十通届いている。

あたしはメールの内容を目に通さず、すぐに破棄した。

誰なのかはもうわかっていた。

名前を挙げる気はないから、ここでは奴らと呼ぼう

ここ最近奴らはあたしの能力に気がついた

あたしは世の中ではただ化学と香りを愛する科学者と知られて
いるが

奴らはあたしが喰種に関係するの研究をやっていることに知っ
てしまった

情報屋さんから聞いた話によると、奴らはあたしよりも研究が遅れ
ていて、あたしの助けが必要らしい

だけどあたしは奴らに助けをするつもりはない

だって奴らはあたしとは違い、黒い野望を抱いているのだから

狐

球世Side

夜中 都内 某クラブ

僕たちクインクスはナツツクラッカーが出没すると思われるクラブに潜入していた。

ナツツクラッカーは20代ほどの女性をバイトと称し、誘った女性をオークションの商品にさせる調達役だと考えられていた

それで六月くんがナツツクラッカーに話しかけ、そのバイトという人間が取引されているオークションに行くことができた。

これで捜査が進むことができたのだが

僕はあることを考えていた

不知くと話していた時に感じたことだ

『もしサツサンの記憶が戻ったら、俺たちのことを忘れるのか？』

僕は20年間の記憶を失っている

もしその記憶を思い出したら

今まで2年間のことが消えるのではないかと考えたのだ

今の僕は辛いこともあるが

クインクスの子達やアキラさん、有馬さんなどいろんな人たちと出会えてとても嬉しく感じている

もし記憶が戻ってしまつたら――

僕は死ぬのかな――

ナツツクラツカーの誘いに乗ることができ、嬉しくクラブで踊つていた不知くん達を見守っていた、僕。

しばらく不知くんたちを見ていると…

(…ん?)

踊る不知くんたちの近くに見覚えのある女性がこっそりと現れた。

(あの子、どこかで見たような…?)

僕は目を細め、その人をじつと見ていると…

「…！」

その女性と目が合った瞬間、僕は思わずハッと驚き、目をそらしてしまった。

その目が合ってしまった人は卯月ちゃんと同じ所属事務所にいるアイドルでもあり、僕の知り合いだ。

特徴はショートカットの白髪で黒の目の子。

今ここで彼女と会うだなんて予想外だ。

「ちよつと、そこのお姉さん？」

彼女は何か企んでいるような笑いをしながら僕に近づいてきた。

「うちと話さん？」

「い、いや…わ、私には…少し用事が…」

彼女は僕の耳元に小さく「まあまあ、少しでもええから」と囁き、僕の手を取り、クラブの奥にある誰もいない廊下に連れていかれた。

「——なんだ、それで佐々木は女装してるんだね」

「うん… まさかここで周子ちゃんに会うだなんて…」

事情を話すと周子ちゃんは納得してくれた。

彼女の名前は塩見周子^{しおみしゅうこ}。

346プロでアイドル活動をしており、僕より1つ年下の子だ。

「そうだねー、最近佐々木と会ってなかったけど、久しぶりに会った姿が女装ってなんなの？」

「いやあ… 仕事だからね」

「仕事って、佐々木が働いているところは喰種を倒すところやろ」

周子ちゃんはそう言うと言を細めて笑った。

僕は周子ちゃんの連絡先は知らないが、奏ちゃんと同じくよくばったりと会うことがある。例えば街中で歩いていたら周子ちゃんに見つかってしまって、昼食を奢らされたりとか…

「佐々木そのメイク、明らかに楓さんを意識したでしょ？」

「これは… 楓さんに手伝ってもらったんだ」

「楓さんに？それってまじ？」

「うん、一応僕一人でもできるけど、あの人は僕を女装させるのが嫌いじゃないらしい」

楓さんの自宅に上がってコーヒーを頂いたあと、楓さんは僕の女装を手伝ってくれた。

やはり女性だからかなのかメイクの手入れはうまく、僕を女性らしく仕上げてくれた。

「もし僕が一人で女装を仕上げたら、多分楓さんぽくなるよ」

「楓さんぽくなるかー。あーでも佐々木は楓さんとは1センチ負けるし、今の佐々木は似非楓さんやな」

「（こらこら、周子ちゃん…）」

周子ちゃんの言っていることは確かに事実なのだが、少々からかっているように聞こえる。

「それで… 周子ちゃんはどうしてここのクラブに？」

「今日暇だったから久しぶりにクラブでぶらりとしていたんだ。まさか佐々木が女装していて思わず笑っちゃったよ」

赤の他人なら僕を女性と見てくれるだろうが、周子ちゃんのように僕を知っている人が見たら驚くか笑うか、それとも引かれるかもしれない。

「… それで佐々木がここにいる理由が、確か喰種がいるからでいいんだよね？」

「うん、今ここに僕が追っている喰種が潜んでいるからね」

僕たちクインクス班と同じく捜査している鈴屋班はナッツクラッカーを追っている。ただその喰種を追いかけるのではなく、囮捜査という形で女装をし、その喰種に近づこうということだ。最初はナッツクラッカーに近づかれるかと心の隅に不安が少しあったのだが、お酒を飲んだ六月くんが酔った勢いでナッツクラッカーに話しかけ、ついにはお誘いに乗ることができたのだ。

「その喰種の特徴はフードをかぶっていて、マスクをしている女性なんだけど…」

「あーその人ならあたしも誘われたよ」

「… え？」

僕は周子ちゃんの言葉に耳を疑った。

「ほ、本当なの!？」

「うん、少し話しかけられたけど、あたしはアイドルだしお金は間に合ってるから断ったよ」

「そ、それは良かった…」

周子ちゃんがナッツクラッカーの誘いを断ったことに僕は胸をなでおろした。

「もし誘いに乗ったら喰われるの？」

「いや、あくまで推測だけとおそらくオークションで商品をして売られる」

「商品？それって人身売買？」

「まあ、そうなるね」

「ふーん、喰種ってよくわからん生き物やな」

現在、ナツクラーカーは喰種達による人間の売買を目的としたオークションの商品の調達を担当しているのではないかと上層部の見方でもあり、もしそのオークションの場所が特定できれば、高レートの喰種を駆逐することができる。

(… それにしても本当に良かった)

ナツクラーカーに誘われるのが僕たちクインクスの役目なのだが、まさかナツクラーカーが周子ちゃんを誘うなんて思わなかった。周子ちゃんがそのオークションの商品にならなかったことに僕は安心をした。

「あの… 周子ちゃん？」

「んー？」

「僕が今こうして女装をしていることは内緒ね？」

「そんなこと言われると、シューコちゃんは広めたくなるなー」

周子ちゃんはへへッと悪巧みを抱いている顔で僕を見た。

「そ、それだけはやめてほしいよ…！」

「冗談冗談、流石に広めはしないよ」

周子ちゃんはフレリカさんや志希ちゃんのように自由奔放な人を扱うのは疲れないが、だからと言って本当に疲れないかと言われると疲れる。

「そういや、この前に奏とまた言い合ってたんだよね？」

「え？どうして？」

「女の勘というやつだよ。あの時の奏を見ていたらすぐにわかった。いつも佐々木と奏は仲悪いもんね」

「… 本は譲れないからね」

前にも話したが周子ちゃんは本のことと険悪な空気を作る僕と奏ちゃんをなだめる役でもある。

「それと、凜もなぜか苛立ちを見せたよ」

「え？凜ちゃんも？」

「おそらく佐々木が来たという情報を耳にして会えなくてイライラしたと思うよ。あの感じだったら間違いない次会ったら殴られるわ」

「あ…… そうなんだね……」

周子ちゃんの話の話を耳にした僕は少し肩を落としてしまった。

凜ちゃんは優しい子なのだが、怒ると怖い子でもある。

凜ちゃんの攻撃は体の芯にまでくるほど痛い。

「まったく、佐々木は女たらしやん」

「女たらしって……！それはないよー」

気分を落としていた僕は周子ちゃんの言葉を耳にした瞬間、

そんな僕を姿を見た周子ちゃんは「冗談、冗談」とハハッと笑った。

「もう、あたしは佐々木のごときは女たらしとか考えてへんから安心してよ」

「だ、だといんけど……」

僕をからかって言っていると思うが、周子ちゃんの言葉に妙に安心ができない。

「そういえば佐々木」

「ん？」

「髪染めへんの？」

「髪？」

「そう、前までは髪は真っ白だったじゃん？今はだんだんと黒くなってるよね」

周子ちゃんと言う通り、僕の髪はだんだんと上から黒く染まりつつある。

「あー、染めるのってお金がかかるからやらないよ……」

「お金かかる？そんなことないよ。薬局とかスーパーで安く買ってできるし、佐々木なら簡単にできるはずだけど……」

周子ちゃんはそういうと、どこか納得がいかない顔をした。彼女がそう答えるには僕はわかっていて。

僕はわざと口を濁してしまったのだからだ。

たしかに周子ちゃんの言う通り、そのまま髪を染めればいいのだが、そもそもどうして髪が白くなったのかはわからない。

おそらく消えてしまった20年間の記憶のどこかに何かあったと
はずだ

「佐々木、あたし前から思ったことやけど……」

「ん？」

「佐々木って卯月ちゃんとかシューコちゃんとかめっちゃ有名なアイドルと知り合ってるじゃん？」

「うん、そうだけど……？」

「それで何か変に思わない？」

「変？変って何が？」

「ほら、普通なら一度会っただけで仲良くなる？」

「……確かにそうだね」

普通ならありえない。

本来なら一度出会って急に仲良くなるなんてドラマや漫画の世界
みたいなのだが、僕の場合は現実に起きている。

「佐々木は別にCCG繋がりで卯月ちゃんや未央ちゃんに会ったわけ
じゃないし、前から会ってたわけではないじゃん？それでどうして
佐々木はうちのアイドルとすぐに仲良くなれるの？」

「……」

周子ちゃんの言葉に僕は口を閉ざしてしまった。

返す言葉がすぐに思いつかなかった。

しばらく考えた末、僕は「……わからないなあ」と周子ちゃんに答
えを出した。

「なんもない？それってほんと？」

周子ちゃんは疑うような目つきで僕を見る。

「僕にはわからない…。どうして卯月ちゃんや凜ちゃんや凛ちゃんがそこまで僕に積極的に話しかけるのか…。周子ちゃんは何かわかるかな？」

「あたしは普通に佐々木と話してて楽しいよ。だけど他の子たちについてには本人に聞いた方が確実に早いと思うよ」

「そうだよね…。」

以前から卯月ちゃんや未央ちゃんと話しててどこか違和感を感じたことがある。卯月ちゃんは僕と別れる時、どこか悲しそうな顔をしたり、未央ちゃんや凜ちゃんもどこかぎこちない笑顔になることもあった。何度も聞こうとしたけど、全て聞きそびれてしまった。

「あたしは別にそんなに深くは考えないけど、卯月ちゃんが佐々木に對して結構好意を抱いてるのは間違いないよ」

「…。え？」

少し気を落としていた僕は周子ちゃんの最後に言った言葉に、気が動転してしまった。

「う、卯月ちゃんが好意を抱いてる…。？」

「あぐれ？なんだろうね、その態度く？」

周子ちゃんは少々動揺する僕を見て、からかうような目つきでじつと見つける。

「い、いや…。恥ずかしがっていないって…。」

「シユーコちゃんにはお見通しかなー？」

やはり隠しきれなかった。

「それで、文香ちゃんのことはどう思う？」

「…。え？文香さん？」

「そう、佐々木って文香ちゃんとは結構仲良いじゃん」

「…。まあ、そうだね」

文香さんとは本のごとで話が盛り上がるし、どこか共通する話題を持っている。

さすがに奏ちゃんのようにお互い譲り合えない関係ではないけど…。

「文香さんは容姿も美しいし、綺麗な人と思うよ？」

「容姿？どこがいいの？もしかしておっぱ」

「さすがにそんなところじゃないよ……！文香さんの容姿で綺麗なのは目かな……特に前髪で隠れた青い目はとても美しいと思うよ」

文香さんは卯月ちゃんと比べると美しさが目に入ると青い瞳がいつも僕の心をハッとさせる。

「それで、文香ちゃんのこと好き？」

「……え？」

周子ちゃんの言葉に少し固まった。

でもそれは卯月ちゃんほど動揺した気持ちではない。

「恋愛というか……友達としては好きかな……？」

「……ふーん」

周子ちゃんはどこか納得がいていない感じで答えてた。

「……どうしたの周子ちゃん？」

「いや、別にー。あ、それよりドリンクを一杯おごってくれない？」

「え？お、奢る？」

先ほどの態度から急にハキハキとした態度となり、がらりと変わったため戸惑ってしまった。何度も拒否するが、周子ちゃんは「喉乾いたーん♪」と僕の肩にくっつき、離れさせない。結局抵抗して数分後、僕は周子ちゃんに負けてしまい一杯奢ることになった。クラブで飲むドリンクは値段が高く、周子ちゃんを選んだものは明らか意図的選んだと思えないほどほかのやつより高いものだった。

その後僕は周子ちゃんと別れ、不知くん達と合流し、シャトーへと戻っていった。

シャトーへと戻った僕は、後日上層部に報告するため書類を作成を

していたのだが

周子ちゃんが話していたことが頭から離れなかった

僕が卯月ちゃんたちと出会ったのは偶然なんだろうか？

もしくは初めから仕組まれたことなのか？

いや

あまり考えてはダメだ

彼女達と出会ったのはただの偶然だ

誰かが仕組んだ出来事なんて考えたくもない

Touched by the Rhyme

346プロダクション 取締役副社長室

プロデューサー^武は琲世が届けてくれたCCGからの書類を美城副社長の元に届けにきた。

「……次の作戦は喰種が集まるオークションか」

「はい、今回も大規模な作戦になるそうです」

プロデューサー^武の目の前で椅子に座っている女性は美城取締役副社長。

彼女は346プロダクションの会長の娘であり、346プロ社内では次期取締役社長と噂される人物だ。

彼女は今まで海外で仕事しており、帰国後346プロダクションで改革を行い、346プロの名を大きく挙げた人物だ。

彼女のやった改革は革新的であり、当初は反対の声があったものの成果が上がるにつれ反対の声が少なくなった。

(現在、父である会長とは不仲説が社内に聞くな…)。

父である346プロ会長とは仲が悪いと密かに噂される。

理由としては美城副社長が帰国した時、直接会長に会わずメールで済ましたり、各部門の方針の違いによる衝突もあり、特に喰種対策についての衝突もあったそうだ。

プロデューサー^武とは当初はアイドル部門の方針の考えで衝突をしたものの、喰種対策には同じく賛成しており、アイドル部門での方針の違いは今でも残っているものの時間が経つにつれ衝突がなくなっていくた。

「今回渡しに来たのは鈴屋班の者ではなく、佐々木一等捜査官なのか」

「ええ、鈴屋准特等が佐々木一等に譲りました」

「譲ったか… だろうな」

美城はそう言うと言ったかのようにため息をした。

喰種対策局からの報告書を346プロに届けさせるのは鈴屋班のみにしたのは美城なのだが、ここ最近班長である鈴屋什造はめんどく

さがる行動がたびたびプロデューサー^{武内}から聞かされておられ、当初は改善するよう鈴屋自身に要求したが、ここ最近では諦めたらしい。

「だが鈴屋准特等のおかげで13区の治安はよくなったものだ。彼には感謝しきれない」

13区はかつては血の気の多い区であったが、鈴屋什造率いる鈴屋班の活躍により喰種による事件が減り、あと少しで完塞^{かんさい}が達成される。※完塞^{かんさい}はエリア内の喰種を排除し、再び入れさせない状態のこと。

346プロが喰種対策に乗り出したのは事務所に所属していたアイドルが13区で喰種に襲われ、死亡をした出来事であった。

その亡くなったしまったアイドルを担当をしていたのがプロデューサー^{武内}であった。

当初346プロ内では喰種対策に力を入れるのは無駄なことであり、他に力を入れるべきだと反対の声が多かった。

しかし美城が海外から346プロに帰ってきた時、喰種対策にさらに力を入れることに決定をしたのだ。

当時はその方針に疑問視や混乱があったものの、23区にあった喰種収容所から多くの喰種の脱走やアオギリの樹の日に日にます脅威により理解をするものが社内が増えつつある。

すると美城は『佐々木琲世か』と何か引つかかったように呟いた。「どうかされましたか?」

「確か佐々木一等は確かクインクス計画の指導者だな」

「はい、彼は有馬貴将特等捜査官の元で鍛えられた捜査官で、実力は良いと耳にしています」

クインクス計画は保安上346プロでは数人しかいられていない。

計画内容は喰種をより殲滅しやすくするための計画なのだ……

「彼は確か、半喰種だろ?」

「……ええ、おしやる通りです」

プロデューサー^{武内}は頑なに答えた。

CCGは喰種の体内から取り出し、製造をしたクインケを使用しており、一般の目から見れば道徳に反している。

しかしCCGは更に効率を上げようとしているのか、喰種の能力を人間の体内に埋め込んだクインクス計画を始めたのだ。

特にクインクス計画の指導者である佐々木琲世は人間が食べる物を口にするのができないとプロデューサー^武達^Pに耳にしており、摂取可能なのは人間の肉とコーヒー、あとは水しかない。

「君は敵である喰種の能力を体内に入れていることを聞いてどう思う？」

「……複雑な気持ちです。人間の体内に喰種の能力を入れるだなんて今でも信じられません」

かつてプロデューサー^武していたアイドルを殺した生き物の能力を体内に埋め込むことにプロデューサー^Pは抵抗があった。

「CCGの奴らは喰種の体から取り出して作ったクインケを使用しているが、それでは満足できなかったらしいな。次は喰種を雇うつもりだろうな」

美城はそう言うと、バカにするように嘲笑った。

「私は喰種捜査官の働きを評価するが、上の奴ら^{和修家}には評価をしない。会った時の反吐が出る空気が今でも思い出す」

「和修議長とご対面した時ですか？」

「ああ、まるで人と話していないようにも思えた」

CCGは政府機関にも関わらず、各重要職には和修家が代々受け継いでいる。もし和修家に刃向かう真似があれば徹底的に潰される。閉鎖的な空気を嫌う美城には好きになれるわけがなかった。

「奴らがいなければ、おそらくはCCGの風通りが良くなるだろうな」「ええ、おそらくそうだと思います」

CCGは機密事項が多いせいか、一般人の喰種に対しての知識が乏しく、曖昧な情報が行き交うばかりである。

そのためには喰種に対しての正しい情報を世間に提供するよう346プロは何度も伝えているが、全て却下されている。

プロデューサー^武は美城副社長の元に離れた時、あることを考えてい

た。

(佐々木琲世……彼はあの青年に似ている。)

プロデューサー^{武内}が佐々木と初めて出会った時、思わず目を疑った

まるで以前に出会った青年にそっくりであったからだ

その青年は自分がプロデュースしていたアイドルの知り合いであり、助けてくれた青年

しかし青年は現在行方不明になっており、プロデューサー^{武内}は佐々木琲世と出会った時、その青年が戻ってきたのかと思った

だが彼の名前は違い、職業も全然違った

でも佐々木琲世と会うたびに雰囲気やはり今でもかつて出会っていた青年に似ている。

彼は何か青年と繋がりがあのではないか？

プロデューサー^{武内}は密かに考えた

—————

球世Side

シャトー

みんなが寝静まった頃、僕は携帯の連絡帳を開き、ある人に電話をした。

いつもなら繋げる時に聞こえる通信の音を気にすることは無いのに、今回はどこか緊張をしてしまう。

しばらくすると『もしもし？』と女性の声が僕の耳をくすぐるように聞こえた。

「…美嘉ちゃん？」

『あ！佐々木さん！久しぶりですね！』

僕が電話をした人物は城ヶ崎美嘉ちゃんだ。

『佐々木さんが急にアタシに電話なんてめずらしいね』

「そうだよね…いつもならメールだけど…」

いつもなら美嘉ちゃんとはメールで話しか直接会うぐらいしかないのだが、電話は今初めて話すのだ。

『それで、どうしたんですか？』

「ああ、そうだね…」

あまりにも緊張をしていたため、言うことを忘れていた。

「えっと…美嘉ちゃんはそろそろ誕生日だよね？」

『うん、そうだけど？』

「早いかもしれないけど… 美嘉ちゃん、誕生日おめでとう」

『… どうしたの？アタシの誕生日忘れたの？』

美嘉ちゃんはからかうように僕に話した。

「あはは… やっぱり変だよね… 美嘉ちゃんの誕生日は11月12日ってわかってるよ」

僕が突然美嘉ちゃんにまだ誕生日ではなのに、早めに祝うのは理由があった。

「しばらく仕事で会うことがないから… その…」

『たしかにお互い会う時間はないよね… 佐々木さん、電話してくれてありがとね★』

美嘉ちゃんは言葉をうまく話せなかった僕に優しく話してくれた。

僕が今美嘉ちゃんに電話するきっかけを作ったのは、僕が遺書を書いていた時だった。

次の作戦は11月11日に実行することになっており、その次の日が美嘉ちゃんの誕生日だ。

今まで作戦前に早めに誰かの誕生日を祝うことはなかったのだが

今回の作戦は嫌な予感を感じる

具体的になんなのかは言葉に表せないが

もしかしたら死ぬかもしれない

嫉妬

琲世Side

1区 CCG本局 昼過ぎ

僕はアキラさんと綿密にオークションの打ち合わせをした後、気分転換に本局の外に出ていた。

次の作戦は油断もできないため、緊張もそうだし不安が胸の中に風船のように現れていた。

いつもそうだが作戦が終わると先ほどまで顔を合わせていた人が殉職する状況に多く対面する。

先ほどまで生きていた人が骸となって息絶える。

そう考えるだけでも自分の身に大きな負担が生じる。

だから僕は本局から出たんだ。

(今日は珍しく単独だから、なんか違和感があるな...))

いつもなら僕はクインクスのみなどと一緒にいるのだが、今日は違う。

六月くんは鈴屋くんと作戦当日の打ち合わせで13区に、不知くと才子ちゃんはシャトーで待機、あとは瓜江くんはフレームの手術で明日には帰ってくるらしい。

(このまま喫茶店に行ってもいいけど...))

先ほど一緒にいたアキラさんは作戦当日と一緒に参加する班のところに行ってしまった、『琲世は先に昼休みと取ってくれ』と言われ、何もすることなく一人で街の中に歩いている。

お昼休みになるといつも楓さんから喫茶店のお誘いがあるが、ここ最近楓さんはお仕事で地方に行ってしまったため、今からお誘いがくるのではない。

腕時計を見ても時計の針があまり進むことなく、昼休みはまだまだあった。

暇だなあと心の奥底でポツリと思った瞬間

「……？」

僕はピタリと足を止めた。

誰かが僕を見ているような気がした。

誰だろうかと僕はゆっくりと振り向くと、一人の女性が立っていた。風でなびく長い黒い髪に前髪で隠れた美しい青い瞳をした人。彼女の肌は綺麗に咲く白い花のようにとても美しい。

「こんにちは、佐々木さん」

彼女を見た僕は不意につかれたように目を大きく開き、驚いた。

僕はその女性のことは知っていて、久しぶりに出会う人。

その人の名は、鷺沢文香さんだ。

—————

僕たちは近くあったレトロ風の喫茶店に移動し、お互いが対面するように席に座った。

早速席に座った僕たち。

最初に僕が口を開いた。

「久しぶりです、文香さん」

「お久しぶりです。佐々木さんが元気でよかったです」

文香さんはそう言うと言を細め、にこりと笑った。

文香さんは346プロのアイドルであり、僕より年が一つ上の女性。

まさか今出会うとは僕は考えもしなかった。

「しばらく佐々木さんとお会いすることができなくて、本当にすみません」

「い、いえ、謝らなくてもいいですよ？文香さんと今会えただけでも嬉

しいです」

申し訳なさそうに頭を下げた文香さんを見た僕は困惑してしまい、すぐに止めた。

文香さんとは長く会っておらず、楓さんや卯月ちゃんとは違いほとんど会っていない。

いつもお互いのどちらかが仕事や都合によって会うことができず、こうして会うのが本当に珍しい。

文香さんは「こちら、お返ししますね」とカバンから僕が前に貸していた本をそつと返してくれた。

「ありがとうございます。もう読んだんですか？」

「ええ、カフカ短編集が読めて、私は嬉しかったです」

文香さんが貸していた本を早く返してくれたことに少し驚いた。文香さんは本を読むときは結構時間をかけて読む人のだが、前に本を貸した日よりそれほど空いていない。

『まだ読んでいても良かったんじゃないですか？』と僕は文香さんに聞くと、『随分前に何度も読んでいたので、早く読み終わりました』と答えてくれた。文香さんがそう答えると、僕は前に考えたことをふと思いつ出した。

「あの文香さん」

「はい？」

「文香さんが今住んでいるところは古書店ですよ？カフカはあるんじゃないー」

「いえ、古書店と言っても必ずしもなんでも取り扱っているわけじゃないんですよ」

僕の言葉を遮るように口を開いた。

僕は「あ…そ、そうですね」と何かに気がつかさせられたように言葉を返した。僕は文香さんの古本店にあるんじゃないかと思っていたのだが、よく考えてみればいくら古本屋といえどなんでも揃っているとは限らない。別におかしいではなく、あり得ることだ。

「佐々木さんは、なぜあそこに行ったんでしょうか？」

「お昼休みにどこに行こうか迷っていたんですよ」

文香さんは僕の言葉を耳にすると、「そうなんです」とどこか嬉しそうに微笑んだ。

「実は私もちようど、どこに行こうか迷っていたんですよ」「迷っていた…?」

僕は文香さんの言葉に少し疑問を抱いてしまった。

その理由は僕と会ったときの文香さんの顔。

あれは迷っていたと言うよりも、何かを探していた顔に見えた。

そう考えると文香さんの言葉にどこか矛盾が生じる。

(…少し考えすぎたかな)

でも僕には指摘する余裕はなかった。

これ以上聞いても結局自分から会話にブレーキをかけてしまいうだ。

ここ最近の僕は心の中に不安があった。

それは自分の知らない過去を知るのが怖い。

今まで20年間の記憶を知らずに2年間生きていたのだが、ここ最近、自分の知らない過去に興味を持ち始めている。

もし過去を知ってしまえば僕は死ぬかもしれない。だから僕はこれ以上心に負担をかけないように文香さんに聞くのをやめた。

「た…確かに奇遇ですよ…街の中で会うなんてとても珍しいです」

僕の違和感のある感じに話した言葉を耳にした文香さんは「ええ、そうですね…奇遇です」と何も察する様子もなく微笑んだ。

その姿を見た僕は心の中で、気づかれていないことにほっとした。

「実はありすちゃんもいるんですよ」

「え?... あ、あります... ちゃんですか...」

文香さんからありすちゃんがいると耳にすると、少し気分が下がってしまいました。

「... どうしましたか?」

「いや... 実はありすちゃんは僕のことを今も嫌うんですよ。例えば、ありすちゃんと呼ぶと『橘です』と怒った感じに言葉を返したり...」

僕はありすちゃんに未だに『ありすちゃん』と呼ぶことが許されず、『ありすちゃん』と言おうとすると『橘です』と怒った顔ですぐに言い返す。いつになったら『ありすちゃん』と言うのを許してくれるだろうか？

「そうなんですか・・・ ありすちゃんはいいい子なんですが・・・ どうして佐々木さんに敵対的になるのでしょうか？」

僕の話を目にした文香さんはありすちゃんがどうしてその行動に出るのかはわからないらしい。

僕は「ありすちゃんは優しい子だとわかりますが・・・」と腕を組みながら考えた。

しばらくすると、お互いに沈黙が生まれた。

お互いが頼んだ飲み物が置かれるも会話が再び始まることなく、僕がコーヒーを一杯口に移すも変化はしなかった。

でもわかっていることはお互いは緊張で口を進むことがなかったわけじゃない。

少し心地がいい。

こういった沈黙も悪くない。

でも完全に心地がいいとはいえない。

どこか淡いが心に生まれていた。

何故なのかはわからない。

卯月ちゃんとは明るい色があるのに、文香さんは違う。

なぜなんだろう？

文香さんは美しくて優しい人なのに

それとは逆に暗い色が無意識に現れてくる

それはまるで、暗い雨雲から降る雨のように暗い色だ

「……？」

自分の中に彷徨っていた僕、すると自分の右手に何かかが重なっていることに気がついた。

目を向けると誰かが僕の右手を小さな両手でそつと重ねていた。

その小さな両手を辿るように視線をあげると、文香さんが何か懐かしむように僕の手を見ていた。

その顔はとても美しく、どこかはかない。

青い宝石のように綺麗な瞳から伝わる、悲しみ。

テレビや雑誌で見かける文香さんとは全く別の人物。

美しさと哀しみが入り混じっていた。

文香さんに哀しみ？

なぜ僕はそう考えてしまうんだ？

彼女は美しい人なのに、自然と哀しみがやってくる。

一体どうしてなんだろう？

そう考えていた僕だけどー

「…あ…す、す、すみませんっ！」

じつくりと文香さんを見ていた僕だが、文香さんは自分がやってきたことにハッと気がつき、恥ずかしさを表し、スツと僕の右手から両手を話した。

「きゅ、きゅ、急に手を重ねてしまい、す、すみません…」

文香さんは恥ずかしさのあまり、呂律が回っていないかった。

「いえ、大丈夫ですよ」と伝えるが、文香さんは「本当に大丈夫でしょうか？」と心配をした顔で何度も僕に聞いた。別に大したことじゃないのに、どうして慌てふためくのだろうか不思議だった。

「大丈夫ですよ、文香さん。あなたのことを嫌うわけじゃないですよ」

「…… あ、ありがとうございます。今言うのはあれだと思いが…… 佐々木さん…… 今度、どこか一緒に——」

文香さんが話していた途中、突然僕が持っていた電話が鳴り出した。

「…… ああ、すみません、文香さん。僕の携帯です」

「佐々木さんの携帯ですか？もしかしてお仕事ですか？」

「はい、もしかしたらそれかもしれないんで電話に出ます」

僕はそう言うと、ポケットに鳴っていた僕の電話を取り出し、電話に出た。

僕に電話をかけてきたのはアキラさんだった。

「はい、琲世です」

『琲世、少し来て欲しい。作戦当日に共に参加する班の打ち合わせがある』

「はい…… わかりました」

僕はそう言うと電話を切った。

「すみません、文香さん。仕事でそろそろ戻らないといけなくて……」

「お仕事…… ですか……」

そう言った文香さんの顔はどこか悲しそうだった。

僕が「文香さん……？」と声をかけると、文香さんは悲しみを振り払うように「…… いえ、大丈夫です」と微笑んだ。

「文香さん、今お金を渡しますので、あとはお願いできますか？」

「ええ、お仕事なら仕方ないですよ。私がお支払いします」

僕は財布からお金を取り出し、文香さんの手元に置き、席から立ち上がった。

「では、僕は仕事に戻りますので、またどこかで会いましょう」

「はい、またどこかで」

僕たちは別れの挨拶をすると、僕はすぐさまCCG本局へと戻っていった。

本局へ戻っている時、僕の頭にはある場面が残っていた

それは沈黙していた時に見た文香さんの顔

あの美しさと哀しみを持った文香さんはなんだただらうか？

僕はその疑問を思いながら本局へと戻った。

――

文香 Side

私が喫茶店のお会計を済ました後、ゆつくりと346プロへと戻っていました。せっかく佐々木さんと会ったのに、一緒にいられたのは数分程度。何でこんな惨めな時を味わなきやいけないんだ？

(…ん?)

後ろの木からじっと見つめる女の子がいました。

「どうしたんですか、ありすちゃん？」

私が優しく声をかけました。

彼女の名前はありすちゃん。

来年で高校生になる子で、私と同じく長髪の子です。

「文香さん、また佐々木さんと会ったんですか？」

「…ええ、そうですよ」

私の答えを耳にしたありすちゃんは、どこか不満そうにしました。いつもありすちゃんは佐々木さんのことは好きではありません。

「ありすちゃんはなんで佐々木さんのことを嫌うんですか？」

「…」

私が聞くところありすちゃんは言葉を探しているのかしばらくの間、口を開くことはありませんでした。

「なんと言いますか……その……好きじゃないんですよ」

「佐々木さんはいい人ですよ。ありすちゃんを嫌っていませんよ？」

佐々木さんは素敵な方です

今日は卯月さんと会っていなくて良かった

卯月さんはいつも佐々木さんと一緒にいる

私はなぜか仕事や都合で遮られる

羨ましさ妬ましい気持ちが生まれる

なんで私がこんな思いをしないとイケないの？

なんで？

あの女は簡単にあの人に近づけるの？

まるで私は陽に当たらない物語の登場人物

とても妬ましい

なんで私はこんな思いをしなければならぬの？

「…ふ、文香さん…？」

「…え？」

気がつくど、ありすちゃんが私の腕にぎゅっと抱きついていました。

「どうかしたんですか…？」

ありすちゃん顔はまるで何かに恐れるような顔でした。

辺りを見渡しても怖いものはなく、おそらく私の心が表に出たようだった。

「なんでもありませんよ？」

これ以上ありすちゃんに不快な思いをさせないように、作り笑顔をした。

ああ、また表に出てしまった

私の悪い感情が

presentiment

ありすSide

お昼が過ぎた頃

私は文香さんとしばらく事務所の外にお出かけをし、事務所に帰ってきた。

事務所の入り口に入ると文香さんは次のお仕事のため途中で別れ、私は一人になった。

私もお仕事はあるのですが、しばらく時間があるため私と文香さんが所属しているユニットの部屋に入りタブレットを開き電子書籍を読んでいたのだけど、本の内容が頭にまったく入ることなく次のページを開く作業をしてしまった。

(また怖い顔をしていた...))

私が本の世界に入れない原因、それは「恐怖」。

私はある人に恐怖を抱いている。

それは仕事を失敗してしまうのではないかの恐怖でもなく、知らない人から恐怖を抱いたのではない。

その恐怖を作ったのは、私が憧れる女性の文香さんだ。

(... 佐々木さんと別れて苛立ちを見せてたのかな?))

私は文香さんのことが怖い。

初めて文香さんと会った時に現れなかった感情。

私は文香さんのことを尊敬する女性だと考えている。

だけど恐怖を抱いてしまう。

私が事務所から出た時は文香さんも一緒にいたのだが、途中で文香さんが何かを発見して立ち止まり、何かに向かって走っていった。その時の私は一体何があったのかわからず文香さんを探していたら、文香さんは佐々木さんとお茶をしていたのだ。

最初見た時は嫌悪感を覚えたのだが、佐々木さんと話す文香さんの顔を見たらすすと消えてしまった。

佐々木さんと話す文香さんは本当に喜んでいた

何の偽りもない笑顔で笑っていた

その姿はかつて私の前にいた文香さん

最初文香さんと出会った時の私は『ありす』と呼ぶのを許さないほど冷たく閉鎖的でした。

だけど文香さんは冷たく接する私を優しくしてくれました

何度もひどい言葉を言ってしまった時でも文香さんは優しくしてくれた

それで私と文香さんが初めて大舞台に立った日、私は文香さんに心を許したんだ

その時の文香さんは体調を崩してしまい、一時会場を騒乱させてしまいました

あの時の私は文香さんを自然と本気で心配をしていた

今まで冷たく接したのに、嘘みたいに心配をしたんだ

それ以降私は文香さんを憧れる美しい女性だと思っていた

佐々木さんと出会うまでは――

佐々木さんと話す文香さんは私がいとも見る文香さんの姿だったのだが、喫茶店から出た文香さんの姿は一変した。

『……ムカつく……なんで……なんで……』

一緒に事務所に帰っていた時に文香さんが私の横につぶやいていた言葉。

前髪に隠れる瞳は何かに対して憎むように恐ろしく、感情が表に出たのか持っていた本を握り潰すように持っていた。

佐々木さんと会って以降、文香はどこか変わってしまった。

前までは文香さんに気軽に話しかけたのに、今では文香さんに声をかけるだけでも勇気がないと話しかけれない。

それに私に話しかける文香さんの姿は目を真っ直ぐに見ていられない。

私にも飛び火がやってくるのではないかと怖くて仕方がないのだ。

他にはふと立ち止まり、突然、物を投げつけた光景を見たことがある。

だから私は文香さんに恐怖を抱いてしまうのだ。

前までは文香さんを怖く感じるなんてなかったのに

佐々木さんと出会って以降、私の心の中で恐怖が芽生え始めた

私と同じく佐々木さんのことを嫌う奏さんに聞いても『あれは文香自身の問題。ありすちゃんには関係ない問題よ』とはつきりさせてくれない

これ以上文香さんが佐々木さんに近づかないで欲しい

私が知る文香さんが消えてしまいそうで怖い

最後に私に本当の笑顔を見せたのはいつだろう

い
最後に見た文香さんの笑顔が風のように過ぎ去ってしまうのが怖

文香さん

あなたはなぜ恐ろしい人になってしまったんですか？

文香さん

もう怖い顔をしないで欲しい

文香さん

お願い

文香さん

私の大好きな文香さんに戻って

—————

凜Side

レッスンが終わって事務所から出た、私。

事務所の外に出た瞬間、秋の終わりを告げているように感じる冷たい風が肌に当たる。

(もうこんな季節か…)

夏の季節が終わって二ヶ月が経った11月。

9月までは夏の残暑がまだ残っていたのに、今では夏の暑さに恋しくなるほどの冷たさを味わっている。

もうそろそろマフラーを部屋の奥から取り出す準備をしないといけないかも。

(…最近、卯月たちとは遊んでいない…)

卯月や未央とはアイドルになったばかりの時と比べるとほとんど会っていない。

同じユニットを組んでいるのだけど、それぞれにはやるべき仕事があつて、気がつけば会っていない月もある。

でもお互いには夢中になれることがあるほうがいい。

変化を恐れて何も変わらなかつたら成長はしない。

それで私は卯月たちより先に別の世界に足を踏み入れたんだ。

(今年のクリスマスに私の家でパーティーか…。まったく未央は何を考えているのやら…。)

会う回数が減ってしまった私たちは、今年のクリスマスと一緒にパーティーをする約束ができた。

私の家でパーティーをしようとと言うと私がパーティーを提案をしたのかと思うかもしれないが、実は未央が提案をした。

まだ一ヶ月あるのに未央はもう計画を立てていたため、本気が伺える。

ちようどみんなが集まれるのは夕方ごろのため、パーティーをすることができると。

今のところ参加者は卯月と未央、私なのだけど。

(流石に佐々木をクリスマスに…。)

その思った瞬間だった

「……はい、わかりました、キジマさん。すぐに向かいますね」

すると、”ある男性”が私の横を通り過ぎた後、歩いていた私はピタリと足を止めてしまい、振り返ってしまった。

(…：え？なんか…：見たことがあるような？)

先ほど横を通った黒髪の男性。

年は佐々木と同じぐらいの人で、黒いコートを着ていた。

会社帰りや学校帰り、どこかへ行く人が無数にいる夜の街の中、その男性が私の横を通り過ぎた瞬間、違和感を覚えた。

(…：気のせいだよ。私、少し考えすぎたのかな)

私は少し深呼吸をし、再び歩み始めた。

あの男性が横を通り過ぎた後、同じはずであった秋の夜風がどうも不穏に感じる。

びゅうびゅうと音を立てる風の音がまるで何か嫌な予感を予言しているように聞こえる。

私は夜の街の中、不安を抱えながら、家に帰っていった。

私の横を通り過ぎた男性は、私には関係ない

その時の私はそう考えていた

また会うだなんて、まさか

|||||

琲世Side

本局から出た、僕。

本局に入っていた時は太陽が綺麗に輝いていたのに、今では太陽が沈み、真つ暗な夜空が広がっていた。

今日は、いつもの捜査でもなく仕事でもない

今日は、明日実行される喰種オークション掃打戦の最後の打ち合わせだった

それで僕はクインクスのみんなの遺書をアキラさんに渡した

遺書の提出期限は作戦前日で、いつもなら一週間前に終わらせるのだが、今回は違った

遺書を最後に書き終えたのはクインクスの指導者である僕だった

僕はいつも通りに遺書を書くのに、手が思うように書けなかった

僕が遺書を最後まで出さなかったことにアキラさんは勘付いていた

遺書をアキラさんに提出した時、アキラさんからこんなことを言われた

『いいか、ハイセ。卯月のことを考えるな』

アキラさんの勘は的中だった

僕が遺書をすぐに書けなかったのは、卯月ちゃんたちに関係して
いた

卯月ちゃんと会った当初は遺書はすぐに完成できたのだが

ここ最近、卯月ちゃんたちに何かあるのではないかと思いはじめた

僕は20年間の記憶を知らずに生きてきた

高嶺の花である卯月ちゃんたちと何も遠慮することなく仲良くな
っているなんておかしい

もしかしたら消えてしまった記憶の中に、彼女たちが関わっている
かもしれない

そう考えると消えてしまった記憶を知らぬまま作戦で死ぬのが嫌
に感じる

だけど僕が住む世界はそう言う世界だ

いつも一緒にいるの当たり前だった人が、翌日にその人が死んだら
知らせが届く

それが喰種捜査官

明日、結果がわかってしまう

僕は作戦で喰種を倒し生き残るのか、それとも骸になって死ぬのか

望み

卯月Side

夜

家にいた私は食事をした後、食器をシンクに置いたんだけど、すぐに洗うことはせず、そのままベッドに向かい、力がスツと消えたかのように横になった。いつもならすぐにお皿を洗うんだけど、どうも気持ちいがパツとしない。

(私……憧れているのかな……)

私はそう思うとベットにあつた枕を取り出し、パツとしない気持ちを満たすようにぎゅっと抱きしめた。

そのパツとしない気持ちが生まれてしまった原因は分かっていた。

今日、大学で何度も見かけたことだった。大学に行く時、授業を受けている時、大学内で食事をとっている時、大学から帰っている時など何度も見かけた。

(何でカップルを見てしまうんだろう……)

もやもやとした感情を抱いてしまった原因は、幸せそうに過ごすカップルを見たからだだった。自分と同じ年頃のカップルを見ていた私は憧れのような感情を抱いていた。仲むつまじく過ごすカップルの姿がとても幸せそうで、私はどこか複雑な気持ちになった。

流星に幸せに過ごしているカップルに嫉妬を抱くなんてないのだけど、見ているとどこか胸の中が引つかかる感覚が生まれるのは事実。

(友達に何度も言われるんだよね……彼氏を作ったことないの!?!つて)

私は20歳だけど、ちゃんとした恋愛はしたことがない。よく友達から私が一度も恋愛をしたことがないことに驚かれる。たまに私がテレビで一緒に出演した男性と相性が良さそうだったり、いいカップルになりそうとかの声を耳にする。

たしかに一緒に出演する男性の方々はカッコいいし、優しい人でもあり、話が盛り上がることもある。

でも私は好きという感情を芽生えることがない。楽しく話をしても恋愛には至らない。たまに私を惚れさせようとかっこよく振る舞う人もいるけど、私は惚れたりはしない。仮に容姿がかっこよく、何もかもが完璧な人が私を優しくして告白してきたら、私はきつと断ると思う。それは自分がアイドルではない状態でも同じく答えるだろう。

私には恋人に等しい存在を持つ人間がいるんだ

彼の名前は佐々木琲世

その人は金木さんに似ている人だ

佐々木さんのおかげか、他の男性にときめくなんてできないかもしれない

ここ最近佐々木さんが金木さんに本当に似ていると感じ始めてしまった

(私：：： 本当に好きになっていいのかな?)

でも私はアイドル。

アイドルが恋愛をしてしまえば、多大な迷惑をかけてしまうし、今後の道が消えてしまう。

だけど、わかっていても欲が出てしまう。

今までアイドルに専念しようと決心したのに、金木さんが私の前に消えてしまった時に恋愛感情を抱いてしまった。

(いま、電話しようかな：：?)

もしかしたら今なら佐々木さんは仕事が終わっているから、電話はできるかもしれない。

私はメールを開き、文書を打ち始めた。

心を満たされたいからか、今日はメールを打つのが早い。

『こんにちは、佐々木さん』とメールを送ると、

(：： あれ?早い?)

いつもなら返信がくるのは数分ぐらいなのに、今回は数秒だった。

佐々木さんからのメールを開くと、『どうしたの卯月ちゃん?』と書かれた文が表示された。

その文を見た私は嬉しく感じ、確信をしたんだ。

もしかしたら電話ができるかもしれない。

私は勢いに任せ、文章を打ってメールを送った。

『電話をしてもいいですか?』

もしかしたら佐々木さんは『いいよ』と返事を出し、電話をしてくれるかもしれない。

私は楽しみにしながら返事を待った。

しかし、返ってきたメールは期待外れだった。

『ごめん、できない』

佐々木さんからのメールを見た私は思わず「えっ」と声を漏らしてしまった。

私はショックをしてしまったのだ。

数十秒待っていると、佐々木さんからまた返事がきた。

『仕事はまだ終わってないからできない』

私はその文を見た瞬間、ハッと我に返った。

私は期待をしすぎたんだ。

佐々木さんはいつでも時間があるわけじゃない。

私は自分のことしか考えられないわがままな子になっていたんだ。

私はショックした心のまま、メールの文を打った。
最初に打った時よりもだいぶゆつくりで、とても遅い。
『わかりました、急なお願いを言ってしまうてごめんなさい』

私はそのメールを送ると、携帯を手放し、天井を見た

ああ、満たされたい

私は恋愛を正式にしたことがないから、味わいたい

私はベットの枕をぎゅっと抱きしめた

琲世Side

喰種対策局 本局

僕は更衣室にてボディーアーマーなどを防護服を体に身につけていた。

いつもこの時間ならそのままシャトーに帰っているのだが、今回は違う。

(∴∴ そろそろ六月くんがナツツクラツカーの約束の場所に行ってしまう∴∴)

今日の夜、喰種が人身売買をしているオークションに突入をするのだ。

多くの喰種がいると思われるため、今回の作戦は多大なる犠牲者が出ると予想されている。

そう考えると油断はできない。

一緒に戦った人が死ぬこともあるし、僕も死ぬ可能性だってある。

(電話を消さない∴∴)

僕はポケットにあった携帯を取り出し、画面を見る。

今の所、誰も僕に連絡してはいない。

今更、連絡帳を開いて連絡を取るつもりはない。

僕は既に遺言書を書いたんだ。

最後だから連絡をする行動を起こしてしまえば迷惑もかかるし、本当に死ぬかもしれない。

携帯の電源を消そうとしたその時……

一通のメールが届いた。

(誰だ?)

僕は電源を消すのをやめ、届いたメールを開いた。

(え?…… 卯月ちゃん?)

僕はそのメールの主を見ると驚いてしまった。

卯月ちゃんからだっただ。

(…… このタイミングで卯月ちゃんから返事がくるなんて……)

なんだろうかと『どうしたの卯月ちゃん?』と返事を送った。

メールを打つ僕はいつもより早かった。

きっといつもとは違う雰囲気だったかもしれない。

早く知りたいという感情が芽生えていたんだろう。

少し待っていると卯月ちゃんから返信がきた。

『電話をしてもいいですか?』

その文を見た僕は、胸が締めつけられる感覚を味わってしまった。

(…… 今、言われるなんて)

先ほど言ったのだが、僕はこれからオークションに突入するのだ。

その直後に卯月ちゃんと電話はできない。

僕はすぐに文を入力した。

『いめん、できない』

この文を卯月ちゃんに送るのは抵抗があった。

きっと彼女に傷をつけてしまう。
だけど今はこの文を送るしかない。

今電話をしてしまえば、会いたい気持ちが高まってしまう。
そして仮に僕が作戦で殉職しまえば、彼女は悲しみ立ち直れなくなるかもしれない。

『仕事はまだ終わってないからできない』

僕はその後、理由が書かれたメールを追加で送った。

これで彼女には理解してほしい。

これ以上聞いてほしくない。

そう待っていると卯月ちゃんから返信が来た。

『わかりました、急なお願いを言ってしまったってごめんなさい』

卯月ちゃんからのメールが届いたことを隠した僕は、携帯の電源を消す。

きっと彼女はショックを受けたのだろう。

だけどそうするしかない。

これは僕のためでもあり、彼女のため。

そして僕は更衣室から出た

またここに来れるように、生きないと

嵐の前の静けさ

プロデューサー^{武内P}Side

夜

私はまだ346プロダクションにいた。街の景色が一望ができるフロアで一人眺めていた、私。いつも多忙な私にやるべき仕事は終わったのだが今日は少し量が少なく早く終わった。普段ならそのまま家に帰るのだが、今日は違う。

本日の夜、CCGは喰種が行なっているオークションに突入する

私は緊張を抱いているのか足が動くことができず中々フロアを離れることはなかった。

(今回は会場が特定されていないため、伝えることができないか…) いつもならCCGから作戦が行われる地区を事前に伝え、我々346プロはその地区に住んでいる所属アイドルや俳優、モデルに注意もしくは退避させるように伝える。しかし今回の作戦は囷となつている喰種捜査官が到着した会場が作戦場所のためはつきりとした情報は開示されてない。喰種が人間がオークションの商品を扱っていると聞くと気味が悪くなる。喰種捜査官から聞いた話によるとかつてテレビに出ていた俳優や親を亡くされまたは拉致された小さな子供、あとは若い女性が特に取引にされているらしい。(… 被害は今回も避けられないだろう)

私がCCGが行う作戦で一番耳にしたくないことは犠牲者の数だ。作戦では通常の勤務では出会うことのない危険な喰種が多くいる場合が多く、作戦後に公表される殉職者を書類から見ただけでも胸に痛みが生まれる。作戦で殉職された捜査官一人一人の名前が書かれたポスターが東京都1区にあるCCG本局ホールに並べられた光景は、CCGが作戦を346プロダクションに報告する時に真っ先に頭に

浮かんでしまう。以前の私は不謹慎ながら殉職者のことを思い浮かべることがなかったのだが”ある作戦”以降考えるようになった。

それは3年前に20区で実行された作戦『隻眼の梟 討伐戦』

その作戦は私にとって忘れられないものだった。

一つ目は20区内で島村さんが取り残され

二つ目は討伐対象であった隻眼の梟と私は出会い

最後は喰種捜査官で数少ないお知り合いだった亜門さんが殉職されてしまったのだ

一つ目の卯月さんが20区で取り残されたことはCCG側が作戦開始直後に我々に作戦を行うと報告していたため仕事が終わったプロデューサーたちは急務に終われた。しかしアイドルの一ノ瀬さんが、島村さんが20区に取り残されているとの情報が入り更に緊張が走った。当時島村さんは活動を休止しており、世間では彼女が活動を再開されることを待ち望んでいた。その彼女が戦場と化した20区に取り残されていたのは重大な問題であった。最初はただ島村さんの無事を祈るばかりであったのだが、突如転機が訪れた。島村さんは有馬特等捜査官が指揮する0番隊によって無事に救出されたのだ。島村さんが無事と聞く前の私は不安が長く抱え込んでいたのだが、無事と耳にした時は表現ができないほどとても安心をした。

20区での作戦が終了後、我々346プロダクションは作戦を事前に数日前に伝えるようにする協定を違反していることにCCGを非難をし、今後再び起こり得ないよう伝えたのだが、現在喰種集団であるアオギリの樹が突発的に都内の各区に襲撃事件を起こしているため協定を改変する必要性が我々346プロダクションとCCGの課

題として上がっている。

二つ目の討伐対象であった隻眼の梟と出会ったことは、私と高垣さん以外知られていない出来事だ。私が隻眼の梟と出会うきっかけは346プロダクションに訪れた作家の高槻泉の言葉だった。

『話は変わりますが、20区に美味しいコーヒーを出す喫茶店があるんですよ』

高槻さんが20区にある喫茶店を私に勧め、後日私は仕事終わりにその喫茶店に訪れた。喫茶店の名は“あんていく”。住宅街の中にひっそりとあった喫茶店で今でもあの光景が思い出す。その喫茶店の中に入った私を出迎えてくれた初老の男性。その男性が喫茶店あんでいくの店長でもあり、CCGの駆逐対象でもあった隻眼の梟だった。喰種と聞くと恐ろしい化け物で人間を容赦無く襲う生き物だと私は考えていた。しかしあんていくにいた店長は私を襲うことなく普通の人間のように振る舞い、私を襲うことなく気さくなに話しかけてきたのだ。

『楓ちゃんは真面目でいい子でした。彼女がここに働き始めたきっかけは今でも思い出しますよ』

私があんていくに訪れたもう一つの理由は楓さんがかつてあんでいくで働いていたことだ。私はその情報を高槻さんから初めて知り、あんでいくの店長に訪ねたら本当だと知った。今の社会では情報が発達しており噂がすぐに広まるにも関わらず、社会の流れに取り残されているように全く知られていない情報であった。

私が店長が喰種だと知ったのは喫茶店あんでいくに出た時だった。ちょうど私が20区に出た後20区に続いていた道が喰種捜査官らにより封鎖され、ちょうどちひろさんからの掛けてきた電話で知っ

た。あの時の衝撃は今でも記憶に蘇る。普通に話していた店長が喰種だと知った時、自分の中にあつた喰種の見方が変化した。私は以前に担当していたアイドルが喰種に捕食され殺された経歴を持つている為喰種に対して憎しみを抱いていた。

しかし喰種はすべてが恐ろしい怪物の者だけではなく、私や高垣さんを襲わずに優しく接する者もいることに気がついたのだ

私は喰種に対して盲目だった

最後は私を知る喰種捜査官が20区での作戦で亡くなられてたことだ。その人の名前は亜門鋼太郎^{あもんこうたろう}。三年前に行われた20区の作戦で殉職とされ、他にも一度だけお会いした滝沢政道^{たきざわせいどう}さんも亜門さんと同じく殉職をしてしまいました。当時の作戦での殉職者数は多大な数であり、今での作戦の中では一番最悪と言われるほどだ。しかし私は亜門さんの殉職理由が3年経った今でもわからない。他の殉職された捜査官の殉職理由ははっきりしているのにも関わらず、亜門さんや滝沢さんなどの一部の喰種捜査官は殉職理由が公表されていない。私は亜門さんの殉職理由を知る為に時間があつては亜門さんを知る捜査官の元に訪れ聞き回った。しかし知る人たちから出た答えは『わからない』だった。亜門さんを知る人たちは同じく作戦に参加したものの、最後に亜門さんと居合わせた人がいなかった。他に私は何人かの喰種捜査官に聞いたのだが、どれも曖昧な答えしか聞けず行方がわからない。

(彼は…亡くなられているのか?)

私は亜門さんの殉職理由を知りたい

あの時の20区に一体何が起きていたか?

本当にあの作戦は今までの作戦と同じものだったのか?

私は渦巻く謎を抱えながら夜の闇に輝く街を眺めた

球世Side

静まり返る輸送車の中。僕たちクインクスを乗せた輸送車は目的のオークション会場に向かっていた。今どこに走っているのかわからないが、僕はクインクスのみんなにすることをしていた。

「勝てないと判断したら迷わず逃げる、いいね？」

「オス」

「今すぐにも」

「（またお得意の安全講習か……）承知しました」

僕は瓜江くんと不知くん、才子ちゃんに作戦前ということに改めて再確認をしていた。僕たちクインクスが大きな作戦に出ることは初めてで、もし大きな成果を出したらクインクスの有効性を示すことができる。オロチの一戦以来の久しぶりの戦いだけど、しっかり戦闘の練習を取っているためおそらくは前よりも成長はしている。

（……六月くんは大丈夫かな？）

今回クインクスの一人六月くんがオークション会場を突き止めるべく仕造くんと囮でオークションの商品として商品調達役であるナツツクラツカーが乗る車に運ばれ、僕たち喰種捜査官はその車の跡を追う形でオークション会場を特定する。しかし囮役を演じることが非常に危険であり、早く六月くんに合流しなければ生存率が段々と減ってしまう。それに先ほどアキラさんからの情報によれば仕造くんからの通信は確認されたが、六月くんからの応答はなかった。その情報を耳にした僕は不安に駆られていた。ただ六月くんが持っている通信機が壊れているだけと胸の中に何度も問いかけても僕の胸の中は晴れることがない。僕はただ六月くんが無事であるように祈るしかなかった。僕がそう考えていると耳につけていた通信機に連絡が入った。

『各員に告ぐ、今回の任務を再確認だ』

通信機から聞こえる威厳のある声。その声の人の名は和修政准特等捜査官。彼はCCG本局局長（わしゆうまつき）和修吉時のご長男で今回の作戦では指揮官として参加する。今回の任務は主に二つに分けられる。一つは館内にいる喰種を殲滅すること。特に今回は多くの喰種が会場内において、SSレートの喰種が存在する。他にもアオギリの樹の喰種が

潜んでいる可能性があるため注意をしなければならない。二つ目は民間人の救出だ。オークションということで拉致された民間人が集められているため監禁されている場所を特定しなければならぬ。それにおそらくそこに六月くんと什造くんがいると思われる。

『作戦中は状況に適宜判断せよ……以上』

政准特等の通信が切れると僕たちが乗る輸送車がタイミングよくピタリと動きが止まった。長く移動したはずなのに不安と緊張のせいか早く着いたみたいだった。

「……もう会場に着いたみたいだね。みんな気を引き締めて降りるよ」

「オウ、さっさと行こうぜ」

「行きましょう（他の班に手柄を盗られる前に）」

「あつという間に着いてしまったのかあ……ママン」

僕たちは輸送車の後ろに被せてあったシートを上を外し、ゆっくりと地面に足をつけた。あとは什造くんの合図を確認ができれば会場に突入する。

「いいね？みんな油断しないように行くよ！」

僕がそう言うと僕たちが乗っていた輸送車から離れ、作戦に参加する捜査官たちが多く待機する会場の入り口に移動をした。

——— オークション掃討戦 あと数分前

ironical ▪ stranger

六月Side

壁にもたれながら一歩一歩つとゆつくりと進む、俺

歩くたびにまっすぐのはずの廊下がぐらぐらと揺れている

俺は腹部に負傷をしてしまった

先ほど一人の喰種から間一髪に逃れたのだけど、その喰種から放たれた赫子かくねで腹部に深い傷を与えられた

着ていたドレスの腹部から垂れる血が床に一粒ずつ落ちる

垂れる血を見ると自分は死ぬんじゃないかと、ふと頭に浮かんでしま

前にも似た出来事はあったけど、今はあの時とは別の状況

助けが数百メートル先から来ているのに、もしかしたら喰種に殺されかねない状況だ

壁にもたれ耳をすませると館内がどこか騒がしい

その声は俺がホールの真ん中で立たされた時の声とは違う

あの時の声は嘲笑いに似た恐ろしい声だったのに、今は悲鳴と怒号の声飛び交う

俺は先ほど深傷を負わせた喰種から避けるため、別のルートに行くことにした

傷を負わせた喰種はオークションで俺を競り落とそうとした喰種で、会場内の混乱で俺を強引に奪おうと攻撃を仕掛けにきた

そのまま真っ直ぐの廊下に行くよりもドアのある別の廊下に行けばいい

「……」

俺はそのドアのある廊下に入ると、自然と立ち止まってしまった

その廊下には俺と同じ喰種捜査官が何人か倒れていた

一人は腹部に大きな穴があり、もう一人は下半身がどこか消えてしまった者

どうやら何者かに殺されてしまったらしい

先ほど聞こえた悲鳴はきつと彼らだったかもしれない

「……」

俺

いや

私は……

志希 S i d e

今日は仕事もレッスンもなく一日中家に引きこもっていた、あたし

外は一日中晴れで心地よかったのに外に出なかったのは少し後悔

あたしが外に出なかったのは有名人になってしまったから家に引きこもっていたから理由の一つだけど

熱中すぎて日が沈んでしまったことに気がついたという理由が一番大きい

あたしがアイドルになる前は海の向こうで化学を研究する変人だった

アイドルのお仕事がない日はだいたいはあたしの家にある特設に作った研究室でこもっている

時には文香ちゃんや美嘉ちゃんなどの友達と遊ぶ事はあるけど、それ以外は自分の研究室にいる

(今日は集中が続かないなあ…)

あたしは自分が気が散るのが早いことに大きなため息をし、長く座っていた椅子から離れることにした

最後に椅子から離れたのは何時間前だろうか？

もしかしたら椅子と同化することができるかもしれないほど長く座っていた

(一度、外に出よう)

部屋で寝転がる選択肢を捨て素足でベランダに出た、あたし

あたしは夜に静まり返った街の空気が好きだ

集中して暑くなった頭を冷やしてくれる空気がなんとも心地がいい

あたしは皆と同じ人だから無限に集中することができない

だから時には休みも必要

心にリフレッシュを与えなきや

だけど今日もどうもリフレッシュができない

素直に空気を吸えない

あたしは『ああ、とてもきな臭い』と心の中で愚痴を言うようにつぶやいた

それは研究室にこもっていた時に何度も頭に浮かんだことで、まるでハエを何匹を潰してもやってくるみたいなきな臭いこと

それは前からあたしに連絡してくる奴らのことだ

奴らはそうとう諦めが悪い

数ヶ月たった今でもあたしの力が必要らしい

まったく成長しないね

数ヶ月なら一ミリぐらい成長が生まれるはずなのに、なんでまだあたしの手を求めるのかな？

どれほど奴らは鬱陶しいかというところ、ポケットにあったスマホを見ると数百件ほどのメールが届いているぐらいだ

あたしはそのメールを一度も目を通していない

全部奴らからのメールだから

『まったくどこの迷惑メールを送るクソ会社かよ』とふふつと嘲笑った

(今頃の時間帯は… ササハイさんに電話しても繋がらないか)

電話帳を開き、K・Kさんの下に書かれているササハイさん

彼はあたしを虜にさせる男性だ

確か今頃ササハイさんは作戦に参加しているよね

ササハイさんから作戦に参加する話を耳にしなかったけど、多分今行なっている作戦には参加をしている

今回の作戦は東京のどこかに喰種がやっているオークション会場が作戦場所と言われているけど正確な情報がないためわからない

喰種が人間のオークションをやるだなんて会場はどんな空気をするんだろう？

きっとドス黒い空気が吸えそうであたしの変な興味が生まれちゃう

作戦のことを考えると今日の東京の街は騒がしくなりそう

13区のス克蘭ブル交差点のバカ騒ぎよりも悲惨な出来事になりそうだけど

(それにしてもどこに手に入んだらろう？あそこって秘密主義のと

ころだよね?)

ササハイさんが作戦に参加するという情報は、情報屋さんから頂いた情報だけど決して合法的に取った情報とは思えない

CCGは外部に情報を出すことはなく、仮に情報を出したら重い刑罰を与えられる

あたしは情報屋さん以外から結構そういう情報を持っているから罪人だ

『ねえ、キミ?』

そこのキミだよ

『なんで志希がそんな情報をもらっているか?』って思ったでしょう

?

キミはわかるよね？

CCGってどんなところか？

先を知っているキミならもう答えがわかっているよね？

?

ササハイさんがいるところは健全な政府機関と考えないはずだよ

ササハイさんがいた世界は結果はわかっているけど

い
今あたしがいる世界はその先を知るわけがないから、答えが言えな

だから”時”が経つのを楽しみに待ってね』

(もう少し、外にいよう)

た
あたしは現実逃避をするためにしばらく外の空気を吸うことにし

おいしくは吸えないけど、少しでも感じれたら満足

また化学薬品が充満する私の部屋に戻るのだから、感じられた時を
待とう

時間はまだあるのだからね

m i s r u n

球世Side

僕たちクインクスはクインケを手に持ち、進むたびに進行を阻ませる喰種を駆逐しながら六月くんの救出に向かっていた。僕たちを襲う喰種は作戦実行前に予測していた通りアオギリの樹に所属するロングマントを着る喰種ばかりで、ここまで影響力があると実感させられる。だが今のところオークシヨンに参加したと思われる喰種の姿が見えない。

「後ろ頼むよ!! 不知くん、瓜江くん!!」

「わかったよ! サツサン」

「了解」

二人はそう言うのと、後ろから飛び込んできた3体の喰種を持っていったブレード型の尾赫クインケ”ツナギ plain”で切り裂いた。今の所、僕たちは赫子かくねを使用せず、クインケだけで戦っている。赫子かくねを使えるならさっさと使えと他の捜査官からの冷たい視線を目に入ってしまったが、僕はクインクスのみんなに喰種捜査官だから極力クインケを使用するように伝えている。瓜江くと不知くんは問題なく喰種に駆逐しているが、クインクスの一人”才子ちゃん”の姿はなかった。

「うおおッ! 皆早すぎるぞ!」

息を切らしながら僕たちを追いかける才子ちゃんはハンマー型の甲赫クインケ”ぼくさつ2号”を持っていながらも日頃の怠りが現れたせいか、喰種を駆逐することよりも僕たちに着いていくだけでもやっとなかった。僕が率いるクインクスのみんなは初めての大きな作戦で開始前まで不安があつたが、今のところ才子ちゃん以外は問題なく戦えている。

(先に六月くんの元に行かないと...!)

建物の奥に進むたび、僕は六月くんの安否が不安で仕方がない。睦月くんは什造くんと同じ困なのだが、鈴屋くんより経験が浅いことと通信が一度も入らなかったせいで僕の胸の中は不安でいっぱいだった

た。おそらく六月くんがいると思われる。

僕たちが建物の奥に進んでいると・・・

「っ!!」

僕はちょうど曲がり角で人の影がうつすらと写っていたことにはつと気がついた。今の所奥に進んだ喰種捜査官は什造くんか六月くんしかいない。だがその影は六月くんよりも身長が高くて、赤くて長い赫子が出ていた。もう少し前に出てみると、戦いでしわが現れたと思われるシャツとストラックスを履いた喰種が怪我で床に膝をついた六月くんを赫子でトドメを加えようとした。

(危ないっ!!)

僕はすぐ様、負傷した六月くんを間一髪で攻撃を避け、彼を抱きかかえた。

「っ!!?」

「オラア!!」

六月くんにトドメをさそうとした喰種は突然僕たちが来たことにハツと目を開いた瞬間、不知くんの赫子から放たれた手のひらぐらいのミサイルの形をした弾幕を放った。

「ぬウ・・・！な、何事・・・!？」

喰種は不知くんが放った弾幕を避けた瞬間、喰種の後ろから瓜江くんが現れ、赤い赫子を出した喰種の腹部に膝を加え、ツナギで攻撃をさらに加えようとした瞬間、瓜江くんの攻撃を受けた喰種はすぐさま赫子でツナギの攻撃を防ぎ、即座に瓜江くんから離れた。

「佐々木二等、奴は鱗赫です」

「ああ、わかった」

今僕たちの目の前にいる喰種の服装を見るとロングマントを着ていた喰種とは違い、パーティーに参加するためのスーツに着ていたためおそらくはオークションに参加していた喰種だと思われる。それに顔を隠す仮面すらなかった。

「こ、この香り・・・!!きき・・・ 貴様がア・・・!!!!」

すると僕たちの目の前にいる喰種は僕を見ると、顔を歪ませ、ぎりぎりつと歯ぎしりを大きく立てた。

「佐々木…… 佐々木……… 佐々木琲世エエ!!!」

その喰種は僕の名を館内に大きく響くほど叫び、僕たちに突っ込んできた。

ヒナミSide

オークションが行われた会場の屋上にいた、私。

「……ええ、わかりました。再編成して、ナキ・ミサの隊に護衛してください」

「はい、”ヨツメ”様」

私は隣にいたアオギリ兵に伝えると、後ろに待機していた

オークション会場周辺には白鳩ハトが会場を包囲をし、各箇所ハトに配置しているアオギリの隊がなんとか白鳩ハトの進行を阻ませているが、会場の外から仲間の応援がくるのは可能性はゼロに近い。

(今の所、劣勢はないけれど…)

私は前線に戦うアオギリ兵からの通信だけではなく、私の耳から状況を把握し指揮している。私は他の喰種とは違い、状況は読み取れる。遠くにいる白鳩ハトの数、今どこが戦闘ハトが起きているのか、あとどこが戦力が削られているのかわかるのだ。

(……)

私はふと、指揮をすることよりも別のことを考えてしまった。今更ながら私はアオギリの樹に所属する喰種。社会から見れば白鳩^{ハト}が真つ先に潰すべき喰種の集団でもあり、一般人からすれば恐ろしい人喰い集団だ。確かに私が所属するアオギリの樹の喰種たちは野蛮な方もいるし、冷酷な方もいる。

だけど、私はそれらの喰種に属さない臆病者だ。

私は人間を食べないと生きていけないんだけど、人間に対して憎むことなんてできない。私には人間の友達が居たんだから。

(∴ 私はみりあちゃんたちと比べたら、最低なことをしている)

それはかつて図書館で出会った子達。今ではトップアイドルとして輝く赤城みりあちゃんと城ヶ崎莉嘉ちゃんだ。みりあちゃんたちが輝くたびに私はつい比べてしまう。

私はみりあちゃんたちと比べたら、ぜんぜんダメな人だ

みりあちゃんたちが輝くたびに、私は輝くことを否定されたように聞こえてしまう

私はみりあちゃんたちと違い、人間を喰う喰種だから

(… 今更考えても、仕方ない)

私は気を取り直し、再び耳を澄ました。少しでも手を抜いたらアヤトくんたちに迷惑がかかってしまう。私は今、目の前にあるやるべきを集中しないとイケない。

例え最低な状況でも私は生きていくしかないんだから

死闘の場と化したオークション会場から離れた、私。人目から避けるため会場の近くにあった森に入り、腐った土の匂いがする道のないところを、杖の外観を持った刀で視界を塞ぐ杖を切り裂いて歩いていった。きつとここはその後オークション会場で戦ってきた喰種の逃げ場となるか、もしくは喰種捜査官が先に待ち伏せ、血しぶきが舞う場所になるだろう。

(… 今頃、喰種どもは逃げるのに必死だろう)

自分はオークション会場にいる喰種に人間だと察知されないよう”裏から手に入った香水”を体に吹きかけ、顔に味気ない白い仮面を顔につけオークションに参加をした。しかし今回のオークションに出された人間どもは、私の主に口にするには相応しいものはなかった。かつては売れた過去の栄光にすがり続ける俳優、夜の街で彷徨っていたと思われる品のない女、そして腹の脂肪がぎっしりとし、冷や汗で前髪が乱れた富豪の中年男性など一円よりも価値のない人間ばかりだった。私は面白くないものしか出ないオークションにぞんざいな気分で席から立ち上がり、会場から出ようとしたり、会場の外で何やら不穏な空気を察知した。私は事前に会場の位置を認知し、退路を確保していたため、すぐに脱出することができた。私が物影に隠

れ、会場の外で不穏な空気を出した原因を探ると、CCGの紋章が書かれた装甲車両が何十台も止まっていたのだ。私は不穏な空気を出した原因を知った瞬間、喰種捜査官から察知されないよう会場からすぐに離れた。オークション会場は私がいる森からは結構離れているのだが、会場から発砲音や悲鳴など戦闘が行われていることがわかる音が森の奥にいる私の耳に聞こえる。

(さて……次の食材はどうすれば……)

今回私の主が頂くのに相応しい人はおらず、入手することができなかった。別にまだ家には肉と血があるのだが、いずれなくなるため私はオークションに足を運んだ。オークションの開催地は情報屋から金を払って知ったのだが、結局その金は無駄なものになってしまった。

(……早く、次の手段を探さねば……)

私は心の奥底に焦りを抱いていた。それはもし私の主が口にすべき肉と血がなくなった状況が起きてしまったらつと。そうやってしまつては私の主は体が弱つて、死が早まってしまう。

(……”お嬢さま”、今回あなたにふさわしき人間が見つかりませんでした)

私は心の中で今回のオークションで得られたものではなく、何もないままお嬢さまの元に帰っていくことに誰もいない森の中で自責の念を抱いた。私の主は一つ上の女性で、何も無い私を引き取ってくださった。お嬢さまはオークション会場にいた喰種とは違い人間が口にできるものを頂くことができるが、時には人間の肉を食さなければならぬ。

そうしなければ、お嬢さまは長く生きることができない

お嬢さまがいなければ、私の生きる意味を失ってしまう

(……それよりも、早くこの場から立ち去ろう)

私は暗闇に染まる森の中へと消えていった

オークション会場が白鳩ハトに完全制圧ハトされる前に

Caring Feeling

志希Side

「今頃何してるんだろ？」

私は床に転がり、天井に会話するようにつぶやいてみた。

しばらくベランダで外の空気を吸っていたのだけど、秋風が肌寒く感じたため部屋に戻り、床に転がった。

少し開けた窓からびゅーびゅーと聞こえる秋風の音がまるで状況を教えているように聞こえる

その音は怖く聞こえるけど、あたしの胸の中に好奇心が生まれる。他人から見れば気が気が狂ったと思われるだろうね。

だけどそれがあたしと言う人間だ

ただ安定した生活をするよりも、スリルを感じられる刺激のある生活を望むのが、あたし

「そういえば、ササハイさんは生きてるのかな？」

オークション会場にはものすごい喰種がいると耳にしているから、おそらく犠牲者は多いかもしれない。

でもササハイさんは強い人だから、太刀打ちはできるかも。

「まあ、明日には答えが出るから、待ってみようか。あたしの望みはもちろん生きて欲しいけどね」

あたしは天井と会話するように呟き続けた。

そういえば、あの子も同じくオークション会場にいたよね？

あの子は帰っているのかな？

それとも死んでいるのかな？

あたしがそう考えても、日が明ければ答えがわかる

あたしはササハイさんとあの子が生きて帰ってくることを望むよ

緊張感が背中に張り付いたかのようにまったく抜けない。僕たち。僕たちは会場の外から出て、急いで管理棟に向かっていた。

「たく… トオルを襲った喰種はなんなんだよ… しかもその仲間が赫子を分離って、あんなのありかよ？」

「まさかあんな喰種がいるとは驚いたよ」

先ほど六月くんを襲った喰種と戦いあともう少しして駆逐できるその時、ある一匹の喰種が現れた。六月くんを襲った喰種を赫子で引つ張り出し、退路に赫子の壁を築いたのだ。通常のクインケでは破壊することができず、別のルートに行くことになった。

「なあ、サツサン？本当に瓜江に任せて良かったのか？」

「和修准特等が瓜江くんを指名したから、きつと大丈夫だよ」

「ウリボーイは少なくとも私らより優秀だからいいじゃね？」

「そ、そうだけだよ… 才子、痛いことを言うなよ」

今、僕と一緒にいるのは不知くんと才子ちゃんだけで、六月くんと瓜江くんはいない。六月くんはこれ以上の戦闘はできないと判断し、和修准特等に退却の許可を頂いた。伝えた直後は許可を頂けるか心配だったが、和修准特等は拒否せず六月くんの退却に許可をし、ついでに瓜江くんを同行させるように僕に伝えた。僕は和修准特等が退却を許可するのは驚いた。あの人は人を使い捨てることがあるため、おそらく退却を認めることはないだろうと考えていたのだが、まさか退却を認めるのは驚いた。

「とにかく僕たちは管理棟にむかうよ。あそこを攻略すれば他の喰種の居場所が特定できるからね」

「なんだよ…上層部はこの建物の全体を把握できてないのか？」

不知くんは僕の言葉に少し頭を傾げた。

「一応情報部も全体を把握しているよ。だけど今僕たちが戦ってきた喰種のほとんどはアオギリに所属する喰種だよね?」

「確かにはアオギリの喰種しか見てねえな」

「そう、オークションに参加した喰種はどこかに隠れているよ。おそらくは隠された場所にね」

廊下で倒れる喰種や僕たちを襲う喰種のほとんどはアオギリの樹に所属する喰種ばかりで、まるでオークションが行われた様子が無い。

「だから管理棟を占拠して、オークションに参加していた喰種を今すぐ見つけないと逃げられるよ」

「そうだな。さっさとぶっ殺さねえとな… あ、そういや、阿藤さんたちはどうしたんだ?」

「阿藤さん? 今、僕たちと一緒に管理棟に向かっているはずだけど…」

通信から阿藤准特等率いる阿藤班は僕たちクインクスと一緒に管理棟に向かうのだが、合流するのがやけに遅い気がする。阿藤班は数々の作戦に参加した経験豊富な班なのだが、未だに僕たちクインクスの元に合流しない。

「とにかく、合流する前に管理棟に向かうよ。管理棟を抑えているナツツクラツカーを駆逐しないと」
「オウ」

会場の外から聞こえるのは夜の静けさではなく、羽赫クインケの発砲音や鋼同士が打ち合う音、あとは喰種か捜査官の悲鳴。僕と不知くんはなんども喰種と戦ってきたから戦闘の音を気にすることは無いのだが、才子ちゃんは今全く慣れていないせいとその音が出るたびにビクツと体を震わせる。

「ママン… 本場に戦場にいるんだよね?」

「うん、そうだね。ちゃんと僕に離れないようにね」

今の所、他のところでは犠牲者が出ているため、気が抜けない。考えたくはないが、僕が指導しているクインクスの誰かが死ぬ可能性がある。だからちゃんと戦わないといけない。生き残るために。

「っ！」

管理棟へ続く道に歩いてみると、僕は何かに気がついた。誰かが草木の中に倒れていたのだ。近づいてみると倒れていたのは喰種ではなく、僕たちと同じ喰種捜査官だった。しかもその捜査官に見覚えがあった。

「あなたは大芝班の…？」

「林村だ… 佐々木一等」

草むらの中で倒れていたのは大芝班所属の林村一等捜査官だった。

「お怪我のほうは…？」

「管理棟から落下したが、木がクッションになって、幸いかすり傷程度だ…」

林村一等を見る限り目立った怪我はなく、自分で立ち上がれそうだった。

「佐々木一等は今、どこに向かうのだ？」

「僕たちは今から管理棟に向かいます」

「管理棟… まだ上司と部下が取り残されている…」

「…」

林村一等の言葉を耳にした僕は思わず口をつぐんでしまった。先ほど和修准特等から管理棟にいた大芝班は全滅と聞いたためだ。林村一等の顔を見る限り、自分の班が全滅したと知らされていない。

「… すぐに医療班の要請をー」

僕は「大芝班が全滅したことを伝えず、医療班の要請しようした。」

その時だった

「っ！」

後ろから気味の悪い気配を感じた。その気配は不知くんに狙っていた。

「あぶないっ!!」

僕はすぐ様不知くんの前に出て、持っていたソード型クインケ”ユキムラ”で立ち向かった。

しかし――

「っ??」

「オッほあああ!!!マジかッ!!止めやがった!!」

気配を出していた喰種は片足だけでユキムラに力をぶつけ、そのユキムラの刃を僕の肩に押し込んだ。僕は必死に押し返そうとするが、その喰種に力負けをってしまった。

「ぐはあ!!」

僕はその喰種に力を押され、地面に叩きつけられるように倒れた。僕の体から伝わる痛みはユキムラに受けた痛みだけではなく、噛まれたような痛みを感じた。

「…んメエ?!?!な、なんだこの味!?!?こんな食ったことねえよ?!?!」

大きく咀嚼音を立て、気が狂っているかのように声を上げる。

「さっさささささささ…そうか…オメエが…」

前を向くと白髪で黒いマントを着ていて、大きく目を開いていた喰種はが立っていた。まるで死神と思われるかのように恐ろしい格好をしていた。

「くっ…」

普通ならば医療班の助けが必要なほどの攻撃を受けた僕だけど、それは必要はなかった。ヤツから受けた傷は自然と修正されていく。しかし回復までの時間はヤツから与えてくれない。

「なあ?!?!もう一度、口にさせてくれえよお?!?!」

ヤツは再び僕に突っ込むかのように接近した。

「…っ!!」

赫子を腰から出させ、接近してきたヤツの体に貫かせた。僕が使っているクインケでは歯が立たないため、僕の赫子で攻撃させた。

(…やったか?)

僕の赫子に貫かれらヤツの口から血が出た。おそらくこれは致命傷だ。僕はそう思っていたのだが――

「ひひひ……こんぐらいじゃ全然響かねえ……全然響かねえよ」

するとヤツは痛がる様子はなく、発狂しているかのように笑いをし出した。体に赫子が貫かれているにも関わらず、ヤツは余裕そうに話していた。普通ならば致命傷のはずの攻撃なのに、まったく怯んでいない様子はない。

”慣れている”からなananなんああああ!!???”

するとヤツの左腕から大きなブレードをひた赫子が現れた。はるかに僕の赫子よりも大きく、しかも僕の赫子をいとも簡単に切り裂いた。

「不知くん!!林村一等と一緒に行け！」

「でもサツサン……！」

「行くんだ!!行け!!」

危機感を察した僕は叫ぶように不知くんたちに指示をした。このままでは不知くんたちの命が危なくなる。不知くんたちは僕の言う通り、林村一等と一緒に僕の元から立ち去った。

「いいね!!……上司の鏡だねえ！」

ヤツは気味の悪い笑いで僕に話しかける。今まで僕と戦ってきた喰種の中では一番気が狂っていて、強敵だ。

「秘密に話でもしようぜ……二人きりで」

ヤツは首を大きく傾けると、勢いをよく僕に急接近をした。

瓜江Side

俺はオークションが行われたと思われるホールに入っていた。

「瓜江くん、本当にこの道であっているの？」

「おそろくな（まったく違うが）」

俺は佐々木一等から六月を退却するように言われたが、俺は気に食わなかった。勲章を得るのにうってつけの大規模作戦の時に前線から撤退するなど腹立たしい。他の班に獲物が奪われる。それで俺は六月に”わざと”道を忘れた仕草をし、別のルートに向かっていた。

「六月はここでオークションにかけられたのか？」

「うん、ここにたくさん喰種がいたんだけど…。どこに逃げたんだろう…？」

誰もいないホールを見てみると、舞台上に何らや小さな小屋があった。

「六月、お前はあれに見覚えがあるか？」

「うん、俺はそこから舞台に出たんだ」

「そうか、入ってみるか（もしかしたら…）」

俺たちは舞台に立ち上がり、小屋の中に入ってみるとあることに気がついた。

「見ろ、床に昇降装置がある。これで商品を舞台上に運び出すんだろう。奥のフロアに進んでみよう」

「先行班はいるのかな？」

「ああ…（いないと願う）」

俺はそう言うのと床にあったハッチを取り出し、俺たちは下に入った。中は視界が悪く、光が見当たらない。

（おそろく……は…）

俺たちはその薄暗い通路を進む。大きな音を立てないようゆっくり、ゆっくりと進む。喰種は音に関しては俺たち人間よりも敏感だ。少しでもヘマをしたら俺の功績は消えてしまう。

「っ！」

すると暗い通路の先に微小な光が見えた。近づいてみると小さなハッチが光を遮断するように閉まっていた。ゆっくりハッチを開くと、ある光景が俺の目に映る。

「…ビンゴ」

俺はその光景をみるとニヤリと口を少し歪ませた。俺の狙い通り

だ。俺たちは商品を一時的に保管する倉庫にたどり着いたのだ。そこには俺の狙い通り、オークションに参加していた正装を喰種が無数にいた。早く逃げたしたいばかりかイライラを募らせた喰種や、恐怖に怯える腰抜けの喰種がいた。

こいつらは俺の獲物だ

誰にも邪魔されてたまるたか

瀬戸際

文香Side

真つ暗な部屋の隅に置かれたベッドに横になった、私。数十分ほど目を閉じて、私に覆いかぶせてくれる眠気が現れない。明日も仕事があるのに、私の体は寝させてくれない。重要な仕事なのに、なぜ言うことを聞いてくれないのだろうか？

(…)

目をゆつくりと開けると、ベッドに横になって2時間が経っていたことに気がついた。私は寝ていたと自覚ができない睡眠をしていた。背中が少し痛い。

(…)

気持ちがパツとしない。そう思った私はベッドから立ち上がり、机に置いてあった携帯を取り出した。普段はいじることのない携帯を触るのは限られている。一つはお仕事で連絡をする時、二つ目は私のお友達に連絡をする時、

最後の三つは佐々木さんとお話をする時だ。

私は三つの理由の中で最後の理由をするために携帯を取り出したのだ。暗い部屋の中で携帯を取り出したのだから、携帯から出る光が眩しく感じる。世間では携帯の光で生活習慣が悪くと警鐘を鳴らす理由がよくわかるほど眩しい光だ。だけど私は佐々木さんに連絡したいあまり、世間が鳴らす警鐘を考えるとせずメールを開いた。

(…)

私は佐々木さんのメールアドレスを指定しあとは文章を打てばいいのに、指がピクリと動かなくなつた。私はいつも佐々木さんにどう言つた言葉を送ろうか迷つてしまう。考えている時の私は、自分の決断力に苛立ちを感じてしまう。私は躊躇してしまい、あの人に振られてしまった。

(…これにしましょう)

私はメールの文を考えた末、しばらく携帯の画面に小さく叩いていた指でメールの文を打つ。

『こんばんわ、佐々木さん。少しお話はできますか?』

打つた文を改めて見ると、単純な文をすぐに打つことができなかったことに無力さを感じる。あんなに考えたのにこんな文が出来上がるだなんて、私はダメな人間だ。あの女に勝つことができない。あの女ならどんな返信をするのだろう。

(…)

メールを送信をし、佐々木さんの返信を待つ、私。私は携帯を枕の隣に置き、横になつた。私は目を閉じることになく、携帯の画面を見る。

(遅い…いつものことなのに、今日は遅い…)

佐々木さんからの返信がすぐに返つてこない。佐々木さんは何も悪くはない、と私は自分を落ち着かせるように心の中に呟く。あの人は常に時間があると限らない。もしかしたら明日の仕事の為に寝ているかもしれない。

そう考えたいのだけドロー

(まさか…他の人と話してる…?)

時間が経つと、私の頭の中に嫌なことが浮かんできた。それは私が忌々しく思う女だ。もしかしたら、佐々木さんとしゃべっているのではないかと考え始めた。二人が楽しく会話をしている光景を、私は取り残されたかのように見る、私。そう考えるとあの女を憎しみを抱く。私が手にできなかつたものを、あの女は軽々と手に入る。

そんなの許せない。

私をあの女の影にされるなんて

『あの女に… 再び取られてたまるか… ！』

私は心の底から怒りを感じながら、ベッドのシーツを力いっぱい握った

不知 Side

俺は才子と林村サンと一緒に管理棟に向かっていた。本当ならばサツサンと一緒に向かうはずなのだが…

(さっきの喰種はなんなんだよ…？)

管理棟に向かっている途中、俺が今まで戦ってきた中でとんでもないヤツが現れた。目が大きく開き黒い服装していて、口周りには赤い血がべったりとついていた。そいつを見た時俺はまるで死神が直々に殺しにきたかと思った。

「シラギン… ママンは大丈夫かね…」

「サツサンなら大丈夫だ。俺たちよりも強いからな」

不安で仕方がない才子に俺は『心配ない』と自信持った風に言うが、実際俺も心配で仕方がない。先ほど俺たちに逃げろと言ったサツサンの顔が忘れられない。あの顔は本当に危ないと言っていた顔だった。

（サツサンは今、あの死神みてえなバケモンと一人で戦っているんだろ？本当に勝てるのか？）

今までサツサンの横にいた俺にはわかる。あれほど不利なサツサンを見たのは初めてだった。前のオロチの時と比べて、全く違う。マジで殺されるじゃないかと考えてしまうぐらい。

（ここが管理棟か…）

不安でいっぱいだった俺は気がつく、管理棟の前にたどり着いた。

（サツサンから頼まれたなら、やるしかねエ…！）

いつまでも不安のままじゃ、ダメだ。サツサンのことを考えても仕方がない。俺にはやるべき仕事があり、稼がないといけない。俺は気持ち切り替え、管理棟の中に入った。

（あそこか…？）

管理棟を進んでいくと、モニターの光が廊下に漏れていた部屋を見つけた。林村サンの顔を見ると、林村サンは何も言わずにモニターの光が漏れている部屋を人差し指をでさし、そして指を口に当てた。それを見た俺と才子は喋らず、ゆっくりと部屋を覗く。

（あいつがこの前に見かけたナツツクラッカーか？なんつーカッコーしてるんだ？）

モニター室を見ると、各建物を写すモニターに張り付くように見る女がいた。その女は肌の露出がヤバく、まるでストリップパーみたいで胸とケツが丸見えの格好だ。前に見たときはオタサーみたいな服装をしていたのに、なんつーカッコーなんだよ…

「……二億…二億…どっ」

ナツツクラッカーはモニターに見ていて、後ろに振り向くことがな

い。

(今のうちだっ!!!)

俺は背中から赫子を出した。異様な形をした俺の赫子からミサイルのように赫子が放たれる。

「!!」

しかしモニターに釘付けだったナツツクラッカーはすぐに俺が放った攻撃に気づき、瞬時に攻撃を交わした。

「チツ…： 気付きやがったか…：!!才子ツ！バックアップ頼むー」

俺が放った弾幕は遠すぎたことかバラついた。ナツツクラッカーに近づけば多くの弾幕を受けさせる。俺は大きくジャンプをする
と…。

「飛ぶな！三等！」

すると林村サンが俺に大きく声を上げた。俺が林村サンの声に気がついた時、もう遅かった。

「っー」

すると突然、天井から赤く鋭い赫子が俺の体に貫くように現れた。ナツツクラッカーが赫子を出してはいないにも関わらず、天井から赫子が現れた。

『イキがよきソな、若^{ボール}気を感じる』

罠に引つかかった俺を見たナツツクラッカーは、目をハツと開き、まるで獲物を捉えた肉食動物みたいな目をしていた。ああ、やばい。こいつはただの喰種じゃねえ。下手したら、死ぬ。

球世Side

僕は突然現れた喰種に完全に負けていた。

「敵さんとおしゃべりするの、まずは黙らせないと」

ヤツは片手で僕の首をぐつと締め付ける。

「くっ…は…」

息ができない。どんなに蹴りを加えようと、どんなに赫子で攻撃をしようとも、結局ヤツに攻撃を弾かれ、反撃を加える。

「ほお？抵抗なし？だったら、起こさせてやるよ!!!、」

ヤツは僕をおもちやの人形のように壁に投げつけた。今まで正々堂々と戦ってきたはずの僕は、何も攻撃をすることもなく、ただヤツの攻撃を受けているだけのサンドバックのようになっていた

どんなに赫子で攻撃しても、どんなに抵抗しても、結局ヤツを倒すことができない

こんなピンチの時、絶対使いたくないことがある

僕はさらに上には行きたくなかった

「お前が先生の最高傑作だったよな？なのに全く無抵抗とかいい度胸してるなあ!!?」

ヤツはそう言うと言壁に叩きつけられた僕に追い討ちをかけるように赫子を突き刺した。

僕は、今日死ぬかもしれない

いや

正確には、死ぬか消えるかだ

「ねえ、ハイセ」

ヤツの攻撃を一方的に受けている僕の後ろに、彼が現れる。

彼は僕に力を使えというように現れる。

彼と渡り合うだなんて、無理だ。

力が大きすぎる。

『ハイセ、ハイセ』

僕の心の中に聞こえる、彼の声

急かしているかのように僕に声をかける

『僕を見て……僕の名前を呼んで』

死神の足音が、聞こえる。

僕は、消える――

混乱する彼

瓜江Side

オークションに参加した喰種どもを見つけた俺は倉庫上で喰種に気づかれないよう音を立てずに見ていた。ホールの舞台にあった小屋の床にあった昇降装置を頼りに奥のフロアに進み、そして人間が閉じ込められているだろう鋼鉄の箱が並べられている倉庫にたどり着いた。そこにはオークションに参加した喰種どもが避難場所として利用しており、俺たち喰種捜査官がいらないことに息を抜いていた。

(さて…どう出るか…)

俺は倉庫に隠れていた大量の喰種をすぐに駆逐することなく考えていた。確かに目の前に喰種がいるのだが今いる戦力は俺と多少負傷してる六月だけだ。仮に出たとしてもおそらくは集団で襲いかかり、絶命する末路が頭の中に浮かんだ。だが応援を呼ぶのはしたくない。せつかく俺が見つけた獲物を他のヤツに取られては大損だ。

「鈴屋さん！」

すると考えていた俺を気をちらつかせるかのように六月はある方向に目を向き、声を上げた。

(…鈴屋!?)

俺たちの横に鈴屋什造がいたのだ。作戦前は黒い長髪のウィッグをしドレスをしていたのだが、今は元の髪である黒のショートカットをしており、ドレス姿のしていた。鈴屋准特等は声を上げた六月に自分の口に人差し指をつけ、シーーと注意した。

「鈴屋さん、どうしてここに…?」

「奴らに尾^おけたら、ここに辿りついたです」

(厄介者が現れたな…)

俺は心の中で嫌気が生まれた。俺たちの前に現れたのは同じく喰種捜査官の鈴屋什造。彼は天才と言う言葉を贈るのにふさわしき人物であり、彼が率いる班は数々の賞をほぼ独り占めしているほどだ。鈴屋が俺の目の前に現れたことは、功績を取られるのは確定だ。

「ここは増援が来るまで待機です。僕は通信機をどこかに落としてしまいましたので、うりえは僕のかわりに通信はできるのです?」

鈴屋は俺に顔を向け、本部に通信するようお願い出た。鈴屋ならすぐに増援を呼んでほしいと考えているはずだ。

しかし俺は鈴屋の思い通りにはさせない。

せつかく俺の功績を潰されてたまるか

「いや、ダメです」

俺は鈴屋に嘘を言った。

「先ほど何度も通信を試みましたが、全く繋がりません。おそらく電波が悪いと思います（嘘だが）」

他の班が到着してしまえば、俺の功績が少なくなる。そうなるぐらいなら増援を呼ぶ真似をさせない。

「鈴屋さん！奴らが：：！！」

すると六月は再び声を上げ、ある方向に指を指した。倉庫の下に立ち止まっていた喰種に動きがあった。どうやら退路が開いたらしく、早く逃げたいあまりか一人一人の喰種を見ると苛立ちと臆病さが表に出ていた。こうしてほつといでは多くの喰種が逃げられる。

「若干道具は少ないですが、とりあえず僕たちでやるしかありません」
鈴屋が倉庫の下に飛び降りると、俺は鈴屋に続いて倉庫下に降りた。俺と鈴屋が地面に降り立つと、倉庫中にいた喰種が俺たちに視線を向けた。

「は、白鳩ハト：：!？」

「たった二人!？」

「う、嘘だろ：：!？」

俺たちを見たオークションに参加した喰種は安心した態度から死

に怯える臆病な態度へと一変させた。

(注意すべき相手はアオギリに所属する喰種数体……ぐらいか)

外では注意すべきアオギリの樹幹部の喰種がたくさんいるにも関わらず、今いる倉庫にはアオギリの雑兵ぞうひょうと腰抜けのオークション参加した喰種どもばかりだ。だが喰種の数を見れば通常の任務では上げることができないほどの喰種がたくさんいる。奴らを駆逐すれば、昇進は確定だ。

「では、いきますよ」

「わかりました」

鈴屋が合図を出した瞬間、俺たちは喰種に突撃をし攻撃を開始した。俺は持っていたソード型クインケ”ツナギ”で立ち尽くしていた一匹の喰種の首を跳ねた。首を跳ねた瞬間、俺は走りながら駆逐する鈴屋の跡を追いかけながら流れるように喰種を斬り続ける。

(さすが鈴屋……天才と言われるだけの實力を持つてる)

鈴屋は数本しかないナイフ型クインケを自分の体のように動かし、それと同時に常人とは思えないほどのすばやさで数十秒の間に5体以上の喰種を駆逐した。その光景を見た俺は鈴屋に負けてられなかった。

これ以上鈴屋に取られてたまるか

俺は誰よりも多くの功績をあげる

今頃黒磐はどこで戦っているか知らんが

貴様は俺に勝てない

俺の功績には!!

そう考えた俺は右腕から赫子を表し、思いつきり地面を強く蹴った。蹴った瞬間、あつという間に50メートルを数秒でかけぬけ、同

時に俺のブレードの形をした赫子で喰種の二つの首と、複数の喰種の体から血しぶきが高く上がった。俺は今ので鈴屋よりも数秒の間に多くの喰種を殺れた。

(ああ……いいっ!!)

鈴屋から「いいですね、アレ」との声が聞こえた気がする。だが俺はお前よりも多くの功績を上げてやる。

(今の俺の気分は最高だ……!)

俺は選ばれている。他の捜査官が会場外で喰種を一体一体相手をしている中、俺は初めから戦う気がない喰種をとにかく切り裂いている。逃げ惑うきらびやかな喰種を駆逐するのは心地が良い。ふと気がつければ10、また気がつければ20体つと淡々と駆逐している。逃げ惑う腰抜けの喰種を駆逐していると、たまにアオギリに所属するローブを着た喰種が俺に攻撃を仕掛けてくる。だが攻撃してくるアオギリの喰種は戦闘に慣れなヤツばかりだ。Sレート以下の貧弱な喰種ばかりで俺には苦も感じられない。ああ、これで俺は勲章を得られる。もう一つ、もう一つと功績を増やしたあまり喰種を打ち続ける。

「瓜江くん！向こうマダムが……！」

「……!!ああ、わかった!!(でかした、六月)」

倉庫の上にいる六月は奥が見えない部屋に指を指した。六月は俺と鈴屋とは違い負傷しているが、先ほどアオギリの喰種を三体駆逐している。あいつはまだ捨てたものじゃない。

(雑魚を無視して向かう)

俺は周りにいる喰種を薙ぎ払いながら六月が指した部屋に向かう。俺には雑魚狩りは十分に楽しめた。あとは大物であるビックマダムを殺るだけだ。

(鈴屋は複数の雑魚に相手している……)

鈴屋は雑魚をひたすら駆逐しており、そのためかどうやらマダムがいる部屋に気づいていないらしい。そう考えた俺はチャンスだと取られ、マダムがいるだろう部屋に進む。今頃ビックマダムはびくびくと震えているだろう。俺は佐々木琲世を超え、有馬貴将が率いるS3班に上り詰める。

そう考えた瞬間だった――

(…っ!?)

すると突然、絶頂を迎えていた俺に終止符を打つかのように巨大な赫子が俺をぶつけるように現れた。その赫子はあまりにも強い衝撃で俺にぶつけ、俺は倉庫の壁に大きく叩きつけられた。そして俺の口から赤い血が吐き出された。

(な…なんだ…!?)

攻撃を受けた直後は情報が収集できなかったのだが、時間が経つにつれて俺はあることを思い出した。

「三白眼さんぱくがんがとつてもかわいこちゃんな子ね♡文字通り、喰べちゃいたい」

俺の前に現れたビツクマダムは怯えていた様子はなく、堂々と前に立ち、巨大な赫子を出していた。

ああ、そうだった

俺は慢心をしてしまい、重要なことを忘れていた

マダムはSSレートの喰種

無駄にある脂肪が付いている姿とは想像がつかないほどの高い戦

闘能力を保持しており、

それでマダム界で上り詰め、喰種たちに多大な影響を及ぼす喰種へと
なった

俺はとんでもない喰種と戦っていることに気がついたのだ

球世Side

何もどうすることのできない僕はヤツに捕まれ、ものすごい速さで壁に登っていく。

ヤツは「ツツタカ、ツツタカ」と眩きながら僕をおもちやのように掴む。

「あががあ!!」

ヤツが壁に走っていく同時に、僕を壁に建物の壁に引きづられていた。壁に長く引きずられた跡を残し、傷つけられた僕の姿にヤツはにやりと口を歪ませる。

「はい、出国」

ヤツは建物の最上階付近の壁に僕を叩きつけ、さらに僕の背中に強い衝撃を加え、壁に再び当たった瞬間、奥に入っていくように大きく壁に穴ができた。壁を破壊し、建物の中に投げつけられた僕はそのまま何も動くことなく建物の床に落下する。僕が入った建物は舞台のあるホールで、僕はちょうど舞台の真ん中に落ちていった。

「つまんねえな?この程度か?」

ヤツは倒れている僕にゆっくり近づく。また掴まれ、投げ出される。そう思った僕はヤツがある程度近づいた瞬間、

「…!」

今自分の体に残っている力を引き出すように僕の体から赤い赫子を出現させ、ヤツの胸に貫くが…

「ほお?久しぶりの反撃がこれか?まったく全然痛くねえな!」

ヤツは体の中央に僕の赫子が突き刺されたのにも関わらず、余裕のある声と全く痛がらない態度を持っていた。そしてヤツは自分の体を貫いていた僕の赫子を躊躇なく取り出し、大きく振り回す。僕は赫子を出すだけでも精一杯だったため再びボロボロの人形のように動くことなく振り回され、再び壁にぶつけ、その後座席に落下した。僕が落下した座席周りは大きく歪み、ヤツの攻撃がどれほど強いものか表していた。

「この世は腐ったもんだよ。一位と二位の差はひでえものだ。どんなところでも同じこと。灰だらけのお姫様だったり」

僕は話す気力がなく、ヤツは淡々と喋る。

「返事はなしか。寂しいな?せつかく話しているのによ!」

ヤツは倒れている僕の足を掴み、壁に投げつける。それでも満足していないのか、すぐ様壁に叩きつけられた僕の前に現れ、僕の腹部に拳を何発も加える。一発一発と加えるたびにホール中にヤツの狂った笑い声が響く。攻撃を受けている僕は何度も攻撃を受けたせいか痛みというものを感じなくなった。僕はもぬけの殻となってしまうた。

「俺は話してるんだよ、お前に。お前と呼んでも通じないか?仕方ないなああ?優しい俺がお前の名を言おうか」

ヤツがそう言うのと拳を打つのをやめ、ぼろぼろの僕を舞台の中央に投げつけ、すぐさま宙を浮いていた僕を足で舞台の真ん中に落とした。

「お前の名はササキハイ…いや」

ヤツは舞台の中央に倒れる僕にそのまま僕の名前を言わずに、ある人物の名を言った。

「カネキケン」

朦朧としていた意識が、目覚めたかのように戻った。

なんでここで名を聞くんだ？

その名は以前、卯月ちゃんから耳にした名前。

なんでヤツの口から出るんだ？

ヤツはなんで彼の名を知っているんだ？

僕は動かなかった口をゆっくりと「違う… 違う…」と息が途絶え
そんな声で言う

頭が回らない

僕は佐々木琲世

僕は彼でもなくササキハイセ

ササキのハイセ

ヤツが呼んだ名前の人物じゃない

彼女が呼んだ名の人物じゃない

ヤツは彼女を知っているのか？

彼女はヤツを知っているのか？

わからない

思いつかない
考えたくない

何もかも考えたくない

考えてしまえば、僕が死ぬ

ササキハイセが死ぬ

ササキハイセが死に、彼に変わる

僕は彼女が言った名じゃない

僕は、僕は、僕は……

現実に叩き落とす

志希 Side

「あ」

目を開けた時、あたしは真っ暗な自分の部屋でそうつぶやいた。あたしがつぶやいた理由は寝ていたところがふかふかのベッドではなく、冷たい床にべったりと張り付いていたことに気がついたからだ。ベッドにあつた枕と毛布は全部床に落ちていて、まるで地震が起きてのではないかと思っちゃうほど散らかっている。あたしはゆっくりと体を起こし、部屋の周りを見渡すと目を閉じる前の時と変わらず真っ暗だ。

「…？」

まっくらな部屋をしばらくみると、めちやくちやに書類が置かれている机に、微少な光が見える。あたしは大量に置いてある書類をまとめることなく横にどかすと、スマホがでてきた。スマホを手に取り画面を見ると、残りの電源が20%未満の警告が表示されていて、電源を表す電池のマークが真っ赤に染まっている。いつもあたしはスマホを充電せずほったらかすから、毎回あたしのスマホは悲鳴をあげるように警告マークが表示している。

ここ最近、あたしがスマホをいじる時間が少なくなった。スマホをいじるのは友達との連絡か、何かを少し調べるぐらい。スマホは便利で時間を潰すのはいい道具なのだけど、やり過ぎてしまうと自分を見失ってしまう搾取る道具でもある。スマホをいじるなら、あたしが夢中になれる研究に没頭した方が幸せだ。

(おや？美嘉ちゃんからだね)

電源が少ないことを警告する通知を消すと、数時間前にきた美嘉ちゃんからの返信が一通だけあつた。前まではあたしのお世話役でもあつた親友は、今は会う時間が少なくなっている。でもこれは悪いことじゃない。美嘉ちゃんは美嘉ちゃん自分で自分が目指すべき道を進

んでいるのだから、これはいいことだ。

『志希、最近仕事に出ていないの?』

美嘉ちゃんの久しぶりの返信は、あたしが最近仕事に出ていないことだった。美嘉ちゃんの言う通り、あたしは最近アイドル活動が少ない。別に楽しくないからやってはないのではなく、前まで好きだった研究がさらに好きになってしまったから、わざと減らしている。

『研究がここ最近楽しくてね』

あたしがそう返信すると、2分も経たないうちに美嘉ちゃんの返信がきた。こんな真夜中なのに、美嘉ちゃんの返信が来るとはあたしは少し驚いた。

『また研究? まったくいつも何やっているのよ?』

今の時間帯は美嘉ちゃんは寝ているはずなのだが、美嘉ちゃんの返事がくるなんて思わなかった。

『いろいろだよ』

『いろいろ? 香水?』

『香水とかいろいろ』

『そのいろいろはなんなのよ!』

美嘉ちゃんの返信を見たら、あたしは思わず暗い部屋で笑ってしまった。久しぶりに美嘉ちゃんをからかってみるとやっぱり面白い。頻繁に会ってからかうより、どこか心地がいい。

『まったく... 志希は相変わらずよくわかんないよ...』

『でも美嘉ちゃんがこんな時間帯に返信がくるなんて思わなかったよ』

『まあ、確かに普段のアタシなら返信はしないよ。でも久しぶりに志希と話しているからね。本当なら早く寝るべきだけど、やっぱり返信がしたくなっちゃったよ』

『でも今寝ないと仕事に支障が出るよ?』

『そうだね。志希の言う通り、そろそろ寝ようかな?』

『いいよ』十分に楽しめたし』

『でも志希、あんまり研究室で引きこもらないでね。ずっと引きこもったらアタシが連れ出すよ』

『はい、ありがとね〜♪』

あたしが美嘉ちゃんとかちょうど話が終わったその時だった。
「……」

送信ボタンを押した瞬間、誰かからの連絡がやってきた。その返信者の名を見たあたしは思わず舌打ちをし、苛立ちが生まれる。まるで夢から現実に叩きつけられたように。

『いつもお疲れ様です、一ノ瀬志希さま。くっくくくです。私たちは貴女様の腕を非常に評価しています。ぜひ我々との研究にご協力できないでしょうか？貴女様がお望みになる報酬をご用意しますので、ご返事の方をおねがいします』

また奴らからの連絡だ。しかも何百回も同じ文で、コピーアンドペーストをしているぐらい同じ文。

あたしはスマホを充電器にさすことなく書類がたくさん置いてある紙の山に放り投げ、ベッドに再び寝転んだ。

奴らからの勧誘は本当にうんざりさせられる。自分たちでは実現できないことをあたしにおしつけるように何度も連絡をしているみたいに連絡をするから、あたしは奴らとは関わりたくない。何度もメールを無視すると奴らは直接あたしの前に現れる。あたしは奴らが目の前に現れるたびにいつも言う決まり文句を奴らに言っ去る。『お前らはお前らで研究してろよ』っと吐き捨てるように言っ去る。あたしは奴らに数え切れないほど言った自信があるほど奴らは私の前に現れる。

あたしはあたしで研究しているんだから、邪魔をしないでほしい。

あたしは自分のペースで研究をするのだから、今から再び寝る。

日が明けたら、あたしが試した実験の結果が出るのだから

不知Side

ナツツクラッカーが目の前にいるのに、天井から突然鋭い赫子が俺の後ろから突き刺した。俺の腹を貫いた赫子から赤い血が床に垂れ落ち、体も同時に落ちる。普通ならそのまま床に倒れて死んでいるんだが、俺は普通のヤツとは違う。

(な、なんだよ…!?)

俺は天井に現れ体を突き刺した赫子が腹から完全に離れた瞬間、すぐさま体勢を整え死体のようにくねりと曲がった体勢で倒れずに床に着地をした。赫子で空いた俺の腹は徐々に塞いでいく。俺はクインクス手術で人間でありながら、人間よりも能力が高い喰種の力を持っている。それに普段から街中で喰種と戦い、赫子で突き刺されまくったからナツツクラッカーの攻撃には驚かされたものの大きなダメージにはならなかった。

「気をつける、三等！奴は尾赫と甲赫、分離型の赫子を持っている！そのうち尾赫は分離させてトラップの様に使うことができるらしい」

「さ、先に言っておきたいよ!!」

「うるさいっ！焦ってたんだ！」

俺たちよりも階級が高く経験のある林村サンでも焦っていた。なぜなら先ほどAレート出会ったナツツクラッカーがSレートへと変更されたんだ。理由は林村サンがいた班がナツツクラッカーによって全滅となってしまった。俺よりも経験がある捜査官を殺せるほどの力がある喰種となるといつもの捜査よりも気が抜けねえ。

「いくぜっ!!!」

俺は背中から赫子を出し、赤い弾幕をナツツに向かって放った。俺の赫子は羽赫で、遠距離攻撃が活かせる弾幕を誇る能力を持っている。才子は「いったれ、シラギンナー!!」と声をあげたのだが…

(防ぎやがった…!)

今まで放った中では命中率が断然に上がったのだが、ナツツは腕には生えた赤い盾みたいな赫子で全弾を防いだ。その光景を見た俺は大きく舌打ちをした。

「不知!」

林村サンはナツツに近づき、ブレード型尾赫クインケ”セニング”で攻撃をし、俺に赫子を再び放つが、ナツツは一ミリも顔を動かすことなく平然と赤い盾をした赫子で受け止める。やはり数をぶちこんでも、結局一弾一弾の火力がなければ話にならない。そう考えるとこの前に戦った”オロチ”の言葉が思い返される。

(どこかスキを見つければ…)

俺はそう考え、前に踏み出したその時だった。

「ーっ!!」

踏み出した右足に”何か硬いもの”を踏んでしまい、床に大きく体勢を崩してしまった。

「気をつけろー三等!!」

俺の体が床に倒れ林村さんの声に気がついた時、先ほど林村サンと戦っていたはずのナツツがいつの間にか俺の真上にいた。俺の真上

にいたナッツは右足を曲げ、俺の股間にめがけて大きく足を振り下げた。

「うおおおツツツ!!」

俺はナッツにあそこを潰され声をあげたのではなく、間一髪でナッツの攻撃を回避でき、そしてあまりにも恐ろしい攻撃を思わず声をあげてしまったのだ。ナッツは再び俺のあそこを踏みつけようとしたその時、幸いにも林村サンが攻撃を惹きつけ、腰を抜かした俺から離れさせた。

「ヤベ… マジでシラコになるところだった」

俺はナッツに男のあそこをぶち壊されるところだった。ナッツが履いている靴は黒光りのハイヒールで、あの後ろの尖ったヤツが俺のあそこに潰されることを考えるだけでもとんでもなくおそろしい。

（… たく、なんであんだよ!! こいつ!）

俺は気を取り直し、姿勢を崩すきっかけを作った踏みつけたものを手で拾った。俺がつまずいたのは、鼻に着く様な匂いを出していた”理科室で使う細い試験管”だった。モニター室でこんなのが転がっていると考えてると変に感じ、怒りの感情が現れた。俺は危うくこいつでナッツに殺されるところであった。俺は感情をぶつけるように、思いつきり試験管を壁にぶつけた。

その時だった。

「おう!?」

すると試験管が当たった壁に、先ほど天井で現れた赤い赫子が壁から現れた。

（なんだよ!! またナッツがー）

そう思った俺はすぐにナッツの方向を見たが…

（… ?）

ナッツは俺を全く見ておらず、林村サンと戦っていた。

「…」

俺はあることを考えた。

もしかしてナッツは壁にある赫子を完全に操作しているのではないかと、俺たちを壁に近づけて反応させてやっているのではないかと？

いずれ、死

瓜江Side

ビックマダムの強烈な一撃を加えられ、血を吐いた俺はうろたえる体をどうにか立ち上がらせ、前を向いた。

(な…なんだよ…!?)

今まで俺が受け止めた攻撃の中では一番に入るほどの力で、前に戦ったオロチよりも強力だ。

「あら？アタクシの攻撃を受け止めるなんてすごい子ね〜」

建物壁に張り付いていたビックマダムはうろたえる俺の姿に馬鹿にするかのようにつつした。うるさい、俺をバカにするな。俺は赫子が見える人間だ。俺は並大抵の捜査官とは違う。俺をそんな目で見るな。

「あああ!!!」

俺は感情を声に出し地面を蹴り上げ、壁に張り付いたビックマダムに赫子を構え接近した。

「あら〜いいわね、その攻撃」

ビックマダムは脂肪が張り付いた体から想像がつかないほどの早い速度で回避をした。俺の赫子は壁に大きな亀裂を生れさせ、空振りした俺にビックマダムは巨大な赫子で俺の体に一撃を加えさせる。

「ぐあははっ…!!」

俺は再びビックマダムの攻撃を受け、地面に叩きつけられる。俺は他のクインクスのやつよりもフレーム4に上げているのに、ビックマダムには歯が立たない。あの手術をした意味はなんだったのか？と思うほど腹立たしく感じる。

「逃すか…俺の…」

倒れていた俺はゆっくり立ち上がり、再びビックマダムに立ち向かおうとしたその時だった

「…!!」

俺の体から複数箇所痛みが現れた。ハッと気がついた時、俺の身

体中に無数のナイフが突き刺さっていた。

「マダム、ご無事でしうか」

ビツクマダムの横にスーツを着た二体の喰種が立っていた。ああ、また忘れていた。俺は夢中になりすぎた。ビツクマダムには護衛の喰種がいたんだ。

「ええ、久しぶりに赫子を出しちやったわ。この子は普通の子じや味わえない面白い味を出したのよ」

俺は何もすることができず、死体のように地面に倒れた。もう力をつき果たしてしまったようだ。

「さあて……頂いちゃおうかしら」

俺はビツクマダムの大きな手に掴まれ、そのままビツクマダムの口に入れられてしまった。

俺はこれで終いなのか

功績を上げられないまま、死ぬのか

六月Side

俺は進路を妨害してきた喰種を倒した後、瓜江くんの元に向かっていた。先ほどビツクマダムがいると思われる部屋に行つて以降、瓜江くんが姿を表していない。まさかと思い、ビツクマダムがいると思われる所に向かうと……

「瓜江くん……？」

俺が瓜江くんの元に着いた時、瓜江くんは何も動かずにビッグマダムの口に下半身を出したまま入れられている。見る限り瓜江くんには抵抗する動きがなかった。

「まだだ……まだ……やられて……」

ビックマダムの口から聞こえる瓜江くんの声。このままでは瓜江くんが殺されてしまう。今、戦えるのは俺しかない。

(な、なんとしないと……!!)

俺は持っていたナイフ型鱗赫クインケ“アブクソル”と“イフラフト”をぎゅつと握りしめ、瓜江くんと口に入れていたビックマダムに立ち向かった。

「……!!」

すると複数のナイフがどこかか投げつけられていた。投げられた先を見るとオークションに参加した喰種と同じスーツを着た喰種がいた。しかも他の参加した喰種とは違い、戦闘ができる奴らだ。おそらくはビックマダムを守る護衛の喰種だ。

「うぐっ！」

ナイフを避けていたのだが、一本が俺の肩に突き刺さる。けどこれで怯んでしまえば、瓜江くんが死ぬ。俺は肩からくるナイフの痛みを耐え、護衛の喰種にあと数メートル接近をした。

しかし……

「ぐばああ?!?!」

あと数センチのところで立ち向かおうとしたら、護衛の喰種は俺に接近し俺の腹に蹴りを加え、俺の背中にナイフを力いっぱい突き刺した。

「ああああっ!!!」

耐えきれない痛み。背中からナイフが突き刺され、肉に大きく傷をつける。それだけではなく、肉にある骨にかすれる痛みが体にくる。

俺はその痛みに耐えきれず、床に倒れてしまった。

(…う、瓜江くん…)

私は瓜江くんを助けることができずに倒れてしまった。クインケだけでたち向かおうとした私が悪い。本当ならば瓜江くんのように赫子をださなきやいけないのに、私は出すことができない。何も動けなくなった私は、瓜江くんのように死んでしまうんだ。

ああ、なんて無力なんだろう

心の中でそう呟いた瞬間、

「ぼー、あががが……!?!?」

すると突然、瓜江くんを啜っていたはずのビツクマダムが大きく叫んだ。意識が朦朧としていた私は一体何が起きたんだと前を見ると、動けなかったはずの瓜江くんが手でビツクマダムの口を大きく開き、そして右足でビツクマダムを強く蹴りつけ壁に叩きつけた。

「こおせき……こーせき……こうせえき……いい、もももつと、もとほしい」

マダムの口から脱出した瓜江くんはものすごい速さで何かを呟き、体を不可思議に震えていた。おかしい。いつも瓜江くんは感情を出さすことがないのに、今見ている瓜江くんは正気を失い、感情が乱れていた。それに右腕に出していた赫子は瓜江くんの体よりも大きく

なっていた。

「もももももっと、ももっとほしい!!!こおおおせきいいいいををををををおおおお!!!」

瓜江くんの正気とは思えない叫び声が建物内に大きく響き渡った。

不知Side

モニター室にいた俺は目を閉じ、壁にあるナツクラーカーの分離赫子を探し出す。俺はふっのやつとは違い喰種の力を持っている。その喰種の力の一つが聴覚だ。まるで潜水艦のソナーの様に目で見えないものを見つけられる。

(分離型の赫子が5、6個あるのか...)

俺の聴覚から伝わった限り、モニター室の壁には赫子が5、6個あるとわかった。俺はその一つがある所に少し叩きつけると...

「ー!!」

壁から鋭い赫子が大きな音を立てながらすぐに生えてきた。しかもそれはナツクの意志ではなく俺が近くで叩きつけただけで現れた。この原理を生かすには俺と林村サンだけでは足りない。

「林村サン！」

「なんだ？」

「あのー」

俺はこれからやる作戦を林村サンの耳元に話した。

「ーああ、わかった。俺はあいつを相手にしているから、米林三等を頼む」

「わかりました、林村サン！待ってくださいー！」

俺は林村サンに話した作戦を実行するため、ナツクと相手をしていた林村サンの元ではなく怯えて動けなかった才子の元に向かった。

「し、シラギン？」

「ぎ、才子！お前の力が必要なんだよ！」

「な、なんだよ……アタイは今まで戦ってきたのは、二次元の奴らしかないぞ……」

俺は才子に戦いに加勢するように伝える。しかし才子は俺の言葉に乗る気もなく怖がっていた。確かに才子は俺たちクインクスの中では全く喰種との戦闘をしておらず、シャトーでニートをしていた。だが俺は才子の力を求める理由があった。それは才子には俺たちクインクスの中では一番の”潜在能力”がある。もし才子が加勢してくればナッツを倒せる。俺はうろたえる才子をどう戦わせるか考えていると、あることが浮かび口にした。

「なあ、才子。さっさとナッツを倒して、サツサンの元に行くぞ」

「ママンの元……？」

「そうだ。さっさとナッツを倒さなきゃ、サツサンが死ぬ」

「ま、ママンが死ぬ……!?!」

才子は俺の言葉に目を大きく開き、先ほどの怯えが薄々と消えている。今サツサンは一人でSSレートのが狂った喰種と戦っている。あのサツサンですら焦りを感じるほどの喰種だから、もしかしたら今苦戦しているかもしれない。

「早くしろ！もう持たない!!」

部屋になんども聞こえた鋼同士が打ち合う音がさらに大きい音が聞こえると、林村サンはナッツの攻撃に大きく押されるように後ろ下がった。

「待たせました!!林村サン!!」

「たく、待たせやがって！じゃあ作戦通りに行きますか！」

林村サンはそう言うのと、再びナッツに接近しブレード型クインケを振り下ろした。ナッツはすぐさま林村サンの攻撃を赫子で何度も防ぎ、そして林村サンに反撃を繰り返す。林村サンはナッツの反撃に応じて攻撃を防ぐが、なんども受けているうちには林村サンの左腕にナッツの攻撃を受けてしまった。しかし林村サンは大きく歯を噛みしめ、ナッツを空中に上げさせるようにブレードを下から上へと切り

裂いた。

「飛べ、オラ!!」

林村サンがそう言うのと、ナッツに追加攻撃をせずに後ろに下がった。

「いけっ!!!」

林村サンが下がった瞬間、俺は宙に浮いたナッツをさらに上に上げさせるよう俺の背中に生えた赫子から弾幕を放った。俺が放った弾幕を当たって欲しいが、それよりも当たって欲しいものがある。さらに上へと上げられたナッツは壁にぶつかりそうになるぐらいに上がっていた。

ナッツの分離型赫子の特徴は単純だ。

近くのものに反応して突き刺さる!!!

「ぐあはっ!!」

天井とすれすれだったナッツの後ろから巨大なトゲの形をした赫子が天井から現れ、ナッツの腹に突き刺した。突き刺されたナッツは壁から生えた赫子で動きが止められた。

「才子!!!」

ナッツを動きを封じ込めたら、あとは戦闘に慣れていない才子の順番だ。俺が目を閉じていた才子の名前を叫ぶと、才子は力強く目を開き、左目に赫眼を出し、才子の背中から赫子が現れる。

それは俺の赫子よりもはるかに大きく、部屋のもを無造作に壊しまくる恐ろしい赫子であった。

「大丈夫か、才子?」

「ぜえ...ぜえ...」

赫子を出した才子は地面に膝を着き、息を切らしていた。やはりサツサンの言った通り、クインクスの中では一番潜在能力を持った力を表し、Sレートに引き上げられがナッツを戦闘不能にさせた。その爪痕がモニター室の床と壁に大きく刻み込まれていた。まるで龍が暴れまわったかのように爪痕を残していた。

「たく…どっちがバケモンかわからんな…」

林村サンは左腕にできた傷を右手で抑えながら俺につぶやくように言い、耳につけていた通信機で作戦本部に連絡をした。今俺たちは管理棟を抑えたため、館内の様子が全て把握することができると、あとは林村サンが管理棟のモニターにあるデータを作戦本部に送る作業をする。

「…」

俺は息を切らす才子の元に離れ、右手にソード型クインケを手にして床に倒れるナッツの前に立った。

「…危険度が高え喰種は駆逐すると高額な報酬がくる」

俺はクインケの刃を下に向け、

「デメエはいくらだ？」

そしてナッツの胸に刃を深く突き刺した。

「ぐ…は…」

刃が突き刺した瞬間、ナッツの口に血が溢れ出る。そして床に倒れていた時に開かなかった口がゆっくりと開く。

「お金…お…金…きれいに…」

『キレイに…なり…たい』

ナッツはそう言うと、口を動かすのをやめ、目の瞳孔が開いた。俺たちと戦ったナッツは死んだ。それは今まで戦ってきた喰種の中で一番強くて、そしてとても静かに死んでいった。

「人間らしいこと言うんじゃないよ…」

俺はあまりにも静かすぎて、不気味さが生まれた。喰種は人をぶつ殺す生き物なのに、なぜ優さを感じるんだ？ ナツツはたくさんの人間をぶつ殺したのに…

そう考えているとー

「あああああつあああああああああ
??!?!??」

すると突然、誰かの叫び声が館内に大きく響いた。俺はその叫び声にハツと現実に戻されたかのように気を取り直した。

「なんだよ…？この放送は…？」

その声は見知らぬ人の声じゃなくて、俺が知っている声だ。まさか…あの狂った喰種に…

「才子…もしかしてこの声は…才子？」

俺は才子の方に振り向いたが、床にひざまずいて息を切らしていた才子の姿がなかった。

球世Side

「あんなに叫んでも、助けはナシか。かわいそうだな」

先ほど僕の叫び声が建物中に大きく響いた。誰かが僕がいるホールの音声を放送で館内だけでなく、敷地の外にまで大きく響かせた。だけど僕の叫び声は効果はでなかった。今ホールにいるのは僕と死神に似た喰種だけだ。誰もホールに入る気配はなかった。

「お前さんの無残な姿、お似合いだよ」

無残に壊れ、瓦礫と化した座席に投げ捨てられた僕の横にいるヤツ。僕はヤツに勝てるわけなく、攻撃を受け続けた。攻撃を受け続け

た成果視界は真つ暗で、痛みが消え、意識が消えつつあった。

「なあ、こんな哀れな自分になった感想は？」

「し……に……た……く……ない」

動くことができない僕はただ死にたくないとただ言うしかなかった。

僕はここで死にたくない

僕を待つ人たちがいる

その人たちを置いていくなんでできない。

「あ、そう？・単純すぎてつまらない感想だな。そこらへんのガキでも作れる感想みてえだ。お前さんはここまでだな」

ああ、これで死んでしまう。

消えてしまった記憶を知らずに死んでしまう。

「俺のデザートにしてやるよ」

ああ、これで死んでしまうのか。

僕はこれでおしまいなんだ

凍りつく

米林Side

『俺のデザートにしてやるよ』

管理棟から出て、ママン非世がいると思われるホールにたどり着いた、私。ママンはあと数メートルにいるのだが、私は音を立てずにただ物陰に隠れているだけだった。だけど私はママンを助けることができない。とても静かすぎるホールにぐしゃぐしゃになった観客席に倒れるママン、そして他の喰種よりとんでもなく恐ろしい喰種がママンを見下すように座っている。

(どうすれば…いいのだ…?)

私より強いはずのママンは死神みたいな喰種にボコボコにやられ、もう瀕死の状態で倒れていた。私は先ほどナツツクラツカーの戦いで赫子を使う力はなく、手に持っていたはずのハンマー型のクインケ”ぼくさつ2号”は管理棟で置いてきてしまい、なんでそんな状態でママンを助けにきたのか自分に聞きたいほど無防備でたどり着いてしまった。だけど何もせずただ立っていれば、ママンが死んでしまう。

そんな葛藤を抱いていた私にホールで転機が訪れた。

『ーー!!!』

突如静かだったホールに再び激しく物が壊される音が私の耳に伝わり、体に振動が伝わった。一体何が起きたのだと頭の中に浮かんだ瞬間、ママンの体に硬くて長い赫子が巻きつき、どこかに引っ張り出された。その引っ張り出された先を見ると一人の喰種が立っていた。

(え…?喰種?)

その喰種は私と同じく女性で、目元を隠す仮面を被っていた。服装を見る限り私とは敵対すべきアオギリの樹の喰種。だけど次の行動で私にさらなる驚きが生まれた。

(なんでママンを守るように抱えてるんだ…?)

瀕死状態であるはずのママンをトドメをさすことなく、優しく抱えていた。本来敵同士のはずの存在がなぜか味方同士のようになっている。

「なーんで邪魔をするのかな、ちゃんヒナ♡」

死神に似た喰種は苛立ちが入った口調でママンを守る喰種に話しかけた。どうやら本当は仲間同士の二人。だけど立場が一変したことがわかる。一体何が起きているのかわからない。

私は異様な光景を出会ってしまったのだ。

瓜江Slide

先ほどビツクマダム口にブチこめられていた、俺。何もすることができなかつた俺に突然、自分の体が意を反して動き出した。マダムの口を死んだように動かなかつた腕で大きく開かせ、そして俺よりも大きいビツクマダムの腹に俺の細い脚で蹴り上げた。普通ならばできないはずの行動が急にできた。それは体の奥底に無限に力が生まれ、気分は湧き水のように溢れてきたのだ。

「お、お、おれ、おれ、おれおれおれおれおれ(おおおれ、れれれ、れえおれれ)」

気持ちが高まりすぎて言葉がうまく出せない。それと頭が整理ができない。頭の中が俺でいっぱい。いっぱいいで、理性のある言葉が出せない。

「ま、マダム!!」

すると護衛の喰種が聞こえると、俺の後ろから刃物の痛みが数箇所現れる。だけど刃物の痛みは気にするほどではなく、逆に気分が上がった俺は苛立ちを抱いた。

「じゃああまままあするんなああああああ!!!」

先ほど俺を倒した護衛の喰種は俺の赫子であつという間に首が吹き飛び、護衛どもの体はばたりと床に倒れた。

「すすすすげげげ??」

俺は思わず感情を隠しきれずに声をあげてしまった。やっぱりフレーム解放手術をして正解だ。クインクスどもはフレームのレベルが2に対し、俺のフレームレベルは限度に近い4だ。その力が現れたのか俺の右手に生えた赫子がいつもより大きく拡大し、そして喰種がすぐに片付けることができる。

「たたたた、たのしいいいい（こんにちは）」

自分でも驚いてしまうほど大きな声が出せた。こんなに声をあげたのいつぶりかな。考えるのやめた。今は楽しめ、楽しめ。俺の世界まっしぐら。

「ひゃーとんでもなくクレイジーだね」

ビツクマダムはそういうと気が狂っていた俺に邪魔をするように赫子を突き刺す。俺は勢いに任せ、マダムが放った赫子を自分の赫子で切り裂く。ああ、なんて強いんだ。さっきまでの自分がとても弱々しく感じる。赫子を切り裂いが俺がやることは、ビツクマダムの体を切り裂くだけであった。あとは簡単だと、慢心をした、俺。

しかし、流れはそうはいかなかった。

（…あ、れ?）

気がつくとも俺は攻撃をやめ、マダムに一方的にやられていた。ビツクマダムは赫子だけではなく俺の体を拳で殴り続ける。あれ?なん

で攻撃をやめるんだ、俺？さつきまでの勢いはどこに行った？俺は先ほどと同じく何も動けない状態になっている。

『なめんじゃねえぞガキゴラ』

ビックマダムの口から聞こえた言葉を耳にした瞬間、マダムは俺に赫子で最後の一撃を与えさせ、俺は風で飛び散るゴミのように吹き飛ばされ、そして床に大きく強打した。

(……………)

口を開き、着ていた服と体がボロボロになり、無残な姿で倒れる、俺。床の冷たさが背中に徐々に伝わった時、俺は気分が高まつてきた時に感じられなかった感情が胸の中に現れた。

「……なんで俺はこうなるんだ……よ……」

俺は声を震わせ、俺の心から悔しさが生まれてきた。俺は誰よりも成績を上げてはずだ。けど人々は俺は注目を浴びない。なんで俺に賛賞の声が聞こえないんだ。

「……あいつとは違い首席なのに、なんであいつばかり……みんな、みんな、死ねよ。みんな俺のことを邪魔と感じているだ……死ねクソ……」

腹出し。俺は黒磐に憎しみを抱く。黒磐は俺より目立った功績を上げていないにも関わらず皆から賛賞をもらう。きつと作戦後も黒磐はまた賛賞を受けるはずだ。

なんで俺は、またこうなってしまうんだ。

「瓜江……く」

すると隣で六月の声が聞こえた。その時だった。

「……!!!」

ぐしゃりつと体を貫く音が聞こえた。俺は過ちを犯してしまった。

近くにいた六月の腹に右手で体を貫いたのだ。周りの状況を読めずに自分の世界にしか見ていなかった。そのせいで味方である六月に攻撃をしてしまった。

「……………」

俺は考える余裕は持っていなかった。攻撃してしまった六月にどう説明すればいいのかわからない。謝り方がわからない。どう対処すればいいのかわからない。俺は空っぽな頭で考えていたら……

「……瓜江くん」

すると突然六月の背中から白い赫子が現れ、俺を包み込むように優しく触れさせた。

「……邪魔じゃない……大丈夫だよ」

六月は傷ついて俺に報復の攻撃をすることなく、優しく俺に声をかけた。六月の腹にできた穴は徐々に狭まっていく。

「辛いよねひとりぼっちは……くるしいよね」

共感をしてくれる人。俺は初めて味わう。今まで一人であった俺の心には心地いい。冷たさしかなかった俺にはなかったもの。

「六月……」

六月は今まで赫子を出すことはなかった。俺は驚きを抱いたのだが、赫子以外にあることに驚いていた。

「……この匂い」

俺はあることに気がついた。六月から伝わる香り。その香りはどこか普通のヤツとは何かが違う。六月から流れる血は傷に流れた血と違う香り。

（そうか、お前……）

俺がそう考えた瞬間だった……

「もう、イライラマックス!!!お芝居はここでおしまよ!!!」

静かだった俺たちにビックマダムの苛立ちがこもった声が終わせた。

「アンタは競り落としたんだから連れて帰る……あとそのガキは粉々にして、私の口に入れるわよ!!!」

ビックマダムは怒りをぶつけるように鋭い赫子で床に倒れていた

俺たちに振り下ろす。俺たちはもう戦えない。せつかく久しぶりに優しさを味わった俺に、終わりが差し迫っていた。このままビツクマダムの攻撃を受けてしまおう、俺。

——その時だった

「——!!!」

ビツクマダムのするどい赫子が一瞬にして肉の塊と化した。俺たちの前に黒の制服をきた五人の集団が現れたのだ。

「こんにちは、ママ」

よく見ると先ほど雑魚狩りをしていたはずの鈴屋が前に立ち、そして鈴屋班の四人が倉庫に到着していた。ふと気がつくと、倉庫に多数の捜査官が到着しており、オークションに参加した生き残りの喰種を連行していた。

ヒナミSide

「なくんで邪魔をするのかしらねえ、ちゃんヒナ?」

タキザワさんがいるホールに現れた、私。本来会場の屋上で各部隊の指揮をするべきはずの私は、タキザワさんとする喰種捜査官が戦うホールに舞い降りた。

「オウル、あなたは早くアヤトくんたちの元へ行ってください」

落ち着いた声で私は苛立ちを抱えるタキザワさんに落ち着いた声で答える。確かに外にいるアオギリの樹の舞台の状況は劣勢だ。ナキさんが指揮する部隊は壊滅、管理棟は白鳩ハトに占拠トされてしまい会場のすべてが把握されてしまった。

「ただ、本当はタキザワさんに指示するためにホールに来たんじゃない。」

「それは、お兄さんが決めますよ。」

タキザワさんはそう言うとき大きく飛び上がり、そして背中に生えた赫子から赤い弾幕を私に向けて放った。私は後ろに生えた骨に似た長い赫子2つで弾幕を防がせる。けれど赫子一つ一つ放たれる赫子の弾幕は物を粉々にさせるほど強力だ。やはり改造された半喰種だと耳にしているから攻撃がはるかに強い。

（……やっぱり、強い……！）

私は戦闘をするのは苦手だ。私は組織の役目は後方の支援をする立場であり、人や喰種を殺める仕事はしない。けれどそのつけが今タキザワさんとの戦いに現れた。大量の弾幕を防ぐ赫子の隙間から赤い弾幕が私の体に擦りつける。私はタキザワさんが放つ弾幕を把握することができず、ただ振り回すしかない。一瞬だけタキザワさんの隙が見えて、私は赫子を向けるのだが、タキザワさんは素早い動きで攻撃を避け、遊び半分で赫子に乗ったりして再び赤い赫子を私に放つ。

私はここでタキザワさんに負けるわけにはいかない。

私がホールに現れた本当の理由は、タキザワさんが戦っていた一人の喰種捜査官を守るためだ。

彼はササキハイセと言う人物だけど、私にはかつて優しくしてくれたお兄ちゃんカネキにしか見えない。

見た目だけではなく香りも同じく似ていて、何もかもがお兄ちゃん《カネキ》だ。

ただひとつだけ違う点がある。

それは彼の中である。

彼はお兄ちゃん《カネキ》ではなく、ササキハイセという喰種捜査官だ。

名を耳にただけでは私はわからなかった。

だけど先ほど建物中に響いていた声を耳にした時、私は確信をしたんだ。

この人は間違いなく、お兄ちゃんなんだと

(――守らないと)

この人は消してはいけない

それは私の望みでもあり

彼の帰りを待つ”お姉ちゃん”の望みでもある

だから彼を一人で戦わせない

そう胸に誓うように言うと、私の後ろから更に赫子を生えさせ、すでに生えさせていた赫子に変化を与えた。それは骨に似た赫子には鋭い刃が生えていた。私は躊躇する感情を抱かず、先ほど弾幕を放ったタキザワさんに赫子を向け、そして突き刺した。

「ぼがやぎやががっやがやや!!」

私の赫子に生えた刃でタキザワさんの体の肉を切り裂く。先ほどすばしっこく動いていたタキザワさんはただ私の攻撃を受け、気が狂った声を上げる。私の攻撃を受けたタキザワさんは腕を吹き飛ばされ、その後ホールの舞台に大きく音を立てながら倒れてた。

(……)

倒れたタキザワさんの姿を見た、私。しかし背中に生えた赫子をす

ぐに消さなかつた。普通ならばもう決着がついた雰囲気だと感じるかもしれないが、まだ決着がついていないのだ。

「いたい、いたいねえ…？」

タキザワさんは手を使わず床に足裏をピタッと引っ付け、そして体を起き上がらせた。その次に落ちていたタキザワさんの手から赤い糸が無数に生え始める。タキザワさんの切られた腕からも同じく赤い糸が無数に生え、落ちていた自分の手と繋がった。そしてタキザワさんは何ごともなかつたように指を一つ一つゆっくりと動かす。

「おいちゃん、はあはあしちゃうー」

私はタキザワさんの姿に胸の中の更に恐れを抱いてしまった。それはタキザワさんの体に異変が起きていた。タキザワさんのボロボロになった体が再生だけではなく、体に赤くて硬そうな赫子が現れる。

「……よ？」

タキザワさんが顔を前にぐねりと前の向くと、顔には赤い仮面が張り付いていた。それはタキザワさんが事前に持っていたのではなく、赫子が顔を隠すように現れたのだ。

タキザワさんは私とは違い半喰種だけではなく、通常より凶暴化する赫者かくしゃでもあるんだ。

境目

卯月Side

「……」

ふと気がつくとも目をハッと開いた、私。カチカチと時計の針が鳴り響く私の部屋。窓からの光を遮断していたはずのカーテンに少しだけ月の光が漏れている。あれだけ彼のことを考え、眠れなかった私はいつの間にか眠りについていたようだった。

(…寝れない)

だけど一度起きてしまったら簡単に眠れない。ベッドに仰向けになつた体を右や左に向きを変え何度も寝返るが、閉じる瞳から睡魔が来る様子はなかった。

(…なんでまだ考えるんだろう)

佐々木さんのことが頭の中から離れない。せつかく眠りにつけたのに私を起こすようにすぐに頭に浮かんでしまう。ただ目を閉じているだけでは眠れないと判断した私は暗い部屋の中、ベッドから立ち上がり服がたくさんしまつてあるクローゼットの中からあるものを迷わずに取り出した。

(…これを着よう)

それは黒色のチャックがついたパーカー。普段明るい色の服を選ぶはずの私がついていて、しかも大きさとデザインは私の体では少し大きい服だ。なぜ私がこの服を持っているかという、それはある男性からもらったものだからだ。

その男性は私を助けてくれた命の恩人であり、佐々木さんに似た人だ。白い髪にどこか悲しそうな目をした私より年上の男性。私はただ彼からもらつたのではなく、窮地に立たされた私に着させ、そのまま彼にもらつたのだ。

その窮地というのは心が辛かったときではなく、悲しかった時ではない。私が高校3年生だった頃、喰種捜査官と喰種が激しく戦っていた20区で取り残された時のこと。あの時は人生で初めて死の恐怖

を味わい、建物の影で怯えていた、私。そんな状況の中、彼が私の前に現れたんだ。なぜ彼があそこに現れたのか今でもわからない。だけど今わかることは彼のおかげで私は死を免れ、そして私は彼に特別な思いを抱いてしまったのだ。

(… ああ、落ち着く)

彼のパーカーを着た私はそのままベットに入り横になると、どこか安心感というものが心の中に注がれるように来る。私はこのパーカーを着るといつも思い出すことがあるんだ。あれは20区の街の中、彼と一緒に夜の街を駆け巡ったこと思い出。私が彼と会うまでの20区の街は銃の音や誰かの悲鳴が聞こえていたのに、彼が私を抱きかかえ街を駆け出した時の街は騒がしい音が耳に入ることなく、夜の静かさが聞こえた。私は彼と一緒にいたことで恐怖が消え、一緒にいる安心感が得られたんだ。あの時を考えていた私のある感覚が体に訪れる。

(…ん)

すると閉じていた瞳からどこか落ち着くような感覚が現れた。普段意識することのない心地よい感覚。言葉で表すなら、眠気という言葉だ。この感覚を保てば意識が薄れ、眠れがやってくる。

私は彼のパーカーを着たまま、枕を優しく抱きしめる。わがままを言ってしまうば、会えることのない彼と一緒に寝たい。私は彼とはあの出会い以降、3年も会っていない。私は彼ともう一度会いたいと胸の中で呟く。あれほど特別な思いを抱かせたのは彼しかない。

彼ともう一度会いたい、という叶うことのない願い。

だけど私はそれでも願い続ける。

彼が再び私の元に帰るまで――

鈴屋 Side

僕はオークションに参加した喰種が隠れる倉庫で久しぶりにママと会えました。

僕が物心を着いた時から育ててくれた親で、ママは僕よりも体が大きくて、手だけでも僕の顔よりも大きい人です。

「じゅ、じゅぞうちゃん…!!や、やめてっ!!!」

ママは腰から出していた赫子が切られ、足はクインケの攻撃でやられてしまい立ち上がることができません。ママは人間ではなく、人間を糧とする喰種です。ママはCCGではビックマダムと呼ばれSSレートという危険な喰種です。僕は今、ママの敵である喰種捜査官になり、そしてママと再び会えました。

「ママのことをうらんでいるでしょう!?あ、あ、謝るわ!!どんな償いもするわ…!!」

ママはCCGにとって生かしてはいけない存在で、ある人は僕の人を狂わせた元凶と言います。ママはひどい喰種で、多くの人を買っていた喰種とCCG内でいっぱい聞きました。

だけど僕は、違います。

「……ぼくはあなたをうらんではいません」

僕はママに対して悪く思っていない。僕がママに刃を向けるのは仕事だからです。僕はママには傷しかもらわなかったけど、もしあの時ママに出会わなかったらあの人と出会わなかった。あの人は僕

の変えてくれた人で、今はずっとベッドで寝ている。あの人がいなかったら、僕は今とは違う人間になっていた。だから僕は、ママを恨んではいません。

「……勘違いしてるんじゃないわよ」

すると僕の言葉を耳にしたママの様子に変化がありました。それは隠していたものを出すように怯えていた様子が消えて行きました。

「私がお前を取ったのは、たまたまい商品と思っただけよ!!!」

ママの口調が荒々しくなる。それは怯えた姿を忘れさせるほどの怒りがこもった声で、優しさというものはない。

「私は、お前のことを一度も愛したことツーーー」

ママの声を耳にしていた、僕。すると突然僕の目の前は暗くなり、音が聞こえなくなりました。

「……お耳を失礼」

僕の目は視界をママの最後を遮り、僕の耳は僕の部下である半兵衛が耳を塞いでくれました。前を見ると先ほど態度を変えたママは動いていませんでした。

ママの最後の声と姿は見れませんでした。だけど悲しみというものは現れなかった。泣くことも、悔しがることはありませんでした。

『さよなら、お父さん』

一瞬にして終わった。

僕の親だった人がつけていたサングラスが僕の足前に落ちた。ずっと幼い時から見てきたサングラスに少しの血がつく。

前に誰かが僕をかわいそうな子と言っていた。

前に誰かが僕を不真面目な子と言った。

前に誰かが僕を落ち着きのない子と言った。

前に誰かが僕を悪い子と言った。

前に誰かが僕を異端者と言った。

前に誰かが僕を将来ダメな人間になると言った。
前に誰かが僕を社会不適應者と言った。

みんなは流れに乗らない僕にいつもそう言っていた。

もし僕みたいな子が僕の前に現れたら、

僕は――

球世Side

「……」

瓦礫の中に埋もれるように倒れ意識を取り戻した、僕。あれほどヤツに攻撃を受けたのだが、僕はまだ死んではいなかった。僕はヤツに最後の攻撃を受けようとした時、一人の喰種に助けられた。その喰種はおそらくは女性でアオギリの喰種のはずなのに、なぜか僕を助けてくれた。その喰種は今どうしているかと、前を見ると――

「はあ…はあ…」

その喰種は僕を守るためにヤツと戦ったのだが、ヤツの圧倒的な力に床にひれ伏せ、後ろに生えた赫子はボロボロになり、あまりにもダメージを受けているのか赫子が再生をしない。

「う、うううぐぐおうぐぐう!!!」

するとホールの中央から、もがき苦しむ声がうつすらと僕の耳に

入った。僕は前を見ると、僕を瀕死の状態にさせたヤツが自らの頭を半壊しかけた壁になんども打ち続けていた。その姿は先ほどの気が狂った様子ではなく、誰かに謝るように声をあげていた。

「お、俺は何も、何もしてない!!あ、ああ、あああっー!」

ヤツの体から生える赫子は先ほど見たときよりも大きくなっていたのだが、意を反するように不可思議に動いていた。その姿はまるで僕と同じだ。自分では抑えきれない力を得た時と同じ姿をしていた。

『えらべ、えらべ』

すると僕の頭の中から彼の声が聞こえた。その同時にズキズキと頭が痛む。

(……)

僕はあまりにもヤツに攻撃を受けてきたせいか頭にくる痛みに気にすることはなかった。僕は瓦礫の中に埋もれていた自分の体を起こした。瓦礫から抜け出すと、自分の体にある感覚があると気がついた。それは誰かが僕の体を動かしている感覚だ。

(ああ、そうだね……この体は僕ではなく、彼のだ)

僕の身体の間を曖昧にさせているのは僕の中にいるもう一人の僕。

いや

もう一人の僕ではなく、彼だ。

僕は本来彼に返すべきだが、そうしてしまえば僕は死んでしまう。それに今あるものを取り残してこの世を去るなんてできない。

だけど、今の僕は違う。

僕は今ならいいかもしれないと考え始めた。

僕は胸の中でそう思い、力がうまく入らない自分の体を動かしながら、僕を助けてくれた喰種の横をゆつくりと通る。

「お兄ちゃん…?」

僕を助けてくれた喰種は僕を止めるように声をかけた。その声は初めて聞いたのにどこか懐かしい。きっと彼女は僕をある人物として見ていると思う。

「身体がカネキケンでも、僕は君が知る人物じゃない」

カネキケン

その喰種はきつと僕をそう見えているだろう。だけど僕はカネキケンとは違う人物だ。

僕は彼の体を借りて生きている。

彼は僕を返せと何度も頭の中に問いかけているから、ただ恐ろしい怪物にしか見えなかった。

でもカネキケンについてわかったことがあった。

「でも、カネキくんはこんなにも想われているなんて、きつと素敵な人だったんだね……」

彼はたくさんの存在を守っていたんだ。

僕を守ってくれた喰種もその守られた一人で、彼はただ恐ろしい怪物じゃないとわかった。

彼はきつと、その存在を守ろうとしていたら何かに出会ってしまった。彼は眠りについてしまったんだ。

そういえば、カネキと言う名は前から一度耳にしたことのある。

初めて聞いたのは笑顔がすばらしい彼女からだ。

あの時どうして涙を流しながら僕をそう呼んだのか、今わかった気がする。

僕は自分を守ってくれた喰種の前に進み、苦しみもがくヤツの前に立った。

先ほどまでヤツから散々攻撃を受け、死ぬのが怖かった、僕。

だけど、その怖いという感情が消えていた。

今なら僕は消えてもいい。

君に返してもいい。

『……だから、僕に守る力をください』

僕は呟くように言うと、右手の親指で人差し指を折った。

d a w n

球世Side

痛みに耐え切れずに叫び続け苦しみもがく奴に接近する、僕。先ほど奴から散々攻撃を受けたにも関わらず、僕は立ち向かっていた。

「ちぢがうんだあだ!!あ”れ” ばじがたがなかつたんだあああ!!」

暴走する自分を抑えるように叫ぶ奴は接近してきた僕を赫子から赤い弾幕を放ったが、僕は瞬時に放たれた弾幕を避け、腰から爪の形をした3本の赫子を出し、暴走する奴に切り裂く。だが奴は僕の攻撃には怯まず、すぐさま僕の頭上に大きく飛び、そして苦しむ声を上げながら弾幕を放ちながら、僕に接近をする。

「あ”あ”あ”お”おれ” ばばば!!」

僕は接近してくる奴から避けようとしたが、体を動かさずにそのまま奴に大きく蹴りを加えられてしまった。僕は自分の体を動かしている感覚がしない。無気力に近い感覚がだんだんと体に染み付く。僕は再び奴に攻撃されるだけのパターンに入ってしまう。

『ねえ、ハイセ。僕がこわい?』

攻撃を受ける僕に聞こえる、君の声。

君が僕に無気力のような感覚を作っている。

「…うん」

『なんで?』

「君は強いから…」

今の僕じゃ扱い切れない君の力。

「それに、君の計り知れないほどの暗さが怖いんだ」

満たされないことに嘆く君の心。その二つが僕が君に恐怖を抱いてしまう要因。それらを払拭しても僕が消える恐怖が前に立ちはだかる。

君に体を渡してしまえば、僕は死んでしまう。今まで生きてきて数年の時が一瞬にして消える。

「ぐぐぐぐづづづづづづ」

ふと気がつく、僕はまた奴に首を掴まれていた。僕をまつすぐと見る奴は荒々しく息をし、僕の首を掴む手に徐々に力を入れる。奴に首を掴まれた僕は抵抗しようとしたが、反撃する力が体から湧き出なかった。痛みが首にきているのだが、痛みよりも意識が遠のく感覚が刻々と強まってくる。

『ハイセ、ハイセ』

ああ、僕はこのまま死ぬんだ。

『聞いて、ハイセ』

今まで積み重ねたものが一瞬にして終わる。僕が指導してきた子たち、僕を指導してくれた人たち、僕と共に戦ってきた人たち、そして――

『ハイセ、お願い』

『僕（ ）を消さないで』

すると奴と戦っていたはずの僕の前にはしろい子供が立っていた。その子は僕の胸を掴み、顔を下に向け泣いていた。その子は暗闇から聞こえた人物とは違い、はつきりと姿が見えていた。そこのは『お願い、お願い』と恐怖に怯えながら涙を流していた。

僕はその子と同じく怖がっていたんだ。

消えてしまう恐怖に

「――わかった」

僕が君にそう言う現実に戻り、僕の首を掴んでいた奴の手を強く引き離し、頬を喰い千切った。

「おれを…食った!？」

奴が僕の行動に驚いた瞬間、僕はすぐに奴から離れる。

――僕が、救う

――怖がつている君のために

奴から離れた僕は腰から再び赫子を出し、そして――

「っ!!!」

僕は腰に生えた赫子を奴の腹部に命中させた。先ほどよりも浅くではなく、深く腹部に赫子を突き刺した。そして深い傷を負った奴は静かに床に倒れていった。

「…っ」

僕は身体中にあつた気力を一気に使い果たしたようにばたりと倒れた。僕は奴と同じく地面に倒れたのだ。あまりにも力を使い果たし、自分のまぶたがゆっくりと閉まり始め、そのまま眠りにつこうとしたその時だった。

『ハイセ、起きて』

すると僕の中にいた君が、再び僕を呼びかけ、倒れていた僕はゆっくりと目を開いた。前を見ると僕を助けてくれた喰種が喰種捜査官に取り囲まれていたのだ。その喰種捜査官たちは通常の捜査官とは違い白いロングコートにフードをかぶった捜査官たちであった。僕は彼らの姿を見て、どこの班なのかすぐにわかった。

(…有馬さんっ！)

するとホールの奥に白髪の男性が立っていた。その人は僕が知る人物である有馬さんだった。有馬さんが率いる有馬班が僕と奴、あとは僕を助けてくれた喰種、三人しかいなかったホールに集結していた。有馬さんは右手にランス型にクインケを持ち、僕を助けてくれた喰種に一步一步と近づいていく。不味い、このままでは彼女が駆逐されてしまう。

「ま… まつてくださいい…」

僕は体の痛みと遠のく意識を押しさえ込み、彼女に近く有馬さんに呼び止める。彼女をどうか救わないと…

「… ”ハイセウ”」

有馬さんは僕の声の耳にすると、ピタリと足を止めた。その姿を見た僕は床から立ち上がり、床に平伏す彼女の元に近づいた。彼女の元に進んでいると先ほど戦っていたはずの奴はいつの間にかどこかに消えていったに気が付いたのだが、僕はそんなことを気にする余裕はなかった。僕は彼女の前に立ち、有馬さんにこう伝えた。

「彼女は僕が追い詰めました… 所有権は僕に… 頂いてもよろしいでしょうか？」

僕がそう言うのと有馬さんは彼女にクインケを向ける様をやめ、「医療班を、”佐々木一等”が負傷だ」と言いその場を去った。

ああ、また僕は喰種に手加減を与えてしまった。有馬さんに何度も注意されているにも関わらずに。だけど今回はいつもとは違う。喰種であるはずの彼女が僕を助けたのだ。彼女が僕を助けたのは、ただの偶然じゃない。

きつと彼女は――

長かった夜に終わりをつけるように真っ暗だった視界がだんだんと青い明るさになる森。

俺は腹部にできた傷を手で抑えながら森の中に駆け抜けていく。先ほどオークションが白鳩ハトによって壊滅した報告を耳にした俺は会場からすぐに脱出し、森の中へと入っていった。

(そろそろ目標の場所につくな…)

オークション会場に向かう前に各班ごとに合流ポイントを設定し、おそらくは何人かがそこにいるはずだ。俺はそう思い合流ポイントに向かっていると…

(…なんだこの匂いは?)

すると何やら血の匂いが鼻に突く。その匂いは人間の血ではなく、俺と同胞の喰種の匂いだ。通常ならば気にする程ではないのだが、明らかにただ事ではないと察した俺は目標の場所に着くと…

「……!!」

合流ポイントに着くと、そこには同胞であるアオギリの喰種たちの骸が転がっていた。俺はその光景を見て驚きのあまり固まってしまった。倒れている奴らは俺よりもだいぶ強く、多くの白鳩ハトを殺してきた歴戦の奴らだ。その仲間が無残にも原型が見えないほど体がやられていた。

(…誰だ?)

異様な光景に固まっていた俺は倒れる無数の死体の先を見ると、まっすぐと立つ人を見つけた。そいつは黒髪の短髪に黒のドレスをきた女だった。

(もしま、奴は白鳩ハトの鈴屋か!)

俺はすぐ様身構え、赫子を出そうとしたその時――

「……!?!」

突如俺は地面に倒れてしまった。それは自分の意を反した行動で、ばたりと草が生い茂る地面に倒れた。

(な、なんだ…!?)

俺は一体何が起きたのか把握できず、すぐに立ち上がろうとしたが…

「っ―」

うまく立ち上がることができない。足の感覚が全く感じられず数十秒後が経つと、叫びたくなるほどの痛みが現れた。すぐに手足を確認しようとしたその時…

「お前の探し物はこれか？」

女の声が聞こえた後、倒れる俺の目の前に手足が地面に無造作に落とされた。その手足は俺がついさつきまで動かしていた手足であった。

「お前は、オークションから逃げ出したアオギリの喰種か」

「…っ！」

俺は声が聞こえた上に顔を上げると、女が俺を見下ろすように立っていた。すると俺は女の顔を見た瞬間ハッと息を飲んでしまった。

「なんだその顔は？私に見覚えがあるのか？」

「お前は…！オークションに参加した喰種では…っ！」

俺はこの女にはつきりと見覚えがあつた。この女は白鳩ハトではなくオークションに参加していた喰種だ。なぜ奴が同胞である喰種を殺したのか？と考えていると…

「お前は阿呆か。よく嗅いでみる。お前の鼻はなんのためにある？」

女はそういうと持っていた杖を俺の鼻に向けた。俺は息を吸うと、全く違っていた。匂いは人間だ。あの時、横に通った時は匂いは喰種だったはずだが、喰種の匂いが微動たるも感じない。

「哀れだな。貴様らの逃げゆく姿はまるで鎌倉の軍記物語を思い出す」

女は光が見えない目で俺をあざ笑う。

「お前らの組織は私にとつて邪魔な存在だ。少しでも数を減らさねばな」

女はそう言うとお柄つかをしつかり握り、杖の持ち手を引くと杖の中から白銀の刃が現れた。俺はその刃によって動きが封じられたと察したことに気がつき、そしてこの刃によって多くの喰種が葬られたと察した。俺は刃を見た瞬間、この女は只者ではないと解釈をした。だが気がつくのは遅かった。抵抗することができずもう何もできない。

「そうだ、冥途の土産として私の名を覚えるがいい」

刃を俺の頭に向け、女はこう言った。

「私の名は白雪千夜。しらゆきちよ 邪魔な存在を消す掃除屋だ」

そして女は逃げる手足を失った俺に刀は振り落とし、俺は一瞬にして視界と音を失った。

それが俺が最後に聞いた言葉であった。

あの声はとても静かで、まるであの世から迎えにきた死神のような冷酷な声だった。

卯月Side

ぐっすりとベッドに寝ていた、私。つい数時間前までは眠ることができなかった私は彼から頂いたパーカーを着て、深い眠りに戻る事ができた。段々と刻が立つと真つ暗な夜空が映っていた窓が段々と明るくなってきた、そしてそこから太陽の光が現れ、眠っていた私を起こさせました。

「…ん」

私は体を起こし、ゆつくりと手を伸ばした。ぐったりとした疲れがなく、いい目覚めだ。

(いつの間にか寝ちゃったな…)

彼のパーカーのおかげで、眠れなかった私にしっかりと睡眠が取れた。他の人に言ってしまうはおかしいんじゃないかと言われるかも

しれないけど、私は本当にこのパーカーを着てしつかりと眠れた。まるで彼に抱かれたように感じるからかもしれない。

(電話はできなかつたけど、次があるからいいや。)

寝る前に佐々木さんとメールで話したんだけど、今回は佐々木さんとは電話で話せなかつた。だけど別の最後じゃないし、また次回に電話をしたらいい。また次があるんだ。

私はそう思い、ベッドから立ち上がった。

文香 S i d e

暗かった部屋に反するように現れる朝日がカーテンの隙間から光が差し出す。その光は私の体に当たり、眠っていた私を起こす。

(……)

私はゆっくりと目を開くと、疲れがたまる体を立ち上がらせ、髪の毛をわしゃわしゃとかき乱した。

憂鬱

眠りから覚めた私が最初に浮かんだ感情。今日は私が苦手なダンスレッスンがある。それが数時間後行われる。そう考えてしまうと、無意識に舌打ちをしてしまう。

(……なんでダンスがあるの?)

ああ、やめたい。休んでまたベッドに寝転びたい。だけどやめたいなんて簡単に言えない。今の私は引き返すことができない程有名に

なってしまったんだ。私が休んでしまえばたくさんの人に迷惑をかけてしまう。

(…携帯)

枕の横に置いてあった携帯を取り出すが、結局画面には何も通知が届いてはいなかった。私が愛する人からの連絡もなく、あるのは味気ない携帯の壁紙。ここ最近佐々木さん以外と話した記憶があまりない、私。他の人との連絡はいいのだけど、やっぱりあの人からの連絡は誰よりも嬉しく感じられる。

なにしてるんだろう、私

大学を卒業をした同じ学年の友達に満足的生活をしているけど、私は何も方向性のないまままでアイドル活動をしている

なんのためにアイドルになったんだろう

今更そう思い返しても答えが返ってくるわけがない

私は誤った選択を身を任せてしまったのだから

聖なる夜

琲世Side

季節は肌寒い時期となり、訪れたクリスマス。シャトーではクリスマスパーティーが行われた。クリスマスパーティーには僕たちクインクスだけではなく、11月のオークション戦でお世話になった人たちをシャトーに招き入れた。

「有馬さん、コーヒーです」

「ありがとう、琲世」

そのお世話になった一人に有馬さんが来てくれた。もちろん他にアキラさんや什造くんも来てくれて、最初皆はリビングの方にいたけど、しばらく経つと僕と有馬さんは奥の部屋でゆっくりコーヒーを頂いていた。

「琲世、このコーヒーはインスタントか？」

「いえ、市販のインスタントじゃなくてちゃんと豆から作りましたよ」

「そうか、コーヒー豆をちゃんと苗から作ったのか」

「ち、違いますよ！豆はお店から買った焙煎豆ですよ！」

すらっと出てきた有馬さんの天然発言に僕は思わずツツコンでしまった。有馬さんの天然ぶりは相変わらずだ。さすがにコーヒー豆を栽培からやる余裕は僕にはない。

「コーヒー豆をコーヒーミルで砕いて、あとは淹れただけです」

「そうなんだ。でも普通に淹れたコーヒーとは言えないほど味がいいな。もしかして自分で勉強をしたのか？」

「ええ、独学です・・・と言いたいです、恥ずかしながら楓さんに教わりました」

「楓・・・高垣楓のことか？」

「はい、楓さんはコーヒーを作るのが結構上手なんです。テレビだとお洒好きいなって言われているんですけど、」

「そうなんだな」

11月後半の時に楓さんの家に一度訪れ、楓さんの淹れた美味しい

コーヒーを作れるように学んできた。最初は楓さんのように美味しいコーヒーを作れるか不安だったが、なぜかやる工程はすんなりと全部覚えられ、楓さんほどじゃないけど自分なりにいいコーヒーが作れるようになった。

「…ここまで琲世にうまいコーヒーを教えた彼女に感謝しないかな」

「いやいや、それほどでも…」

僕は有馬さんの言葉に少々恥ずかしくなった。そういえば楓さんは有馬さんと同じく天然だ。しかも二人は一度も会ったこともないから、もし二人が会ったらどんな感じになるだろうと考えていたらしい。

「そういえば、琲世」

「はい？」

「シャトーに来て思ったんだが、なぜ卯月達を呼ばなかった？」

「…え？」

突然の有馬さんの思わぬ言葉に僕は固まってしまった。

「さ、さ、さすがに卯月ちゃん達は呼べないですよっ！」

僕は焦った様子でいやいやと手を横に振った。実はクリスマスパーティーの時に卯月ちゃん達を呼ぼうか考えたのだけど、この時期の彼女達はおそらく仕事で疲れているのではないかと思い、パーティーに呼ぶことを断念をした。

「別に琲世の友達を呼んでもいいと思うんだけどな…」

でも、有馬さんは卯月ちゃん達をパーティーに招くことに何もおかしく感じることなく僕が淹れたコーヒーを飲む。

「い、いや、有馬さん。卯月ちゃん達はクリスマスのお仕事で疲れていると思うんですが…？」

「でも年に会う回数は少ないだろ？それだったら来年のクリスマスは呼んでもいいんじゃないかな？」

「来年ですか…まずはOKしてくれるかわからないんですが…」

たとえ卯月ちゃん達がOKを出せても他にも問題がある。例えば週刊誌に乗らないように注意しないといけないし、あと卯月ちゃん達

のそれぞれのプロデューサーさんにも言わないといけないなど色々
と面倒なことが起きるはずだ。

「卯月達とは会ったことはないけど、琲世とはお世話になっているし、
それにお礼を言いたいからね」

「… とりあえず頑張って交渉していきます」

来年のシャトーに卯月ちゃん達が来ると考えるだけでもどこか嬉
しく感じ始める。

来年の僕は一体どうなっているんだろう？

卯月Side

クリスマスイブの夜。今日はお仕事はもちろんありません。クリ
スマスということでもいつもより夜遅くに仕事が終わわり、それでいつも
の私なら家に帰ればすぐに寝ますがー

「はい、みんな。メリークリスマスー！」

「メリークリスマスー」

今日の夜、私が住むマンションで私と凜ちゃんそして未央ちゃん三
人のクリスマスパーティーが行われました。クリスマスパーティー
と言っても大掛かりでやるものではなく、少しお菓子を飲み物を用意
して話すだけのお茶会みたいな感じです。

「いやー、久しぶりにしゅりんとしまむーと話せて嬉しいよー」

「そうかな…？いつも未央って私に電話してくるから全然久しぶり
感がなかったんだけど…」

「それはひどいよっ！しぶりん！」

「まあ、まあ、二人とも。こうして会うのは久しぶりですからいいじゃないですか…。」

本当はクリスマスパーティーをする予定はなかったのですが、未央ちゃんが『今日みんなが集まらない？』と提案し、凜ちゃんと未央ちゃんは既にお仕事は終わっていたのですが、私はちょうどお仕事が終わってしかもだいぶ疲れていたので参加はできないと言ったら、未央ちゃんが『じゃあしまむーの家でパーティーする？』と提案し、それで私の家でパーティーをすることになりました。

「それにしても未央、卯月の家でパーティーは結構無茶な提案だと思うんだけど…。」

「だ、大丈夫です、凜ちゃん！今日まさか凜ちゃんと未央ちゃんに会えると思っていなかったの、会える機会ができたから嬉しいです！それにここ私の家ですから、もし眠いと感じたらすぐに寝ますよ！」

「…しまむー、本当に眠かったらすぐにベッドに行つてね？流石に提案した私に責任が…」

「大丈夫ですよ、未央ちゃん！」

私は心配する二人に元気そうな声で返しましたが、実は結構眠いです。今思えば少し無理をしてしまったのだけど、私が無理をしてもパーティーをしたかったのは二人に会えるからだ。私がアイドルになった当初は仕事はいつも凜ちゃんと未央ちゃんと一緒だったのだけど、今は別々で活動しているため会う機会はそんなにないです。だから今日みたいな突然空からやってきた幸運を逃すわけにはいかなと私は無理をしても二人に会いたかった。

「そういえばしまむー？」

「ん？」

「佐々木さんも呼んでもよかつたんじゃないかな？」

「佐々木さん…。」

私の家に集まる前、メールで未央ちゃんから『佐々木さんに参加するか聞いてみる？』と私と凜ちゃんに聞いたんだけど…。

「… 佐々木さんをこんな時間にお誘いをするのは迷惑かなっ

て…」

私は最初佐々木さんを呼ぶのを賛成しようと思いましたが、そもそもこのクリスマス会は何も前触れもなくも突然行われたもので、佐々木さんに負担をかけてしまうのではないかと思ひ、結局お誘いをするのをやめました。

「今頃、佐々木は寝てるよ。私がいっつもメールする時そうだもん」
「あー、確かに。私もそうだよ。佐々木さんは佐々木さんで忙しいかもね」

佐々木さんは喰種を退治する喰種捜査官だから私が考える以上に忙しいかもしれない。だから今日パーティーに呼ばなかったのは正解かもしれない。

でも本当は佐々木さん呼びたかった

佐々木さんを私の家に来させて、ワイワイと楽しみたかった

次のクリスマスは彼と一緒に過ごしたい

クリスマス・イブがそろそろ終わる夜。

「みんなおつかれー★」

「おつかれ〜♪」

「お疲れ様です」

今日はクリスマス・イブと言うことでアタシが住むマンションでアタシは志希と文香さんと一緒に集まって飲んでる。普段みんなとは仕事で会う機会がなく、一週間前に志希がみんなが集まらないかと提案し、それでアタシが住むマンションでやることになった。

(引越して正解だね… というかアタシのマンションが最適だわ…)

今時計を見るとそろそろ日付が変わる頃で結構遅い。もし莉嘉とお母さんが住むマンションだったら間違いなく実行はできなかった。ちなみに候補で志希の家か文香さんの家があったんだけど、志希は薬品臭さで飲み会ができず、文香さんは一人暮らしではなく親戚の人と暮らしているため、普通に一人で住んでいるアタシの家が結局選ばれた。

「美嘉さんこうしてお会いするのはお久しぶりですよね？」

「うん、久しぶりに文香さんに会えて嬉しいですよ」

今回の飲み会で文香さんと久しぶりに会えて嬉しかった。志希は意外と事務所で会ってて、よく家から引張り出している。話を戻して文香さんはアタシとは違った可愛さや大人っぽさがある二つ上の方で、憧れるところもある。

「最近美嘉さんはとてもお綺麗ですし、お仕事の方もー」

文香さんが話していたその時だった。

「いや〜文香ちゃんは相変わらず可愛いね〜♪」

すると突然志希が文香さんに抱きつき、じゃれつき始めた。

「… って志希！文香さんを困らせる真似をするな！」

アタシは突然文香さんにくっついた志希を離れさせようとしたが、志希は「いいじゃん、いいじゃん♪」と中々離れなかった。

「あの…美嘉さん。志希さんは私と一緒にいたいようなので離さなくともよろしいかなと」

「ほーら、文香ちゃんの言う通りだー」

志希は文香さんが言った後に煽るようにアタシにそう言った。

「あんたは…まったく」

アタシは煽る志希を文香さんから離すのをやめた。

「そういえば、志希。あんた最近仕事を減らして自分の研究室に籠っているって聞いたんだけど…」

「おや？それは誰から聞いたのかなー？」

「…あんたのプロデューサーからだよ」

アタシはそういうとわかりやすくため息をついた。前までは志希はアイドル活動に専念していたのだが、ここ最近なぜか研究室に籠るようになった。どうしてなのか志希本人に聞くが、大体返される言葉は『あたしのマイブームが到来した』と言う。

「これからどうすんのよ、志希？このままアイドル活動はするの？」

「あたしは…これからどうしようかなー？このまま研究してもあれだし…文香ちゃんはどうかかな？」

「…え？私ですか？」

「急に文香さんに話を振るな」

文香さんは突然志希から話を振られ、少々戸惑っていた。志希は相変わらず自由奔放なところは変わってない。

「わ、私は…今やっているお仕事に専念します」

「今文香さんがやっているお仕事ね、いいじゃん」

「文香ちゃんはべっぴんさんだもん」

志希はそう言うとき文香さんの頬を自分の頬をくっつけ、スリスリとすり合った。文香さんはここ最近モデルの活動を少々ながらやり始めたと耳にしている。文香さんは綺麗な方だし、これからはいいかもしれない。

「そういえばみんな最近何かあった？」

「何か？」

「うん、あたしは新しい薬が出来上がったんだけど、ちょうど実験台がないんだよね。どこかにいい人はいないかな？」

志希はわざとらしい口調でアタシをじっと見つめる。

「だからアタシを選ぶな!!」

アタシは散々志希の実験台になりかけたことがあり、変な薬の飲まされそうになったりした。

「じゃあ、美嘉ちゃん。実験台になりたくなければ、最近あったことを言うんだっ！」

志希はそう言うのアタシにピンつと指をさした。

「さ、最近ね… あ、そうだ」

するとアタシは最近会ったことを思い出した。

「そういえば、この前に佐々木さんから電話きたんだよね」

「おや？ササハイさんから？」

「うん、その時はアタシの誕生日前だったんだけど、なぜか誕生日おめでどうと言われたんだよね」

不思議に感じた。別に当日でも数日経って言えばいいのにどうして前日の夜に電話をしたのかわからない。あの電話は一体何だったんだろう？

「なんでなのかわかんないけどー」

アタシが淡々とは話していたその時だった。

『…はっ…』

すると聞いたことのない冷たい声が突然部屋の中に聞こえた。

「…えっ？」

アタシはその声を耳にした瞬間、思わず話を止めてしまった。あまりにも明るかった空気が異様な空気に一変した。その冷たい声がし

た方向を見てみると…

「…文香さん？」

その声はアタシでもなく志希でもない。声を出したのは文香さん以外いなかった。

「あ…い、いえ…なんでもありません…」

文香さんは震えた声でそう言うと言と視線を下に向けマグカップを持っていた手はぶるぶると異様に震えていた。

「どうしたんでー」

「寒いんだよね、文香ちゃん？」

すると話していたアタシに、文香さんの横にいた志希が割り込むように言葉を遮った。

「…は、はい…少々寒いですね」

「文香ちゃんは…確か…そう、冷え性だったよね？ちよつとあたしの体温で温まってね」

志希はそう言うと言と震える文香さんをぎゅつと抱きしめた。

「美嘉ちゃん、ちよつとエアコン温度あげてくれない？」

「え…あ、うん。と、とりあえずエアコンの温度を上げるよ」

アタシは志希にそう答えるとエアコンのリモコンを取り、温度を2度上げた。別に寒いと感じる寒さじゃないけど、アタシは疑問を口にはせず、志希の指示通りにエアコンの温度を上げた。しばらく文香さんに言及する機会は訪れずにアタシたちの飲み会は終わってしまった。

さっきの声はなんだろう？

あの声は明らかに何かに対して反発した声にしか聞こえなかった

それに文香さんの震えは明らかに冷え性の震えではない

だとしたら文香さんは一体どうしたんだろう？

見ていない内に一体なにが…？

前半と後半

球世Side

11月4月の前半

春が訪れ、僕は一年をとった。

つい先ほど都内にあるドーム型の会場でCCG昇任式が行われた。式典終了後のパーティーではCCG昇任式で出席し階級を昇級した喰種捜査官はCCGの軍服に似た礼装を着ており、昇格しなかった捜査官は通常勤務時に着るスーツを着ている。

僕たちクインクスは式典では全員は礼装を着用していた。オークション掃討戦で功績を上げ、みんなはそれぞれ階級を昇格し、僕は一等捜査官から上等捜査官へと昇格した。

(これで本格的にクインクスの必要性が認知してくれるはず...)

今までクインクスはよろしくない評判で他の喰種捜査官から懐疑的な目で見えていたのだが、オークション掃討戦で功績を上げたため今までのクインクスの見方が一変し、来年には新たに増員する話が出るほど評価が上がった。これで他の捜査官からクインクスが今のCCGには必要な部隊であるとわかってくれるはず...

「この年で上等捜査官になるとは大したものだ」
「っ！」

すると考えていた僕に礼服を着たアキラさんが声を僕にかけてきた。

「あ... えっと... どうも真戸^{まど}暁^{あきら}准特等」

「よせ、気恥ずかしい」

僕がアキラさんをそう呼ぶと、アキラさんは少し眉を寄せた。いつもと違う呼び方で不慣れだからだったかもしれない。アキラさんも同じく昇格し、上等捜査官から准特等捜査官へと階級が上がった。

「それにしてもアキラさん。その年齢での准特等もとてもないですよね...」

「ああ、確かに普通ならば無理であるが、今はアオギリの台頭により激戦続きで功績が上げやすい。私はようやく母と肩を並べたが...」

あ、そうそう」

アキラさんはグラスに注がれたドリンクを一飲みすると、何かに気がついた仕草をした。

「そういえば、ハイセ。ここで言うのもあれだが、つい最近オークション関連で奇妙なことがわかった」

「奇妙なこと？」

「ああ、この前の11月に我々が戦ったオークション会場の近く林から、逃亡したアオギリ構成員の死体が新たに見つかった」

「…え？」

僕はアキラさんの言葉に静かに驚いた。オークション掃討戦から4ヶ月経った今、もう聞くことがないだろうと思っていた情報が再び表に出たからだ。

「オークション会場外で見つかった共食いされた喰種とは別の件ですよね？」

作戦後はオークション会場だけではなく周囲も徹底的に捜査をし、その後現場処理が行われた。その周辺の捜査で会場から逃亡したと思われるアオギリの構成員が発見され、その体から何者かによって喰われた跡が見つかった。だが今アキラさんから聞いている情報は新しいものだった。

「その通りだ。その喰種の遺体は周辺住民が発見し、警察から連絡が入った。まだ私は見てないが、もうすでに白骨化していたそうだ。今の所、骨には赫子の跡らしきものが見つかってないため、死因は不明らしい」

赫子の跡は喰種捜査をする上ではとても重要で、その喰種は捜査官がマークしている喰種なのかそれとも新たな喰種なのかなど特定する上で重要な判断材料だ。

「現場を見た捜査官はおそらくは餓死ではないかと言っていたのだが、私の勘ではアオギリの樹以外の何者かの手によって駆逐されただろうな」

「アオギリの樹以外の何者かですか？」

「現時点ではわからないが、今後も調べる必要がある」

アキラさんが話した件は、今後捜査する必要だある件だと思われる。今CCGはアオギリの樹に目を向けているが、他の組織なども同じく目を向けなければアオギリの樹と手を組まれるか、もしくはアオギリの樹並みに成長するかもしれない。

「それにしても奇妙だな」

「ん？奇妙？」

すると突然、アキラさんはなぜか奇妙を強調するように口にした。

「ああ、そうだ。とてもと言うほど奇妙だ」

「奇妙ってその何者かのー」

「いや、全く違うな」

「え？」

先ほどの事件の話の続きかと思ったのだが、全然違うらしい。

「なにが奇妙なんですか？」

「ああ、それは4月に入ると感じるんだ。最初の二日はまあ察せてわかるが、その二日を過ぎると別にその月に誕生日がないにも関わらず1日が経つたびになぜか楽しみにしているヤツがいるんだ」

「??？」

先ほど話題からかなり飛んでいて、全く理解ができない。アキラさんの話が見えてこない。

「あの…アキラさん。一体何を話しているんですか？」

「ああ、すまない。今月末に卯月の誕生日を楽しみにしているお前を話していたのだが？」

「…はい？」

突然卯月ちゃんのお誕生日の話題になり、僕は状況を掴めてない。

「な、なんで急に卯月ちゃんの話をつ!？」

「こら。大声で言うな。変に広まるぞ」

アキラさんは冷静に突っ込まれた。改めて僕は小さな声で「なんで卯月ちゃんのお話を…？」とアキラさんに聞いた。

「全く、ハイセは。今のお前は去年のお前と同じだ。卯月の誕生日が近くたびにウキウキとしている」

言われてみればアキラさんの言う通り、僕は4月に入った僕はとて

もウキウキしている。

「別に彼女たちとは会うなどは言わないが… ほどほどにしろ」

「ええ、わかってます。彼女たちはアイドルですからね…」

「それで今回もまたあそこか？」

「いえ、今回は場所が違います…」

いつもなら凜ちゃんの家で卯月ちゃんの誕生日会をするのだが、今回は違う。

「違うのか？なら場所はどこだ？」

「えつと…それが…」

僕はアキラさんの耳元に近づき、小さくこう伝えた。

『今回は卯月ちゃんのお家で誕生日会をやるんです』

未央Side

11月4月の後半

桜の木にあったピンクの花びらが散り、緑色の葉っぱが徐々に増え始めた、この季節。私は今日の昼のお仕事が終わり、今から事務所から出ようとしていた。今日の私はいつも以上に上機嫌だ。

（今日はしまむーの誕生日！それにしまむーの家で久しぶりに佐々木さんと会える！）

今日は私と同じユニットであるしまむーの誕生日だ。前に会ったのはクリスマス・イブで、別に間は4ヶ月と短いように思えるかもしれないけど、私にとってはとても長い間だった。しまむーやしぶりんとみんなで集まれるのは年に数回程度だから、しまむーの誕生日にも関わらずまるで自分の誕生日を楽しみに感じている。

しかもそれプラス、久しぶりに佐々木さんと会えるんだ。しまむーとしぶりんは佐々木さんとは去年は2回以上会ったんだけど、私は残

念ながらしまむーの誕生日会の一回しか会えなかった。

(まあ、今日佐々木さんに会えるから問題ないかな?)

私はそう考え、そのまま事務所に出ようとホールで歩いていると…
(ん?…あれってもしや?)

すると私はホールにあるソファアに座っていた女性に目を止めた。
腰まで長い金髪をし、上品な雰囲気醸し出す女性。

「あつーこれはこれは、ちとせお嬢様じゃないですか!」

私はその女性の名前を言いながら、ソファアに座る女性に近づいた。その人の名前は黒崎くろさきちとせ。私より4歳上の方で、私と同じく346プロのアイドルをしている。

「あら、未央ちゃんじゃない♪」

ソファアに座っていたちとせお嬢様は私の声に気がつき、麗しく微笑んだ。実はちとせお嬢様とこうして話すのは結構久しぶりだ。事務所内ではよく見かけるのだけど、予定が合わないせいか会う時間がない。ちなみにちとせお嬢様は本当かわからないけど、吸血鬼の末裔と名乗っている。

「ちとせお嬢様。どうしたんですか?」

「ちようどレッスンが終わったから、今帰りを待っているところなのよ。とりあえず少しだけ隣に座ってくれるかしら?」

私は「いいですよ!」と答え、ちとせお嬢様の言う通りに隣のソファアに座った。まだしまむーの誕生日会まで時間があるし、久しぶりにちとせお嬢様と話せる。

「いやうちとせお嬢様と話すのは久しぶりですね」

「ええ、こうして話し合うのはめったにないよね♪それにしても今日はやけに気分いいみたいけど、どうしたの?」

「はい!今日はしまむーの誕生日で、今からしまむーのお家に向かうところなんですよ!」

「あら?今日は卯月の誕生日なの?それはおめでたい話わよね♪」

ちとせお嬢様はそう言うと、うふふっと笑った。

「誕生日会ね。なんだかその言葉を聞くとか楽しそうで、私も行ってみたいわ♪」

「じゃあ、このまま一緒にしまむーのパーティーに来ますか？」

私は勢いに乗るようになちとせお嬢様にお誘いしたが・・・

「別に行っても構わないけど・・・ おっとお迎えが来たわ。未央、外に出るわよ」

私が「お迎え？」と聞くと、ちとせお嬢様は「ええ、あそこに」と事務所の入り口に指をさした。私たちはそのまま事務所に出てみると、道路に一台の車がハザードランプを照らしながら止まっていた。「あの黒い車って・・・？」

真つ黒でいかつい空気を漂わせる外車が止まっていた。あまり車に詳しくない私でも、これは高級車だと言える車だ。

「ええ、あの車は私の家の車よ。そろそろ姿が見えるはずだけど・・・あ、出た出た♪」

すると黒の高級車から一人の女性が運転席から降りた。

「あの子は私の僕ちゃんよ」

「し、僕ちゃん？」

「まあ、流石に僕ちゃんと言う名前じゃなくて、千夜ちゃんと言う名前よ」

身長は大体150cm後半ぐらいで、黒色の短髪に黒スーツを身につけ、黒の手袋した女性だ。千夜と言う人はすぐに歩道側にあった後部席のドアの手前に立った。

「おかえりなさいませ、お嬢様。お迎えに参りました」

「ええ、ありがとうございます。千夜ちゃん。今日も運転よろしくね♪」

「はい。承知しました」

千夜さんは表情を変えることなく受け答え、後部席のドアを開いた。千夜さん姿も態度もまさに執事と呼ぶにふさわしい人だ。

「未央。すまないけど私はこれから自分の家に帰らないといけなの。じゃあ、またね未央♪」

「：あ、じゃ、じゃあね！ちとせお嬢様！」

私がちとせお嬢様に別れを告げるとちとせお嬢様は車に乗り、千夜さんがドアを閉め運転席に戻ると、ちとせお嬢様を乗せた黒の高級車は街の中へと姿を消した。

(今の執事の人、すごく可愛かったな…)

私は千夜さんを見るのは初めてはなかった。ちとせお嬢様が346プロのアイドルになった時から何度も見かけたけど、近くでみたのは初めてだった。最初千夜さんを見た時はちとせお嬢様と同じアイドルと思っただけど、『千夜ちゃんアイドルではないわ』とちとせお嬢様の口から知った。

前に私は『千夜さんは普通にアイドルになったらいいんじゃない？』とちとせお嬢様に聞いてみた。だけどちとせお嬢様は『一度プロデューサーからスカウトがきたんだけど、私から断ったわ。千夜ちゃん私の使用人という重要な立場を持っているからね』と言葉を返した。確かに使用人として重要かもしれないけど、一緒にアイドルになったら問題ないと思うんだけど…

本当の理由は一体なんだろう？

私はそう考えながらしまむーの家へと向かった。

我が主人

千夜Side

黒本革に包まれた運転席に乗り込んだ、私。漆黒の扉を締めれば外の騒がしい音を一気に遮断し、そして人差し指でエンジンをスタートさせると高出力のエンジンを搭載しているにも関わらず静かに始動する。当家が所有するこの車は高級車の名に恥じない大型セダンであり、ハンドルを握ればこの車の良さが身に染み、安物の車では味わえない高品質を味わうことができる。だが私には満足しないところがある。

「では、家に帰ります。お嬢さま」

「ええ、わかったわ。千夜ちゃん」

それは道路で走れば正解がわかる。ハンドルの右にあるシフトレバーをドライブに入れ、サイドミラーで後方を確認し、ハンドルの左にあるウィンカーレバーで右を合図し発進するとわかる。車を走らせると身にぐつと重力を感じられるが、残念ながらこの車は運転手重視ではなく、後部席に座る人に対して親切に作られている車だ。他のドライバーがこの車のハンドルを手に取りれば最高品質だと言うだろうが、私はそう簡単には言わない。

「はあく疲れたく。ほい、ぽちっ」

お嬢さまは肘掛にあったボタンを押すと、座席をさらに後ろに下げゆつたりと足を伸ばす。大概のセダンは後方の人間に対しては辛辣と言うほど乗り心地は悪いのだが、この車はベースモデルの車とは違い贅を尽くした車であり、セダンにも関わらず後部席はさらに後ろに下げることができ、席の下から足乗せのオットマンが現れる。さらに後部席中央には冷たい飲み物を収納ができる保冷庫が完備されており、まさに後部席に座る人間に対して親切な作りだ。

「お嬢さま、お体のほうはどうでしょうか？」

後ろに座ってらっしやるお嬢さまを見ることなく前を見て運転するする、私。この車の説明が長引いたせいで自分の名前を申し遅れてしまった。改めて申そう。私の名前は白雪千夜^{しらゆきちよ}。黒埼家に仕える者

だ。

「ええ、特に問題なかったわ。いつもよりきつかったけど、なんとか乗り越えたよ」

「無理をなさらないようお願いします」

後部席でゆったりなさるお嬢さまの名は黒埼くろさきちとせ。黒埼家次期当主であり、346プロダクションでアイドルである。お嬢さまは非常に美しい方であり、誰もが魅了するアイドルになられております。しかしお嬢様は昔からお身体が弱い方で、アイドルになった当初は何度もお体を崩されました。今は当初ほどお体を崩されることはなくなりましたが、やはり心配だ。

「ちーちゃん、今日の晩御飯はなにかしら?」

「本日は牛肉のトマト煮と春野菜のサラダ、デザートはいちごのムースデー」

「おお、どれも響きがいいね♪」

いつもならば料理はここまで紹介するのだが、今日はその”いつも”ではない。

「あとそれから、”肉”を口にする日です」

「あら? もうそんな日?」

「ええ、本日ちようど一月ひとしひが経ちましたので、お食事後にご用意します」

私の口に出た”肉”とは、牛肉でも豚肉のようなただの人間が口にするような食肉ではない。それは人肉だ。文字通り、人間の肉を用意する。

「結局、私の体は嘘はつけないのよね。なにせ私の家は喰種の血を受け継いでいるもの」

お嬢様は”肉”言葉にため息をつかれました。月に一度やらなければならぬ行為であり、通常ならば刑法に反する行為だ。だがお嬢様は刑法を反しなくてはならない理由がある。

「はい、お嬢さまの家は人間ひとと喰種の血を受け継いでおります。現在は人間の血が優っています、やはり喰種の影響が残っています」

「やっぱり私の家は自然に反している存在なのか、うちの人間のほと

んどが早世するのよね。お父さんはしばらく生き長らえそうだけど、私はお父さんよりも生きていけるかしら？」

お嬢さまは表では一人の人間として振舞っているが、実を言うと喰種の血を受け継ぐ人間だ。半人間もしくは半喰種とさえいいたいと思うが、お嬢さまは喰種のクォーターである。ただ半人間とは言いにくい。以前私は半喰種の者は他の人間と喰種よりも身体能力が勝ると耳にしたことがあるが、お嬢さまは喰種の血を受け継いでるものの半喰種のように身体能力は高くはない。それにお嬢さまは喰種だけではなく通常の人間と比べると衰えている点がいくつもあり、この家に入った時に家中から『ちとせお嬢さまは黒埼家史上もつとも病弱な方だ。あまり言いたくはないが、もしかしたら黒埼家はこれで断絶するかもしれない』と影を落とした話を聞いたことがある。

「…失礼ながら、お嬢様。そのようなご発言をおやめください。お父様が始めた食肉の効果が出ているはずですよ。お父様は歴代の当主よりも長く生きています。同じく食肉をなさっていらつしやるお嬢さまもさらに生きていけるはずですよ」

今まで短命だった黒埼家になんとか生き長らえようと黒埼家当主であるお父様は人肉を口にするという行動をなされた。当初は家中では『根拠のない解決方法』として反対の声があったのだが、今では詳しく分かっていないが効果が出ており、黒埼家が唯一長らえる方法として行なっている。お嬢さまは病弱であることは事実でも、お父様のように長く生きていけるはずだ。

「そうよね。千夜ちゃんの言う通り。少なくとも私がまだ生きてるのは、人間の肉を頂いているからかもしれない。それに先を絶望していたらダメだよ。まだ生きていければ、何かいいことが起きるかもしれないし、新たな物語を期待しなきゃね♪」

「新たな物語ですが。厄介ごとじゃなきゃいいですがね…。」

私たちは車内でそうした会話をしながら、家へと帰って行った。

私は黒埼家の使用人として、この家を守る定めがある

黒埼家を名を恥じない家柄を保つため、私は陽の当たらない裏で武器を取る

ここ最近、CCGではロゼが取り上げられていると耳にした

ロゼは確かただの喰種の集まりではなく、かつてドイツにいた名高い家の名らしい

名高い家とは言え、所詮社会の底辺にいる喰種とは変わりがないがな

話によればロゼは都内で大量誘拐をしている喰種集団として、今後S1班の捜査対象としてマークされる

全く、阿呆だ

なぜ目立つような行動をしている

ロゼという名高き家を自ら破壊する行動を起こすとは、まさに阿呆の極み

やつらは一体何を考えているだろうか？

考えるだけでも哀れに感じる

日が沈み始める夕方。

今これから楽しいことが始まるうとしていました。それは待ちに待った、私の誕生日会。誕生日会はいつもなら凜ちゃんの家でやっていましたが、今回は私の家です。私の家には凜ちゃんと未央ちゃんが来てくれ、リビングにあつたテーブルの中央には3つのケーキが並べられ、それを囲うように二人が作った料理が置かれていました。私たち3人は席に座っていました。そのままだが、まだテーブルにある料理に手をつけていませんでした。そのまま誕生日会は始めてもいいかもしれませんが、一つだけ足りないことがあります。

「そろそろ来るかな…?」

私はそう呟くと携帯の画面に表示された時計をちらりと見ました。私の誕生日を祝ってくれる人は凜ちゃんと未央ちゃんだけではなく、もう一人います。私たちはその人が来るのを待っていると、ピンポンとインターホンがリビングに鳴り響きました。

「おっ、ついに来たんじゃない?」

「今年も遅れてくるって失礼だと思っただけど…」

インターホンがピンポンと鳴ると、凜ちゃんと未央ちゃんはすぐに席から立ち上がり玄関へと向かいました。

(やっとなの人に会える…!)

私は手を口で隠し、とてもウキウキしていました。その人とは凜ちゃんと未央ちゃんと同じく頻繁に会える人ではなく、私が一番会いたい人です。私はそわそわと待っていると、その人はいよいよ現れました。

「誕生日おめでとう、卯月ちゃん」

「っ！佐々木さん、お久しぶりです！」

私はその人の姿を見た瞬間、無意識に声が上がってしまい、席から立ち上がり彼の元に駆け寄り彼の手を包み込むように握りました。

私がいいたくてしようがなかった人佐々木さんです。佐々木さんはCCGで喰種捜査官として働く二つ上の男性で、私はこうして会えるだけでも例えれないほど嬉しい。

「佐々木、今年も遅刻してない？」

「あはは・・・今年も遅れちゃってごめん」

「まあまあ、しぶりん！佐々木さんはある意味主役みたいなものじゃー！まさに主役は遅れてやってくるってやつじゃん？」

「主役って・・・今日は卯月の誕生日なんだけど？」

「佐々木さんが来てくれるだけでも、私は十分嬉しいです！」

彼に夢中になっていた私の言葉を聞いた凜ちゃんは「卯月がそう言うなら仕方ない」とやれやれとため息をつきました。私たちは私服を着ていましたが、佐々木さんの服装は白いコートに下には黒のスーツです。佐々木さんは去年と同様、仕事が終わってそのまま私の家に訪れました。私は喰種捜査官は考える以上に大変なお仕事だと佐々木さんから聞いていて、私の誕生日会に遅れるのは仕方ないと思っています。

「佐々木はコーヒーでいいんだよね？無糖のアイスコーヒーしかないけど」

「うん、それでいいよ。あと何も入れずにブラックで」

「それだったら私は砂糖を山盛りに入れたいんだけど、いい？」

「さ、さすがにそれは困るかな・・・」

凜ちゃんは「冗談、冗談」とふふつとからかうように笑いました。佐々木さんが頂くのはテーブルに乗せられているものではなくドリンクだけです。佐々木さんが私の家に来る前に『僕は食べないよ』と事前に聞いていますので、私たちは佐々木さんの分は用意していません。佐々木さんはよいしよと席に座ると、私たち三人は流れにのるようにみんな席に座りました。

「佐々木さんは今年も早く帰るの？」

「そうだね。晩御飯を作らないといけないし、あと今食べたら晩御飯が食べれなくなるよ。みんなはここで晩御飯にするの？」

「うん！私たちはこのまま晩御飯として食べるよー！」

佐々木さんは一人暮らしではなく、他の喰種捜査官たちと共同生活していると聞いています。それに料理の担当は佐々木さんがメインらしく、『なるべく遅くは帰らないようにしているよ』と言っていました。しばらく佐々木さんと会話していると、未央ちゃんが何かを思い出した仕草を見せ、佐々木さんに声をかけました。

「ねえねえ、佐々木さん」

「ん？」

「初めてしまむーの部屋に来たご感想は？」

「か、感想…？」

「そうそう！しまむーに失礼のない感想をどうぞ！」

未央ちゃんから突然の無茶振りに佐々木さんは戸惑いました。佐々木さんはあまりにも突然のことで目を泳がせながら考えたしたが、考えがまとまったのかやつと口を開きました。

「えっと… 卯月ちゃんの部屋は可愛い部屋だなんて思うよ。僕が同年代の女の子の部屋に入るの初めてー」

佐々木さんが私の部屋を見渡し、ちようど私の後ろに視線を向けたその時だった。

「ーっ！」

すると突然、佐々木さんは表情を歪め、左目を手で抑えました。

「佐々木さん…？」

「… あれ？佐々木さん、どうしました？」

「どうしたの、佐々木？」

私だけではなく未央ちゃんと凜ちゃんも同じく気がつきました。

「… ああ、なんでもないよ… 卯月ちゃん、ちよつとお手洗いを使っているかな…？」

「ええ、構いせんが…」

「佐々木。手洗いの横にある洗濯機の中を覗かないでね？そこ見たら殺すよ？」

佐々木さんは「流石に覗かないよ。わかってる…」と苦笑いをしながら席を外し、お手洗いに行きました。

「佐々木さん、急に手を洗いに行つてどうしたんだろ？」

「さあね。もしかして卯月の部屋に初めてきたから拒否反応が出たんじゃない？」

「拒否反応って、結構不慣れじゃん」

凜ちゃんとう未央ちゃんは佐々木さんが笑っていましたが…

「何もなかったら、いいですけど…」

私は二人の冗談話に自然と笑えず、作り笑いをしてしまった。先ほど佐々木さんが見せた痛みは、冗談がなく痛そうに目を抑えていました。

まさかと思うけど、私の後ろにあったものを見て何か感じたのかな？ ちようど私の後ろには写真が飾られているフォトフレームが置いてあり、他に目立った物は置かれていない。

佐々木さんのただ事ではない行動を考えていると、なんだかすごく嫌な予感がする…

命の水

球世Side

席を外して手洗い場に入ってドアを閉めた、僕。手洗い場は白が基調な部屋で、手洗い場の横には凜ちゃんが言っていた通りに洗濯機が置いてあり、後ろにはバスルームがあるとされる透明のモザイクがかかってある浴室ドアがあった。

(…)

僕は手洗い場の銀色の栓をひねり、蛇口から流れた水をすぐに顔につける。僕が席を外したのは数時間前に終わった仕事の疲れで薄々と出てきた眠気を消すためではなく、卯月ちゃんの部屋を見渡してたら突如痛みが現れたからだ。

「っ!!」

顔に水をつけていると、また痛みが現れた。痛みは左目の奥から現れ、まるで目玉をくり抜かれるような耐えきれないほどの痛み。僕は卯月ちゃんたちに気がつかれないように声を抑え、痛みを耐える。

(なんで…今出るんだ?)

この目玉をくり抜かれる痛みは初めてではなく、オークション戦以来から突発的に現れる。前に起きたのは僕が上等捜査官へとなった時で、痛みだけではなく知らない女学生が僕の記憶の中に現れた。フラッシュバックだ。ここ最近僕の知らない記憶が急に思い出すようになってきたのだ。

『どう、楽しい? ハイセ?』

「…なんでキミが現れる?」

痛みがしばらく続くと、僕の後ろに白い髪をした子供の姿をした彼が現れた。周囲は僕がいるはずの手洗い場から、何もない鼠色の空間へと気付かぬうちに変わっていった。

『ハイセは僕を嫌うような目で見るとね。なんでそんな嫌そうな目で見ると?』

「僕が卯月ちゃん達に会ったからキミが現れたのか? キミは彼女達と関係あるのか?」

『…さあね。彼女達のことをどうのこうの言っても、彼女達には聞かえないしね』

彼は全く感心しない顔で吐き捨てるように答えた。彼は見た目は幼い子供なのだが、彼の口から出る言葉は子供らしい言葉ではなく、ひどく残酷な言葉ばかりで見た目と大きくギャップが出るほどだ。

「それで、なんでキミは現れたんだ？」

『全く、ハイセはせっかち屋さんだね。早まっても何も得しないよ』

彼はそう言うと、わかりやすく大きくため息をした。

『僕はハイセに警告をしているんだ』

「警告…？」

『そう、警告。ハイセを悲しませないために僕はこうして現れたんだ』

「警告って、彼女たちがアイドルだから気をつけろと？」

『ハイセがわかっていて、僕がこうして口に出すわけないだろ？それにしばらく彼女たちと過ごして、どうして急に痛み現れたか考えれないの？』

彼はそう言うと素っ気ない態度で返事をした。

『気がつかないの？どうして僕が急に現れたかを？ハイセは気づかないの？』

「じゃあ一体なんだんだ！キミが急に現れた理由は！」

彼が僕に急かしているような口をしたため、僕は苛立ちを抱き感情的になってしまった

『言わない』

「言わない？それはどうして？」

『もし僕が今伝えたらきつとハイセはこう言うよ、「知らないやよかった」ってね』

「…？」

彼は一体何を言っているんだ？僕が「知らないやよかった」というほど重大なことあるのか？

『今のハイセは知らなくてもいい、いずれハイセか、もしくは彼女たちが答えを明かすよ』

「答え…？それは一体」

『待ってれば訪れてくるよ。だから僕を消さないでね?』

彼が僕の耳の元にそう言うと、一瞬にして姿を消した。

「…」

彼が消えたと気がつくのと、何も無い鼠色の空間が卯月ちゃんが住む部屋の手洗い場へと戻っていった。

(…やっと消えた)

僕は戻ったことを確認すると大きく息を吐いた。気分を損なった。せつかく彼女の誕生日会なのに、急に僕の中にいる彼が現れるんなんで、気分を損ねた。彼女たちと過ごすのは別に悪いことじゃない。彼女たちは僕を友達と思っているはず。

たけど僕が彼女たちと交流するたびに、わかってしまう。

どうして彼があの時、僕に警告をしたのかを

日が沈み、街の光が真っ暗な時間に景色を作る夜。お嬢さまと私は高層ビルの最上階にある階に住居を構えている。部屋は質素な家具は置いておらず、どれも外国製のきらびやかな豪華な家具ばかり。まさにお嬢さまが住むのにふさわしい住居だ。

「はい、(ち)ち(そう)さま」

食事が置かれる席に座ったお嬢さまは服を汚さないように着けていたナプキンを口元を拭き、本日最後の食事を召し上がりました。

「今日出された肉はまるで牛や豚とかの肉をいただいているみたいで、とても美味しかったわ」

「お嬢さまが美味しく召し上がって光栄です」

喰種の大体が肉を生で食べると聞いたことがあるが、流石にお嬢さまに生のままでご用意すると間違いなく体調を崩されるため、肉を加熱し、肉の臭みを消す香草のソースを加え、お口にしやすいように最後に減らさなければならぬ。さすがにデザートを減らす愚かな行為はしないがな。

「さてと…そろそろ ディージェステイフ digestif をお願いしてもいいかしら？」

「食後酒ですね、かしこまりました」

お嬢さまは食後はいつもお酒を飲まれます。でも流石に毎日お酒を飲むと肝臓に悪いため、一週間に二日ほどお酒を飲まない日を設けている。ちなみに先ほどお嬢さまが言った ディージェステイフ digestif はフランス語で食後酒だ。

「今日はどんなものをお飲みになりますか？昨日お父さまから、ホワイトポートをいただきましたが」

「ポートワインね。確かに食後酒にはお似合いだけど、今日は遠慮するわ」

お嬢さまは普段は果実系の食後酒をいただくのだが、本日は違うようだ。

「では、本日は何を召し上がりますか？」

「今日はウイスキーのロックを頂こうかしら」

「ウイスキーですね、かしこまりました」

以前、ある輩がお嬢さまのことをカシスオレンジのような甘い酒を好む女でお酒は弱そう、と呟きスクリュー・ドライバーなどのレディーキラーカクテルを出そうとしたことがあった。お嬢さまは確かに甘いお酒を嗜むことはあるが、決してアルコールが高いお酒が飲めないことはない。時にはアルコール度数が高いお酒をお飲みになる。

それはアルコールに慣れていないと楽しめない物ばかりだ。

「種類はどうしますか？」

ウイスキーには様々な種類を持つ酒であり、生産国別で見るとわかりやすいだろう。ウイスキーの名を聞いて高い酒だと認識してしまう者もいるかもしれないが、そんなことはない。高いものはもちろん高いのだが、安くて良いものもあることを知ってほしい。

「んー、新大陸産のバーボンやカナディアンは飲みやすく悪くはないけど、やっぱりウイスキー本家のスコッチにするわ」

「かしこまりました。スコッチですとシングルモルトやハイランドモルトがあります」

「うーん、そうだね。スコッチでも結構な種類があるからねー」

お嬢さまは人差し指を口元に添え、『うーん』を何度も呟き考えました。一言でスコッチと言っても、先ほど私の口で言ったシングルモルトやハイランドモルトがあり多種多様だ。

「ここは私の最初の苗字で書かれている」**黒** とつくウイスキーであり、かの有名な British の首相が愛したものをシングルで

「ブレンティッド・ウイスキーのもですね。かしこまりました。ではご用意します」

私は椅子から立ち上がり、様々な酒が綺麗並べられている酒棚を開け、黒い箱に入れられた細長いウイスキーボトルを取り出した。そのボトルには英国紳士が歩く姿が目印のスコッチで、味わいはいいものだ。このウイスキーは現在庶民でも買えるウイスキーだが、昔は庶民が簡単に手を出せないほど高いものであった。私はボトルを開ける前に綺麗に磨かれたロックグラスを用意し、冷蔵庫から綺麗に出来上がった丸氷を取り出し、そして丸氷を割らぬようロックグラスの中へと静かに入れた。次にまだ開けていなかったウイスキーボトルを開け、そのままロックグラスに入れるのではなく、よくカクテルを作るときに使われる砂時計の形に似た銀色のメジャー・カップに入れる。お嬢さまは先ほど言っていたシングルは30mlのことであり、人差し指ぐらい量と言うのが由来らしい。銀色のメジャー・カップで計り、そして丸氷が入ったロックグラスにメジャー・カップで計った

ウイスキーを入れ、最後に飲み物を混ぜるときに使用する細長い棒であるマドラーでかき混ぜれば完成だ。

「お待たせしました。どうぞ」

私はウイスキーに丸氷が入ったロックグラスと、お水が入ったコップをお嬢さまにお出ししました。お嬢さまはロックグラスを持ち、ウイスキーをぺろりと舐めた。

「はあ、いいわね。ぺろっと舐める感じで飲むのが、私がウイスキーの好きどころ」

お嬢さまはウイスキーを飲むとウイスキーが入っているロックグラスを置き、別に出されたお水を口に注いだ。そうしなければウイスキーの高いアルコールが身体中に周り、酔いがひどくなってしまう。

「はい。ウイスキーは一気に飲むべきお酒ではありません。あれを一気に飲むものは酒に対して無知な者か、ただの愚か者です」

「はは、面白いわ。それだけでも、いいおつまみだわ」

「それですとお口が寂しくなりますよ、お嬢さま。おつまみをご用意します」

私はそう言うとお嬢さまの前にナッツが入った小皿を出しました。

「ん、さすが千夜ちゃん。気が利くね」

「いえ、それが使用人がやるべき仕事です」

「はは、流石が私の使用人というかもしれないけど、千夜ちゃんも一緒に飲まない？」

「いえ、私はスコッチが苦手なものでして」

「つまり、泥炭（ピート）が嫌いなのです？」

「はい、おっしゃる通りです」

私は泥炭（ピート）の匂いが未だに好きになれず、嫌いのままである。スコッチは泥炭（ピート）の匂いがスコッチという個性を出しており、その匂いを漢方薬と例えるものもいるほど嫌うものは少なくはない。スコッチの中には泥炭（ピート）が抑えられているものもあるが、私の口が受け入れてはくれない。まだ日本産のジャパニーズウイスキーや、アメリカのバーボンの方が飲みやすい。

「さてと・・・お酒のお話は置いて、ここ最近前に20区にいた

美食家グルメのこと聞かないわね？」

「美食家グルメですか。久しぶりに耳にしますね」

お嬢さまがいう美食家グルメは人のことではなく、かつて20区で活動した喰種だ。しかもハツと驚くほど久しぶりに聞いた。

「それにしてもなぜ美食家を？」

「今ふと思い出してね。どうしてるかしらね？」

「おそらくは自分の家で引きこもっていると思われる。以前までは自分で食料を調達していたはずですが、CCGの情報によれば3年前から活動はなしとの」

「ありやりや、何かあったんでしようね。と言うか3年前と聞くと、ちようど20区の大きな作戦を思い出すわ」

「ええ、当時お嬢さまは島村卯月が20区内で取り残された情報を耳にしましたよね」

当時は島村卯月が20区内に取り残されたことに、346事務所内では結構なおおごとだったらしい。そりゃ活動休止している人気アイドルが戦場と化した場所に取り残されたと聞いたら黙ってはられない。

「ええ、作戦のことについては聞く耳はなかったんだけど、同じ事務所にいる卯月ちゃんを取り残されたと聞いた瞬間、耳がすぐに傾いちゃったわ。それにしてもどうして卯月ちゃんは取り残されたっけ？」

「作戦開始前に一ノ瀬志希の家から離れず取り残されたと言われていきます。その後はご存知の通り、喰種捜査官によって救出されましたね」

「ああ、そうだったわね。捜査官に助けられた…でも助け出すのに時間かかったよね？」

「そうですね。作戦開始から数えますと…確か5時間ですね」

「5時間って、喰種と捜査官が戦っている中の20区で、捜査官一人も見つかってないって、どれだけ運があってもカバーができないじゃないわ。何か隠されてない？」

「隠しごとですか。あのCCGならあり得る話ですね」

CCGはどの政府機関よりも秘密主義を貫く機関であり、喰種捜査官が使用しているクインケが喰種の赫子で作られていることや、喰種が絡んでいる事件を詳細など世間では謎に包まれた政府機関と言われている。

「ええ、私は絶対何かあると思うよ。CCGの元で働いている下の者が知らなくても、”上”が知っているはずだわ。あいつらはいつもそう、本当に汚い連中だしね」

「……」

お嬢さまは少々荒々しく言い、嫌なことを忘れたのかウイスキーを飲むペースを早くしました。

「全くあいつらはなんなのかしら？正義の味方気取りしてるけど、実際はとんだ悪者なのにね。これほど糞より汚い……」

「…失礼ですが、お嬢さま」

「ん？どうしたの？千夜ちゃんも一緒にあいつらの愚痴を言い合う？」

「お嬢さま。少しお水をお飲みになられたらどうでしょうか？気が荒くなっております」

普段では言えないことをポンポンと出せるのがお酒の良いところでもあり、悪いところである。これ以上お嬢さまの度が超えないよう、私はお嬢さまを落ち着かせました。

「… あー、ごめんね。つい本音が出ちゃったわ」

普段荒々しく言わないお嬢さまが奴らに事情がある。それは話せば長くなるため、またどこかで話そう。

「とりあえず、千夜ちゃんには3つの仕事をしてほしいわ。一つは今都内で目立ち始めた人さらいの喰種集団”ロゼ”の件、二つは美食家の消息の件、最後は卯月ちゃんが助かったのは本当に幸運がよかっただけなのかの件の3つを調べてほしいわ」

「結構多いですが、私は問題ありません」

どの仕事もそう簡単には終えることない危険なものだが、私には慣れたことだ。お嬢さまは私の言葉を聞いた瞬間、「ならよし♪」、と気分良く言い、丸氷から溶けた水で薄まったウイスキーを飲み干し、席

から立ち上がりました。

「それでよし、千夜ちゃん。私は歯を磨いて寝るから、じゃあおやすみ」

「おやすみなさいませ、お嬢さま」

お嬢さまは「ふふっ♪」と鼻歌をしながらリビングから立ち去りました。

「… また面倒なことがありそうだな」

私はお嬢さまが部屋に戻ったことを確認すると、大きくため息をした。今回の仕事の中の2つは間違いなく面倒臭く、最後の三つ目はおそらくはすぐは終わる。私は面倒臭さを消すためか、少量のグラスに先ほどお嬢さまが飲まれたウイスキーを一口ほど少し入れ、そしてそのままストレートでぐつと飲んだ。だけど私が飲んだ酒は面倒臭さを消すことなく、逆に私が嫌う泥炭（ピート）が真っ先に現れた。

「… 相変わらず、泥炭（ピート）がとても臭いな、こいつは」

やはり私にはこの酒を好むことはできない。飲めないとわかっているにも関わらず飲んでしまった私は馬鹿者だ。私は泥炭（ピート）の匂いを打ち消すよう、水を何杯か飲み、食器洗いや明日の朝食の用意など家事を済ませ、リビングから去った。

Side deals

球世Side

23区 コクリア

鋼色の重厚な壁に囲まれたこの施設は、作戦中もしくは捜査中で捕らえた喰種を収容する一般には公開されてないCCGの極秘施設だ。大概の喰種は作戦中や捜査中に駆逐するのが決まりだが（僕は駆逐までやらずに行動不能にして捕らえる）、重要な高レートの喰種はコクリアに入れられ、捕らわれた彼らは必要な情報を答え続けるか、もしくは自分が処分される日を待つしかない。人間社会で例えるならコクリアにいる喰種たちは、自分がロープが吊るされている処刑台に送られる日を待つ死刑囚だ。

「こんにちは、フエグチさん」

「… こんにちは」

「これ決まりで少ししか用意できなかったけど…」

「… ううん、いつも本の差し入れありがとう」

ガラス越しにいるのは女性の名は、フエグチさん。普通の人から見たら綺麗な女性だと捉えてしまうかもしれないが、彼女は人間ではなく喰種だ。しかも彼女は今CCGが殲滅対象であるアオギリの樹に所属していた喰種である。僕が彼女を生かしコクリアで収監させた理由は、アオギリの樹の情報を聞き出すためでもあるが、もう一つある。それはCCGにとつての利益ではなく、個人的な願いがあった。

「ありがとう、お兄ちゃん」

「…」

それは敵の存在である僕を助けたのだ。普通ならば喰種は人間を助けるなんてありえないのだが、彼女は違った。僕は去年のオークション戦でもし助けがなければ、僕はこうして生きてはいなかった。それだけではなく、彼女は僕が知らない過去の記憶を持つ人物だ。彼女と会うたび僕を最初佐々木さんと言わずに、いつもお兄ちゃんと呼んでいる。

「……調書、始めていいかな」

「……うん」

僕はそう言うとアオギリの樹に関する書類を取り出し、フエグチさんに質問を始めた。フエグチさんはアオギリの樹に所属していた喰種というところで、アオギリの樹に関する情報を持つ重要な喰種だ。彼女から聞くことは、例えばアオギリの樹に新たな喰種が加入したことや、内部についての詳細など聞き出す。

「……ご協力ありがとうございます。お疲れ様でした」

「……お兄ちゃんも」

「……」

いつもフエグチさんは僕が訪れるたび、彼女は悲しそうな顔で僕を見る。それはどこか既視感を感じる悲しい顔。

「あのフエグチさん？」

「ん？」

「何か本の要望はあるかな？」

「要望……？」

「例えば読みたい本の種類とか……あと本とは別に僕に聞きたいこととか……」

「……」

フエグチさんは僕の提案にしばらく黙り込んだ。僕が持つていける本は限られるが、どこか悲しむ彼女の要望に答えたい。

「あの……佐々木さん」

しばらく考えていたフエグチさんから出た言葉は、思わぬ言葉をであつた。

『卯月ちゃんと知り合ってますか？』

「…え？」

フエグチの言葉を聞いた僕は頭の中が一瞬にして真っ白になってしまった。

「卯月…？」

「うん。佐々木さんは知り合っていますか？卯月ちゃんはいつもお兄ちゃんのことを話してたの。だからもしかしたら佐々木さんと友達かもって…」

「…」

僕はフエグチさんの質問に口を硬くしてしまった。フエグチさんは先ほどアオギリの樹の情報を躊躇せずに言ってくれたのに、僕はフエグチさんのように言えなかった。僕に卯月と言う名に心当たりはあった。だけど僕が知っている卯月は普通の人ではない。

「いや…知り合っていないよ」

「知り合っていない？」

「うん。僕は卯月と言う人は知らない…」

「そうなんだ…」

僕は嘘をついてしまった。僕が知っている卯月はただ一人、アイドルの島村卯月だ。フエグチさんが言っていた卯月はもしかして…

「あの、どうして僕にその…卯月ちゃんの名を？」

「…ごめんなさい。なんでもない」

僕とフエグチさんのお話はそれで終わってしまった。フエグチさんは正直に答えたのに、自分は正直に答えられなくて恥ずかしくなった。だけでも僕が卯月ちゃんと知り合っていると云ったらどんな言葉を言うのだろうか？逆になんで卯月と言う名を知っているんだろう？まさかフエグチさんは卯月ちゃんと知り合っていた？もしかしたら、卯月ちゃんに聞いたら…

(…考えすぎだ)

それ以上余計なことを考えるな、僕。僕が知る卯月ちゃんとフエグ

チが何らかの關係を持つているわけがない。考えて混乱するなら、僕は考えるのをやめた。

僕はこの誰にも言えない複雑な思いを抑えながら、コクリアから去っていった。

美嘉 S i d e

346プロダクション入り口前。

今日はいなぜかいつもよりも早く起きてしまった、アタシ。流石にベッドに再び横になって二度寝をすることはせず、早く家から飛び出し、今日やるべき仕事がある346プロへと向かった。

(あれ?なんか集まってる?)

事務所に入ると、アタシは真つ先にある光景を見つけた。数人かの女性スタッフが困った顔で何か話していた。そのスタッフたちはアイドルを舞台に立つ上で大切な役目であるメイクアップアーティストさんだった。

「どうしたんですか?」

「あ!美嘉さん!」

アタシが声をかけると、メイクアップさんたちはアタシを見るとすぐに飛びついた。

「え?ちよつと、そんなに飛び出してどうしたんですか?」

「実は…志希ちゃんが見つからなくて」

「…また失踪ですか」

アタシは包み隠さずに大きなため息をしてしまった。志希の失踪が初めてならば焦りが出るけど、これは初めてではなく何度も起こしている行動。志希の悪い癖である。

「それで志希はいつごと失踪を?」

「つい数十分前なんですよ。楽屋で一人待機していたはずなんです

が… いつの間にかいなくなってしまうて…」

「ああ、マジか…」

志希はじつとしてするのが嫌な人間。楽屋で一人待機していたら、志希はすぐに逃げ出す。

「志希さんはあと30分ほどで現場に到着しないといけなくて、あと10分ほどで移動しないといけなくて…」

「10分って、見つけられるかな…」

志希の失踪はすぐに見つけられるものではなく、普通の人が探し出すだけで10分は無理だ。10分ぐらいだと志希をだいぶ知っている人じゃないといけないけど…

「美嘉さんって確か志希さんを見つけてるのがお上手ですよね？」

「… えっ!? あ、ああ、そうだけど？」

思わず変な声を出してしまった。話しかけてきたメイクアップさんは見た感じ新しい人で、言ったことは大概合っているのだが、いつの間にかアタシは失踪した志希を探すのが上手い人としては扱われていることに、まさか初めてお会いする人にまで知られていることに心底驚いてしまった。

「お願いできますか? 私たちは1時間以上事務所で探しまわったのですが、中々見つからなかったの…」

「アタシは仕事まで時間があるので、大丈夫です」

アタシは笑顔で言葉を返したのだが、正直言うと志希がいなくなったことと多くの人がアタシを志希を探すと認識させたことに生まれた苛立ちを隠すの必死であった。

「本当ですか!! ではお願いします!! 美嘉さん!!」

「わ、わかりました… すぐに連れ出しますので…」

アタシがそう言うのとメイクアップさんは「お願いします!!」と言い、メイクアップさんたちはアタシに志希を搜索するのを任せ、去って行ってしまった。

(ああもう!!! まったく、どこに行ったのよ、志希!!)

志希を探して欲しいとお願いしたメイクアップさんが去ったことに確認したアタシは、隠していた苛立ちを真っ先に表に出した。なん

だが朝早く起きた理由が、失踪した志希を探し出すためと言ってもいいほど偶然すぎる。

(さっさと連れ出さないとっ!!)

アタシは一人、346プロにいるであろう志希を探し始めた。朝の心地よさが一瞬にしてアタシから去ってしまった。

千夜Side

蒸し暑い空気が漂う346プロダクション地下駐車場。私はその耳障りするような所でただ突っ立っているのではなく、地下駐車場に車を止め、車内にいた。いつもここでお嬢さまの帰りを待つており、予定の時間になれば地下駐車場から車を出し、事務所の入り口前に車を止める。流石に無断で地下駐車場に駐車しているのではなく、お嬢さまをプロデュースするプロデューサーから許可をいただき、駐車している。しかしお嬢さまがお帰りになる時間はまだ時間がある。

(そろそろ、来るか)

腕時計を見ると予定時間まであと数分程度。私はある人物と待ち合わせをしている。ヤツはお嬢さまと同じくアイドルのだが、他のアイドルとは違いある特殊な才能を持った人物である。ヤツについて世間の人間は化学が好きで人物だと認識しているのだが、ヤツがどんなことをしているのかについては詳細に知る者は以外にも少ない。なにせヤツは一体何をやっているかを広く口にしていないのだから。

(… 来たか)

ヤツについて説明していると少しだけ開けた窓から、カツンツ、カツンツ、とハイヒールが換気扇しか聞こえなかった地下駐車場に鳴り響いた。どうやらヤツが来たようだ。私はヤツの姿を見ることなく、前を見ていると、後ろのリアドアが開いた。

「お嬢さまのおかえりだよ〜♪」

「わざわざらしい真似方をやめろ、一ノ瀬志希」

後部座席からやってきたのはお嬢さまではなく、346プロダク

シヨン所属アイドル一ノ瀬志希だ。

「あれ？どうして後ろを向いていないのにあたしだとわかったの？」

「簡単だ、バックミラーだ」

「あー、rear-view mirrorね。はいはい」

一ノ瀬は発音よく英語の単語を言うと、すぐにドアを閉めた。私は一切この女を直接見ることなく、右側にあるドアに肘をつけ、一ノ瀬をバックミラーで見ている。

「いやこの車はいいね♪シートは結構いいし、あとこの車のメーカーって黒がメインとっていいよね♪それにさ。このメーカーのごつついSUVいいよね。あの軍用車みたいな車。名前は…そう、ゲレンデワ」

「一ノ瀬、貴様はディーラーに來た客氣取りするな。お前は何のために来たかわかっているのか？あと勝手にリクライニングスイッチをいじるな」

一ノ瀬はお嬢さまが座るべき席にゆうゆうと過ごし、肘掛にあるボタンを黒いピンクのネイルをした人差し指でぽちぽちと興味深く触っていた。

「もお、せっかくあたしが冗談を言っているのに。相変わらず冷たいね、キミ」

「その冗談が一番無駄だつて気がつかないのか？」

「ひどいなあ、キミは。そんなキミのために数分前に考えた話題なのに」

「つまらんな。そんな話題」

この女はいつもこうだ。本題をすぐには入らず余計な話ばかり言い、時間を長引かせる。私はこの女の態度に気に入らないが、それでも彼女とこうして関わる理由がある。

「さてとお遊びはここまで、そっちは要求通りの情報を持っているかな？」

「ああ、何も持たずにして待つわけないだろ？」

「うん、それでよし。じゃあ、取引を始めよっか♪」

それは取引だ。

私はこの女と知り合っているのは、仕事を進行する上で欠かせない人物だからだ。

本当の姿がわからない会話

志希 Side

怖い人が乗っついていそうなメルセデスのセダンに乗り込んだ、あたし。あと数十分後で仕事に行かなくちゃならないけど、あたしは事務所の入り口に行かず地下駐車場に向かった。あたしを知る人からしたら、もしかしたらただの失踪かもしれないけど、今あたしがやっているのは失踪ではなくお金が絡んでいる仕事だ。いわゆる、閉鎖的な会社が禁止している副業だ。

「さてと、最初にちとせちゃん用の物をを渡すよ」

あたしは持っていたトートバックから銀色の留め金で閉められた小さな黒い木箱を取り出し、運転席にいる千夜ちゃんに渡した。一見あたしが渡した小箱は高そうに聞こえるかも知れないけど、全部百均で買った物で作っていると言うことは、千夜ちゃんには秘密。

千夜ちゃんは何も言わずに小箱を手を受け取った瞬間、すぐに小箱の留め金を開け、中身を確認をした。中にあるのは細長い試験管に液体が入っている3つの薬品だ。

「今回も三回、3ヶ月分の薬だよ」

「前と同じ成分だよな？」

「もお、キミは疑い深いんだから。ちとせちゃんとは仲良くしているからさすがに殺すような真似はしないよ」

ちとせちゃんはふつーの人間ではなく、喰種の血を受け継ぐ人間だ。あたしの愛しい人と同じと言いたいけれど、ちとせちゃんはちゃんと人間の食べ物を食べれるから同じとは言いがたい。ただ人間と喰種の血が混じっているせいかふつーの人間より体が弱い。

「この前も言ったと思うけど、この薬は月に一度に料理の味に支障がでないように加えてね」

「なぜ以前言ったことを同じく言うんだ？お前は記憶が悪いのか？」

「さあ、なんでだろうね？もしかしたらキミに向けて言ったのではないかも」

「は？」

千夜ちゃんは理解していない威圧のある感じで答えた。千夜ちゃんがそう答えるのは正解だ。なにせこれは千夜ちゃんに向けてのものではない。そう、誰かへの言葉で、言葉というより説明だ。

「まあ、キミはわかっていていると思うけど、あたしは変人だよ。あたしが変な発言するのはおかしくはないから、さつき出た変な言葉は置いて、最近のちとせちゃんの体調はどう？」

「急に話が変わるな。お前の先ほどの発言を言及する気は無いがいいだろう。お嬢さまは食肉する以前よりはだいぶ良くなっている。食肉に関しては薬品の味に対しての言及はない」

「おお、いいね♪それってあたしの薬品が不味くないことじゃ」

「阿呆が。お前が作る薬品はひどい味だ。そこらへん薬局で売っている薬よりも最悪だ」

「ありやりや、やっぱりそうだった？というか前も同じこと言ったね、あたし♪」

あたしはわざとらしくきよとんつと顔を少し傾けると、千夜ちゃんはわかりやすい舌打ちをした。

「当たり前だ。前に同じくこんな話したよな？それに合う味付けや料理を考えるだけでも相当時間をかけた。全く、お前もこっちの身になれ」

あたしが作った薬はちとせちゃんのための薬なのだけど、出来上がった時に試しにちよこつと飲んだらとんでもない苦いものだった。そこは苦さを消せばいいんじゃない？、と考える人はいるかもしれないけど、摂取しているちとせちゃんの身に関わるほどの問題を引き起こしかねないため、苦味を消すことはできない。良薬は口に苦し、という言葉があるぐらいだから仕方ないとあたしは思う。

「まあ、まあ、そこはキミの料理スキルがよかったということでもいいじゃない？ということでは、あれを出してよ？労働の対価としてあれ出して♪」

あたしは右手を出し、グイグイと4本指をあげる。

「…わかったから、そんなに求めるな。今から渡す」

千夜ちゃんはあたしの態度に呆れ、スーツのジャケットから一枚の紙をあたしの手のひらに置いた。

「わ〜い♪お小遣い、お小遣い♪」

あたしがわざとらしく喜んで受け取ったのは、ただの紙ではなく小切手だ。それに小切手に書かれている金額は48万円だ。

「取引先がいるだけでも感謝をしろ、お前」

「うん、これはあたしにしかできない小遣い稼ぎだね〜。よくネットで取り上げられている胡散臭いヤツよりだいぶいい仕事だよ♪」

ここ最近のあたしがやっている副業は千夜ちゃんに薬を売り込む仕事だ。今までは誰にも売り込まずに試作品を作り、そして誰にも渡さずに破棄するだけの化学が、今では手元に現金が手元に来るいい仕事になった。あたしがここ最近アイドルの仕事をしなくなった理由は、商品を製作するために忙しくなったからだ。流星に覚醒剤やヘロインのようなものはつくってはないから、みんな安心してね。

「ところでこのお金はちとせちゃんのお金かな？」

「いや、そうしたら家中のものに気づかれる。その金は全部私からだ」
「キミからって、48万を出すってふつーならば赤字じゃないの？」

「少なくとも赤字ではない。収支から見れば黒字だ」

「わお、さすがちとせちゃんの使用人だね！あ、いいこと思いついた！あたしとお付き合いない？そうしたら人生薔薇色じゃ」

「悪いがお断りする。お前のような女は一番嫌いだ」

私の提案が千夜ちゃんにバサリツと斬るように断られた。流星にわかってたんだけどね。

「ちえ、せつかくいい提案したのに。そうしないからキミに近寄る男がいないんだよ」

「詳しく言えば、私に近づく男は大抵低能ばかりだ。私に会う愚かな男は性欲と金しかなく、それらがなくなれば別の女に移る、人権を剥奪しても誰も泣きやしない者ばかりだ」

「キミらしい言葉だね〜。それでどんな風に振り切ったの？」

「簡単さ、まずは相手の眼をまっすぐと見る。ほとんどの負け犬はそこで立ち去るが、それでも退散せずに私の体に少しでも触れば、関節

技で決める。これで以上だ」

「容赦ないね〜♪」

あたしは千夜ちゃんのこの話を心から楽しんでるが、もし他の人に話すとほとんどが絶対引いてしまう。例えば前に千夜ちゃん聞いた話なんだけど、4人のチャラ男から車を奪われそうになった話がある。千夜ちゃんが運転するこの車はマイバツハと言うとても高いモデルらしくて、それで4人のチャラ男が街で走り周囲に見せびらかすためにこの車を盗もうとしたところ、千夜ちゃんがチャラ男たちが持っていた幻想を打ち消し、地獄を見せたらしい。その後千夜ちゃんはチャラ男全員を半殺しにし、さらには一人一人の個人情報などの弱みを掴み、警察に訴えても訴えることができない状態を作り、泣き寝入りにしたらしい。この話を聞く限り千夜ちゃんはふつーの女ではない。まあ、あたしもふつーの人間じゃないけれど。

「キミのお話でお腹が膨れたところで、次は情報をよろしく♪」

あたしがそう言うのとトートバックから一本の香水を取り出した。

「ああ、わかった。まずはこっちに渡せ。話はそれからだ」

「了解♪」

あたしは差し出された千夜ちゃんの手のひらに香水をポンツと置いた。もちろんこれはさつき薬品と同じくふつーの香水ではない。

「その香水効果の方はどう？前よりは長続きしたけど？」

「ああ、問題はない。喰種どもの中に入っても誰も気づきやしなかった」

「わお、さすがあたしの門外不出の香水だね♪」

千夜ちゃんの言葉を聞いたあたしは誇らしく感じちやった。千夜ちゃんに渡した香水はふつーの人間からしたら無臭だけど、喰種だと同族の香りがするものだ。多くの喰種と戦い、そして喰種がいるオークションなどの集会で潜入する千夜ちゃんから聞く限り効果は高いとわかる。ちなみにこの香水の顧客は千夜ちゃん以外にもいるけど、それはまたどこかで話そう。

「香水を渡したことだし、まず最初にCCGが最近始めたことはなにかな？」

「今CCGはロゼの捜査をしているな。その中でお前が知りたがっている佐々木琲世が捜査に加わっている」

「おつ、ササハイさん入るんだね〜♪」

ササハイさんと言う言葉を耳にしたあたしは思わず、声を出してしまふほどの喜びを出してしまった。ササハイさんはあたしをトリコにさせるいい人。ササハイさんは“彼”に似ているが、意外にも違う点がいくつもあるため、ササハイさん≡彼とはならない。

「最近のササハイさんはどうかかな？」

「佐々木琲世は4月から一等捜査官から上等捜査官へと昇格し、真戸班所属から佐々木班の班長へと変わったな」

「ササハイさんがここまで成長するとは、あたしは嬉しいよ〜♪」

「お前はどこ目線で言っているんだ？」

「これ志希ちゃん目線だよ」

あたしがそう言うと千夜ちゃんは呆れた顔で顔を傾けた。

「そのロゼの捜査は前まではそこまで注目されなかったが、ここ最近動きが活発化し始め、ついにはS1班と各上等らで構成されるチームが捜査に乗り出したな」

「ふーん、そうなんだね。全然興味ないなあ」

ササハイさんの話が最初に出てきたせいかわ、次に出たS1班の興味は一気に下がった。千夜ちゃんからいろいろな班の名前が出たけど、あたしの頭にさっぱり入らない。

「ーあとはキジマ班も合流し、キジマ班のメンバーは…」

「ああ、クソキョーミない。聞くだけでも疲労が溜まるいらぬ情報だね」

お菓子のおまけみたいな人の名も聞きたくはない。まあ大体どんな人がいるかは把握しているけど。

「なんだその態度は？せつかく私から提供された情報に不満か？」

「不満と言うか、もうお腹いっぱいだね。それにしてもキミはいろんなことを知ってるね」

「なんだ、急に？」

先ほどまで呆れ顔だった千夜ちゃんが興味を示した目つきに変

わった。

「明らかにあたしが知る情報屋さん以上にいろんなことを知ってるんだもん。情報屋さんはCCGの捜査内容を詳しくは知ってないし、その情報を取るぐらいなら他の情報を取って言ってたよ」

CCGは秘密主義の場所であり、先ほど千夜ちゃんが言っていた話はCCGから見れば全部不正に入手したものばかりだ。ちなみにあたしが言う情報屋さんは一体どんな人なのかは、千夜ちゃんには伝えないし、みんなには伝えないよ。

「その情報ってどうやって手に入れてるの？キミ？」

「悪いがそれは教えることができないな。これ以上私にその情報を求めるなら、香水ではなく札束を持ってこい」

「ちえ、キミはたくさんお金をもらってるよね？それ以上もらっていないことあるの？」

「何を言っている。これは取引だろ？ただの女同士の会話ではない」

やっぱり千夜ちゃんは冗談は聞かない真面目な子だ。なんどもお願いしても無理とわかったあたしは最後の話題を聞くことにした。

「本当に最後のこと聞いていいかな？」

「さっさと答え」

「キミとササハイさん、どっちが強い？」

「佐々木琲世か？」

「うん、ササハイさん。ササハイさんは半喰種でキミは人間じゃん。それで戦ったらどうなるかなーって思ってる」

千夜ちゃんはいろんな喰種を駆逐してきたため、もしかしたらササハイと戦ったらいい戦いになるんじゃないかとふと思いついた。

「さあな、今のあいっじや私の相手にならないだろうな」

「ほお、自信満々ですなあー。それはどうしてかな？」

「聞きたかったらさっきの小切手をよこせ。あと時間を見ろ」

千夜ちゃんが運転席と助手席の間にあったインパネにつけられた高級時計に指をさした。時間を見ると次の仕事まであと10分だと気が付いた。

「おっと、これはこれは。いそがないといけないね〜♪」

あたしは小切手をトートバックに入れすぐにドアを開き車から出ようとする、千夜ちゃんが「一ノ瀬」と何か思い出したかように呼び止めた。

「ん？どうしたの？」

「次はどこで会えるんだ？」

「次はキミがいつもいるバーにいるよ」

「いつだ？」

「さあね。近いうちにはわかるよ」

あたしがそう言つて車から離れようとしたけど・・・

「待て、一ノ瀬。お前は携帯を持っていないだろ？連絡先を知らなければいっでも」

「あたしの連絡先は教えないよ？だつて携帯をほつたらかす人間だもん。そろそろ仕事に行かないと遅れちゃうから、じゃあ、またどこかで〜♪」

あたしはそう言うのとドアを閉め、スタッスタッと地面にあるタイルを三つ飛び超えるように一歩一歩大きく歩いた。あたしは確かにスマホを見ない人間だから千夜ちゃんの連絡先を受け取る気は無かつただけだ

千夜ちゃんにあたしの連絡先を教えない理由は他にもあるけどね。

美嘉Side

事務所中に志希を探しまわつた、アタシ。限られた時間で志希がいそうな場所に向かって探していたのだが・・・

(ああもうーなんでいないのよ!!)

いつもなら志希がいそうな場所に行けば大抵見つかるのだが、アタシが知る限りの場所には志希の姿はなかった。いつもならすぐに捕

まえられるが、今日のアタシは不調だ。

(こりゃ、志希が仕事に遅れるのは確定じゃん……)

アタシは大きなため息をし、志希を探すのを諦めて肩を落としたまま事務所の玄関ホールに向かった。

(どうしよう…… 見つけれなくて……)

志希が仕事に行かなくてならない残り時間はあと2分。アタシに志希を探すことを任してくれたメイクアップさんたちにどう伝えようか考え始めてた、アタシ。メイクアップさんは確か1時間以上志希を探していたと言っていて、アタシに全てを託した。そんなメイクアップさんたちに残念な気持ちをアタシが与えてしまう。アタシはそのリスクを考えたまま、玄関ホールに向かっていると……

(ん……?)

すると玄関ホールにあるソファーに見慣れた人物が猫のように何も無い天井を見ていた。普通の人なら異様に感じすぐにその場から離れるけど、アタシは立ち去るどころかハッと驚いてしまった。

「あっ!! いた!!」

アタシはソファーに座っている人をまっすぐと指をさし、思わず声をあげてしまった。ソファーに座っているのは事務所中どこを探してもいなかった志希だった。アタシがホールに響くほどの声に気がついた志希は「ん? どうしたの美嘉ちゃん?」と平然とした顔でアタシに向いた。

「どうしたのじゃないでしょ、志希! あんたは一体どこにいたのよ!」

「え? あたしは事務所の中にいたよ?」

「はあ? アタシが事務所中探しまわってけど、あんたの姿はどこにもいなかったよ!」

志希は足が早い方ではないけれど、いつの間にか姿を消す能力はものすごく強い。例えば打ち合わせの時に多くの目撃者がいるのに、志希がその場から去ったことに誰も気がつかなかった事例が数えるのを諦めてしまうほどある。

「あたしは別に事務所中を移動してないよ?」

「じゃああんたは一体どこにいたのよ!」

「それは言わないよ」

「言わない? どうして?」

「もしかしたら食事をしている人がいるかもしれないから言わないよ」

「食事?もしかして手洗い?」

「おっと、そんなこと言っちゃダメだよ。食べている人がいるかもよ?」

「はあ?」

アタシは志希の発言に疑問を抱いた。別に玄関ホールには食事をしている人はどこにもいないのだが、志希は一体何を話しているの? でも志希をさっさと仕事にいかせないと遅れるため、考えるのをやめた。

「とりあえず、志希はさっさと仕事に向かってー」

「ここで問題でーす」

「え?なに?」

すると突然、志希が問題を出し始めた。

「ハンドルを英語でなんと言うでしょう?」

「ハ、ハンドル?ハンドルって、ハンドルじゃないの?」

「ぶぶっ!!違いまーす!!」

志希は間違ったアタシに小馬鹿するような笑いをした。その顔を見たアタシは心の奥底から徐々に怒りが湧き上がり、その怒りを声に出した。

「志希!!事務所の入り口であんたのプロデューサーが待っているから、さっさと行け!!」

「りようか〜い♪じゃあ、またね美嘉ちゃん〜♪」

志希はそう言うど怒るアタシを全く気にせず、ウキウキとした様子で事務所から出て行った。

(やっど志希を見つけられてよかった...)

とりあえず志希が時間ギリギリながら見つけ、そして仕事に向かったくれたことにアタシはホッとした。普通の人なら志希の自由奔放の態度についていけないか、無意識に怒りをぶつけるかもしれない

が、アタシは志希とは長い付き合いのため、どうしても許してしまうところがある。

(……)

志希が事務所から去ってしばらくすると、アタシの頭に一つの疑問が薄々と浮かんだ。

(事務所の手洗いはどこも空いてなかったんだけど、本当に志希はそこにいたの?)

それはさつき志希がずっと隠れていただろう手洗い場だ。おそらく本人はそこに隠れたと思うんだけど、アタシはそれに疑問を浮かんだ。アタシは短時間ながら事務所中の手洗いを目を通したのだが、このドアも閉まっておらず空いていた。詳しく志希から聞いてないため、もしかしたら手洗いじゃないかもしれない。だとしたら志希はどこに隠れたんだろう?

あたしはその疑問を抱えながら玄関ホールから去って行った。

不幸な私

球世Side

4月が去り、気がつけば5月が始まったこの季節。4月の前半でピンクに染まっていた桜は、今ではポツポツと緑色の若葉が桜色の花びらの中から現れ、まるで桜の季節と連想させる春を終わりを告げているみたいだ。

(今回の喫茶店は…ここかな?)

そんな変わりゆく桜の木々の下にいた僕は昼休みに入るとCCGから離れ、都内にあるとある喫茶店に向かっていた。そこは僕が調べて見つけた喫茶店ではなく、久しぶりに出会う人が見つけてくれた喫茶店だ。

(えっと、前に会ったのは…確か去年だったような?)

今思えばその人と会うのは今年初だ。去年の初夏までは頻繁に会っていたのだが、お互いがやるべき仕事で会う機会が減ってしまった。そして年を越した五月にようやくその人と会うことができた。(もしかして、あの人かな…?)

久しぶりに会う人に指定された喫茶店にたどり着いた、僕。送られたメールの最後の文には『奥の席で待っているわ』と書いてあったが、最初店内を見たときは混み合っていて、どこにいるのかわからなかった。でも僕はメールの通りにお店の奥を見てみると、人混みが混み合う喫茶店のお客さんの中にどこか見慣れた人を見つけた。一見すると目が悪いのかメガネをつけているのだけど、おそらく度が入っていないメガネをつけている美しい女性がひとり客であるのにも関わらず二人用のテーブル席に座っていて、窓に映る歩道の景色を凜とした顔で見つめていた。僕はその方を見た瞬間、『あ、この人だ!』と確信を持った目を持って、そして混み合う店内を進みその人に近づいた。

「こんにちは、楓さん」

「あ! やつと来たわね、佐々木くん!」

僕がその人の名前を呼ぶと、凜とした顔をしていたその人は声に気

づき、すつと顔を向け僕を見ると凜とした顔から笑顔へと綺麗に変わった。その方の名は楓さんだ。今年に入りあと1ヶ月で半年になるこの時、僕は久しぶりに楓さんにお会いしたのだ。僕は席に座り、コーヒーを注文しようとプラスチックのメニュー表を手を取ろうとしたら、楓さんはタイミングよく「もう注文したわ」と伝えてくれた。「佐々木くんの姿を見たとき、思わず嬉しくなったわ」

「ええ、楓さんとお会いするのは去年以来ですよね？」

先ほど言ったのだが、楓さんとは去年までは頻繁に会っていたのだが、5月に入ってやつと今年初めて楓さんと会えた。

「それにしても、前より髪が黒くなってないかしら？」

「そうですね。初めて楓さんとは会ったときは真っ白でしたよね」

「うんうん。佐々木くんと最初に会った時は、春になったのに雪が残っているみたいなの真っ白だったのね。今思うと懐かしく思うわ」

「懐かしく感じるって、まだ2年ほどしか経ってないですよ？」

「そうかしら？確かにまだ2年かもしれないけど、私からしたら”もう2年”なのよ」

「もう2年ですか？」

「そう、この歳になると意外と早いのよ」

僕はなぜそこまで2年を強調するのかわからず、楓さんは大人な女性らしくふふつと笑った。確か楓さんは今年で…

「そういうえば、卯月ちゃんから聞いたわ。先月、昇進したって」

「え？…あ、そう、そうですね」

考えていた僕は急に楓さんが話題を変えたことに思わず動揺してしまった。まるで楓さんがそれ以上考えるなど言わんばかりにふらりと話題を変えたいみたいだ。

「昇進おめでとう、琲世くん♪」

「ありがとうございます、楓さん。卯月ちゃんに聞いたんですね」

「ええ、卯月ちゃんとお話ししたら、『この前、佐々木さんに会ったんですよ！佐々木さんはつい最近ー』って感じに卯月ちゃんが自然と話してね。それで佐々木くんが昇進したって聞いたの」

「あー…そうなんですね..」

楓さんがどんな感じに卯月ちゃんから聞いた僕は最初は嬉しさを味わったが、知った経緯を耳にした時、嬉しさが薄れてしまった。たぶん卯月ちゃんは楓さんなどの僕に会っている人に話しかけているかもしれないけど、流石に僕が会ったことのない人に僕の話題を口から出してないことに祈るしかない。ちなみに卯月ちゃんの誕生日会に起きたあの痛みは、卯月ちゃんたちには何も聞かれずに無事に誕生日会は終わった。でも完全に気づいていないとは言いい切ることができない。

「そういえば、佐々木くんの生徒たちはどうかしら？」

「生徒ですか？僕は生徒と言うよりうちの子と言ってますよ」

「うちの子？」

「そう言えば佐々木くんはうちの子と言うよね？それだったら琲世くんが父さんの存在で、お母さんは——」

「そ、それ以上言わないでください！」

あともう少しで楓さんの口から、週刊誌の一面に大体的に載せるのにふさわしい内容が出るところだった。

「以前よりは丸くなりましたよ。」

明日は不知くと新しいクインケを受け取る予定だ。

「あと、それから——」

楓さんにさらに話を振ろうとしたその時、僕のポケットにあった携帯が短く鳴り始めたのだ。

（ん？メール？）

僕の携帯から誰かからのメールが届いた音がした。

「メールを見ないの？」

広げようとした僕を

「見てもいいんですか？」

「別に私は頭がお堅い人じゃないから、見てもいいじゃないかしら？」

僕はポケットに鳴り出した携帯を取り出し、画面に表示されているメールの主を見ると..

(文香さん…?)

文香さんと連絡をするのは今年初めてだった。

『こんにちは、佐々木さん。』

「ねえ? 誰かしら? もしかして卯月ちゃんから?」

「卯月ちゃんじゃないです。文香さんですよ」

「文香ちゃん?」

文先ほどまでメールの主に興味しんしんだった楓さんは、文香さんの名を聞いた瞬間、態度が一変した。

「あー…文香ちゃんね…」

すると乗り気だった楓さんは、なぜか触れてはいけない話題に避けたがるような顔をしていた。

「楓さん? どうしたんですか?」

「あれ? 佐々木くんは文香ちゃんのこと知らないの?」

「え? 知らないって、どう言うことですか?」

少し経つと楓さんは「あ、そうだったわ」と気が付いた仕草をした。

「佐々木くんは346プロにいないからわからないよね。ちよつと暗黙の了解のことなんだけど…」

言いつらそうな様子をしていた楓さんは少し間を作り、そしてやっと口を開いた。

「ここ最近の文香ちゃんの様子がおかしいらしいのよ」

「様子がおかしい?」

楓さんの言葉を聞いた僕は思わず眉をひそめてしまった。文香さんはいつも優しくして落ち着いている方なのだが、そんな文香さんがおかしいと聞くと違和感を感じる。でも僕はしばらく文香さんと会っていないため、今どんな感じなのかはよくわからない。

「ええ、実際に文香ちゃんと会ってないけど、みんなから聞く限り病んでいるらしいの」

「や、病んでいるんですか?」

「ええ。本当かわからないんだけど、落ち込んでいるようでイライラしているようで、情緒不安定のような感じに聞こえるもの」

「…」

「何かあったと思うわ…。みんなから聞いた文香ちゃんは絶対仕事の問題だけじゃないもの」

「…」

僕は淡々と発言する楓さんに集中することできなくなった。

なんだろう？この感覚は？

文香さんが情緒不安定なのは関係しているとわかっていないのに、なぜか関わっているように自然と考えてしまう。

僕は記憶がある限り文香さんに悪いことをしたことないのに、まるで僕のせいで起こしてしまった罪悪感が無意識に出る。

371

僕は彼女に悪いことをしたのか？

僕は彼女に酷いことした記憶なんてない。

僕は文香さんに悪いことをしたなんて――

「どうしたの？佐々木くん？」

「――え？」

ふと気がつく、楓さんは迷う僕に心配な顔をしていた。

「… あっ、え、えっと… 文香さんがどうして病んでいるのか、わからなくて」

僕は楓さんに気づかれないう、必死に嘘を隠した。考えすぎだ、僕が彼女に悪いことをしたわけなのに、どうして考えるんだ、僕？

「佐々木くんも全くわからないのね… 本当に心配だわ」

「… なんで346プロの皆さんは直接文香さんに聞かないんですか？」

「私はもし文香ちゃんに会えるなら、直接聞きたいわ。でも時間が無いのよ。あと」

「あと？」

「他の人から聞く限り、触れてはいけない話題になってるらしいの」「触れてはいけない話題？」

「なんでみんなは言及しないのかわからないのよ。」

「私は時間がないから… あっ！」

すると何かいい手段はないかと考えていた楓さんは「あ、そうだ！」と何か閃いた。

「佐々木くんが聞いてくれないかしら？」

「え？僕ですか？」

「ちょうど文香ちゃんのメールを見る限り佐々木くと会いたそうだから、それで会って聞いたらどうかしら？」

「僕から聞くのはちよっと…」

「もしかしたら、このままじゃ文香ちゃんが」

「…」

今の状況的には、引き受けるしかない。

「じゃあ… 文香さんに聞いてみます」

「おっ！いい返事ね！」

僕は楓さんと同じく純粋な嬉しさが湧き出ない。今僕が出しているのは無理して出している偽りの嬉しさだ。

「では、そろそろ昼休みが終わるので
「いい収穫を待ってるわ」

楓さんは待ち遠しくて仕方ないかもしれないけど、僕は同じく共感
はできない。楓さんと別れた後、一人CCG本局に向かう僕は自分の
胸の中に徐々に異変が起きていた。

なんだろうか？

文香さんの話が無性に負の感情が胸の中に現れる。さっきまで楓
さんと話していた時は頭にすぐに出なかつたが、一人になった時に急
に頭に浮かんでしまった。

今まで僕が考える文香さんは誰も見つけられない場所で美しく咲
く花のように見えたのに、

楓さんから話を聞いた後の僕が文香さんを考えると、美しく咲いて
いた花が無残に切りつけられ、そして誰かに踏みつけられたように悲
しい

文香Side

カテーンで外の光と閉ざし、一つ読書灯だけが灯された私の部屋。
今日の私は何も予定はないので、家で一人読書をしていました。

(…)

お伝えするのを忘れていました。私は家にいると言いましたが、詳
しく言いますと20区にあるアパートに住んでいます。前まではお

じがやっていた古書店に住んでいましたが、大学卒業とおじがやっていた古書店の閉店と共に住居を移動しました。

(…)

カチカチと時計の針がなる部屋で一人本を読んでいた、私。前は時間を気にせずに読書を読むことができましたが、今手元にある本を読んでも、内容が頭に入らずただ字を読んではまっている。

(…まだ?)

私が本をいくら読んでも頭に入らなかったのは、佐々木さんからの返事を待っていたんだ。先ほど私は佐々木さんにお誘いのメールを送り、佐々木さんからの返事を待っている。いつも本の話しか出してない私が何も目的が決まってるないメールを送るなんて珍しい。

(…何かあったの?)

今日はいつもより遅いような気がする。いつもなら数分で帰ってくるはずなのに、私の携帯は石のように動かない。本を1ページ、1ページ、と開いてもまだ佐々木からの返事が届かない。

(…会いたいののに、なんで来ないの?)

私はまだ今年に入って佐々木さんに一度も出会っていない。大体は仕事と前に踏み出せない弱い私のせい。私は佐々木さんに会いたくて仕方がなかった。時計のカチカチとした音がだんだんと遅く聞こえ始め、まるで1秒が数時間と言う途方のないほど、とても遅く感じる。

(…まさか、あの女の元に?)

不安に駆られた私の頭にあの女のこと突然浮かんだ。その女を頭に浮かぶと、不安だった私に攻撃的な感情が強まっていく。

(…早く離れろよ…返事を邪魔するな)

私は持っていた本を閉じ、イライラを解消するためか指を机になんども小刻みで叩き始めた。

あの女を考えると、本で培われた語彙力が崩れ表現方法が単純になっっていく、私。世間では語彙力は重要だと宣伝するように言ってい

るが、今の私には関係ない。

もしかしてあの女の元にいる？

いや、間違いなくそうだ。

だって、こんなに時間が遅くなるわけないもの。

だったら、タイミングを逃した私が悪いのか？

ああ、それはあの女のお望み通り、正解だ。

私があの人を誘うタイミングを遅くしなければ、私は今年早く会う
ことができなかった。

私は幸せになっちゃダメなの？

どうして幸せがあの人に流れつくんだ??

どうして不幸せが私に流れ着いてしまうんだ???

あの女が可愛いから
??????

私がブサイクだから
??????

私は社会でいらぬ人間だから
????????

私は彼の隣にいちやいけぬ存在なのかな
????????

あの女に『隣にいるな、くそ女』、と言われるから
????????

『従わぬなら、さっさと死ぬ、あばずれ』
????????

死ぬ、よ

「—————」

すると突然携帯の着信音がまつすぐと私の耳に入り、自分の世界にいた私は一瞬にして元の世界に戻り、負の感情が消えた。
(き……き、来た?)

私は死人のように動かなかつた携帯をすぐに取り出し画面を確認した。画面に写つていたのは、うつとしい仕事メールでもなく、同じ

事務所のアイドルからのメールではなかった。

『いいですよ、文香さん。日付と待ち合わせ場所の希望はありますか？』

それは私が望んでいた彼からのメールだった。彼からのメールを見た私は先ほどの表に出した負の感情がまるでなかったかのように心が収まり、そしてほっと息を漏らした。彼からのメールが届いた時間は送信した時からたった3分ほどしか経っていない。

（ああ…。”金木さん”）

私はかつて共にした彼の名を心の中で呟いた。

最近の私は心を安らぐことができず、仕事もレッスンを捗ることができない。

そんな私に唯一心を穏やかにしてくれる存在があった。

それは本より温かみがあり、他の人とは違うと言い切れる存在、彼なのだ。

ボロボロな人形の私は彼なしじゃ、生きていけない。

心の安らぎを求める私は彼をあの女の所有物にさせない。

絶対に、あの女の物にさせない。

午前にあつたお仕事が終わりに、家に帰ろうとした私は事務所で久しぶりに志希さんに会い、事務所内にある喫茶店で志希さんとお茶をしてみました。

「私の誕生日に佐々木さんと会えたんですよ！」

「へえ、そうなんだ♪ササハイさんと会えてよかったね♪」

志希さんはうんうん、と嬉しそうに佐々木さんのお話を聞いていました。志希さんは本当は今日仕事がないと聞いたのですが、本人の志希さんは『衝動的に卯月ちゃんに会いたくなつた』と言い、にやははつと志希さんらしい笑いをしました。

志希さんはいつも私と会うたびに絡んだりするのだけど、私を『血は繋がっていないけれど、あたしの可愛い妹♪』と挨拶と同時にいつも私に会うたびに言ってきました。最初はなぜなんだろうと疑問を持っていましたが、今では疑問を持つことなく慣れ始めました。

「卯月ちゃんは本当にササハイさんのこと好きだね」

「えっ？そ、そうですか？すう、好きと言ってても友達の意味ですよ？」

私は志希さんの言葉に少し慌ててしまい、本当の想いを隠すために友達の意味と言う嘘をついてしまった。流石に佐々木さんのことを好きと言うのはできない。だけど志希さんは『そおかな？』と、どこかわざとらしい口調でニヤニヤし、何か企んでいる顔をしました。

「あたしも同じくササハイさんのことは大好きだよ？」

「え、えっ!?!それは本当ですか？」

「うん。友達の意味で」

「あ… そうなんですか」

「あれれ？もしかして、別のことを考えたの？」

志希さんは勘違いしていた私をからかうような目で「ねえ、どんなコト？」と何度も聞いてきました。

「もお、志希さん！私は志希さんが本当に佐々木さんのことを好きと勘違いしたんですよ!!」

「ん？本当ってどう言う意味なの？」

「え？本当？… え、えつと…」

私は躊躇してしまい、うまく言葉の表せなかった。しばらくもじもじとしていると、志希さんはふふつと笑い。

「悪かったよ、卯月ちゃん。変なからかいをして」

志希さんはそう言うのと躊躇していた私の頭にポンつと手を置きました。

「もお、志希さん…。」

私は自分をからかった志希さんに不満を持った顔でぷくつと口を膨らませました。

「まあまあ、そんな顔をしないでよ。あ、でもその顔も可愛いなあ♪そのままできてよ♪」

「更にからかわないでくださいよお…。」

私が怒っても、志希さんは私の顔を伺うことなくポジティブのままです。

「それでさ、他にササハイさんの話ある?」

「…。」

私は佐々木さん関連の話を考えていると、私の中にあつた嬉しい感情が薄まり始めた。そのきっかけはこの前の誕生日会で気が付いたことを思い出したのだ。

「ねえ、志希さん」

「ん?」

「この前に会った佐々木さんの姿がまるで金木さんだなんて思ったんですよ」

「カネケンさんに?」

「はい。今思うと顔も声が金木さんとそっくりで、それに誕生会に会った時、佐々木さんの髪が前よりも黒かったんですよ」

「前よりも黒に?」

佐々木さんの髪は前に会った時よりも黒くなり、前まで佐々木さんを金木さんと考えることがなかったんだけど、今では佐々木さんを金木さんと再び思い始めたんだ。

「そうなるよ、もしかしたら佐々木さんは金木さんじゃー」

私がさらに話を広げようとしたその時だった。

「ねえ、卯月ちゃん」

すると志希さんは私の話を遮るように突然私の名前を呼び、私たちの会話の空気が一変した。志希さんの顔は先ほどと同じく笑っているんだけど、いい意味の笑いじゃなかった。

『ササハイさんをカネケンさんと考えるのをやめなよ』

「えっ?」

私は志希さんの言葉に口をつぐみ驚いてしまった。

いつも優しくしてくれる志希さんが、私に冷たく言葉を発したんだ。

情緒不安定

卯月Side

先ほどまで空にあった太陽が一つの大きな雲に隠れてしまい、少し暗くなってしまった346プロの内にあるカフェテリア。さつき春の暖かさがあつた私たちの会話に、突然志希さんが冬の冷たさを戻したかのように暖かかった空気が一瞬にして凍り、会話が止まってしまった。

(え…?)

私は志希さんに佐々木さんのことを話していたのだけど、急に私に冷たく言い渡した志希さんに理解はできず、ただ『え』と言う一文字しか表現できない程の状況が続いていた。

「…えっと、志希さん?」

先ほどまで気をつかうことなく志希さんと会話をしていた私は冷たく笑顔を振る舞う志希さんにおそろるおそろる声をかけてしまった。

「ーああ、ごめんごめん。あたしの悪い癖が出た。卯月ちゃんが混乱するのは必須だね」

志希さんは私も言葉を耳にすると、自分の頭をわしやわしやとかき、「ああ、まったく」と自分に言い聞かせるように呟いた。その姿を見た私は「え?」と変な声で呟いてしまった。

「まあ、要するにあたしが言いたいのは、ササハイさんをカネケンさんと考えちゃダメだよと言う話なんだよ」

「それはどうしてなんですか?」

「あたしの解釈なんだけど、多分ササハイさんの匂いがカネケンさんと同じだとあたしは思うよ」

「…えっ!?か、金木さんと同じですか!」

「そう、でも一つだけ違うところがある」

志希さんはそう言うのと、『ここだよ』と自分の体に強調するように指を体に突いた。

「あたしの予想だと、中身が違うんだよ」

「な、中身…?その中身ってなんですか?」

志希さんが言った”中身”とは一体なんなのか知らない、私。知らない私を見た志希さんは「あれれ…？」と頭を傾けた。

「… ちょっと難しく言っちゃったかもね、あたし。簡単に言えば、サハイさんは記憶喪失のカネケンさんだと思うよ」

「っ!!」

志希さんの言葉を聞いた私は心臓に大きな鼓動のような衝撃が走った。え？佐々木さんが記憶を失った金木さん？あの20区に取り残された私を助けてくれた人が、まさかいつも声をかける喰種捜査官のあの人だなんて…

「それだったら、今すぐ私たちが思い出させたほうがー」

「いや、卯月ちゃん。それはナンセンスだよ。ナンセンス」

「え？」

またもや志希さんは右手を軽く横に振りながらすぐに異論をし、話していた私を阻ませた。

「どうしてなんですか？もし佐々木さんが本当に金木さんなら、今すぐに思い出した方がいいじゃないですか？」

「あー、やっぱり卯月ちゃんはそう言うよね。あたしの予想通りだ」

「え？」

「悪くは言わないけど、卯月ちゃんは目の前の利益しかみていない」

「目の前の利益？」

私が疑問を持った返事をした瞬間だった。

「ねえ、卯月ちゃん」

「はい？」

『本当にわからないの？』

「…っ!!」

私は志希さんの言葉を聞いた瞬間、体の中に嫌な冷たさを味わいました。突然、志希さんは冷たく嘲笑うような目で私の目を見ていたのです。

「い… いや、本当にわからないって… な、なんですか？」

「卯月ちゃん、とほけないですよ。あたしはどうして卯月ちゃんが今すぐに記憶を戻そうよと言った理由を聞きたいんだよ？いい加減、無知

を装うのはよくないよ?」

「む、無知って…っ!なにを言ってる!」

「まずササハイさんの状況を知っているかな?ササハイさんはササハイさんで自分の居場所があるんだよ。例えばササハイさんの部下たちが一番いい例えかな?一緒に住んでそろそろ一年になるけど、この前ササハイさんと電話で話した時に、ササハイさんは自分の部下のことを自分のことのように充実してたんだよ?それで卯月ちゃんはササハイさんの今の状況を考えた上で、今すぐ思い出させようと言ったのかな?そうなのかな?ねえ?」

「…っ」

「ねえ、なんでなの?ねえ?」

志希さんはまっすぐと私の目を見ながら「ねえ、違うの?」と口を閉じて黙る私に何度も聞いてきます。今の私はまるで親に『どうしてこんなことをしたの?』と言われ、答えが出せない子供みたいに私は口を噤んでしまった。いつも優しいはずの志希さんがこんなに私に問い詰めてくるなんて初めてだ。私はどんな言葉で返せばいいのかわからない。

「…すみません、志希さん」

「ん?」

「私、あとのことを考えずに発言してしま…て…」

私は何も言わない志希さんからどんな言葉が出るのか怖がってしまい、目に涙がこもり始め、声がだんだんと小さくなって目の視線を下にそらしてしまいました。本当ならばやってはいけないことだとわかってはいるけど、私は志希さんに恐怖を抱いていたんだ。

「……………」

ついにはお互いは何も話さなくなり、風の音しか聞こえなくなつた。私は今すぐこの席から離れたくて仕方がなかった。だけど自分がどんな罪を犯したのかわからぬまま逃げるのは嫌と言う感情が私の胸の中に止まっているせいか、私は席から立ち去らずに座ったまま止まっていた。

そんな自分自身の戦いへと変わろうとしていた私に、転機が訪れました。

「……っ！」

それは俯いたまま座っていた私を冷たくしていた志希さんが突然抱きしめたのでした。先ほどまで容赦無く私に問い詰めた志希さんが急になぜ抱きしめたのか私にはわかりません。もしかしたら今までの冷酷さはドッキリでやったのではないかと一瞬思いましたが、この後の志希さんの行動で答えがわかりました。

「……ごめんね、卯月ちゃん。怖がらないで」

志希さんが行った行動は、私の耳元で優しくして小さな声で囁いたのでした。その声は演技と言われたら疑いたくなる程のどこか弱々しい声で、耳にした私は志希さんのいつものドッキリではないと確信しました。

「し、志希さん？」

「……ひどいことをしてごめんね。あたしはすごく申し訳ないと感じてるよ……」

抱きしめる志希さんの手は優しく私を触れてはなく、何か悔しがるようにぎゅつと少し服を握るように強かった。

「……志希さん？」

「………」

再び志希さん呼びかけましたが、志希さんは何も答えることなくただ私を抱きしめ、再び風の音しか聞こえない時が始まった。今吹いている風は暖かい季節を知らせる春風なのに、志希さんを抱きしめている私は今吹いている風を口から表せない寂しい風にしか捉えられなかった。

「……もう離れていいかな？」

「……え？いい、いいですけど……？」

するとしばらく黙っていた志希さんがふつと声を出し、それを聞いた私は突然きた返事に変な声で答えてしまった。私が返事を返した

後、志希さんは私の体から離れ、先ほど志希さんが座っていた椅子に戻りました。

「…ごめん」

「そんなにごめんって言わなくても十分伝わってますよ?」

志希さんは先ほどの私のように視線を下を向けたまま、細々と『ごめん』と言いました。志希さんがこれほど申し訳なさそうに『ごめん』と言うのは私が20区に取り残された時以来でした。

「…最近のあたし、いろいろと疲れちゃってね… それで気持ちを整理する余裕がなくて、さっきのひどいあたしになっちゃったんだ」
「… そうなんですか」

志希さんは右手をほおにつけ、「まったく、あたしは」とため息をつきました。志希さんは一体何に疲れていたのは、その時の私はなぜか理由を聞きませんでした。

「それでどうして私に佐々木さんに思い出してはダメと言ったんですか?」

「… さっきの卯月ちゃんが言っていた『思い出させる』のは、ササハイさんを存在否定にすることと近いんだよ」

「存在否定?」

「例え話をしてみようか。例えば今の卯月ちゃんは自分の過去を知らない記憶喪失の状態としてみよう。それである時、過去を知る人から『私は前のあなたが好きなんだ。だからあなたはさっさと過去の記憶を思い出して、消えて欲しい』と本気で言われたどう思う?」

「… 言われたら、悲しくなりますよね」

「そう、だからあたしは卯月ちゃんの提案を止めさせたの。あたしが提案するなら記憶思い出させずにした方がいいと思うんだ」

「そのままって?」

「あんまり言いたくないけど、今のササハイさんは幸せじゃない? ササハイさんはササハイさんで立派な一人の人間なんだよ。誰かの代わりじゃなくてね。ササハイさんと何度か会ってみると、カネケンさんにはないものがあると気がついたんだ」

「え? それはなんですか?」

「まあ、それは自分から探してみると面白いと思うよ?」

志希さんはそう言うと、いつもより小さな声で『にやはは』と笑いました。その志希さんの笑顔を見た私は、再びいつもの志希さんへと戻ったことに表に出さなかったけど、胸の中でほっと安心をえました。

「…さつきはごめんね。卯月ちゃん」

「いい、いいですよ。そこまで謝らなくて… も?」

私は再び謝った志希さんに曖昧な声で返事を返してしまった。

理由はただ一つ、志希さんはいつもより寂しそうな笑いをしていただけだから

それはまるで私を助けてくれた彼のように似ていたんだー

志希 Side

あたしは妹に似た存在の子にひどく言ってしまった。

正直、事前に卯月ちゃんにきつく言うつもりはなかったし、今日はただ楽しく会話をしたかった。

だけど卯月ちゃんが話のネタを切らしたのか、それともふと思い出したのかわからないけど、ササハイさんをカネケンさんじゃないかと言いだめたのだ。

その話を耳にしたあたしは突発的に冷たく否定してしまった。

今こうして思い返すだけでも忘れなくなるほど悪くしてしまった、あたし。

あんなに問い詰めるように話したのは奴ら以来だった。

あたしは別の方法で卯月ちゃんに言うべきだったかもしれないけど、あんなにきつく言ってしまったのは奴らの粘り強い勧誘に疲れていたのは間違いない。

でもあれをやって良いと思ったのはただ一つ、ササハイさんをカネケンさんと同一人物と考えて欲しくないと伝えれたことだ。

そう言わなきゃ、卯月ちゃんがいつかササハイさんを壊すことになる。

ササハイさんが壊れてしまえば、きっと卯月ちゃんが望む彼が消えてしまう。

卯月ちゃんと別れたあたしは、卯月ちゃんに變に問いただしたコトに初めは後悔を抱いた。

でも後々考えると、あの出来事は良いコトではないかと考えたんだ。

もし卯月ちゃんと長く付き合うなら、普段隠しているコトを見せるのも長く付き合う秘訣だと。

ここで言うのもあれだけど、あたしがササハイさんを記憶を失ったカネケンさんと気がついたのはササハイさんと初めて出会った時

だ。

その時は人混みが多い街中だったんだけど、ササハイさんがあたしの横に通り過ぎた時、あたしの鼻が匂いを反応したんだ。

その匂いはカネケンさんと抱きしめた時に覚えた不思議な匂い。あの匂いはあたしの脳内に焼きつくほどまだ残っていたんだ。

それであたしは街で歩いていたササハイさんを追いかけ、自分から声をかけたんだ。

ササハイさんは声をかけてきたあたしをアイドルの一ノ瀬志希と気づいたのだが、あたしはそんな彼の姿に心の中で悲しくなった。

あたしはアイドルの一ノ瀬志希ではなく、かつてプライベートで会っていた一ノ瀬志希と気づいてほしかった。

卯月ちゃんが今すぐカネケンさんと会いたい気持ちはわかるけど、

少なくとも卯月ちゃんが思っている以上にササハイさんは難しい立場に置かれているんだよね。

夜の影が暗さを表現し、人影がなくなったただ車がずらりと並ぶ立体駐車場。車の煩わしいエンジン音がしない立体駐車場ここで私はあることを実行していた。

「な、なんで俺を狙うんだ!!クソ喰種が!!」

冷たいコンクリートの地面に腹に血を流しながら横たわる中年の男。私は寢床に待っていらっしやる習さまのために”収穫”を行なっている。

「口が多い人間だな。今すぐ黙らせてやる」

私はそう言うと言った背中から一本の赫子を出し、死ぬにも関わらずうるさい男に赫子を向けた。

「や... や、やめろっ!!!」

「b o r g豚め」

赤黒い赫子が負傷していた男の胸を突き刺し、男の苦しみがく声が一瞬にして消えた。

(... さてと、味見だ)

私は男を突き刺した赫子で肉を引きちぎり、自分の手元に肉を受け取る。その肉を口に入れ、そして歯で噛みちぎり、舌に肉を触れさせる。

「...ふさわしくない味だ」

口にすると、真つ先に来たのは肉の旨味ではなく、クセの強い脂だ。おそらくこいつは運動もせず、何を食うか考えずにファストフードやらを口をし、何も面白みのない人生を歩んでいた人間だろう。私が手元にあった肉を先ほどまで生きていた男の死体と同じ温度だろうコンクリートの地面に投げ捨てると。

『...見るからに不健康な中年男をまさか殺すとは、言ったお前の舌がb o r g豚以下じゃないのか?』

「っ！」

静かだった立体駐車場に革靴の踏み出す音が響き渡る。私は声が聞こえた方向に振り向くと、夜の影から現れたかのようにある人物が姿を現した。

「急に脅かすな、貴様」

「ああ、すまないな。」 同業者”として口を悪くしてしまった」

姿を表したヤツはマダムが亡くなったオークションで出会った時は一本の杖に西洋人形のように綺麗なドレス姿だったのだが、今私の目に映るヤツ姿はもちろん杖を持っていたのだが、影から現れたかと思わせるほどの漆黒のスーツ姿で、顔はいつも通りの無個性で真っ白な仮面だった。

interests

カナエSide

先ほどまで生きていた食材が骸に変わり、私しかいなかったはずの立体駐車場に以前出会った喰種が前に現れた。

Wei・(白)、貴様が生きていたとはな」

「なんだ？私を心配していたのか？」

私は白仮面を被るヤツをWei・(白)と呼んでいる。その理由は無個性な白い仮面を被っていることから由来し、もちろんそれがヤツの本当の名ではない。ヤツは私の名を知っておらず、私を『お前』呼ばりをする。最後に私の推測だがWei・(白)の性別はおそらく女で、少なくとも匂いからして人間ではなく喰種だ。

「貴様を心配してどうする。マダムがお亡くなりになったオークションで生存した喰種はほんの一握りしかいなかったのだ」

「おお、そうか。大半が死んだのか。哀れだな」

Wei・(白)は喰種オークション界では大物であるビツクマダムが亡くなったにも関わらず、まるで他人事のように言葉を吐き捨てた。Wei・(白)とはオークション以来の半年以上の出会いで、ビツクマダムが亡くなったオークションで逃げ切れた喰種は今把握できているのは私が所属している月山家を除くと片手の指で数えられるほどののだが、Wei・(白)が前に現れたことでまた一本指を折った。

「…それにしても、貴様がオークション以外に出会うとは珍しいな。私の前に現れ何しに来た？」

私はWei・(白)《ヴァイス》(白)に理由を聞くと、「ああ、そうだったな。私はここに現れたのは理由があったな」とわざとらしく振る舞った。

「ここ最近、お前の主人だけがオークションに出ているな」

「なんだ？それがどうしたんだ？」

「現当主は出ているのに」次期当主は最近見ないな？どうしたんだ

？」

「… 貴様には関係ない」

私はWe i・s (白)の言葉に、即座に拒絶反応を表に出してしまった。

「関係ない？ そんなことないだろ。 お前の次期当主はずいぶん前まではオークションで姿を出していたのだが、今では全く生存していないのではないかと思われるほど姿を見ないな。 それに今お前が殺したその食材以下の骸は次期当主に捧げる食材か？」

「聞こえないのか？ 貴様が知る価値のない物だ」

「そんなことないだろ。 そこに血を流している骸はなんだ？ その骸の損傷は明らかにいい加減に攻撃を加えている。 明らかに自分用に頂くつもりはないだろ？」

「だからこれ以上言及をーー」

私がそれ以上We i・s (白)に言及されないよう止めようとしたその時だった。

『お前は主人のために働く使用人になっているか？』

「… は？」

私はWe i・s (白)の今出た言葉に怒りがこもった声で反応を示してしまった。 先ほどまで私はWe i・s (白)の言葉を相手にはしなかったが、今We i・s (白)の口から出た言葉に怒りを覚えた。

「お前は主人に仕える者のはずだ。 主人に対して良からぬものを渡すのではなく良いものを渡せ。 それが使用人としての仕事だろ？ お前は使用人として失格じゃないかーー」

「ーーっ!!!」

私はWe i・s (白)が淡々と喋っていた瞬間、私は感情をぶつける

が如くバラのつるのように伸びた私の赫子をヤツの身体を突き刺すようまっすぐと放った。このまままっすぐ向かえば、Wei・(白)の胸に穴が生まれてしまうのだが――

――しかしWei・(白)は、そのまま赫子を貫かれるような喰種ではなかった。

「――やれやれ」

Wei・(白)は呆れた様子で呟くと体をわずかに傾け、間一髪で赫子避けた。私が放った赫子はWei・(白)の後ろに止まっていた高級車に突き刺さり、損傷した車からセキユリティシステムが鳴り始めた。

「Schey・e!!貴様に言われる筋合いはない!!」

「私の言葉程度で痺れを切らすとは、全くみつともないな。お前は赫子で攻撃する前に、言い返すぐらいの頭はないのか?そこらへんの能無しチンピラと変わらんぞ」

ヤツは息を切らすことなく、余裕の声で私をあざ笑う。普通ならば大抵の人間や喰種は私の攻撃を避けることなく赫子が体突き刺すが、Wei・(白)は予測していたかのように少し笑い、体をわずかながら移動し攻撃を交わした。

「私はいつでもお前と戦えるが、今はそんな時間はない。今、お前が突き刺した後ろの車がお前との戦いの時間を奪っているからな」

ヤツの言う通り、赫子で穴があいた車から作動したセキユリティシステムが立体駐車場という響きやすい建物が外に大きく響き、あとは誰かが来るのが時間の問題だ。

「私はお前と話ができて、いい暇つぶしになった」

「そうか。私にとっては暇つぶしではなく、無駄な時間にしか思えないな」

Wei・(白)は「そうか」と憫笑すると私に背を向け、立体駐車場

から去ろうとしたその時だった。

「待て、Wei・（白）」

私はWei・（白）にあることを聞こうとヤツを呼び止めた。Wei・《ヴァイス》（白）は嘲笑がこもった声で「なんだ？」と足をピタツと止めた。

「貴様はどこで食材を得ている？」

「食材？今更そんなことを疑問に感じたのか？」

「私は貴様がオークションで一度も商品を得た姿を見てない。貴様はなんのためにオークションにいるんだ？それに貴様はどこで主人に捧げる食材を調達している？」

前にWei・（白）の口から聞いた話だが、ヤツがオークションに顔を出している理由は自分のためではなくヤツの主人のためと聞いているのだが、ヤツがオークションで商品を得た姿は一度もなく、ただ落札されている商品を眺める姿しか私は見ない。

「最初の質問なら答えよう。それはただの社会勉強だ。時代は常に変わり続ける。新しき時代の流れを知り、その流れに乗らなければ置いていかれ、犬死をするからな。だから私は主人を古いことに定着し過去にすがりつくような頭の硬い愚者にはさせず、新たな挑戦に挑み続ける賢者へとさせるべく、私は主人の代わりにオークションへと顔に出しているのが答えだ」

「じゃあ最後の食料調達場所は？」

「後者の質問はお前の想像力に任せる。もしかしたらお前が想像できない場所で手に入れているだろうな？」

「想像できない場所？」

「ああ、そうだ。それはお前が生きているうちに知れるのかわからないが、またどこかで出会おう」

ヤツはそう言うと、街の光が輝く立体駐車場の外に飛び込み、ビル3階ほどの高さからそのまま地面に落下をした。人間がこの光景を見れば自殺行為だと思うだろうが、私はそうは思わない。なぜなら飛び降りたのは人間ではなく喰種だからだ。喰種はある程度の高さならそのまま着地することができ、さらに高いところだと赫子を体から

出し、壁に当てればなんとか助かる。

(早くここから脱出しなければ…)

私はWei・《ヴァイス》(白)が目の前から姿を消したことで、最初は面倒ごとを押し付けられたかのように抱き苛立ちが生み出されたが、今私の目で見える二つの面倒ごとはどちらも自分が起こしたことに変わりがなかった。

私は地面の温度に冷やされた不味い死体を置き去りし、誰かが来るだろう立体駐車場から姿を消した。

また、今更の話なのだが

私はWei・《ヴァイス》(白)を喰種だと伝えたのだが

それは私の鼻だけで判断したことであり

Wei・《ヴァイス》(白)が喰種の証である赫眼と赫子は私の目では一度も確認したことがない

先ほどWei・《ヴァイス》(白)が飛び降りた高さは約ビル3階と

言ったのだが

赫子を使わずにそのまま降りてしまえば喰種でも足を怪我するほどの高さだ

私が外に出た時は赫子で使った跡がまったく見つからなかった

W e i ・ 《ヴァイス》(白) はどうやって降りたんだ？

猜疑心

琲世Side

太陽が沈まり、暗闇が続く夜。

シャトーに戻った僕は自室であることを考えていた。

(…どうすればいいんだ?)

僕は今回捜査をする『ロゼ』について悩んでいた。『ロゼ』はロゼヴァルト家の略で喰種集団だ。ロゼヴァルト家は10年前にドイツにいた喰種集団なのだが、和修政特等(当時は二等捜査官)とドイツのCCG捜査官たちによってロゼヴァルト一族は殲滅されたと言われている。しかしなぜ10年前に殲滅されたはずのロゼヴァルト家が浮上したかというところ、最近頻出している喰種集団による『大量誘拐』が要因だ。その喰種集団による『大量誘拐』が起こったとされている現場に残った赫子痕が10年前に殲滅されたロゼヴァルト家の赫子痕と似ていたことが取り上げられ、今回の捜査は『大量誘拐』を起こしている喰種集団によるロゼヴァルト家関係勢力であると捉えた。

(どうしたら、他の捜査官たちと差を作ればいいのか…?)

でも僕が一番悩んでいるのは『ロゼ』自体ではなく、一緒に捜査をするのは捜査官たちだ。

今回は流石に僕の班である佐々木班が単独操作をするのではなく、他の班と捜査をする合同捜査であり、その一緒に捜査をする班の一つがS1班だ。

S1班は簡単にいえばS3、S2班に継ぐ優秀な班で、今の僕らでは比べられないほどの実力を持つ班だ。

その他の班も同じく富良班やキジマ班なども捜査に加わっているため、流石に僕たちの班はそのまま捜査をしまえば負けてしまう。それで僕はクインクスという新たな戦力として何か活かせないか考えていた。

なにかいいアイディアはないだろうか?

僕はそう考えているとー

(…ん?)

悩ましていた僕を声をかけるように机に置いていた携帯がブルブルと振動を伝えた。

僕は誰だろうか?と携帯を取り、画面を見た。

『こんばんは、佐々木さん。明日、会えますね』

それは文香さんからの返事だった。

『ロゼ』の件で少々忘れていたのだけど、僕は明日文香さんと会う約束をしていた。文香さんと会うのは久しぶりで、約半年ぶりだ。

「…」

僕は文香さんにすぐに返事を返すことなく、文字を打つ指が止まっていた。

文香さんに会うとなると、僕はなぜか嬉しさが浮かび上がらない。

卯月ちゃんや凜ちゃん、未央ちゃんなどと会う前はウキウキとした気持ちになるのだが、文香さんに会う前は全くと言ってもいいほど『嬉しい』と言う気持ちが湧き上がらない。

別に僕は文香さんを嫌っているから嬉しい感情が出ないと言っているわけではない。どうして嬉しい感情が出ないのか、僕自身わからないのだ。文香さんは優しくて美しい人なのだけど、いざ会うとなると文香さんの優しさと美しさが僕の頭から消え、負の感情がなぜか真っ先に出してしまう。

(…なぜ暗くなってしまうんだ、僕?)

今の僕では心当たりはない。この負の感情が生まれる原因。

彼女に理由があるのか?

それとも僕に理由があるのか？

今の僕にはわからない。

なぜ彼女と会おうとする時、嵐前の静けさのような暗い色になるのか、わからないんだ。

志希 Side

夜の暗闇で真つ暗な自分の部屋で冷たい床にへばりつく、あたし。あたしがどうしてこんなみつともない姿で床にいるかというところ、ベランダからの風が心地よいからだ。

夜風が涼しく吹く、この季節。

今どんな季節かと言うと、春の終わり頃ぐらい。つまりあたしの誕生日が近い。

あたしの誕生日を祝ってくれる人は、ほとんどは直接あたしに会ってくるのではなくメールやSNSなどの文章で祝ってくれる。もちろん祝ってくれる中には奴らなどの望まない人がいるけど。

まあ、そんなゴミ以下の人を考えても何も得しないから置いといて、今日のあたしは数年振りと言ってもいいほど心地の良い1日を過ごせたよ。

今日は珍しく奴らからのメールが届かなくて、久しぶりにすつきりとした1日を過ごせた。

酒飲んで仕事を忘れてんのか？と思うほどとっても静かだった。

(ーーあつ)

そんな夜風を感じ、床にへばりつくあたしはあることを思いついた。

(最近、文香ちゃんと連絡しないなあー)

心の余裕が生まれたおかげか、文香ちゃんと話していないことを思い出した。

もちろんいつも連絡はとっているはずなんだけど、それはクリスマス以前の話だというのは秘密。

クリスマス以来、文香ちゃんとまともに話していないんだよね。

これはあたしが適当だからまともに話していないんじゃないかね？と思うかもしれないけど、実は文香ちゃんの返事が原因。

前までは長く話せていたんだけど、いつもくるのは短文の文章ばかりですぐに話が終わってしまう。

(じゃあ、久しぶりに話してみよー)

あたしはスマホを取り出し、迷うことなくSNSのアプリを開き、文香ちゃんの連絡先をクリックした。

そして文章を入力し、送信ボタンをすぐに押した。

『やっほー♪文香ちゃん♪』

このふざけた返信はあたしがいつも文香ちゃんに声をかける時の返事だ。

ふつー人は怪しむかもしれないが、文香ちゃんは違う。

それは数分後に答えがわかる。

『どうしましたか？』

文香ちゃんは何もおかしくなく返事をしてくれる。

だけど、ここからがここ最近の文香ちゃんが見れる。

『明日、会えるかな？』

あたしは文香ちゃんの返事を確認した瞬間、すぐにその返事を送った。

前まではこの返事はオツケーしてくれるんだけど……

『すみません。明日は無理です』

しかもさっきの返事より数十秒早い。

『じゃあ、いつがいいかな?』

あたしが文香ちゃんへの返事の数より早く返事をしたのだけど…

(… あれ?止まった?)

返事を送って数十秒、数分、そして数十分経っても返事が来なかった。

それは気のせいじゃないかと思う野郎がいるかもしれないけど、今あたしの返事に『既読』という文字が乗っている。

俗にいう既読無視だ。

(ありやいや、なんでかな?)

普通ならば考えすぎだろうと突っ込みたくなるだろうけど、

あたしには心当たりがある。

これは次の機会で言おうと思ったけど、ここ最近変に長引いちやっ
ていることが多いから、出血大サービスで言うよ。まあ、ざっくりな
んだけど。

あたし、文香ちゃんに悪いことしているんだ。

それはここ最近、ふと気がついてしまったんだ。

私が卯月ちゃんと話すたびに、文香ちゃんはあたしを敵視する目で
見ていることを。

明らかにあたしを友人として見ていない目だったよ。

偽心

球世Side

文香さんと会う日になった今日。

僕は外に出る準備をし、シャトーから出ようとしていた。

「あれ？サツさん、今からどっか行くんスか？」

「うん、今日は用事があるから」

シャトーから出る前に僕はリビングに顔を出すと、リビングでぐうたらと寛ぐ不知くと才子ちゃんに姿があった。瓜江くんはジムに向かい、六月くんは鈴屋くんの元に行ったのだが、二人はこれから伊東班の武臣たけおみくんとどこかに行くらしい。

「ママン…まさか卯月ちゃんと今から…っ！」

「いやいや、卯月ちゃんとはいつでも会えるわけじゃないから…」

僕は才子ちゃんの言葉に苦笑いを示した。才子ちゃんの言葉は半分間違っているが半分は合っている。

「え、えっ…じゃあ卯月ちゃん以外のアイドルと…あ、会いに行くんスかっ!？」

「えっと…」

流石に『今からアイドルと会う』と口から出すわけにはいかない。僕はわずかな時間で考えて、新たな予定を立ててしあつた。

「きよ、今日はアカデミーで指導してくるよ」

「アカデミーで？ママン、もしかして卯月ちゃんより若いピチピチな女を狙いに?？」

「ち、違うよ！講師として指導に行くんだよっ！」

僕は二等捜査官時代から喰種捜査官を育成するCCGアカデミージュニアに在籍している生徒にクインケ操術を指導をしている。僕以外にも指導していく捜査官はいるが、積極的にアカデミーに向かう捜査官は多いとは言えない。

「と、とりあえず僕はアカデミーに向かうから、二人ともシャトーの戸締りはよろしくね?。」

「りよ、了解っス」

「良い女を見つけたら私に言っておくれ、ママン。そしたらシラギンに伝えるで」

「お、オイっ！サイコっ！俺はそんなつもりねーし!!」

「ははは…二人とも」

僕はそんな二人の姿を見ながら目をこすり、アカデミーで指導する時に着る服を取りにくいため再び自分の部屋に戻ってしまった。

僕は珍しく深く眠れなかった。

それは文香さんと会える嬉しさではなく、理由がわからない不安のせいで

僕は嫌なことが起きないように願いながら、文香さんが待っている公園に向かった。

六月Side

俺は鈴屋さんたちの元に訪れ、去年に行われたオークション掃討戦のすり合わせをしていた。オークションでの話はもう半年前になりつつあるが、未だに謎な点が残っていた。それは当時オークション会場には今CCGが殲滅を掲げているアオギリの樹だけではなく、ピエロがいたのだ。ピエロは構成人数や活動区域、あとは活動目的が不明なピエロマスクを被った喰種組織のことで、オークション戦終了後に真っ先に挙げられた。

今はそのすり合わせは終わり、俺は鈴屋さんと局内の小さな飲食スペースで小話をしていた。

「おはなしをするのは大切ですからね。とりあえず、このお菓子食べ

「ていいですよ」

「あ、ありがとうございます…」

俺は鈴屋さんに差し出されたお菓子を受け取り、そのまま口に入れた。つい先ほどまでは鈴屋さんとほんぽんと話していた俺だけど、でもいざ什造さんと話そうとすると話題を出し尽くしたかのように話すことがなかった。

(えっと…どうすればいいんだろう…?)

流石に沈黙をつすけることは不味いため、話題を考え続けた俺は鈴屋さんに先生のあることを聞くことにした。

「什造さんは先生が島村卯月と知り合っていることご存知ですか？」

局内では先生が島村卯月などのアイドルと知り合っている情報がないため、もしかしたら先生と仲がいい鈴屋さんは知っているかもと俺は鈴屋さんに聞いてみた。すると鈴屋さんは驚いた顔をする事なく、「ええ、知ってますよ」と答えた。

「え？鈴屋さんもご存知で？他に局内では知っている人はご存知ですか？」

「んーどうでしょうか？アリマさんかマドちゃんぐらいですかね？」

普通アイドルと知り合っていると結構広まるはずだと思うけど、なぜか局内では全くと言ってもいいほど知られていない。

「なぜ局内ではあまり知られてないんですか？」

「僕の私感ですが広めたらハイセも可哀想ですけど、アイドルの子も可哀想なので話さないと思います。トオルも同じく他の人に話してはいけませんよ…」

「え、ええ、わかりました…」

俺は他にも先生がアイドルと知り合っている人を見つけない意欲はあるが、どうして局内では話題が広がらなかったのか分かった。

「そういうえば鈴屋さんはいつも346プロに行きますよね？」

「はい、あそこにもいつも行きますが強制に近いものですがね」

本当ならば別の捜査官に任せるべきなのだが、美城副社長の指名により鈴屋班以外の捜査官が行くことは原則的に許されない。でも俺

たちが前に346プロに行くことができたのは鈴屋さんがプロデューサー^内さんに『クインクスの皆さんが来ますよ』と伝えたところ、詳しい理由はわからないが異例にも許可が降りた。

「俺、思っただんですが…」

俺が今鈴屋さんに聞く話は他の喰種捜査官も同じく思うだろう疑問だ。

「鈴屋さんは島村卯月などのアイドルを好意的に思ったことないですか？」

局内では囁かれている話だ。鈴屋さんが346プロに何度も行っていて、もしかしたら好意を抱くアイドルはいるのでは？との声が局内で聞いたことがある。

「いや、ないですよ？僕はアイドルにはきよーみないです」

「え？ないのですか？」

「ええ、ないです。というかアイドルと付き合っただんなんか意味ありませんかね？」

鈴屋さんはそう言うのと頭を少し傾けた。鈴屋さんは346プロのアイドルと並んでもいいほど容姿が良く、もしかしたらアイドルと知り合ったり好きになったりするだろうと思ったのだが、鈴屋さんの言葉に一掃された。

「まあ、流石に僕に近づいてくる女の子はいないと思いますよ」

「そうなんですか… あともしなんですけど…」

「ん？なにが”もし”ですか？」

俺

いや、私は鈴屋さんに最後にあることを聞きたい。

それは鈴屋さんに聞き続けた私が思い出したことだ。

「もし先生が島村卯月とお付き合いましたら…？」

「んーどうでしょうかねー？僕には”付き合う”という行為がわかりませんので、何ともいえませんね。一つわかることは、仲は良さそうと言えるぐらいですかね」

鈴屋さんはそう言うのと小さく笑いながら、お菓子を口に放り投げるように食べた。

でも私は、鈴屋さんと同じく純粹に笑えなかった。

偽りの作り笑いで場を過ごしたのだ。

私は先生があゝの島村卯月に良からぬ心情を抱いていた。

あの時の顔は忘れられない。

先生が島村卯月に見せた顔を――

文香 S i d e

子供の無邪気な声が聞こえる公園で一人待つ、私。

私は3人が座れるようなベンチにひよこんと座り、公園の様子を見渡すことなく地面を見ていました。

(今日、来ますよね…?)

ベンチに座ってまだ1分のはずなのに、私は10分ほど経ったように感じる。

私は佐々木さんに会いたくてしかたなく、待ち合わせ時間まであと30分前に公園に来てしまいました。

まさか佐々木さんはあの女と一緒にいるのではないか？

私はすぐに悪いことを浮かんでしまった。
今日はあの女は346プロにいるはず。
いや、まさか今日は急用で休んでいる？
佐々木さんと会うために休んでいる？
なんて愚かな女なの？
仕事をお粗末にする女。
佐々木さんが可哀想だ。
そんな女に付き纏われている佐々木さんは可哀想。

私が、なんとかしてあげないと…!!!

「……お待たせしました、文香さん」
「っ!!!」

すると約束の時間がまだにも関わらず佐々木さんの声が私の耳に入った。

あと20分になのにどうして佐々木さんの声が聞こえるの？
まさか私は幻聴を聞いているのではないかと疑ってしまった。
「……？」

私は戸惑いを抱きながら顔を上げると、一人の男性が立っていた。
「……あ、さ、佐々木さんっ」
私の前に立っていたのは、来て欲しかった人である佐々木さんだった。

「早く来てたんですね、文香さん」
佐々木さんは私の顔を見えると、私の顔を確認できたことに嬉し

かったのか少し微笑みました。

「え、ええ、今日は早く起きたので…」

佐々木さんの姿を見た私は、しばらく会えなかった彼と再び会えたことに自然と笑顔が溢れました。視界を遮る前髪がかかっても彼は他のどの人よりも比喩物になれないほど素晴らしい人には変わりがないです。

私は佐々木さんの姿を見て、あることに気がつきました。

佐々木さんの髪は以前より髪が黒く染まってきていたのです。

それはまるで最初の「彼」と出会った時と同じ髪色です。

いや、まるでじゃない

佐々木さんはどこか「彼」に似ていると思っていました

佐々木さんは「彼」ではないか？

い
もしかしたら、「彼」が好きだったことを話したらいいかもしれない

自分の心の中で変に現れた笑いが生まれました。

『なんで気づかなかった』のかと

いけないこと

文香Side

彼に出会えて喜びに包まれた、私。

佐々木さんは私の前に現れ挨拶をすると、すぐに私が座るベンチに座りました。

彼とはまるで何年ぶりかに会うような感覚をするほど久しぶりで、長く会わなかったことで彼の容姿に変化がありました。

「以前より髪が黒くなりましたね」

「ええ、皆さんによく言われます」

佐々木さんはそう言うのと少々照れた様子で微笑みました。

佐々木さんの髪は以前までは上から黒と白で分かれており色の割合は半々でしたが、今の彼は黒が多く占めていて、まるで彼と最初に出会った頃を思い出します。

彼が私と最初に出会ったのは私のおじがやっていた古書店でした。あの時の出会いは今でも私の記憶に残っています。あれは運命の出会いと言い切れる出来事だから。

「仕事の都合でしばらく文香さんに会えなくて申し訳ありません…」

「えっ？ い、いえ… お仕事なら仕方ありません。喰種捜査官は普通のお仕事より大変だと耳にしていますので私は大丈夫ですよ」

私はそう言うのと隣に座る佐々木さんに少し近づきました。

私は彼の隣にいるだけでも幸せ。

小さいことだろうけど、私はそれだけでも幸せだ。

きっとあの女は近くにいられる幸せを当たり前だと考え、既に幸せの感覚を忘れ去ってしまっているだろう。

私があの子の哀れな思考を考えていたら、さらに彼の隣にいられることが幸せに感じられる。

「えっ？ どうしたんですか、文香さん？」

「… あっ」

私は佐々木さんの驚いた言葉に自分が夢中になり過ぎたことに目を覚ましました。

急に近づかれたら驚かれるのに、私は彼の横にいるという状況に我を忘れてしまいました。

せつかく会えた佐々木さんに嫌われないよう、疑われない嘘を考えなければなりません。

「すみません…しばらく佐々木さんとお会いしていませんでした…その…嫌でしょうか？」

普通ならば間違いなく疑われる口実。

しかしその時の私は数十秒と言う短い時間の中で彼に嫌われないよう必死に考え出した答えだ。

その時の私は心の奥底で嫌われるのではないかという恐怖を抱えていました。

「い、嫌と言うか…急に近づくと驚くので…」

しかし彼は嫌がる様子を私に見せる事なく、驚きのあまり言葉を探していました。彼の様子を見る限り、私を嫌う様子はありませんでした。私は戸惑う彼に「このままでここにいてよろしいでしょうか？」と聞くと、彼はしばらく考えた末に「文香さんがお望みならいいですよ」とまだ残っていた戸惑った様子で承諾してくださいました。

まさに嬉しい誤算が今、ここで起きたのでした。

いつもより彼の近くにいられることに私は彼に気づかれないう、嬉しさを心の内に留まらせました。

「今は周りに人はいないので大丈夫ですが、もし誰かが現れたら離れて頂けられたらありがたいです」

「ええ、わかりました」

彼の言葉を耳にした私はその時が来ないよう密かに願っていました。この祝福の時を壊しに来る人が現れることのないようにと。

「あの…佐々木さん」

「ん？」

「聞きたいことがあるんですが…」

私は最初に佐々木に聞きたいことがありました。それは記憶を失っている彼を思い出させるための手順の一つです。佐々木さんと出会って2年ほど経過した今、なぜ今まで聞かなかったのだろうかと疑

間に感じてしまうほどの質問です。

「佐々木さんはもしかして… 高槻作品をお好きではないでしょうか？」

かつて彼が好きだった書籍。彼は私に高槻作品を勧めた記憶が今でもはつきりと思ひ出します。

もしかしたら佐々木さんも彼と同じく高槻作品が好きであるに違いない。

その時の私は彼が思ひ出すと確信を持っていました。

しかし佐々木さんは私が予測した反応を示しませんでした。

「あ… 高槻作品ですか…」

佐々木さんは高槻作品を聞いた瞬間、高槻作品に興味を抱いた様子と何かを思ひ出した様子を示さず、避けたがるような反応をしました。

「…あれ？佐々木さんはお好きではないのでしょうか？」

「あ、いえ… 多少は高槻作品を読みますが… 何というか… 苦手というか…」

佐々木さんの姿はまるで彼と初めて出会った時の私を見ているようでした。高槻作品の特徴である『暗い表現』に嫌気を覚えていた私を思ひ出させるように。私は彼の言葉に高槻作品は自分にとって苦手な作品だと思ひ出したのです。これも彼に夢中のあまりに忘れたことでした。

「そ、そうなんです… あ… えっと…」

私は佐々木さんの予想を反した反応に次の言葉が出ませんでした。

予定ではこのまま意気投合をして会話を広げさせるつもりだったのですが、佐々木さんの苦手そうな発言に一気に計画が崩れてしまいました。私は新しい話題を口から出そうとしたその時でした。

「……あの文香さん」

「……はい？」

「申し訳ないんですが……この後、急用ができてしまったので長くいられないんです……」

「えっ急用ですか……？」

彼のその言葉に先ほど私の頭にあつた嬉しさが一瞬にして忘れられたかのように消えてしまった。

その同時に私の頭の中に真つ先に浮かび上がったのは、あの女だった。

まさか彼はあの女に出会うつもりではないか？

あの女は私が彼と会うことを狙って設定したんじゃないか？

いやいや、そんなことないはず。

なんで無意識に考えてしまうんだろうか、私。

「そ、それって……誰かにお会いするんですか？」

私は心の中で生まれる妬みを押さえながら、佐々木さんに恐る恐る理由を聞いた。彼を疑ってはいけない。彼は私を裏切るような人じゃない。私は心の中で反芻していました。

「いえ、CCGアカデミーで指導するんですよ」

「指導ですか？」

「はい。将来喰種捜査官になる子達に指導を急遽やることになってしまいました…… 本当にすみません」

「あ……い、いえ、だ、大丈夫です……」

佐々木さんの理由を耳にすることができた私は安心を得ました。あの女と出会うのではなく、仕事の都合であつたことに。しかし完全に安心をしたわけではありません。次はいつ佐々木さんと会えるのかわかりません。もしかすると数ヶ月先なのか、それとも年明けの話のなるのか。そう考えていた私ですが、佐々木さんの口から思わぬ発言が出ました。

「お詫びというのもあれですが、来週ぐらいにもう一度お会いするという形でよろしいでしょうか？」

「え……？来週ですか……？」

佐々木さんの口から出た思わぬ幸運。

「はい。今日は予定より短くなるのは必須なので、今度は長く話しませんか？」

「……ええ、いいですよ」

私は何も不満を言うことなく、佐々木さんの提案に受け入れました。

私は彼の言葉に確信を得ました。

私はまだ彼に見捨てられていない。

彼はまだ私を好きに思っている。

志希 S i d e

346プロの真上にお天道様がある、お昼頃。

あたしはやるべき仕事が終わりに、自分が所属している部屋に置いてあるソファアームにぐうたらと寝そべっていた。

(帰ったら、なにしよう?)

あたしが事務所ですべきことはプロデューサーの帰りを待つだけ、それは数十分あれば終わる。そしてまっすぐと家に帰ればい

い。だがそれじゃ味気のない帰りをすることになる。事務所で何かやりたい気持ちはあるのだけど、行動を起こしてくれる起爆剤が見つからない。あたしはソファで寝転びながら考えていたら、あたしが願っていたことが実現するように部屋のドアが開いた。

「あー志希さんー！」

「おっ、ちょうどいいところにきたね♪卯月ちゃん♪」

部屋にやってきたのはあたしの愛しい妹である卯月ちゃんだ。もちろん血縁関係で妹とは言ってなくて、妹のような存在という感じで言っているだけだ。とりあえず妹の話を置いといて、部屋にやってきた卯月ちゃんの様子はあたしに何か聞きたそうな様子だった。

「ちよつと相談したいんですが…。」

「相談？みんなに言えないことかなー？」

あたしは言いづらそうにしていた卯月ちゃんを見るなりソファから立ち上がり、卯月ちゃんに堂々と近づいた。

「なにになに？どんなことを相談したいの？」

「えつと…。」

卯月ちゃんから相談内容を聞くまでのあたしはとてもウキウキとしていた。なぜって暇だったあたしの前に卯月ちゃんが現れてくれたからね。

相談内容を聞くまではね。

「こ、今度、佐々木さんとお食事しようかなつと」

「あー… そうなんだ」

卯月ちゃんの相談内容を聞いたあたしは、思わず言葉を詰まらせてしまった。

その理由なんだけど、もちろんササハイさんがただの人間ではないことが挙げられるけど、それ以上に問題なことがあたし自身にあった。

また文香ちゃんに嫌われる原因を作ってしまう、あたし。

あたしは文香ちゃんも卯月ちゃんも大切な人だ。

だけど一方を優しくしてしまうと、もう片方に悪い印象を与えてしまう。

あたしは今、その行動を起こそうとしてしまう。

避けたくても、避けられない。

人間関係って、ほんと難しい。

これだから、イヤなんだよ。

私はいつも通りに10分前に346プロダクション前に車を止め、お嬢様の帰りを待っていた。いつも346プロダクション前に路上駐車をするとその横に通りがかかる歩行者から敬遠するような視線が伝わる。私はそんな輩を気にすることなくただお嬢様の帰りを待つ。たまに『お前はなんでここで路駐しているんだ、成金野郎』、と何もわかっていない無教養な歩行者から声をかけられるが、別に私がいつも路上駐車をしている場所は警察に切符を切られる場所ではないのだから、愚かなまま愚民の声を聞く価値はない。

私の頭の片隅にあった中々消えない嫌な記憶を思い返していると、ずっと閉まりっぱなしだった車内に新しい空気を入れ替えるように後部席が開いた。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「ええ、ただいま」

助手席から現れたのは私の主である黒埼ちとせお嬢様であった。本来なら私は運転席ではなく、車の外でお嬢様の帰りを待ち、そして後部席のドアを私が開けるのだが、しかしお嬢様は『そこまでやらなくてもいいわ』と何度もおっしゃったため、行う回数は少ないもの。こうして運転席に待機したまま待つことをやるようになった。後部席からシートベルトが閉まる音を耳にした私はしばらく止まっていた車をゆっくりと走らせた。

「今日のお仕事はいかがでしたか？」

「ええ、今日も問題なく無事に終わったわ」

「お嬢様のご無事にお仕事を終えてよかったです。それで本日のご夕食は——」

お嬢様は嘘が混じっていない返事をし、綺麗に作られたアームレストに肘を置いて安らかな顔でバックミラーに視線を向けた。これがお嬢さまがお仕事から終えた後のいつものやりとりだ。その後の流

これは私が今日の夕食のメニューを言うはずなのだが…

「んー晩ご飯のお話は後にしてくれるかしら？」

「あとですか？」

話していた私に突然、お嬢様は言葉を挟んだのだ。普段のお嬢さまは夕食の話を省くようなお方ではないのだが、いったいどうしたのだろうか？

「ええ、晩ご飯よりも知りたいことがあるの。とても知りたい欲求が空腹でしかたがないのよ」

「お食事ではなく情報がお望みとは珍しいですね。それはどんなことでしょうか？」

「前に私が依頼した3つのことなんだけど、全部わかったかしら？」

「…まだすべてを解き明かしておりませんが、現時点わかっていることをお伝えしてもよろしいでしょうか？」

「ええ、全く問題ないわ。何せちーちゃんの進歩が良さそうに見えるからね」

お嬢様が知りたがっていたことは以前お嬢様が依頼した3つのことだった。1点目は都内で起きている人さらいの正体、二つ目は美食家の消息、最後は島村卯月が助かったのは運だけなのか、の3つの依頼だ。

「まず人さらいの”ロゼ”について、奴らは主人が口にする食材のために大量に誘拐していることが判明しました」

「主君用？主君用にしては大量に拐いすぎじゃない？その主君さんは結構食べるわね」

「いいえ、主君が過食だからではないと思います。これは私の見解になります、主君の意を反した従者の勝手な行動だと思えます」

「あらら、従者の勝手な行動とは勝手な行動って嫌なことね」

お嬢さまは妙に意味が含まんだ言い方をすると、私の目をまつすぐと見るようにバックミラーを見た。

「通常喰種は月に一人の人間を口にすれば生きていけると言われていますが、ロゼは半年で約50人以上の人間をさらっており、いくら主君が口にする食材にとはいえ、明かに異常です」

「聞いた感じだと食材の質から量へと変わったようね。うちの千夜ちゃんがそうならないことに祈るしかないわ…」

「よく私の前でよく言えますね」

私はお嬢様の言葉を指摘すると、話を指摘してくれたことに待っていたと言わんばかりに「ノリはいいわね、ちーちゃん」と嬉しさが含んだ笑いを見せた。相変わらずお嬢様は様々なお顔を見せる方だ。

「それで2点目は何か分かったからしら？」

「2点目はまだ推測範囲段階ですが、おそらく美食家はロゼと関係があると思われれます」

「お？いきなりすごいこと言うわね。ちーちゃんの推測にしては結構大雑把じゃないかしら？」

「いえ、ご安心を。ちゃんと理由もございます」

2点目についてはただの自分の考察ではなく、関連性のある情報をもとに考察したものだ。

「ロゼの活動がCCGに目をつけられるほど活発し始めたのは去年の12月頃。その1ヶ月前の11月にCCGが喰種オークションに襲撃を始めた時期であり先ほど説明をした喰種の食事情のことを考えると、従者は主人にふさわしいものを探そうとたくさんの人をさらに始めたのだと思います」

「でもそれだと美食家の関連性が見出してないように聞こえるけど？」

「ええ、今の話だけでは確実に足りません。そのために”つながりのある情報”をお伝えします」

どんな場面も必要なことだが、どこでも繋がりが無ければ完成はしない。

単発的な話を一つ一つ言っても、とある重大事件をただ捜査をしても、とある議論を収束をしようとも、結局は繋がりを作らなければ完結はしない。

「ロゼの活動が開始したのは半年前ではなく約三年前になります。三年前と言えばちょうど美食家の活動が途切れた時期でもあります」

「あーそれ、前にちーちゃんが言ってたね。ちょうどお酒を飲んでい

る時にね」

「お酒で酔っていたにも関わらずよく覚えていますね」

「ええ、覚えてるわ。って、ちーちゃん、その発言はひどくないかしら？」

「時には毒が必要かなと」

私はそう言うのと少し鼻で笑い、頬を少し上げた。普通ならばやつてはいけない行動なのだが、お嬢様とは浅い付き合いではないためできる行動だ。

「まあ、それは置いといて。ロゼと美食家の関係性は時期が同じだったからでいいかしら？」

「はい。現時点ではそのような可能性があります」

「情報は途中でも、結構調べているわ。どこで得たかは聞かないけど」

お嬢様はそうおっしゃると納得された様子で数回うなずいた。

「それで最後の3点目の卯月ちゃんについてはどうかしら？」

「最後の3点目ですが・・・申し訳ございません、お嬢様」

「ん？」

「島村卯月が20区に取り残された件についてですが、現時点では有力な情報がございませんでした」

「あら？ちーちゃんにしては珍しいわね」

先ほどまで淡々と2つの情報を話していた私だが、最後の情報になると詳しい情報を言うことなく話を途切らせてしまった。

「先程私がお伝えした情報は不十分ながらご用意することができましたが、最後の島村卯月に関する情報はもう少しお時間を頂けましたら有力な情報を得ることができます」

「どうしても聞かないけれど、次回までに用意してね。にしても、いつもちーちゃんと依頼を受けてくれるちーちゃんが遅れるとは本当に珍しいね」

「申し訳ございません、お嬢様」

お嬢様は遅れている原因を言及することなく『まあ、人間だから失敗するのは当たり前だ』と楽観的に言葉を返してきた。

私は最後のお嬢様の依頼である島村卯月の件についてすぐに終わ

るのではないかと考えていたが、残念なことに考えが外れてしまった。その島村卯月の情報の鍵となったのは島村卯月本人ではなく、一ノ瀬志希だ。

この私の話を聞いて、島村卯月本人に聞けばすぐ終わるだろうと考える者が現れるだろう。

しかし本人に聞くとなれば変な察しを抱く可能性が現れると思われる、私は島村卯月が20区に来るきっかけを作った一ノ瀬志希に聞くことになった。

私は一ノ瀬を決して只者と捉えていない。持ち前の化学の知識と喰種の知識で作り出した薬品に喰種やCCGの情報を取引している人間が只者なわけではない。

もしかしたら20区に起きたことについて知っているのではないかと、私は一ノ瀬志希に情報を得ようとしたのだが――

あの女はそう簡単に情報を提供する人間ではなかった。

私は一ノ瀬が欲しがらるだろう情報のいくつかを提示し、島村卯月が20区に取り残された本当の理由を探ろうとしたのだが、一ノ瀬は『あの時の出来事は覚えていないの』とまったく言っても良いほど応じなかった。

ヤツは明らかにあの時の真実を知っている。

これは私の勘ではない。

ヤツから現れた仕草や雰囲気教えてくれた。

ヤツは間違いなく”真実”を知っている。

「――以上が現時点でわかっていることです」

私はお嬢様が依頼した情報を報告しそのまま終わるのかと考えてたその時、お嬢様が「あ」と何かを思い出した仕草を見せた。

「そういえば、一時期活動していた”眼帯の喰種”はどうなったかしら？」

「眼帯の喰種？なぜ3年前に消えた喰種を？」

私は疑問を抱いた声を出してしまった。

「つい最近ふと思ひ出しのよ。なぜかその喰種の活躍を耳にした時、私に胸の中から親近感というものが湧き上がるの。その喰種について、ちーちゃんは何か知っているからしら？」

「…いえ、眼帯の喰種については知りません。知っていることと言え
ば4年前に消えたことぐらいしか知りません」

私の返事を耳にしたお嬢様は「んーそれは残念わね」と嘆息を漏らした。

「でもその眼帯の喰種はCCGでは駆逐された扱いかしら？もしかして誰かのクインケになっていたりして？」

「…そのような情報はごいませぬ。眼帯の喰種に関係する」

私が眼帯の喰種について把握していることは、ヤツの活動が消えた年と言えば…

「確かCCGから高レートの喰種としてマークされたんだよね？その喰種が急に活動が止まるだなんておかしいじゃない？」

お嬢様がそうおっしゃると、『んー』と悩んだ様子で流れ行く街の景色を見る。

「だから、ちーちゃん。また一つ頼んでもいいかしら？」

「また依頼ですか」

「ええ、信頼しているから頼んでいるのよ。他の人間だったら悪い返事しか聞けそうだし」

「おそらくは『給料に似合わない労力』と言うでしょうね」

人を糧にする喰種から情報を聞き出すなど、生死に関わるような仕事を私以外頼めそうな家中の者はいない。

いや、そもそも私がやっている仕事は黒埼家の者には知られていない。私がこのようなことをしているなど、知られてはいけない。

「分かりました。次回まで不足していた3点の情報を完全に用意してきますので、どうかお待ち頂けますでしょうか？」

「ええ、いつでも待っているわ。その時には私を満足させるぐらいの結果が来ることを願っているわ」

眼帯の喰種

その名を聞いて、私の頭の中に心当たりがある人物が一人特定している。

いや心当たり程度の言葉で表すのは足りない人物がCCGにいる。

その人物の名は――

あなたのことばかり

卯月Side

ちょうど空の上にあった太陽が厚い雲に隠れてしまった、お昼。

先ほどまで興味津々で私に近づいていた志希さんでしたが、私が相談したいことを話すと態度が一変しました。

「そ、そうなんだね…卯月ちゃん」

突然喉がつかえたと思わせるほどの話し方になった、志希さん。

私は『何か悪いことを言いましたか?』と志希さんに聞くと、『あ、いやいや!!別に悪いコトじゃないよ??』と気さくな反応を示しましたが、志希さんが見せいている反応は何かを隠しているように見えませんでした。

「ササハイさんと行くのは、ま、まあ、いい提案じゃない…かな?」
ぎこちなく笑いに、無理やり返した返事。

志希さんの様子は明らかに変だ。

私は志希さんが見せた異変に聞きたかったのですが、せっかくのいい気分を壊されたくない思いが私の胸の中に強くなり、志希さんのいつも通りではない様子を聞くのをやめました。

「…そうですね…ちよつと相談に乗ってくださいますか?」

志希さんの様子がおかしくなったのはきつと別の理由だ。佐々木さんに関係した理由じゃないはず。私は自分に言い聞かせるように胸の中で呟きました。

私の返事を耳にした志希さんはまだぎこちなさを感じを抱きながらも『う、うん…いいよ!なにを聞きたいかな?』と私の話に乗ってくれました。

「もし佐々木さんと一緒に食べるとしたら…コースがあるお店に行つた方がいいじゃないですか?」

「コースがあるお店?」

「はい!コースの方だと決められた料理が来て、迷うことなく過ごせ

るじゃないかなって」

具体的にどんなお店にするのかは決まってるけど、私は単品で頼むよりも事前に決まってるコースを選んだ方と思う。そうしたらごたつくことなくいいと思うのだけど…

「んーそれだったらコースじゃなくて、ふつーに頼んだ方がいいよ？ おそらくササハイさんはお酒は飲まなし、食べないと思うよ」
「え？ 佐々木さんは食べないのですか？」

お酒は飲まないのはわかるけど、せっかく食事をしに行くのに佐々木さんが食べないのはおかしい。

その同時に志希さんのその話を耳にして思い出しのだけど、そもそも私は佐々木さんが食べ物をお口にさせた姿は一度も見ることがない。

「うんうん、ササハイさんは意外と食事に気をつけてて、外食なんて滅多に行かないよ。いや、外食と言っても喫茶店でよくコーヒーをいただく程度だね」

「そ、そうなんです…でも少しぐらいは食べても問題ないじゃないですか？」

「んーササハイさんは少し食べても構わないかもしれないけど、その少しが喰種捜査官にとっては命取りかもね。なにせ事務で働く職じゃなくて喰種相手に闘う職だから、卯月ちゃんが思っている以上に気をつかっているとあたしは思うよ」

「そうなんです…なら単品で頼む形がいいですね。」

私は志希さんの言葉にまだ疑問を抱いていましたが、喰種捜査官だからと言う理由に少し納得してしまい、せっかく自分が提案したコースをやめてしまいました。

「そりゃーササハイさんは喰種捜査官だし、もし何かあったらすぐに行かないといけない職業じゃん？ あと介護でかな？」

「確かに佐々木さんは…えっ？ 介護ですか？ 誰の介護を？」

「誰って、一人しかないじゃん」

志希さんはそう言うのとピストルを打つ感じに私に指をさしました。

「か、介護っ!? 私はそこまでお酒は飲みませんよ！」

「にやはは♪卯月ちゃんがそう考えても、もしかしたら意思と反した

行動が出るかもよー？」

自分で言うのはあれだと思うけど、私はお酒を飲むと人に迷惑をかけるような人ではないはず…

その後、志希さんからのアドバイスとして『食事の席でケータイを出さないでね。せっかく一緒に食べる時にケータイいじってたら来た意味ないじゃん。ほら、カフェでなにも喋らずに自分のケータイをいじっているカップルを見ない？あんなカップル、すぐに別れたらいいのに』と独り言を言うように話してくれました。

この前に一緒にレストランに来ているにも関わらず、なにも話さずお互い自分の携帯にいじるカップルを見かけた。綺麗な服を身に付け可愛らしいメイクをした女性と、クールなパーカーにかっこよくきまつている男性が向かい合って座っているのに、一緒にいることを忘れているみたいに無言で携帯をいじり、お互いが過ごす時間を消していく姿が”理想のカップル”だなんて言いたくない。志希さんはみんなが気づかない所を指摘してくれる。

「それで…志希さんは賛成してくれます？」

ずばずばと考えたことを話す志希さんに聞くのは合わないかもしれないのですが、私は志希さんに賛成してくれるか聞きました。いつもの志希さんでしたら『自分で考えてね』と言われるんじゃないかと思いましたが、私は自信がなかったので理解してくれる人が欲しかったです。だから私は志希さんに賛成してくれるか聞きました。

ところが志希さんは返した反応は、私が思った反応とは違ったものでした。

「…えっ？」

きつぱりと『自分で考えてね』と言うであろう志希さんが、どこか焦りを抱いた反応を見せたのでした。それは私が『佐々木さんと一緒に食事をする』と話した時と全く同じ反応だった。

「さ、賛成…？」

「…は、はい。志希さんならもちろん賛成…：：してくれますよね？」
志希さんから再び現れた、嫌な雰囲気。

私は話している途中で同じ雰囲気になっていていることに察してしまい、尋ねる声が段々と小さくなってしまうました。明らかに触れてはいけないものに触れてしまった空気。私はなにがいけなかったのか、場が凍った部屋で一人考えていたら…：

「あ、あたしは…：さ、賛成する…：かな」

志希さんは目で見えるほどの汗をかきながら。途切れ途切れに口を開きました。私は『賛成する』という言葉を目にした時、一瞬だけ嬉しくなりました。しかしそのすぐに嫌な雰囲気に戻りました。志希さんの口では『賛成』とは言ってくれましたが、部屋の雰囲気は明らかに『賛成』とは言い難いものでした。

「そ、そ、そういえば！もうそろそろプロデューサーが、や、や、やってくる時間だった！」

「…：えっ？：そうなのですか？」

「う、うんっ！今すぐに行かなきゃ！じゃー、ま、ま、またね！」

不自然な喋り方に大袈裟な素振り、そして気を遣われているような堅い空気。私は先ほどまで消極的だった志希さんが突然声を上げて物々しい行動に驚いてしまい、すぐに立ち去る志希さんに『さよなら』と声をかける余裕もなく、志希さんは部屋から出て行ってしまいました。

「…：…」

志希さんが去った後、私はしばらく部屋に出ようとはせず留まっています。

なんだろう、この嫌な感じ。

ワクワク感じるはずの時なのに、同時に後ろ向きな暗い感情が生み出された。

私は何か変なことを言ったのかな？

私は答えを求めるように、窓に映る空を見た。

私が部屋に訪れた時に輝いていた太陽は、隠れていた太陽は未だに姿を表さない。

なんで悪い空気になったのか自分でもわからない。

志希さんが示した感情が一体なんなのかわからない。

佐々木さんと過ごすことが悪いだなんて、どうしてなのかわからない。

ただ一緒に過ごすだけなのに、話してはいけない悪い雰囲気になるのかわからない。

わからない。

私の彼と一緒に過ごしたいだけなのに、不安を抱かせる雰囲気。

どうしてなの？

幸せが遠ざかる道

琲世Side

公園周辺を照らしていた日が灰色の雲に遮られた、昼ごろ。

僕は文香さんと場所を移動することなく、公園にあった木製のベンチでずつとお話をしていた。

「あの… 佐々木さん。そろそろお時間ではないでしょうか？」

「いえ、まだ時間はありますよ。心配しなくても大丈夫です」

文香さんはどこか心配した様子で僕の予定を幾度も伺っていた。

それは僕が遅れてしまうのが心配と言うより、僕と過ごす時間に心配していると言えば良いだろう。

（もう少しお話したいんだけど…約束しちゃったからなあ…）

本当ならば僕は時間を気にすることなく文香さんと一緒に過ごせれたのだが、家から出る時に重大なミスを犯してしまった。

才子ちゃんたちに今日行く予定がなかったCCGアカデミージュニアに所属する生徒の指導をうたってしまったのだ。別にアカデミージュニアに行かなくてもいいのでは？と最初は思ったのだが、後ほど嘘だとバレたくなかったから結局CCGアカデミージュニアへ行くことになってしまった。

（だけど… 急いで行くとは言っていないから、もう少し文香さんと話せるなあ）

でも僕はアカデミージュニアの方には『すぐには行く』とは伝えていないため、まだ公園にいられる。

「佐々木さん、お仕事の方はやはり忙しいのですか？」

「ええ、そうなんです。以前は一等捜査官だったのですが、上等捜査官に上がったせいから前よりも責任が重い仕事が増えましたよ…」

上等捜査官になってから僕は文香さんとは会う機会がさらに減ってしまった。それは文香さんだけでなく、卯月ちゃんや楓さんなども例外ではない。

「そうなんですネ… やはり佐々木さんも忙しいのですネ…」
「ええ、しばらくそうかも知れません…」

僕がそう言うと、僕たちの会話が続くことなくピタリと止まってしまった。

「……」

まだ文香さんと話したいのに、僕は話題が思い浮かばず口を閉ざしてしまった。

(な、何か話すことないのか？僕？)

間があまりにも長く続いたせい、僕は落ち着きが段々と失われつつあった。いわゆる、何か話さなければいけないと言う焦りだ。この焦りで無理やり別の話題を振ってしまえば、空気が悪くなるのは必然。

(… あっ)

ただ時が過ぎ去り僕たちの間に沈黙だけが漂っていた中、僕はあることをふと思い出した。

「文香さん」

「ん？どうしましたか？」

「前からずつと気になっていたことなんです…」

文香さんは僕の声の声を耳にした後、少し微笑んだ。先ほどもそうなのだが、普通の人だったら長い沈黙に耐え切れず居心地を悪くさせるのに、文香さんは沈黙を嫌がる様子もなく優しい目で僕を見ていた。

「僕と初めてお会いしたこと覚えてますよね？」

「ええ、覚えていますよ。それがどうしたんですか？」

それは文香さんと初めて出会ったことに遡る。あれは決して忘れるわけがない。

僕は少し間を空け、口を開いたんだ。

「……僕と初めてお会いした時、どうして文香さんは涙を流したんですか？」

「…えっ？」

僕が質問をした途端、優しく僕を見ていた文香さんは優しさがスツと消え、目を見開いた。

「えっと……それは……どういうことですか？」

「突然話題を変えてしまって申し訳ございません。今思い出したことなくですが、ずっと気になっていたことなんです。僕と初めて会った時にどうして泣いたのか今でもわからなかったのです……」

文香さんは僕の話の話を聞くと「あ……ああつ」と思い出した仕草をした。「そ、そうですよね……初めて会うのに突然涙を流すのはおかしいですよね……？あはは……えっと……そ、その……う、うん……」

ぎこちなく口を動かして目を合わせようとしない、文香さん。

少しの間、文香さんは何か小さく独り言をしていた。

なにを言っているのかわからなかったが、落ち着くために自己暗示をしていたのだろうか？

「……え、ええと……以前佐々木さんに似た方にお会いした人がいました」

「僕に似ている人？」

「はい……その方があまりにも佐々木さんと姿が一緒に……私は涙を流したので」

文香さんはそう言うと、手をギュツと握りしめた。

「その僕に似ている人って今はどうしているのですか……？」

「……いなんです」

「いない？」

「ええ、今はいないんですよ……」

僕は文香さん悲痛に話した『いない』という言葉に察してしまった。それ以上触れるべきではないに聞わらず、なにも知らなかった僕はさらに踏み出そうと聞いてしまった。

「もしかして、その人は亡くなって……」

「彼は亡くなってはいませんよ!!」

僕が『良からぬこと』を尋ねた瞬間、視線を合わせなかつた文香さんは僕の口を閉ざすほどの怒りの声を表し、すぐさま目を剥いた。

「……っ」

文香さんに尋ねようとした僕は言葉を止めてしまった。

身を感じるの怒りに出会い、その後胸の中に現れる冷やか心

地。

今の僕はまるで悪いことをしてしまい、どうしようもなく黙り込む子供の状態だ。

僕は満ちた怒りを見せる文香さんを見てしまった。

普段怒りとは無縁の存在だと思っていた文香さんが男性とは違う女性の怒りを表した文香さんを見るだなんて、数時間前の僕は予想できただろうか？

「…あ、す、す、すみませんっ!!と、と…と、突然、か、かか、感情的に… なってしまい…」

場が凍りついて数分の時が経つと、ヒステリックに声を出した文香さんはハツと自我を取り戻し、震える声で真っ先に僕に謝った。

「いえ、謝らなくてもいいです。僕が間違ったことを言ってしまったって本当にすみません」

「私が誤解するような発言したのが悪いのです… 私が言った『いない』は… 亡くなったんじゃない… 行方不明でわからないんです」

「行方不明？」

「ええ… 彼の行方が分からず、今も全く手がかりがなくて… か、彼は… いなくなる要因なんてなかったはずなのに…」

「… 彼について詳しくお聞きしてもよろしいでしょうか？」

話によれば文香さんが言う僕に似ている人は当時大学一年生で、文香さんとは一つ下の男性だと言う。

彼は僕と非常に似ているらしく趣味や容姿、あと僕が発する声もほとんど同じらしい。

彼が消えたのは4年前のある時で、文香さんがその事実を知ったのは誰も興味を抱かない大学内に貼られた掲示板だった。

「私はあの目を忘れません… 構内で歩く学生たちが見向きもしない掲示板に彼が行方不明を知らせる張り紙があつたことを…」

「その僕に似ている人の写真は手元にありますか？」

「…いえ、持っていない… 彼の写真なんて… 持っていないんですよ…」

視線を下に向け、声が震える文香さん。

「か、彼は…優しいお方でした…私が大学生の時に数少ない友人でいつも本のお話をしていました…それなのに」

そして文香さんは悲しみを抑えるように手を握りしめる。

「…彼は突然姿を消したのです…あの方がいなくなってもいい理由なんて一つもないのに…どうしてなの…？」

「…」

一粒一粒と涙を流す文香さんの姿。

普段見ることのない彼女の姿に僕は胸が締め付けられた。

その同時に僕の胸の中にあることが自然に芽生えていた。

「…あの文香さん」

「…はい？」

「僕がその人を探しましょうか？」

「さ、探すのですか…？」

「はい。どのぐらい協力できるかわかりませんが、もしかしたらこちらで見つかるかもしれません」

僕は悲しむ文香さんの話を聞いて、助けたいと言う思いが生まれていた。

もしかしたら文香さんが探している人が捜査していくうちにどこかで見つかるかもしれない。

「そ、そうですね…わかりました。佐々木さんにもお願いしてもよろしいでしょうか…？」

「ええ、出来る限り捜査をしてみます。まず捜査をする前にその人のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

ここまでのいい流れだったのだが、快晴だった空に黒い雲が急に現れるようにまた文香さんに異変が訪れた。

「…えっ？…な、名前ですか？」

文香さんは僕の発言に疑うような顔をしたのだ。

何かおかしいことを言ったのだろうか？と僕は改めて考えたのだが、別におかしいことを言っていない。

「ええ…ま、まずは名前をお聞きしないと調べられないので…」

「…あ、そうですね！名前を言わなきゃ始まらないですよね！…」

そ、そのお方の名は…」

どうもぎこちなさを抱える文香さんは、探して欲しい僕に似ている男性の名前を言おうとしたのだが…

「そのお方は…その…お…方…は…」

名前を文香さんなのだ名前を言えずに同じ言葉を繰り返し、さらに言うたびに段々と声が震え始め、そして言葉を発することができなくなった。

「…っ…っっ」

目を大きく開き喉に手を添える、文香さん。

その姿は驚いているのかそれとも怯えているのか判断できない。

再び文香さんに異変が訪れたと察知した僕は「文香さん？どうしました？」と尋ねようとしたが…

「な、なんで…わ、私は…い、言えないの…？」

いつも敬語で話すはずの文香さんが、怒りがこみ上げた口調になり始めたのだ。

明らかに僕に言っている口調ではなく、誰にでも伝えていない独り言だ。

「…えっ？どうしましたか文香さー」

「か、か…彼…彼のな、名前…い、い、い、言え…ない…な、な、な、なんで…？」

手と声が震え始める、文香さん。

落ち着きがなく、息が荒い。

「か、か、彼、彼の、彼の名前、なんで…なんで喋れないの？ど、ど、どうして…？どうしてなの…？わ、わ、わからない。わからないわからないわからないわからない!!」

頭を抱え次第に叫び始める、文香さん。

その姿はいつも見る落ち着いた彼女ではない。

気が正気じゃない。

「彼の名前…言えない…言えない…そんなの嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だっ!!!」

「あ、あの文香さん！大丈夫でー」

僕は明らかに普通ではない文香さんの肩を触れとしたその時だった。

「……っ!!」

文香さんに触れようとした瞬間、僕は誰かに攻撃されたかのような激しい頭痛に襲われた。

(な…なぜこのタイミングで起こるんだ?)

その頭痛の痛みは初めてではなく以前にも起こった痛みだ。

ただの頭痛で味わうじわじわとした痛みとは違い、頭の一部が引きちぎれる痛みが断続的にくるのだ。

それに目を開けるだけでも辛く、視界が歪んで見える。

今僕は公園にいるはずなのに、なぜか真つ暗な部屋に閉じ込められているように感じる。

別に何かを見たわけでもないのに、どうして今起こったのかわからない。

僕は痛みを抑えるように歯を噛みしめ、頭に手をつける。

痛みが起きた原因をいくら考えても答えが出ない。

わかるのは彼女に触れようとした時に痛みが現れたぐらい。

だとしたらこの痛みは彼女と何か関係があるのか?

そうなれば卯月ちゃんの時のように僕の中にいる”彼”が現れるはず。

でも今現れるのは頭の中に現れる痛みだけ。

なぜ”彼”は現れない?

卯月ちゃんの時と同じ痛みのはずなのに?

「……き、佐々木さん?大丈夫でしょうか?」

「……っ!!」

文香さんの呼びかける声が聞こえた瞬間、僕を苦しめていた痛みが嘘のように去っていった。

痛みが消え意識を取り戻した時、文香さんは僕の頬に手を置きとて

も心配そうに僕を見ていたことに気がついた。

「あつ…いえ、大丈夫です…」

僕は文香さんにそう返事した時、自分の体が無意識に震えていたことに気がついた。

その震えは恐怖で怯えていた感覚に似ていた。

「あ、あの… すみません、文香さん。僕はそろそろ行かないといけないので」

「…えっ？どこ…あ、ああ… アカデミーでしたね」

震えていた僕は腕時計を見ると、そろそろ公園から出なければならぬ時間になっていた。

時計を見た僕の心情はあつと言う間に時間が過ぎていたよりも、早くここから立ち去りたいと言う気持ちが先に生まれていた。

「で、では…また来週で…」

「あ…はい…また…」

僕は文香さんに別れの挨拶をすると、急ぎ足で公園から去った。

僕たちの会話はとてもぎこちなく終わってしまった。

長らく会っていないにも関わらずに、今回の出会いで生まれたのは出会えた喜びよりも溝が生まれた結果のほうが色が濃いものだった。

彼女の元から数メートル離れた僕は胸の奥底から恐怖心が芽生えていたことに気がついた。

その恐怖心を生み出したのは彼女だと言わざるをえないと考えてしまう。

僕は彼女を怖がるようになってしまったのだ。

彼女の特徴でもある目を隠すように伸びた前髪。

今までの僕は彼女のその姿が綺麗と思っていたのだが

あの時以降恐怖を抱くようになってしまった。

彼女に対し恐怖を抱く自分に、わずかながら異議を唱えなくなる僕もいる。

考えすぎだ、彼女は僕に害をもたらす悪人ではない、彼女は悪くない、と自分に言い聞かせなんとか原因を彼女ではないと説得する僕が

いる。

彼女はなにも悪くないのに、なぜ怖く考えてしまうんだ？

もし彼女が怖いと思うのならば、なぜそう考えてしまうのだ？

僕はこの納得しないまま、文香さんを再び見ることなく公園から去ってしまった。

文香 S I d e

微かに震えを見せた彼を手短な別れの言葉を送ることしかできなかった、私。

彼はもう一度私に振り返ることなく公園から何かに逃げるように足を早く歩かせ、公園から立ち去る。

(…)

彼の姿が見えなくなった瞬間、私は小さく口ずさんだ。

―――呆れた

それは大事な彼のことではなく、影が差す自分に対して送った言葉。
葉。

私はせつかく与えられた機会を”また”逃してしまい、そして得たものは失敗だった。

公園から立ち去る直後の彼の目は私を恋心を抱かせた愛しい人と

して見ていた目ではなく、心の奥底に傷跡が生まれるほど恐怖心を抱かせた人間に出会ってしまった目で見ていたのだ。

彼と出会うまではそんな墜落した結果になるとは、なんて無能な私なんだろうか。

私はまた言えなかった。

他の誰よりもあなたのことが好き、と言う告白を。

しかしその思いは彼の前で伝えることができず、心の中で呟くしかできなかった臆病者の私が存在していた。

臆病者の自分を思い出すと私は勇気を出して選んだ着ていた青いロングスカートをくしゃくしゃにするほど両手で握り締め、『消えろ、消えろ』と呪いを唱えるように繰り返し呟いていた。

そんな自分があるから前にも進み出せず、惨めな結果が生まれてしまった。

私はそんな自分が嫌いだ。

それでどれほどの最悪の出来事に出会ってきたんだろうか。

私は今回の失敗で連想するように今までに出会った屈辱に似た失敗を思い出した。

中学生の頃の出来事、高校生の頃の出来事、大学の頃の出来事、アイドルになりたての出来事、初めて受けた仕事の出来事

それぞれの出来事にある負の思い出が勝手に思い出していく。

公開処刑にするようにやられた屈辱、脅迫じみた怒鳴り、自分の能力のなさに笑われた軽蔑

望みもしないのに思い出していく叩きつけられた悪の記憶。

それぞれ悪の記憶を植え付けられた当時の自分たちはただ耐え忍ぶしかなかったのだが、

今思えば自分に悪の記憶を植え付けた愚者どもは全員死すべき者だ。

きっと私に悪の記憶を植え付けた人間は今頃は私のことを思い出ししないだろう。

でも私はお前らの顔を思え続けてしまう。

自分が望みもせずに勝手に

私はそんな人々にこう言いつけたい

さつさと死ねよ、塵が。

「…っ…っ」

しかし私は今まで私を傷つけた人間を考えているにも関わらず、静かに涙を流していた。

これほど憎たらしい記憶を思い出したのならば罵倒の言葉を口にしてもおかしくはないのに、私は怒鳴る声を上げずに悲しく泣いていた。

なぜなら私の前に立ち去った彼が悪の記憶を作った人間になろうとしていたのだ。

愛しい人なのに、憎むべき人になりつつあった。

望みもしないのに、どうしてそうなってしまふの。

そう考えていくと、胸が痛くなっていく。

なんて臆病者なんだろうか、私。

本当に気が弱い人間だ、私は。

志希 Side

卯月ちゃんと別れたあたしは事務所から出て、ふらふらとなにも考えることなく身に任せるように自分の家へと向かっていた。

つい先ほど苦悩な時間が終わった。

普段のあたしは言いたいことは隠さずに言うタイプなのだけど、その時のあたしは自分を押し殺すように本音を言わずに過ごしてしまっただけ。

卯月ちゃんは薄々とあたしの異様な反応に肌から感じたのか、どこか気をつかっている雰囲気を感じていた。

あたしはそれに気がついてしまい、さらに場の空気が不味くなつた。

あたしはこれ以上ここにはいられないと感じ、あの部屋から飛び出すように去り、事務所から出て行った。

今日は嫌なことから忘れたい。

あたしは家の近くにある閑散としているコンビニに立ち寄り、なにも考えずに白黒のラベルの700mlのウイスキーのボトルを買った。

ふらふらとウイスキーボトルを片手にレジに向かったあたしを會計をしたレジの店員は冷たい目で見ていた。

そりや放浪者じみた人間を相手にしてたら、そんな目になるわ。

心の中で店員の悪口をこぼしたあたしは店員の言葉を聞くことなくウイスキーボトルのどっしりとした重さで歪んだレジ袋を持ち、クソ店員しかいないコンビニから姿を消した。

いつも家に帰るとあたしはすぐに化学実験を開始するのだけど、今日のあたしは違った。

家に帰ったあたしは生温い食洗機の中にあつたグラスを取り出し、コンビニで買ったウイスキーを水を入れるように勢いよく淹れた。

明らかにウイスキーの正しい飲み方じゃないけど、あたしはそんなの考える余裕はなかった。

そしてあたしはソフトドリンクを飲むようにウイスキーをガブ飲みをした。

「……うっ!!」

一気にアルコールが口の中に入ったことで体に拒絶反応が起こり、あたしの口の中にあつたウイスキーは全部床に吐き、雪崩れるように床に倒れた。

急性アルコール中毒になりかねない行動をあたしはやってしまった。

「……っ……っ」

床に散らばったあたしが吐いたウイスキー。
度数が高いお酒だからアルコールの匂いが嫌にも鼻につく。
それに追い討ちをかけるようにウイスキーと床の冷たさがあたしの体に染み付く。

まるであたしが置かれている状況を表しているみたいだ。

「…ど、どっちを選べばいいの？」

あたしは今にも泣きそうな声で誰もいない空間で呟いた。

あたしは無意識に天秤に喩えてしまう。

卯月ちゃんか、文香ちゃんか。

どちらを取るのかと。

あたしは両方とも味方になりたいのだけど、両方と言う選択肢がないのが現実。

片方を選べば幸せになり、選ばなかった方は不幸になる。

あたしはそんな状況に置かれている。

「…っ…うっ…うう…」

そう考えていると、あたしはどうすればいいのかわからずに泣いた。

あたしが流した涙は、床に吐いたウイスキーに一滴一滴と混ざりゆく。

こんな世界、大嫌いだよ。

打明

球世Side

薄暗い結果で終わってしまい、不安と恐怖を抱えたまま翌日を迎えた、僕。

僕は楓さんに報告するために、お昼の休憩時間に都内の喫茶店で会う約束をしていた。

待ち合わせの喫茶店に入った時の僕は昨日の出来事に引きずっていたのか、頭がぼんやりしていた。

喫茶店に入り、あとは店内に楓さんを探すだけだったが、僕はただ店内を見渡していただけで、楓さんの呼ぶ声が聞こえるまで楓さんを探すと言う目的が頭に浮かばなかった。

「佐々木くんー！こっちよー！」

「……っ！」

自分の名を耳を聞いた瞬間、先に席についていた楓さんはお店の入り口にただずんでいた僕の目の前に現れた。

「どうしたの佐々木くん？ぼんやりして？」

「あ……えっと……こ、こんには、楓さん。ちよつと……なんといつか……」

僕ははつきりとした口で楓さんに挨拶することができなかった。

それにうまく説明ができず、僕はただ「えっと」という言葉が自分の口で繰り返し呟いていた。

しかしみっともない僕の姿に楓さんは嫌気を差す様子を見せることなく、「佐々木くんの方はもう注文してるわ。さあさあ、席に座りましょ！」と純粹に明るく振る舞い、止まっていた僕の手を取った。

あまりにも楓さんの明るい振る舞いに僕は少々戸惑いながらも席に座り「あ、あの……楓さん」とその明るい振る舞いをした理由を聞くとしたのだが……

「そんな無理に軌道を正そうとしなくて大丈夫よ。ゆっくりでいいよ」

「は、はい… わかりました」

これから僕が話す内容に気づいていたのか、楓さんの口調は優しさがあつた。

それは不安定な僕を支えるように。

僕が話そうとしたら、ちようどよくお店の店員さんが僕たちのコーヒーを持ってくれた。

そして僕は目の前に置かれたコーヒーを飲み、気分を落ち着かせた。

もし楓さんがあの言葉を掛けてくれなかったら、このお店のコーヒーを味わう余裕は生まれなかっただろう。

「今の佐々木くんの様子を見ると、どうやら悪い知らせの方が強いわね」

「… やっぱり気づきました?」

「ええ、さっきの行動を見れば一目瞭然よ」

楓さんはそう言う。「佐々木くんは嘘を隠すのが下手だがからね」と安心があるため息をした。

「それで、佐々木くんがそうなった原因を聞かせてもいいかしら?」

「はい… それなんですけど… 昨日、文香さんと会ったんですよ」

「昨日、文香ちゃんと会ったのね… ああ、なるほど」

楓さんはそう言う。何か嫌な予感を感じさせる独り言を呟いた。

「… どうしましたか、楓さん?」

「いや、なんでもないわ。それで文香ちゃんと会ってどうだった?」

「あ、はい… それで文香さんと話し後、僕は…」

僕は次の言葉を言おうとしたが…

「……………」

「どうしたの佐々木くん?」

僕は次の言葉を出せずに黙ってしまった。

それは無意識ではなく、意図的にだ。

僕は心の中で葛藤をしていた。

本当にこの話を伝えていいのだろうか?

僕はその言葉を心の中で繰り返しいながら葛藤をしていた。

これから話す内容は何も罪のない文香さんを傷つけてしまう話だ。その話をしてしまえば、きつといつか彼女が――

「――大丈夫よ。佐々木くん」

「っ！」

言葉を詰まらせ、自分の世界に閉じこもっていた僕は再び元の現実世界へと戻っていった。

それは先ほどのように声で反応したのではなく、楓さんが僕の手に触れたからだ。

僕よりも細く、美しい手が僕の右手に優しく包み込む。

「あなたがこれからいう言葉は誰にも言わないわ。きつと文香ちゃんのことを思つて口を閉ざしているよね。だから大丈夫、ゆっくりでもいい」

僕の目をまっすぐと見る、楓さん。

その目はまるで身内を心配するような目。

親の存在すらわからない僕でも、なんとなくわかると認識できるような目だった。

「…それは本当ですか？」

「ええ、お酒を何杯飲んで酔つても誰にも言わないわ。なんとか避けるから」

「…」

楓さんのお酒の発言にいい空気が壊された感じでツツコミを入れたくなったが、僕は言うことを決意をした。

「…僕は文香さんのことが怖くなったんですよ」

「怖くなった？」

その時の僕はやつとはつきりと言葉を口に出すことができた。

「ぼ、僕は…文香さんを嫌つてはないんですよ…でも、なぜか無意識に恐怖が浮かんで…」

「…なるほどね。佐々木くんも同じく感じたのね」

「同じくですか？」

「ええ、私も文香ちゃんは最初会った時からずっといい子だと思つて

いるのだけど、今はなんとというか… 怖さが薄々と感じるのよ」

楓さんはそう言うと、彼女の視線が下に向いた。

「このことは私だけじゃなくて、他の事務所の子たちも同じく考えているはずよ」

「他の皆さんもですか… いつ頃に文香さんの異変に気がつきましたか?」

「はつきりと覚えてないのだけど、文香ちゃんが20歳の時だから… だいたい三年前かな?」

「三年前…」

「三年前から妙に変に感じたのよ。なぜかはわからないけど…」

僕は途中から楓さんの話を聞かなくなった。

僕は楓さんが言った”三年前”と言う単語に妙に反応をしてしまった。

三年前でわかることといえば、一つは20区梟討伐戦が行われた時期でもあり、もう一つは僕がこの世界に降り立った年でもある。

20区で行われた梟討伐戦の年と僕が目覚めた時の年。

それら二つの出来事は起こった年は同じだが

もしかしたら両方とも関係があるのでは…?

僕はさらに思い巡らそうとしたが…

「……佐々木くん?」

「っ!!」

僕はまた深く思い入ってしまった。

これで三回目だ。

明らかに普通じゃない。

「また何か考えていた顔をしていたのだけど、どうしたの?」

「え、ええ… も、問題ないですよ…」

「…」

なぜかはわからないのだが、根拠がないのに僕はこれ以上聞かれると不味い予感が起きると無意識に考え始めた。

それは焦りで生まれたのか、それとも心の奥底に眠る無意識なのかわからなかった。

しばらく疑うような目で僕を見ていた楓さんだが、「…問題なさそうね」とこれ以上話題に触れなかった。

「佐々木くんから悪い知らせを十分に聞いたから、今度は良い知らせを聞こうかしら」

「良い知らせですか？」

「ええ、流石に私と会う時は他の話題を持ってくる事あるでしょ？」

「…はい、あります」

それは朝起きた時に知った。

僕からではなく、“彼女”から。

「今度、卯月ちゃんと食事をすることになりました」

その知らせは彼女から送られたメールで知った。

美嘉Side

事務所の車のラジオで耳にした2時を知らせる時報を聞いて30分が経った、今。

アタシは朝から外の仕事に出て、やっと事務所に戻ってきた。

それで一息をつき、あとはゆっくりと帰る時間を待つのかと言うと残念ながら違う。

プロデューサーがある程度仕事を済ませると、アタシはCMの撮影に再び事務所から出なければならぬ。

アタシはプロデューサーが来るまで事務所に待たなければならぬのだが、流石にじっと待つのは痺れを切らすから、館内をうろちよろすることにした。

事務所内で知り合いにメールする手も思いついたのだが、アタシが知る限りすぐに返信をしてくれる人はいない。

もちろんその中に佐々木さんはいる。

佐々木さんとは最近では会っていないけど、電話やメールのやりとりはやっている。

ただどこも最近では昇任したためかどうも忙しいらしく、会うタイミングが見つからない。

今連絡したところですぐに返事が来る保証はない。

(ん?)

346プロ玄関口に歩いていると、アタシはある人を見つけた。

その人は誰かの迎えを待っているのか、どこか退屈そうに外を見ていた。

「あれ?ちとせちゃんじゃん」

「あら、美嘉じゃないの」

名前は黒埼ちとせちゃん。

アタシより一つ年上の子で腰よりも長く伸びた金髪にとても上品のある子だ。

「ちとせちゃん、今なにしてるの?」

「今日やることが終わって迎えを待っているところよ」

「迎えって...あのスーツをきた子?」

アタシがそう言うのと「ええ、正解」とちとせちゃんはふふっと小さく笑った。

「そのスーツを着た子って確か、千夜って子だよ?」

「うん、そうそう。黒がお似合いな子だよ?」

千夜と言う名を知ったのは未央からだ。

最初名前を聞いた時は広まってもいいのかなと不安があったが、ちとせちゃん本人から『別に知っても問題ないわ』とOKをもらい、千夜のご事は事務所の子たちに少しながら知られている。

「今日はいつもとより、やるのが早く終わったから少しお話ししない？」
「お話？」

「ちーちゃんが来るのは予定通りに3時だからね」

ちとせちゃんはそう言うソファアの真ん中から端に移動し、ぽんぽんと隣に来るように空いたスペースを軽く叩いた。

アタシはそのままちとせちゃんの隣に座り、「千夜にもうちよつと早く迎えに来て」と言わなかったのかと聞いたのだけど。

「いや、千夜ちゃんには負担がかかることだからしないわ。何せ車だしね」

「確かに車だと急いできててもあぶないよね。ちなみにちとせちゃんが仕事している間、千夜はなにしているかわかる？」

「いや、まったく？」

「え？」

アタシはちとせちゃんの発言に間抜けな声が出てしまった。

「ち、千夜が何しているか、し、知らないの!？」

「ええ、そう言うところだけは放任主義なの」

「家にいるとかどっかいつているとか聞かないの？」

「いや、全然」

出会った時と同じく態度は変わらずに冷静に答えている、ちとせちゃん。

普通は把握しているものだと思ったのだが、まさか知らないとは意外だ。

「それに聞こうと思ったりしないの？」

「そんなことは思ったことないねー。ただ一つだけわかることは、一人で何かしていると思うよ」

「何かしてる...?」

一体なんだろうと考えたのだけど、ふと思いつくことが一つ浮かん

だ。

アタシが想像した姿を一つ思いつくと、ちとせちゃんはすぐさま反応をした。

「美嘉、なんか変なこと考えてた？」

「い、いや、千夜はもしかしてあつちの世界の人かなって…」

「あー、やっぱりそう思っちゃうよね？時々千夜ちゃんを見た人からよく聞くわ！」

ちとせちゃんはアタシの言葉に否定するとなく、逆に乗り気でウキウキしていた。

「でも、もしかしたらちーちゃんは裏社会の人間に引けを取らない能力を持っているかも」

「も、持ってる？それって本当に？」

「あくまでそうかもしれないし、実は違うかもしれない…」
「…？」

「まあ、千夜ちゃんはそんなに悪い子じゃないから、良い子だと認識してくれたら私は嬉しいかな」

アタシはちとせちゃんのその言葉に本当に信じていいのかよくわからなかった。

ちとせちゃんはたまによくわからない発言をする。

本当なのか、嘘なのかわからない発言。

これは本当に信じていいのかわからない。

「せっかく美嘉にあったのだから、もうちよつと話をしてもいいかしら？」

「…え、あ、う、うん、いいよ！何を話して欲しい？」

「えつとね… あーあれがあったわ！」

一体どんな話を持ってくるのか気長に対応していたアタシだけでなく、次の言葉で不意をつかれたような状態になるなんて絶対考えていなかった。

「そういえば、美嘉って”喰種捜査官の知り合い”はいる？」

「…え？」

ちとせちゃんの口から思いによらぬ言葉を聞いたアタシは背筋が凍った感覚に襲われた。

今日の前にいるちとせちゃんはいつも見る姿とは明らかに違う。

その姿を一言で言えば、”鋭さ”だ。

鈴屋 Side

おやつの時間まであと30分前の時。

この前のオークション作戦のすり合わせで集中力を失った僕は半兵衛を連れて都内にあるファミレスに適当に入ったのですが、僕はそこで思わぬ人に出会いました。

「…誰ですか、あなたは？」

ファミレスの席に座った僕たちですが、半兵衛が「すみません、鈴屋先輩。わたくし半兵衛は母親から電話が来たため席から外します」と言い、半兵衛はお店から出ました。

それで僕は先にメニュー表を取りデザートを選んでいたら、半兵衛が座っていた席に誰かが座りました。

それは明らかに部下の半兵衛がつけないであろう華やかな香水の香りが僕に鼻に入ったからです。

いったい誰だろうかと僕はメニュー表を下に下ろすと、目の前にいたのは僕より背が高い半兵衛ではなく、僕と同じ身長の女が座っていました。

「やあやあ、どーも。そんな嫌な目で見ないですよ。あたしは怪しい人間じゃないからさ」

話しかけてきたのは見知らぬ女性ではなく、あまり芸能界のことが知らない僕でも知っている人物でした。

「なんで僕に話しかけてきたのですか、一ノ瀬志希」

志希は仕造の口から自分の名を聞くと、「知ってるんだ」とにやはは

と笑いました。

何か企んでいる笑顔も一緒に。

Cheshire Cat

什造Side

人がちらほらといるはずなのに、なぜか僕と彼女しかいないと感じさせるファミレス。

僕がいる席に急に現れた彼女の名は一ノ瀬志希。

ボサボサの癖毛が気になる長髪の女性で猫のように笑う人。

僕は彼女をシキと呼ぶことにしました。

「にやははっ、そんな顔をしないでよ？あたしは敵意なんてもってないよ〜」

「いや、しますよ。急に馴れ馴れしく声をかけられるなんて」

シキは『そうかな〜』と猫みたいに笑い、僕の顔を見ていました。

僕は仕事で346プロに何度も行ってますが、アイドルに関してはまったくきよーみはありません。

それにシキと会うのは初めてです。

「僕に何か用ですか？適当な会話は受け付けませんよ」

「いやいや、あたしはただの酔っ払いじゃないし、そこの女子高生じゃないよ。ただ、キ…じゃなかった、あなたに会話をするためにきたの」

「でしょうね。あなたは遠くの席にいたんですよね？」

僕が座る席からおそらくシキが座っていただろう席が見えます。

席には食べ終わった皿が放置され、見る限りつい先ほど食べ終わったように見えます。

「うん、起きたのは12時で、今確か2時半だよね？あたしはここで今日初めての食事をしていたら…てな感じに今にいたるの」

「アイドルにしては自堕落な生活ですね」

「これはどうも♪」

別に褒めたわけではないのに、シキは嫌がる顔をせず褒められて嬉しそうに笑いました。

「それで、なんですか？いますぐ出て行ってー」

「こんなことを考えたことある？ たまたま訪れたお店で、席に座るとばったりと出会うという展開。あたしは別にあなたが来るなんて思いもしなかった。これは偶然なのか、必然なのかもね？」

「はい？」

シキは僕の言うことを明らかに聞いておらず、独り言のようにべらべらとしゃべっておりまして。

「まあまあ、それは置いといて。えっとキ……という表現はダメだね。あなたの名前はなんだっけ？」

「僕の名前なんて言いませんよ」

僕はため息をし、お店の外に視線を向けました。

さっさと僕の前から消えて欲しいと、半兵衛の帰りを待っていたら……

「キミ、ジューゾーだよね？ 鈴屋什造特等捜査官。S2班の班長だね」

「……えっ？」

僕はシキの言葉に目を疑い視線を彼女に向けると、「お、当たった」とシキはにやははつと奇妙に笑いました。

僕の名前が書かれた物があたりにないにもかかわらず。

「……なぜ僕を知ってるんですか？」

明らかにおかしいです。

僕の名前は喰種対策局でしか知らされていないのに、目の前にいるシキは平然と僕のことを知っていたのです。

「ん？なぜって？ 教えてほしい？ あたし的には……教えたいようで、教えたくない♪」

「……ふざけないでください。あなたはどこからそういう情報を手に入れたか、教えてください。さもなければ……」

「にやはは、教えな——」

シキが発言したその時、僕はシキの首元に自分のナイフを即座に向けました。

「……今、あなたがやっているのはお遊びじゃないですよ。重大な違法ですよ?」

「まったく、ジューゾーは短気だね♪被疑者を痛めつけようなんて、ダメだよ♪」

ナイフを向けられていても、動揺をせずにもっすぐに僕を見てニコリと笑う、シキ。

彼女の目は何か企みを含んでおり、それは子供の悪戯のように軽いうで、正気とも思えない犯罪を計画しているように重いように見える。

「いい加減にしないと、情報漏洩の容疑で連れ出しますよ」

「まあまあ、まずはそのクインケを下ろしてよ?あたしは喰種じゃないんだからさ」

シキは『ここで騒ぎを起こしたって得はないじゃん』と僕のナイフを持つている手を触れ、ゆっくりと下ろされました。

ここで彼女は僕が持っているナイフをクインケと特定していました。

クインケ自体世間では知られていないのに、どうしてシキは知っているんでしようか?

謎がますますと深まるばかりです。

「まず前提として、あたしは喰種じゃない。you see?」

「…ええ、あなたが座ったと思われる席を見るとわかりますよ」

先ほどシキが座ったと思われる席を見ればわかります。

喰種は人間が食べれる食べ物少量口にしただけですら嘔吐すると聞きます。

人が満腹になるほどの量を食べたらどうなるかは、想像できません。

「よし、じゃあ今から話す情報はジューゾー自身しか知っちゃいけないことだよ」

「僕だけですか?CCGに伝えるのは?」

「あーあーだめ。そんなことしちやあたしの生命線は切られるし、

ジューゾーの今後のキャリアに影響するよ」

「は？僕のキャリアに影響って、どういうことですか？」

シキの言っている話がわからない僕は何度も聞きましたが、シキはそう言う、『これは保険だよ』と何度もうつとしそうに言いました。「まず、あたしがジューゾーの前に前に現れたのは、協力してもらおうと来たと言えればいいかな」

「協力……？何を言うんですか？協力って何をやるんですか？」

「うーん、例えばオークションのこととか？今おそらくは作戦中で疑問があったことを照らし合わせているよね？」

「……その通りですね。でもしかし僕たちはもう間に合って」

「本当に間に合ってるの？」

僕は協力を断ろうとしたら、シキは拒否権を執行するように食い気味に口を開いた。

「この世界は謎だらけ。不可思議に思ったことあったでしょ？例えば、ピエロがなぜ作戦を知っていたとか」

「っ!!」

「にやはは、また当たっちゃった♪」

シキはそう言うのと不気味にニヤリと笑った。

ピエロの話はつい先ほど局内でハイセの部下であるトオルと話していたことでした。

「……一体どこからそう言った情報を得たんですか？」

「簡単に言うわけじゃないよ。だって有料だもん」

「有料ですか……？」

「うん、情報は無料の商品じゃないよ？よく美味しい話を持ちかけて騙す話があるじゃん？あれにハマる人って本当に馬鹿だよ。だって本当の美味しいお話ってだいたいは有料なんだよ。タダで渡したら、馬鹿だよ」

シキは早口で独り言のようにべらべらとしゃべりました。

要するに僕が欲しい情報は無料で渡さずに、金銭か対価に合った情報を持つてこればいい。

有料ならば、おそらくはそれに似合うものがなければならぬと考

えたのですがー

「ーまあ、でもジョーゾーには無料で渡すつもりだけど」

先ほどまで情報を渡すのを嫌っていた発言をしたはずのシキが『無料で渡す』とさらっと言いました。

「む、無料って… あなたはバカじゃないですか？」

「うん、馬鹿だよ？あたしはよくギフトドと言われているけど、大概は馬鹿みたいな行動するんだよね。というか天才と馬鹿は紙一重と言われているから、そうかもしれないね」

テレビや雑誌などメディアで見るシキは確かに化学の天才や美しい容姿で完璧に見られがちなのですが、でも実際に出会うと完璧さが一気に崩れ、欠点が目に見えるになりました。

「なぜ初めて会っているはずの僕に情報を無料で渡すのですか？」

「そりゃ簡単だよ。ジョーゾーは少なくとも、まともな人間だとわかる」

「まとも？まともってどんなところが？」

「そんなの今答えを言っってはつまらないよ。とりあえず頭の片隅に置いていて」

「…わかりました。それで情報は？」

「情報なんだけど…長くなりそうだから、また今度。もし今回ジョーゾー単独だったらふつーに言っただ」

「今度って…またここにくるのですか？」

「いや、これで連絡して」

シキはそう言うときズボンのポケットから一切れの紙切れを出し、テーブルを置きました。

「今更言うのはあれかもしれないけどこの紙切れを受け取るか、受け取らずに捨てるかはジョーゾー次第だからね。これはあたしとジョーゾーの中の秘密でもある」

「…ええ、そうでしょうね」

「もちろん、ジョーゾーの相棒には話してはいけないよ？相談もダメ出し、あともしあの人ならばどういった行動をとるとかもなし」

「…最後はなんですか？」

「いや、もしかしたらジューゾーに関係してるかも言っただけ」

あの人ならばどういった行動を？

一体何を言っているんですか？

「だからもしあたしを逮捕せずにこうして協力者として関係を持ち続けるのなら、ジューゾーにたくさん話してあげるよ♡」

「もし組まなければ？」

「それは別に構わないよ。ただしあたしを情報漏洩者として訴えたのなら、ジューゾーも道連れにするよ？」

「さつきから僕を突き落とすような情報を持っているような発言をしています、それは本当ですか？」

「さあね？どつちだろうね？もっていないかもしれないし、もっているかもしれない」

僕を陥れる情報と言っているシキですが、それは本当でしょうか？
僕には心当たりもなく、一見すると無傷かもしれませんが。

しかしシキがどこか手に入れたわからない情報をいくつも言っていたため、そう簡単に逮捕するわけにもいかない。

「まあとりあえず、あたしはここから立ち去るよ。あとはジューゾーがその紙を受け取るか、もしくは受け取らずに捨てるかの選択だから、また会うのを楽しみにしてるよ。じゃあね♪」

シキはそう言うと言席から立ち上がり、僕の肩に優しく触れ、自分の曲であろうリズムで鼻歌を歌いながらふらりとお店に出て行きました。

「……」

僕は立ち去ったシキを追いかけることなく、机に置かれた紙切れを見つめていた。

その紙にはおそらくシキの連絡先が書かれているだろう。

僕がその紙に無駄とも思える思考をしていると……

「ただいま戻ってきました、鈴屋先輩」

シキがお店に出て、入れ替わるように半兵衛が戻ってきました。

「おや、半兵衛じゃないですか？そんなに長かったのですか？」

「ええ、わたくしの母がとても心配された様子で……て、どうかされま

したか、鈴屋先輩？」

「いや、なにもないですよ。それより、ここの新作のパフエでも戴きましようか」

僕はすぐさまシキが置いていった紙切れを自然に手を取り、そして半兵衛にバレないようポケットに入れました。

CCG外の人間にも関わらず、何か良からぬことを抱えていた、一ノ瀬志希。

今まで僕は彼女のことを深く考えることはなかったのですが、今回は彼女の人物像を一変させるほどの転機が生まれました。

これが僕とシキの最初の出会いでした。

黄昏

美嘉Side

多くの社員や外部の人が行き来する346プロの玄関口。

アタシたちの横に歩く人たちは何も違和感を持った顔をせず普通に歩いたり、電話で誰かと話したり、あと誰かと話しているのだけど、アタシは建物内にいる人たちが持っているだろう普通な状態ではなく異様な空気を味わっていた。

「ぐ、喰種捜査官っ?」

「ええ、そうよ。美嘉の知り合いに喰種捜査官はいるかしら?」

「あ... えっと... 喰種捜査官ね...」

確かにアタシの知り合いに喰種捜査官が一人だけいる。

いるのは事実だけど、アタシはそれを口で言っているのか迷っていた。

今、アタシと話しているちとせちゃんは普通に話しかけているのだろうが、アタシにはそう見えなかった。

いつも気にしないはずの真っ赤な瞳がやけに恐ろしさが醸し出し、アタシに違和感を抱かせていた。

「ど、どうして喰種捜査官のことを...?」

「ん? 変に感じる何かしら? 大抵の子は普通に『いないよ』と言うのだけだなあ。そんなに変かしら?」

どこかわざとらしさを出しているように見える、ちとせちゃん。

それはアタシの知り合いに喰種捜査官がいることをわかっているかのような様子。

いや、これは違和感を抱いているアタシだからそう見えるかもしれない。

これは錯覚。正常に戻ればそんなことを考えはしないはず。

「えっと... ちとせちゃんは何したいの?」

「ん? 美嘉に聞きたいことは簡単よ。知り合いに喰種捜査官はいるか、ただそれだけのことよ」

佐々木さんのことを聞いてどうするの？

アタシはただ胸の中に回り続ける違和感に踊らされている。

アタシは少しの間、喋らずに状況をまとめようとしていると…

「美嘉には難しい質問かもしれないわね。じゃあ、質問を変えてみましょうか」

少し混乱しているアタシに気がついたのか、ちとせちゃんは何か意味ありげに笑い、こう言った。

「ササキハイセ」は知っているかしら？」

「っ!!」

名前を聞いた瞬間、アタシは心を読まれたかのように衝撃が走った。

まさかちとせちゃんの口から佐々木さんの名前が聞くなんで、と。

「し、し、知ってるよ… うん…」

「あらあら、どうやら美嘉の知り合いを当てたわね、私♪」

他の人から見たらちとせちゃんは普通に笑っていると思うだろうけど、今のアタシからしたらちとせちゃんの笑いを不気味という言葉にぴったりだと思える。

「…さ、佐々木さんのこと誰から聞いたの？」

「ササキハイセという名前だけど、実は未央や卯月などの事務所内の子にはまったく聞いてないわ」

「じゃあ、どこから？」

「うーん、どこからかしらね？ 私は聞いただけ詳しくはわからないわ」
聞いただけ？

それは誰かかの会話からだろうか？

「それって誰かから聞いたと言う感じでいい？」

「うん、多分」

「多分って… とうか佐々木さんのこと、なんか悪いことにしないよね？」

「悪いこと？ それはどんなことかしら？」

「悪いこと… えっと…」

アタシはそう言うと、口をつぐんでしまった。

もしかしたらあの裏社会に精通してそうな千夜が佐々木さんに危害を加えるかもしれない、と言いたいのだけど流石にまずい気がする。

アタシの目の前にいるちとせちゃんは明らかにやばそうな雰囲気を出している。

もし変なことを言ってしまったえば、何かを失いかねないほど怖い。

「んーこれは見方次第なんだけど、美嘉たちからしたらもしかしたら良い方かもしれないわね」

「良い方…？」

良い方ってどういうことなの？

しかも美嘉たちからしたらって…？

「アタシたちからしたらって… どういうことなの？」

「まあ、でも悪い方も多少はあるかも。例えるなら、薬みたいな感じよ。特定の病気には良い効果をもたらすのだけど、とある部分には悪い作用が起きるような感じかな」

「…？」

何を言っているの？

アタシたちからしたら良くて、他の人からしたら悪いと言うことなのかな？

仮にそうなら、悪い作用を受けるのはいったい誰なのかな？

アタシが深く考えていると、ちとせちゃんが建物の外が見えるガラスを見て「おっと、もうお迎えがきたわ」と呟いた。

玄関口を見ると、事務所内に歩くビジネスマンが着るスーツよりもさらに目立つ黒スーツを着た千夜がやってきた。

「お嬢様。お迎えに参りました」

「ええ、ありがとうございます」

さつきちとせちゃんと話したせいかな、アタシは千夜に対して恐怖心が少し現れていた。

話す前まではまったく怖いと感じなかったのに。

「美嘉、私はそろそろ帰るわ」

「え、う、うん…」

口つぐむ、アタシ。

これ以上ちとせちゃんにいう言葉が見つからない。
そんなアタシの姿を見たちとせちゃんはソファから立ち上がる
と…

「… これだけは言っておくわ、美嘉」

「…？」

何も言うことができなかったアタシに冷静に声をかけた、ちとせ
ちゃん。

それは異様さが感じるほどの落ち着きだった。

「あなたが考えるほど、悪いことをしないわ」

「悪いこと？」

「ええ、本当に。あなたが思うほど、悪いことは起きないのよ。じゃあ
ね、美嘉」

「じゃ… じゃあね…」

帰っていくちとせちゃんたちを見送った、アタシ。

悪くは思いたくはないのだけど、ちとせちゃんから悪い予感を身の
奥に感じた。

ちとせちゃんは何を考えているの？

今日最後に見たちとせちゃんの顔は今まで見たことのない顔で、一
言で言えば”人に似た怪物”だった。

ちとせSide

346プロダクション前に止まっていた黒いセダンの後部席に
乗った、私。

私が後部席に座るとちーちゃんはドアを閉めてくれて、そしてちー

ちゃんが運転席に座ると、ゆつくりと車を走らせた。

今私が乗っている車はドイツ車で結構いい車らしい。

名前は確かメルセデスの…マイバツハだったような気がする。

私がこの車を乗り始めたのは高校を卒業をしてからだと覚えている。

家から送迎用の車を考えてくれたと言われ、お父さんから進められたのはイギリスのロールスロイス。

しかし私は特別車に詳しくはなく別に日本車でもいいと思ったのだけど、千夜ちゃんが送迎をすると知ると私は千夜ちゃんに選ばせ、最終的には今乗っているドイツ車を選んだ。

本当ならば日本車でもいいんじゃないの？と疑問を持っているのだけど、まあ乗り心地はいいから、文句は言いようがないけどね。

「お嬢様」

「ん？どうしたの？」

「城ヶ崎美嘉に私の正体について答えていませんよね？」

「ええ、伝えてはないよ。もちろん、千夜ちゃんがアイドルになることを断った話も」

「ここだけの話。」

ちーちゃんが私を迎えに346プロに来た時、一度だけスカウトされたことがある。

ちーちゃんがアイドルになるのはいい話かもしれないけど、ちーちゃんの帰りを待っていた私からスカウトを断った。

断った理由なんだけど私の貴重なガードマンでもあり情報収集をしてくれる人でもあり、そして従者でもある千夜ちゃんをアイドルにさせるのは望まない、と言いたいのだけどそれは仮の答え。

千夜ちゃんには秘密があり、その秘密を明かしたくないから。

その秘密はなにかって？

それは時を待っていれば、知れるよ。

「ではどんな話をしたんでしょうか？」

「うーん。確かちーちゃんがもしかしたら反社会的な人間かもしれないし、そうかもしれない、ってな感じに話してたよ」

「…明らかに私のイメージが悪くなる話じゃないですか」

「あはは、そうだよね」

素直に笑ったように見えただろう、私。

外観ではそう見えるけど、内側は違う。

結構葛藤していた顔をしていた、美嘉。

私は美嘉をいじめようと好んでやったものじゃないから、心の奥底では少し胸が痛い。

あれはからかいではなく、脅迫に似ていた。

ちなみに美嘉に話した内容の一部に嘘が混じっているよ。

「それで、眼帯の喰種さんは今どうしているかしら？」

「ええ、以前お嬢様が依頼した眼帯の喰種ですがー」

前に私が依頼した眼帯の喰種について、千夜ちゃんからの答えは…

「現在、喰種捜査官としてCCGにおりました。名は、ササキハイセです」

彼の名前を聞いた瞬間、私は頬を少し上げ、ニヤリとした。

当たりだ

ササキハイセ

名前が一文字もずれずに一致している

「やっぱり」あなた」の言う通りだったじゃないの

琲世Side

楓さんと別れ、局に戻った、僕。

僕は卯月ちゃんと食事をすると言った楓さんに伝えた。

卯月ちゃんと食事をすると言った楓さんの反応は良かった。

楓さんは何も隠すような表情を見せることなく、純粹に喜んでくれた。

(……)

局に戻った僕なのだが、楓さんと別れてから不思議にも嬉しさがこれ以上湧き上がらず、まるで水が枯れた井戸のように嬉しさが去った。

来週と一緒に食事をするのだから嬉しくなるのが普通だと思うが、今の僕は違った。

今の僕の胸の中にあるのは葛藤と言えればいいだろう。

(来週と言えよ……確か文香さんもあったな……)

来週には二つの予定がある。

一つ目は先ほど言った卯月ちゃんと食事をする予定。

二つ目は文香さんと会う予定だ。

どちらも来週のどこかで会う約束があり、日にちについては明確に決まっていない。

(……)

一見するとすぐに決められそうな感じだと思っただろう。

しかし僕にとっては頭を悩ますほどの迷いがあった。

影を一時的にそらすことができる明るさか、
影に踏み入れ、真実を知る暗さか、
僕はどちらを選ぶべきか？

(…よし)

数十分考え込んだ、僕。

そして携帯を開き、彼女にメールをした。

『文香さん。来週の水曜日に会いませんか？』

僕は文香さんを選んだ。

卯月ちゃんと食へに行くことよりも、僕は知りたいたいことがあった。
それは文香さんが言っていた、僕に似ている人だ。

最初はいつたい誰だろうかと考えただけだ。

時間が経つにつれて心当たりが段々と浮かんだ。

まさか彼ではないか？、と。

彼の名を言えば、文香さんはどういった反応するだろうか？
僕は不安に蝕まれるような感覚を身に感じ、携帯を閉じた。

卯月Side

やるべき仕事が終わわり、事務所内にまだいた、私。もう帰っていいのだけど、私はある人に話したいことがあります。

「へえ、佐々木と一緒に食べるんだね」

「はい！やつと二人になれるんですよ！」

今、私が会っているのは、ちょうど同じくお仕事を終えたばかりの凜ちゃんです。

流石に佐々木さんと一緒に食事をすると言う話を大きく広めるのは危ないことであるとわかっています。

だからこうして凜ちゃんや未央ちゃんのように佐々木さんを知っている人しか話していません。

「佐々木と食べに行くって、あいつが忙しいそんな時期によくあいつと予定を組めたね」

「え？忙しいそんな時期ですか？」

「あれ？佐々木に聞かなかったの？」

「いえ…最近はメールぐらいしかやらないので、詳しくは聞いてないのですが…？忙しいってどういうことですか？」

確かに凜ちゃんの言う通りかもしれないませんが、最近佐々木さんとの連絡はメールしかなく、電話でじっくり聞くと言う機会が減っているのは確かです。

「なんか最近ある捜査を任されてしばらく話す機会が減ると私に言っていたんだけど、どうしてなんだろう？」

「多分あれじゃないですか？メールだから返しやすかったかも」

「ああ、多分そうかもね。今度殴りに行こう」

「殴るようなことじゃないですよね！」

凜ちゃんは佐々木さんと連絡する時、いつも電話をしています。

メールとかで済ませれるのに、なぜか凜ちゃんは電話にこだわります。

「それでこの前、私はあいつに電話をしたんだ。ネットで公開されたひどい動画のことを聞きにね」

「それって・・・この前にCCGのホームページで公開された動画ですよね？」

この話は先週のお話で、CCGのホームページで話題を呼んだ動画でした。

私は見ていないのですが、結構残酷な動画だったと耳にしています。

具体的に言えば、ある捜査官が喰種を痛めつけ、その痛めつけている喰種の仲間を投降するように呼びかけていた動画らしいです。

「もしかしたらと思って私はあいつに電話をしたんだけど、あいつはまったく関わってないと言う返事を聞いてよかった。むしろあの動画に反発している感じがあったよ」

「それはよかった・・・佐々木さんが関わってなくて・・・」

佐々木さんが喰種を痛めつけていた捜査官とは違い、ひどい人ではないことにほっとした、私。

「・・・あいつは絶対にそんな卑劣なことをしない人間だと、私は信じてるよ」

人間という言葉を強調するように言った、凜ちゃん。

その顔は心配事をなくしたと言うよりも、どこか悔しそうな顔。それはまるで彼を失ってしまったことへの悔しさに見える。

佐々木さんは彼と同じく優しい人。

そう、彼のように悪い人なんかじゃない。

凜ちゃんもきつと同じく考えているはず。

「あの・・・凜ちゃんに聞きたいことがあります・・・」

「聞きたいのって？」

「はい！佐々木さんはどんなものが好きだと思います？」

「好きなもの・・・？」

「佐々木さんと食べるので、何を注文すればいいのかわからなくて・・・」

いつも佐々木さんに好きな食べ物を聞くと、ほとんどがコーヒーと

言うのです。

コーヒ以外に好きな食べ物を聞くことは一度もありません。ちなみに私は生ハムメロンが好きです。

「それだったら卯月が好きな物を頼めばいいんじゃない？」

「自分の好きな物…？それっていいのでしょいか？」

「うん、別にいいと思うよ。というか、あいつがコーヒーと水以外の食べ物をお口にする光景は見たことがない。この前の誕生日会もそうだし」

「確かに言われてみれば…」

私の頭の片隅に一つの懸念があります。

まさか佐々木さんは彼と同じく人間ではないかということでした。

確か喰種は人間の食べ物を食べることができないと言われていて、まさか佐々木さんは…？

「あと、卯月はお酒を頼まないでね」

「え？なんでですか？」

「だから、絶対にお酒を頼まないで、本当に」

「は、はあ…？」

いつも周りの皆さんは私に絶対を酒の飲まないように注意してきます。

別に私は未成年ではなく20歳以上なので、問題ないはずなのですが…？

「とにかく、佐々木の前でお酒を飲まないように。もう時間だから、またね、卯月」

「じゃ、じゃあね、凜ちゃん…」

最後まで私にお酒を飲むなど注意をした凜ちゃんは帰って行きました。

一人取り残された、私。

私は翌日に佐々木さんと一緒に食事を取ると言う予定。

もし第三者が私を見たならば、おそらくデートをすることが決まっています。嬉しそうな女の子と思うかもしれない。

しかし、私はそんな可愛い理想を抱いていなかった。

考えるだけでもワクワクする幸せと胸の奥底にある不確かな不安が混じり合う、状況。

不安が現実には現れないことに、私はひそかに願っていました。

文香 Side

ついにやってきた、佐々木さんとお会いする日。

私は一足先に集合場所である都内の大通りに待っていました。

私は佐々木さんと会うまで本を開いていましたが、本の内容についてはまったく読んでいませんでした。

何を話そうか、私は佐々木さんと会うまでたくさん話題を探していたのです。

新しい本の話題。

最近の流行り。

この前に事務所で起きた出来事。

佐々木さんが務めるところの質問。

佐々木さんが今読んでいる本。

彼の私生活を知る質問。

彼の好きな人。

そして、彼をもっと知るための質問。

私は彼ともっと一緒にいるために、あらゆるものを用意しました。しばらく本を見ているふりをしていて、だんだんと私の元に近づいてくる白黒の髪色をした男性が現れました。

佐々木さんがやって来ました。

「こんにちは、文香さん」

「ど、どうも……さ、佐々木さん」

私は佐々木さんの姿を見ると、自分の心が震えていたことに気がついていた。

佐々木さんと離れて一週間という長い時間からやっと耐え抜いたという思いが報われる、と。

「きよ、きよ、今日は…ど、どんなお話をしましょうか？」

今更のことだが、私は声も震えていた。

自分が不気味に見られかねない行動を彼が心の片隅に異変を感じるくらいに。

私は不気味と思える自分の行動を必死に抑えているのだが、無意識がそうしてくれない。

「…あの文香さん」

「は、はい…？」

「少し移動しませんか？」

「え…!?…あ、は、は、はい…わ、わ、わかりました…！」

口下手に答えた私は佐々木さんについて行くように移動を始めた。

明らかに以上等も言える挙動不審の私に佐々木さんは指摘するとはなかったのですが、佐々木さんは変に冷静でした。

(どうしたの…？私…何か変なことをしたの…？)

佐々木さんは私の不審に感じてもおかしくない様子を指摘しない。

その時の私は最初自分の挙動に佐々木さんは冷淡を抱いたのではないかと思いましたが、しばらく考えるとそれではないと気がつきました。

そして大勢の人が行き交う大通りから、誰もいない電車が通る高架橋近くに来ると、私の顔を振り向かず歩いていた佐々木さんはピタリと足を止めた。

「…今日はたくさんの時間を設けました」

「…え？」

突然、佐々木さんは不可解な言葉を言いました。

「時間を設けた…とは、ど、どういうことでしょうか？」

「いつも僕たちが会う時、何かしらの不都合があるのはご存知のはずです」

「え、ええ…確かにそうですよね…」

いつも私が佐々木さんと会う時、必ずと言ってもいいほど、どちらかに不都合が起きます。

それが起こるたびに、私は苛立ちを覚える。

神様が私の行動を否定するように感じてしまう、と。

「それで今日、文香さんに聞きたいことがあります」

「き…聞きたいこと…？ど、どんなことでしょうか…？」

佐々木さんがこれから何を聞いてくるのかわからなかった、無知な私。

彼の口からある言葉を聞くなんて、この時の私は知らなかった。

『カネキケン』をご存知でしょうか？』

真剣な眼差しでまっすぐと私を見る佐々木さんの口から出た、彼の名前。

名を聞いた瞬間、私は確信的な証拠を突きつけられた犯人のように頭が真っ白になった。

犯人でもないのに、なぜこんなに恐怖が湧き上がるのだろうか？

罪を犯した？

罪を起こそうとした？

私は彼をこれから危害を加えようとしたのか？

私はわからない。

わからない。

これはさつき言っていた、不都合なのか？

佐々木さんが知っていないだろうと思っていた名前を聞くことが、

不都合、なの？

私は、また、ハズレを、選んでしまった、の？

Chocolate Cosmos

球世Side

都内から田舎へと変わったかのように静かな高架橋下。

日の明かりが高架下に届かず、影がかかる、この場所。

「カネ…キ…ケン？」

「はい、文香さんはご存知でしょうか？カネキケンという方を？」

僕が文香さんに”彼の名”を聞くことになった経緯を話そう。

僕がCCGにある捜査資料で『眼帯の喰種』に関する情報を探していた時だった。

『眼帯の喰種』と言う名はCCG内で知ったのではなく、喰種たちの口から聞いた名前である。

僕は『眼帯の喰種』を捜査情報のデータベースにあるか調べていたが、一つも見つからなかった。

仕方なく僕は資料室にあるアナログデータを探ることにし、半分あきらめかけていた時、あるノートを見つけた。

そのノートの持ち主の名は亜門鋼太郎という捜査官の物。

ノートの内容はデジタルデータベースには記述されていなかった『眼帯の喰種』に関する情報が詳しく書かれていた。

ここまでは『眼帯の喰種』の話にしか聞こえないかもしれないが、ノートの最後のページには目を疑うことが書かれていた。

それは卯月ちゃんと文香さんに関しての記述があったのだ。

その内容は詳しくは書かれていなかったが、最後の欄には『鷺沢文香から詳しく聞けなかった』という記述に目を止めた。

『眼帯の喰種』とは関係のない二人がどうしてこのノートに書かれていたのか見つけた直後はわからなかったが、時間が経つにつれて僕は気づいてしまった。

なぜ彼女らは僕と会った時に涙を流していたのかを。

「……………」

僕から目をそらすように下を向き無言になった、文香さん。

彼女の前髪のせいで何を考えているのかわからない。

「……なぜ私に聞くのですか？」

「……以前お話ししたと思います。僕は過去の記憶を失っています。今まで自分を知ること避けてきたのですが、僕は失った過去を向き合おうと決めました。それで調べていくうちに、以前文香さんがCCGの喰種捜査官から聞かれたような情報がありまして、もしかしたら彼のことを知っているのではないかと」

「……つまり、佐々木さんは記憶をなくした彼だと言うことですか？」

「……はい、そうなります」

「……あの」

そして文香さんは顔を上げ、光のない瞳孔で僕にこう言った。

「……あなたは、いったい誰なんですか？」

「……え？」

「今のあなたは、誰ですか？私、今、判断ができません」

「……」

「……答えてください」

僕は文香さんの異様と思える姿に言葉が出せなくなった。

文香さんの声は怒りに似ていた。

まるで何か恨みを持っているかのように。

「僕は佐々木琲世です」

「佐々木さん……なんですか……？」

「……はい」

「……嘘、じゃないですよね？」

「嘘じゃないです、僕はカネキケンでは——」

僕が彼の名前を出した、その時だった。

「……何、言ってるの？」

「……っ！」

文香さんのその言葉を聞いた瞬間、僕は背筋の凍る感覚を味わった。

彼女の優しい口調ではなく、怒りと嘲りが混じった口調、そして文香さんは僕を敵と認識するように目を剥いていたことを僕は知ってしまった。

「もしあなたが〃記憶を失った彼〃ならば、あなたは〃彼〃じゃないですか？佐々木さんではなく、〃彼〃ですよ。」

「ち、違います。文香さん。僕は彼では――」

「ねえ、なんでそこまで意地を張るの？もう十分生きたのでしょ？私にはあなたなんかに興味あつて話しかけているのじゃないの。わからないの？」

僕は文香さんの口から出た言葉に口を閉ざしてしまった。

文香さんの口から吐き出されるのは、罵倒と言つてもいいほどの言葉。

僕の目の前にいるのは明らかにいつもの文香さんではない。

いつもの文香さんは気を遣ってくれる優しい人なのに、今、目の前にいる文香さんはそんな配慮をしてくれる人だと忘れてしまうほど、別人へと変わってしまった。

「ふ、文香さん……！何を言っているのですか……！僕はカネキケンではなく、佐々木琲世です！落ち着いてください――」

「うるさいっ！うるさいっ！なんでそこまで生きたがるのよ！」

両手で耳を塞ぎ、ヒステリックに叫ぶ、文香さん。

「私はあなたなんか求めてない！私はあの人を求めているの！急に消えたあの人をつ！さっさと、消えっ――っ！」

すると突然、文香さんは何か思い出したかのように急に静まり、言葉が詰まらせた。

「……え……え……あ……っ――」

そして文香さんは即座に手で口を塞いだ。

何かに恐ろしいものを見たかのように目を大きく開く文香さんの顔は、自分がやっていた行動にハッと気づいたようだった。

「わ、わ……わ、わ、わ、わた、私……！……す、す……す……す、すみま……す、すみません！」

文香さんはかなり怯えた様子で頭を抱え、先ほどの姿とはまた忘れ

てしまうほど体を小さくうずくまった。

「ふ、文香さん…?」

「…ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

ひたすら『ごめんなさい』と繰り返す悲痛に叫ぶように口から言葉を出す、文香さん。

今の状態じゃ、声をかけても聞こえないぐらいに。

「あ…あ、あ…あ、あ、あ、あなたに酷いことを言ってしまった、ご…ご、ごめんなさいっ!そ、そ、そんなつもりじゃなかったのっ!ひ、ひ、酷いこと言ってしまったっ…!」

「ふ、文香さんっ!」

「っ…!」

異常とも思える行動をする文香さんに僕は一喝するように彼女の名を言うと、文香さんは一瞬にして口を止め、静かになった。

「…す、すみません…わ、私…変ですよね…?偏奇の人…ですよね?…そう、思いましたよね…?ねえ?」

彼女の乱れた前髪の奥にある瞳から静かに涙を流し、まっすぐと僕の目を見る、文香さん。

先ほどの自暴自棄とも言える行動の後の彼女の姿に、僕はなぜか美しさを感じてしまった。

綺麗と言えない今の彼女の姿が、僕の心の奥底で綺麗だと捉えていることに気がついてしまった。

それはテレビや雑誌で見る文香さんの姿よりも。

「私、あなたをずっと彼だと思って、寄り添ってきたんですよ…彼がいなくなつて、不安で不安で仕方なくて…」

「…彼がいなくなつた理由はご存知ですか?」

「…知りません。彼は私に何も言いませんでした…どうして姿を消したのか、私には見当もつきません…彼は私に優しくしてくれたのに…」

文香さんはそう言うと口元を手で塞ぎ、しゃくり上げながら涙を流した。

「…先ほどは本当に申し訳ございません。私、佐々木さんに酷い言葉を出してしまつて…」

「いえ、大丈夫ですよ…それよりも、ずっと座り込んでいたら体に悪いですよ？ほら、立ち上がつてくだー」

文香さんの言葉に傷ついた事実を隠した僕は地面に座り込んでいた文香さんに手を伸ばしたのだがー

「ーえっ？」

すると突然、僕は何かに勢いよくぶつかった衝撃を受け、気がついた時には僕は地面に仰向けで倒れてしまつた。

あまりにも突然だつたため、一体何が起きたのかわからず、だんだんと時が過ぎていくと、僕は今の状況がわかつてきた。

「…そう、これ。彼、彼…彼の感覚…」

「ーっ！」

仰向けで倒れた僕の胸には、文香さんが抱きつくように乗っていたのだ。

先ほどの衝撃はきつと文香さんが突っ込むように抱きつき、僕を陰で冷たいアスファルトに倒れたさせたのだ。

僕に抱きつく文香さんから聞こえるのは、悲しそうにすすり泣く声。

「…離れないでください、お願いです…お願い…お願い…」

僕の顔を見ず、彼女の小さな両手でぎゅつと僕のシャツを握る、文香さん。

僕はそんな彼女に口が固まつたかのように声をかけられなかった。

「私のせいなんです…私のせいで…彼を…」

私のせい？

文香さんは彼が消えた理由を知らないといったはずだが、なぜ自分のせいと言うんだ？

僕は限られたこの時間で考えたのだが、思いあたる答えが一つも浮かび上がらなかつた。

そう、”自分”だつたなら。

「…あの、文香さん」

「…？」

「…体を起こしてください」

「…はい」

地味な冷たさを感じるアスファルトに倒れていた僕は文香さんを抱き抱え、地面から立ち上がった。

「僕は確かに記憶を失った彼です。文香さんからしたら、声も体も顔もきつと彼だと思っているはずです」

「…はい」

「文香さんの言葉や想いを聞いて、彼の気持ちがどんなものなのかだんだんとわかるような気がします…でも」

「…でも？」

僕は言葉を言う前に、少し息を吸った。

胸の中から言葉で現しきれない何かが湧き出る感覚がした。

そして僕が話そうとした瞬間、自分の目から涙が流れた。

「…僕はそのまま彼になり、消えるのは嫌です」

「…っ」

僕は彼女の思い通りに彼になるのを拒絶した。

彼女がどれほど僕を彼と想っていても、僕はそのまま彼になるのはできない。

僕には既に失っているモノがあっても、それと同じくして大切なモノを持っている。

「僕は確かに記憶は失っているのは間違いありません。しかしだからと言って今まで積み上げてきたものを一気に壊すなんて、僕はいやです…僕を養ってくれた人や僕についていてくれる部下など」

「…」

「文香さんがどんなに僕を彼だと思っても、今の僕は彼ではなく僕です」

「…そうなんですな」

文香さんは顔を下に向けてると、彼女の瞳が前髪で隠れる。

先ほどまで何を考えているのかわからなかった僕なのだが、今の僕は彼女がどんなことを抱いているのか僅かながらわかってきた。

今、彼女が抱いているのは明るさが似合わない漆黒の暗さ。悪い出来事が起きる前兆と言えればいいだろう。

「…私、帰ります」

「…え？」

「これ以上佐々木さんの前に立っていたら… 惑乱してしまいます… もう何が正解なのか、わかりません」

諦めに似た声で文香さんは僕を避けるように背を向け、ゆっくりと歩き出した。

「あの！待ってください！文香さー」

僕から離れていく文香さんを止めようとしたのだが…

「さーさようなら」

文香さんは一瞬だけ僕の方に振り向き、もう二度と会えないと知ったような悲しみの瞳と何もかもが喪失したような声で『さよなら』と言った。

僕の名を言わずに。

「…っ」

文香さんのはかない言葉を聞いた僕は無意識に言葉が出せなくなり、この場から去っていく彼女の姿をただ見ることでしかできなかった。

そして彼女が立ち去り、誰もいない高架橋に取り残された僕の頭に、何か失ってしまった感覚に襲われた。

それは好きな人に告白をし、ふられた感覚に近い。

今まで僕は誰も告白をしたことがないのに、どうして『ふられた』と思えるのだろうか？

自分を知るのは、彼を目覚めさせ、自分を消す行動に近いこと。

僕は改めて、痛いほど身に染みついた。

千夜Side

お嬢様がやるべきことを済まし帰宅した、私たち。

本日最後の食事をし、本来ならばお嬢様はそのままゆったりとお過ごししなければならないのだが、今日はいつもの行動とは違うことをしなければならなかった。

「では、まとめましょう。これまでお嬢様が私に依頼したものを」

「ええ、よろしく頼むわ」

リビングにあるダイニングテーブルの上にある花瓶や置物などを全て取り除き、テーブルクロスだけの何も無い姿にした、私。

「まさかCCGからロゼと言う名を公開するなんてね」

「ええ、あの捜査官は自分を囿にしても見つけたい意欲を抱いていることがわかります」

私がそう言うとお食事を済ましたお嬢様にちょうど良い温度のストレートティーを出した。

この前CCGホームページで残虐な動画が公開され、その動画で登場していた捜査官はロゼの捜査に奔走するキジマ式であった。

ヤツは人とは思えないほどの容姿をしており、命など惜しくもない感情を抱いたがゆえにあの動画に投稿したはずと思われる。

「まあ、あの動画は下手なグロディスクの動画よりはリアリティーがあったけれど、それよりロゼの正体は確実にわかったかしら？」

「ええ、判明しております。まず最初に、ロゼの所属先がわかりました」

「へえ、わかったのね。それってどこかしら？どっかのマフィア？」

「いえ、マフィアではありません。反社会的というより、社会的に受け入れている組織です」

「ふーん、社会的に受け入れられている組織ね。それはどこかしら？千夜ちゃん？」

「はい、ロゼが所属しているであろう組織は―――月山グループです」

今、私たちがやっていることは、公然と知られてはいけない話だ。

これから私たちがやるのは、長らく繁栄し続けていた名家の回顧と、これから起こるであろう没落への道を辿るものである。

「月山グループ？それって、あの超名門のところよね？」

「はい、私がロゼの正体を探り、最終的に行き着いた場所がそこです」
お嬢様にロゼの宿主の正体を答えた、私。

お嬢様がロゼの正体を突き詰めるよう私に依頼し、奴らの正体を掴んだ結果、私が辿り着いたのは裏社会に潜むチンピラどもではなく、人間社会にうまく順応し、しかも普通の人間よりもはるかに良い暮らしをしていた富豪の喰種である月山家にたどり着いたのだ。

「つまり、月山財閥のトップである月山家が喰種だったわけ？」

「ええ、世間では底辺層にいと認知されている喰種のイメージと反し、人間社会の上位にいたのです。しかも数ヶ月ではなく100年も隠して」

「よくそこまで隠せたわね。私が言うのはあれだけど」

おそらく月山家がこれほど人間のように振舞うことができたのは、ただ検査の改ざんだけでは足りないのは間違いない。だが私は奴らに長年喰種である事実を隠し通せたことに称賛する行為はしない。なぜなら、あと数日ぐらい経てば称賛するには値しない大失敗を招くのみだから。

「でも月山グループのトップが喰種だとわかったのはいいけれど、そう言うのって企業側が圧力をかけて捜査を止めにくい？あそこって政財界では有名人なはず」

「いえ、それはないと思います。私が調べた情報によりますと、CCGは捜査の動きを止める様子はなく、むしろグループを解体させる意欲を固めています。仮に月山家が政財界の人間に協力を求めたとしても、所詮喰種に助けを求められるのと同じ行為に過ぎず、誰も手を差し出されることはないでしょう」

私が得た情報によれば、CCGは月山財閥を解体する準備を整えており、あとは作戦実行にするためにCCG上層部に許可を求めるだけだと言う。

「もうやる気なのね。もしこの情報が世間に知られたら、衝撃がすごいことになりそう」

「間違いなく各分野に打撃が来るのは間違いなしでしょう。しかし我々の方にも被害は来る可能性があると思います、CCGが公式に声明する時に備え月山グループ内の企業だけではなく、関わりが深いであろう関連会社との一時的に取引を停止する準備をしております」

「さすが千夜ちゃん♪相変わらず行動が早いわね♪」

月山グループとの取引を停止すればこちらの損益が出るのは確定だが、被害を最小限抑えることはできる。もちろんCCGに行動を悟られないよう細心の注意を払いながら裏で計画を進めている。

「それにしても千夜ちゃんの言葉を聞く感じ、月山グループの企業だけではなく関連企業にも取引を停止すると言うと、どうやら月山家だけが喰種じゃないようね」

「ええ、当たりです。月山財閥当主である月山観母と彼の家族だけではなく、グループ配下の社長や役員なども喰種だと判明しております」

「へえ、どのぐらいなのよ?」

「流石に数字と口頭だけではわからないと思いますので、月山グループの被疑者リストをご用意しました」

私は10センチほどの厚さがある資料をダイニングテーブルに広げた。

まず資料の最初に月山家が入り、その次に各グループの企業に所属している役員や各部署を取り仕切る社員など一枚の紙ではまとめきれないほどの喰種が月山グループの上層部に潜んでいた。

「結構調べてきたのね。これじゃあ眠りの妨げになるほど多いわね」

「ええ、流石に一人一人説明をするのは無駄な行為だと思っただければ幸いです」

一応全部まとめるのに2時間ほどかかったのだが、お嬢様の反応を見る限り、一枚にまとめるだけで十分だったようだ。月山家当主の名を紙の中心に書くだけで。

「今回の元凶はロゼよね?彼らは主君に大してかなり愚かなことをし

たわね」

「ええ、ロゼの愚行はなんと言っても、無差別に人間を襲ったことと、アオギリの樹と繋がりを見えられたと言えればいいでしょう」

「アオギリの樹との繋がりが？別に繋がりはなさそうに見えたけど？」

「私がロゼの正体を探っていた時は繋がりはないと考えていました。しかしつい最近、ロゼとアオギリの樹が関係があると報告をした喰種捜査官がおりました」

「その捜査官の名前は？」

まるで答えを知っているようにお嬢様はクスリと微笑んだ。

「その喰種捜査官の名は、クインクスの指導者である佐々木琲世です」

「あらあら、また彼の名前を耳にすることになるとはねっ」

お嬢様はそう言うと、待ち望んでいたかのようにちやりと笑った。

ヤツなど私には眼中はないのだが、お嬢様や一ノ瀬志希はなぜか興味を抱いている。ヤツは半喰種と喰種捜査官を取り除けばただの一般成人男性に過ぎない。

「お嬢様はなぜヤツに興味を抱くのですか？」

「興味？確かに私は彼に抱いているのは事実よ。彼には、興味深い秘密が隠されていると予測をしているから」

「興味深い秘密？」

私はお嬢様が言った言葉だけではなく、もう一つ疑問に覚えたことがあった。

お嬢様はわざとらしい口調で秘密という言葉を強調して言っている。

私はこの状況に違和感を覚え、何事にも対処できるよう身構えた。

「・・・お嬢様」

「ん？どうしたの？」

「何か私に言いたいことがあるのでしょうか？」

「ええ、あるわ」

お嬢様は予測していたと言わんばかりに即答で返事を返すと、私たちがいるリビングの空気が一瞬にして変わった。

それは暖かさのある安心さから、牢獄にいるような冷たさへと変化

していった。

「あなたはいつもどこで情報を取っているの？」

「…急にどうしたんですか？」

お嬢様のその言葉を耳にした私は真っ先に違和感を抱いた。

お嬢様は干渉してこないといつもおっしやっているのに、どうして今聞くのだろうか、と。

「いや、たまには千夜ちゃんのことを知ろうと思ってね」

「私のことを知る？」

「ええ、私は昔から一緒にいるのはもちろん知っているよ。だけど。もしかしたらまだ知らないこともあるかもってね」

「…いえ、これ以上お嬢様が私のことを知ることはないと思いますー」

「じゃあは言い方を変えてこれはどうかしら、今回の月山家のような過ちを犯さないように部下の行動を知るのはいかがでしょうか？千夜ちゃん？」

「…っ」

私の話を遮る、お嬢様。

喰種の目のように真っ赤になるお嬢様の瞳。

いつも通りのはずだが、今はやけに血のように濃い赤く見える。

「…お嬢様。あなたは私の行動に疑いを抱いておられるのですか？」

「疑い？いえ、私が言っているのは質問。私が千夜ちゃんを信頼を持ってるのは事実よ。しかし今日の千夜ちゃんはやけに遠回しに私の質問から避けているように見えるのは気のせいかしら？」

「いえ、遠回しではございません」

「そうなのね。今の千夜ちゃんの様子を見た感じ、もしかしたら私が喰種の血を受け継いでいる秘密と同じくらいの知らないことがあるかもね」

「同等の衝撃を持った情報ですか…」

「ええ、千夜ちゃんは佐々木琲世と同じく興味深い秘密を持っているはずよ」

お嬢様が求めている私の秘密は他人には知られてはいけない重大な秘密。

私の心の中に該当する情報は「一つ」ある。
しかしそんなことをお嬢様に言ってしまうえば…

「…ふふふつ」

「…？」

「ふふふふつ、はははあつ!!」

すると冷静だったお嬢様は2秒が経つにつれて本性が現れるようにずっと堪えていたであろう笑いが吹き出た。

「… どうしたのですか？」

「なくんてね♪結構驚いちゃったでしょう？」

「… は？」

お嬢様の突然よくわからないドッキリに、私は無意識に心ない言葉を出してしまった。

「なんでそこで素っ気ない態度をするのよ？」

「いえ、いつものお嬢様だなんて思っつて」

「まったく… 渾身に込めた演技だったのに… でも千夜ちゃんを動揺させたから成功かな？」

「成功つて… 最後に笑いを吹き出して失敗をしたのには？」

「なんでそこを指摘するのよ！」

お嬢様に最後の吹き出しを何度も言及すると、『これ以上は言わないで』や『あーあー聞こえない』と恥ずかしさから逸らす行動を見せた。

先ほど背筋が凍るほどの冷たい態度からいつもの明るいお嬢様へと戻った。

「とりあえず今夜中に千夜ちゃんに依頼したものを全部聞くのは無理そうだから、今からお風呂に入るからね♪」

「ええ、了解しました。お風呂はまだ沸かしてありませんが…？」

「大丈夫よ。今日はなんだかシャワーだけ浴びたい気分なのよ♪」

お嬢様はすぐに立ち上がり、『じゃあ、おやすみね。私のお月様』と何か意味があるかのように今日最後の言葉を伝え、リビングから退出

した。

「…」

お嬢様がリビングにから去ると、私だけ取り残されたりリビングには何も聞こえない沈黙が自分の心のように漂っていた。

今日最後に見たお嬢様は明るく振る舞ったが、私はお嬢様のように冗談を笑えるものではない。

私が抱える一つの秘密は、黒埼ちとせにとっては損しかないものだから。

夢の終わり

球世Side

夜の暗闇を反し、昼のように明るい都内の歓楽街。

普段、僕はここに訪れるような人間ではないのだが、今日はある人と共にここにきた。

「ここのお店なんですよ」

僕と共にきた人というのは、卯月ちゃんだ。

流星に何も変装をせずに街中で歩いていたら注目のため、今僕の隣にいる卯月ちゃんは長い髪を少し隠すことができる帽子と度なしの伊達眼鏡をしている。

僕たちはお店に訪れ、卯月ちゃんが『予約した〆今村〆ですが』と慣れた口調で店員さんに言うと、店員さんは声をかけてきた人がトツプアイドルである卯月ちゃんであることに気づいた様子はなく、僕たちが座るであろう席に誘導した。もちろん僕たちが選んだのはカウンター席ではなく誰にも見られることのない個室で、僕たちはお互い対面する形で席に座った。

「佐々木さんは何か選びますか?」

「僕は今、出された水だけでいいかな…」

「え?お冷やだけですか?」

「うん、最近妙に食欲が湧かなくて…」

卯月ちゃんたちには言えないことだが、人間が食べるような物を口にすることはできない。

何せ、何もが嘔吐したくなるほど味が不味く感じる舌なのだから。

でも彼女たちに何度も食事を避けた発言をしているため、勘づかれる恐れがあつたのだが…

「じゃあ、私が選んだモノを頼みますね!」

しかし僕に対して察した様子はなく、遠慮なく注文表を眺める、卯月ちゃん。

最近ドラマ出演で得た演技で隠しているのかと思ったのだが、これ

以上彼女に疑いの目を向けても空気が悪くなると考えた僕は言及しないことにした。

「卯月ちゃんはどんなのを頼む?」

「そうですね…せっかくなのっでお酒を頼もうと思います。でも、私あまりお酒を飲まないんですよ」

「飲まないの?」

「はい、どんなお酒がいいのかわからないんです。佐々木さんだったら、どんなお酒がいいと思いますか?」

「んー卯月ちゃんだったら、梅酒でいいんじゃないかな…?」

「梅酒ですか!じゃあ、それにしますね!」

卯月ちゃんはそう言うのと、テーブルにあつたタブレットを取り出し、注文をした。

20代の女性が飲むお酒と言えば、赤ワインを使ったカクテル、サングリアやピーチリキュールを使ったカクテル、フアジーネーブルなど、流石に強いお酒や男らしいお酒(僕が考える)などは浮かび上がらない。

でも僕と一緒にお酒を飲む女性たち(もしくは僕を無理やり飲み会に連れ出す女性たち)の飲むお酒はどうも女性らしさがない気がする…

「あ、きましたね!」

僕がそんなことを考えているうちに、個室にやってきた20歳なつたばかりであろう女性の店員さんが卯月ちゃんが頼んだ梅酒と御通しのきんぴらごぼう2皿をテーブルに置き、『ごゆっくり御過ごしください』と少し不慣れさのある返事をし、部屋から出た。もちろん僕は御通しも口にするのではない。食べてしまえば、嘔吐は待ったなしである。

(卯月ちゃんはどうだろう…?)

先ほど女性に似合うお酒を考えていた時に少し出たが、僕はどうもお酒でのトラブルを抱える女性に当たりやすい人間らしい。

僕の上司でもあるアキラさんや、お酒が好きな楓さんや楓さんが連れてくる346プロ所属の人たちなど、なぜかお酒が絡むと悪い方向

に降ってしまおう。

楓さんから聞いた情報だと卯月ちゃんはすぐに酔わないと聞いたが、凜ちゃんや未央ちゃんに聞くと『あ…うん…』と何か良からぬ予感を抱かせる返事を一瞬だけ見せたのだが、それは気のせいだろうか…？

「では、いただきますね！」

そう言うのと僅かながら梅酒を口にした、卯月ちゃん。

数十秒後に僕は「どうかな？」と彼女に聞くと、「うん！甘くて美味しいです！」と彼女は満足した笑みを見せた。

梅酒はビールやハイボールとは違い、果実の甘さがあるため、初心者が飲むお酒にはぴったりのらしい。

「梅酒は初めて飲んだんですけど、これほど美味しいとは!!」

「え？初めてなの？」

「今まで飲んだお酒だとビールだったり、焼酎なんですけど…味が苦手で…それで飲みやすい缶チューハイを飲んでいたんですけど、これは美味しいです！」

これは僕の考えだが、ビールと焼酎は男の人が飲む酒のイメージが強く、最近の若い女性はそれらのお酒よりも甘いお酒や多種多様なカクテルが好むような気がする。

お酒に対して淡々と言っている僕だが、何度も言うがお酒は一度も口にしたことがない。

「そうなんだね。もし他のお酒を飲むんだったら、最初は飲みやすいお酒を飲んだ方がいいかもね」

「ははは… そうかもしれないね、ささきしやん」
「…ん？」

すると僕は卯月ちゃんの最後の言葉に異変を感じた。

梅酒をほんの少し口にしたただけなのに、明らかにある程度お酒を飲んで酔ったかのような口調がしたのだ。

「ねえ、卯月ちゃん？」

「…はい？」

「酔ってない？」

「え？私は、まだ酔ってましえんよ。少ししか飲んでないのにもう酔っていると疑うなんて、なんの冗談でしゅか？」

「…」

僕は出逢いたくはないものに出逢ってしまったかのような状況に陥ってしまった。

卯月ちゃんに確認をとったが、本人が気づかないほどの酔いに浸かっていたのだ。

僕は酔いが回った卯月ちゃんを見て、心の中で察した。

高垣楓に騙されたと。

「難しい顔をしてどうしたのですか？佐々木さん？」

「…」

うつろな目で僕をじつくりと見て、御通しのきんぴらごぼうをぱくりと頬張る、卯月ちゃん。

僕はそんな彼女に返事をしなかった。

これは酔っている彼女に驚いているのではなく、何度もこの状況を味わった僕だからこそやっている行動だ。

いくら酔っている人にまともな言葉を伝えても、何もかも無駄である。

特に楓さんたちの飲み会で身に染みるほど学んだことであり、これ以降酔っている人に普通に話しかけることはしなくなった。

「ささきちゃんが何も話さないならー」

すると卯月ちゃんはふらふらと席から立ち上がり、僕に近づき…

「よいしょよ」

「っ!？」

そして卯月ちゃんは体がくつつくほどの距離で僕の隣に座った。

いつもの彼女はどこか恥ずかしさがあり積極的な正確ではないのだが、今僕の隣に座る彼女は酔いのせいかなかなり積極的だ。

「これで一緒にいられますね」

「…」

卯月ちゃんはデレデレとした様子で僕の肩に寄り付くように頭を乗せ、少し体重をつける。

他の人から見たら羨ましがる光景だと思うが、僕にとっては楓さんたちと飲み会に行った時と同じ雰囲気。

周りが理性を失っていく中、まともな判断ができるのは自分しかない状況。

ただ助けて、と。

「卯月ちゃん…：水飲まない？」

「え〜水ですか〜？だから酔ってませんよ〜あ！そうだ、佐々木さん！この前にこんなことがありますよ〜」

「…」

卯月ちゃんは困り果てる僕を気に留めず、べらべらと近況で起きた出来事を話す。

それは卯月ちゃんが長電話をするように、終わりのない会話。

僕はそんな彼女を見て改めてこう感じた。

酔っている人にまともな言葉を言っても、無駄だと。

そんな感じで気がつくとき30分が1分のように短く感じるほど卯月ちゃんの話が終わる気配がない。

僕は一人で淡々と話す卯月ちゃんに呆れを抱いていると…

「…ねえ、佐々木さん」

「っ？」

少量のお酒で酔う卯月ちゃんに適当に返事を聞き流していたある時、先ほどまで僕を困らせ、ろれつが回らなかつた卯月ちゃんが突然、酔いが覚めたかのように冷静な口調で僕の名を言った。

彼女の方に顔を振り向くと、僕にくっついていたはずの彼女は少し間を空け、顔を伏せたまま膝を抱えていた。

僕は卯月ちゃんの先ほどとは違う異様な姿に「…どうしたの？」と先ほどの聞き流すような返事ではなく、普通の人に話すように言葉を返した。

「佐々木さんは喰種捜査官だから、信じてくれるかわからないのですが、私、喰種に助けられたことあるんですよ」

「…喰種に？」

卯月ちゃんが喰種捜査官に事情聴取されたことは知っているのだ

が、喰種に助けられたという話は初めて聞いた。

「あれは私が高校三年生の時でした。私の大切な人がいなくなつてそろそろ一年になろうとしていた時でした・・・」

（大切な人？）

卯月ちゃんが言った『大切な人』。

名前と性別はわからないが、おそらく女子の友達だろうか？

だけど先ほど喰種に助けられたとは関係のない話に聞こえるが・・・？

「私が20区にある志希さんの家にいた時、普通の日常と変わらなかったはずの20区が突然、戦場と変わったんです」

（・・・梟討伐作戦）

梟討伐作戦。

それは僕がCCGに入局する1年前に行われた作戦であり、犠牲者の数は計り知れないものだったらしい。

僕はその出来事については詳しくはわからないが、当時の芸能ニュースでは卯月ちゃんを取り残されたとの報道が大々的に取り上げられたらしい。

「それで私が20区に取り残されもうダメだと感じていた時、彼が助けに来てくれたんですよ。彼のどこか悲しそうな顔は、今でも忘れられないんですよ。」

卯月ちゃんはそう言うと、かすかながら嗚咽を漏らす。

明らかに酔った時に現れる泣き上戸のような泣く声ではない。

まるで亡くなった人を思い出し、涙を流している状況に似ている。

（・・・彼？）

僕は卯月ちゃんの口から出た『彼』に何かひっかかるような感覚を得た。

それはどこか僕の中にいる『彼』と関係性があるような感じがした。

（・・・いや、関係はないはず）

僕は彼女に『彼』について聞こうと思ったが、しばらく考えた末、聞くのをやめた。

もしかしたら彼女をもっと悲しませるかもしれないと恐れていた

こともあるが、もう一つ理由があった。

それは彼女ではなく僕が恐れていたのだ。

僕は彼女の口から出た『彼』と聞いた瞬間、胸の底から恐怖心というものが生まれていたことにふと気がついた。

理由はわからないが、今わかることは『彼』について知ろうとしたら、恐ろしい事態に出会う予感がした。

僕はこれ以上『彼』について考えるのをやめた。

彼女が言った『彼』と、僕が考える『彼』は別人だと。

「……木……さん……木さん」

「ん？」

すると膝を抱えこんだ卯月ちゃんから誰かの名前を呼ぶような声が出た。

おそらく僕の名前を呼んだと思うが佐々木の佐々が聞こえず、かすかに違う人の名を言ったようにも聞こえる。

「……っ」

そして卯月ちゃんは床にぼたりと音を大きくたて、酔い潰れてしまった。

「う、卯月ちゃん？」

僕は卯月ちゃんに駆け寄り、なんども彼女の名を呼んだが、応答する気配はなかった。

聞こえるのはうつすらと聞こえる寝息だけで、しばらくは目覚めないと確信がつくほどだ。

（……もう、ここから出た方がいい……）

彼女が寝てしまえば、人間が食べるものを口にすることができない僕にとって居酒屋にいる意味が消えたにも等しい。

僕は床に倒れた彼女を少し体を起こさせ、すぐにお店から出られるように先にレジで御会計を済ませた。

もちろん部屋から出る時は、お店の店員や他のお客さんにバレないように酔い潰れた卯月ちゃんに帽子や伊達眼鏡をつけ、すぐ様お店から退出した。

僕は酔い潰れた卯月ちゃんを担ぎ、夜の歓楽街から去った。

その時の僕はまともに歩けない彼女を支えるのに精一杯だったのだが――

まさかこの後、地に落ちるほどの真実を知ってしまうなんて、その時の僕は知らない。

「…卯月ちゃん？起きてる？」

「起きてましゅよー？はははっ」

僕たち以外誰もいない少し安っぽい電柱の光に照らされている細々とした道。

僕は酔い潰れている卯月ちゃんを背中に抱え、彼女が住むマンションに向かっていた。

場所については陶酔状態の卯月ちゃんから聞いたのではなく、僕は誕生日会に何度も訪れているため、場所を把握している。

(ここまでお酒に弱いとは… まったく)

卯月ちゃんのお酒についての話題に良い雰囲気を出さなかった凛ちゃんと未央ちゃんからも少し詳しく聞けばよかったと後悔があった。

一口程度で何杯も飲んだような酔いを出すとは…

彼女が住むマンションにたどり着いた時、僕は「卯月ちゃん？鍵はある？」と彼女に鍵のことw聞くと、「…鍵？私のカバンにありましゅよ？」と彼女が背負っていたカバンからすぐに鍵を取り出し、僕の手に渡した。

「…ありがとうね、卯月ちゃん」

「どういたしまして〜♪」

満足した口調であっさりと家の鍵の場所を言ってしまった、卯月ちゃん。

もし卯月ちゃんが今回のような同じ状況に陥ってしまえば、知らない人にもあっさりと言ってしまうだろうか？

僕は現実起きて欲しくはない出来事を考えながら彼女の部屋に上がり、ベッドがある部屋へと向かった。

その部屋に入ると最初感じたことは、匂いだった。別に匂いが臭いというわけではなく、女性らしいほんのりとした甘い香りが部屋に入った瞬間にしたのだ。

だが香りと裏腹に、卯月ちゃんの寝室は少々ちらかつていた。流石に歩けないほどではないが、一目で見れば清潔とは感じられないほどのちらかり様だ。

だがそもそも彼女は今日人を招くとは考えてもいなかっただろうから、これは仕方ないかもしれない。

ずっと背中に抱えていた卯月ちゃんをベッドに降ろした、僕。

先ほどまで返事を返してくれた卯月ちゃんは気づかぬ内に深い眠りへと移り、ぐっすり眠っていた。

(さてと、帰：：ん?)

やるべきことを終えた僕は彼女の家から立ち去ろうとすると、僕はあるものに目を止めた。

(写真?)

僕が目についた物は彼女の寝室にあった写真立てだった。

それは前に彼女の誕生日会に見た物と同じ写真であり、どうやら寝室に移動したらしい。

家族の写真や初ライブと思われる写真、未央ちゃんと凛ちゃんと写っている写真、それから――

(…これはなんだろう?)

数々の写真立てがある中、一つだけ伏せてあった写真立てがあった。

それは他の写真立てから10センチほど離れた所に置いてあり、何か意味が隠された配置だと僕はふと気づいた。

僕は疑問を持ちながらその伏せてあった写真立てを立ち上げてみると、その写真は卯月ちゃんの隣に男性が写っていた。

写真を撮った時期はおそらく卯月ちゃんが高校生の時で、場所はおそらく観覧車の中で携帯で撮ったと思われる写真。

(…どこかで見たことのある男性だ)

はつきりとしませんが、どこか見たことのある感覚が僕の胸の奥底から自然と現れた。

別にその男性が一体誰なのか知らないにもかかわらず。

その男性の特徴を言うなら、特徴のない黒い髪に街中で見かけるような顔つきをした普通の男性。

モデルの様に特別に顔がいいと言うわけでもなく、服に関しても同じく普通だ。

だが疑問に思うのは、アイドルになったばかりであろう(おそらく一年目の頃?)卯月ちゃんとどうして観覧車の中で一緒に撮影しているのだろうか?

ファンにしてはどうも他人同士の雰囲気を感じられず、おそらくこの男性は卯月ちゃんとは友達の関係だろうか?

でも友達とは言え、どうも卯月ちゃんの隣にいる男性は高校生と言うよりも大学生と言った方がしっくりくる。

来ている服装は卯月ちゃんと同じ制服ではなく、大学生が来てそうな私服。

(…この男性は、いったい誰だ?)

卯月ちゃんの隣にいる男性のことを考えると、さらに謎が深まるばかりであった。

当時高校生であった卯月ちゃんと知り会うなんて、世間からしたらスキヤンダルになりかねない事実だ。

ではこの男性は、誰なんだ?

僕はその男性について、深く考えていたら――

『ねえ』

「っ!!」

すると突然、僕の頭に激痛が走った。

「……うっ！ぐう！？」

僕は突然現れた激痛に頭を押さえ、すぐさま壁に寄り掛かった。前触れもなく突然現れた痛みは立っていられないほどの痛みで、物にぶつけられた痛みよりもさらに上だった。

「……っ！……っ！」

痛みには耐えられず呼吸が荒くなる、僕。

僕はベッドに寝ている卯月ちゃんに気づかれないうような痛がる声を殺し、痛みが現れた頭を押さえた。

なぜ僕は彼女に助けを求めずに痛みを押さえているのか？

それはこの痛みが”ある人物”が現れるの前兆だからだ。

(……な、なんで……キミが現れたんだ……？)

『もう、気づいたよね？』

人間の温もりさが感じられない冷たい声。

その声に気づいた時、僕は卯月ちゃんの部屋ではなくモノクロ調の部屋にいた。

ベッドに寝ていたはずの彼女の姿はなく、この空間にあるのは錆びた釘が刺さったボロボロの木製の椅子しかなかった。

(気づいた？…いつたい何を?)

『ハイセ、まだ気づかないの?』

彼はそう言うと、馬鹿にするように鼻笑いをした。

(気づかない?…って、どう言うことなんだ?)

僕はわからなかった。

なぜ彼が現れたのかと。

いつも彼が現れる時は、僕が知らない失った記憶を思い出そうとした時だ。

なのになぜ彼が現れる?

『あれは誰かわからないの?彼女の隣にいる人間は、”本当”に知らない男と思う?』

(し、知らない男……?)

僕は卯月ちゃんの隣にいる男性を知らない人であるとはつきりと言える根拠はなく、むしろどこかで見たことのある感覚が理由もなく

あつた。

『普通なら見過ごすような写真だけど、ハイセはその写真を興味深くずっと見ていたんだよね？それで何か変に感じないの？』

（へ、変に感じないって… 高校生である卯月ちゃんが、どうしてその男性と…）

『それじゃない、ハイセ。その男性の顔をよく見てよ？誰か』に似てない？』

（誰かに似ている？）

僕が例の写真を思い出そうとした瞬間、彼はこう言った。

『あれは、』過去の記憶を失う前の君』なんだよ』

（…は？）

僕は彼の言った言葉に理解ができず、頭が真っ白になった。

（そ、それは、どういう…）

『だから、何度言ったらわかるんだよ。彼女は… いや、せつかくだからこう言おう…』

『彼女たち』にとってハイセはいらない存在なんだよ』

（彼女たち？一体誰…っ!!）

僕は彼の発言に言葉を失ってしまった。

”彼女たち”という言葉がどう言った人たちを指す言葉なのかを、僕はすぐにわかってしまったのだ。

（か、彼女たちって…まさか、凜ちゃんや未央ちゃんたちのこと…？）

『うん、正解。直接口に出していないのだけど、彼女たちは示してたよ。例えばなぜ初めて出会ったにもかかわらず、会えなかった人とやっと会えたかのように急に涙を流した、とか？』

それは卯月ちゃんと初めて出会った時を思い出す。

あの時の僕は突然涙を流した卯月ちゃんに異様に感じたことが印象にあつた。

彼女が流した涙は役者の様な嘘か本当かわからない涙ではなく、正

真正銘の感情から溢れ出た本当の涙。

しかもそれは卯月ちゃんだけではなく、凜ちゃんや未央ちゃんなどのある特定のアイドルにだけ現れた。

あれは僕に対して涙を流したんじゃない。

”彼”に対して涙を流したんだ。

つまり、写真に映る彼女の隣にいる男性は“^{ハイセ}彼”だ。
僕ではなく、”彼”なのだ。

『ハイセは変に思わなかった？なんでアイドルである彼女たちが急に接近してきて、友達になったかを？』

(…違う、あれは偶然だ。偶然に僕と出会ってー)

『なんで否定するの？』

(っ!!)

彼の言葉を聞いた瞬間、僕は無意識に言うのをやめてしまい、その同時に胸の中に悪寒に似た感覚がした。

その言葉は、文香さんの口から聞こえた言葉を思い出す。

僕を求めているのではなく、”彼”を求めていると。

『ハイセは、彼女たちにとって”邪魔”でしかないんだよ』

(ち、違ー)

『彼女たちは“仕方なく”、ハイセと知り合っている。彼女たちの気持ちを考えてみてよ？きつと辛かったと思うよ。いつになったら、思い出してくれるかってね』

今まで接してくれた彼女たちの顔を思い出すたびに、今まで見せた顔が信じられなくなっていく。

無邪に笑ってくれた時、冗談を出した時、何かからかう時など、すべてが偽りの行動にしか考えれなくなっていく。

彼女たちは僕を僕として見ていたのでなく、彼として見ていたんだ。

『ーねえ、ハイセ。いつまで、この世界にいるつもりなの？』

「…」

彼の最後の声が聞こえた後、ふと我に帰ると僕は単色しかないモノクロの空間から、現実味のある卯月ちゃんの部屋に戻っていった。

聞こえるのは部屋に飾ってある時計の針の音と、誰かの寝息。

「…っ！」

寝息が聞こえる方向に振り向くと、ベッドに卯月ちゃんが眠っていた。ああ、思い出した。僕は少量の酒で眠ってしまった彼女を家まで送ったのだ。

だがぐっすりとベッドに眠る卯月ちゃんを見た僕が最初に抱いた感情は、不信感だった。

「…嘘だ…嘘だっ！」

僕はまるで恐ろしいものを見たかのように、声と体が酷く震えていた。

今まで彼女が見せた行動が、何もかもが仕組まれたと自然に考えってしまう。

突然僕に抱きついた時、電話をかける時、居酒屋に誘う時、どんなことを考えてても、何か仕組まれていると考えてしまうのだ。

「っ!!」

もう彼女の前にいられない。

酷く怯えていた僕は必死に何かから逃げるように彼女の家から飛び出した。

「っ…っ!!」

誰もいない白い街灯が照らされる夜道。

僕は足音が鮮明に聞こえるほどの全力疾走をしていた。

誰もいないからかもしれないが、その時の僕は不信感に駆られて音を聞く余裕はなかった。

どんなに遠くに行こうが、どんなに走っても、忘れない真実を消し去ることはできない。

僕は、知ってしまった。

彼女が求めていることを。

僕は、知ってしまった。

彼女たちとどうして仲良くなれたことを。

僕は知ってしまった。

彼女たちは僕を『彼』として認識し、僕を『僕』と見ていなかったことを。

しばらく行き先も考えずに走り、誰もいない行き着いた公園のベンチで頭を上げずに座る、僕。

「……」

先ほどの僕は泣きたいという感情が強まっていたのだが、今はどんなよりとした絶望感が湧き出ていた。

もちろんガムシヤラに走っても、知りたくもなかった真実から逃れられわけがない。

今の自分の頭に浮かび上がっていることと言えば、負の言葉ばかり。

どこかの本で見たことだが絶望に陥った主人公が一人思い悩み、頭の中には自己否定の言葉がずらりと浮かんでいる描写を見たことがあるが、まさに今僕はその状態を味わっているのだ。

僕は”彼”については、喰種側の方しか調べていなかった。人間側の方よりも喰種に関係する情報がいくつもあり（例えば喰種のマスクや喰種からの口頭による情報など）、人間側には彼にまつわる情報はないと考えていた。

しかし、今では僕はわかってしまった。彼について知っている人間がいたと知った。だが僕は素直に喜べる様な状況ではなかった。

それは数少ない友人である彼女たちは、”彼”の帰りを待っていたのだ。

僕は彼女たちにとって、望まぬ人間なんだ。

僕はいつそこの世から消えるべきだ。

そう、彼女たちの前から――

『――佐々木くん？』

「…っ！」

すると誰もいないはずの公園に優しい女性の声が聞こえた。

初めは警察官に職務質問をされたのかと思ったのだが、よく考えてみると僕の名前を知っているなんておかしい。一体誰だろうかと自分の涙で濡れた手を目から離し顔をあげると、僕はハッと驚いてしまった。

僕の前に立っていたのは見知らぬ女性ではなく、女性警察官でもない。

僕と同じ身長で、スラっとした細い体にショートボブの髪型をした女性。

その人は僕が知っている人だった。

「楓…さん？」

その人は346プロのアイドルの高垣楓さんだ。

隔無

佐々木Side

「か… 楓さん…？」

絶望の淵に立たされていた僕は誰かに声をかけられ顔を挙げると、
どういいうわけか楓さんが目の前にいたのだ。

「… どうしたの佐々木くん？何かあったの？」

息を切らしながら心配した様子で僕を見る、楓さん。

僕の目の前にいる楓さんの様子を見る限りたまたま出会ったと言
うよりも、僕を追いかけたと言った方が近かった。おそらく僕がひた
すら走っていたところを偶然に見かけ、僕を追いかけたのだろう。

「…」

僕は楓さんの返事に声を出せず、黙ってしまった。それは驚いて声
が出せないのではなく、疑いと恐怖に駆られていたのだ。彼女は卯月
ちゃんと同じ346プロに所属するアイドルだ。しかも卯月ちゃん
と時と同じく”偶然”に出会っている人の一人。もしかしたら、彼女
は…

「… ねえ？大丈夫ー」

「あなたは僕を誰と思っっていますか？」

「… えっ？な、何を言っているの？私はあなたのことを佐々木くん
とー」

「本当にそう思っているのですか？」

僕を心配する楓さんの言葉を遮る、僕。

今の僕はいつものように理性的にはなれず、疑心暗鬼に陥ってい
た。

「急にどうしたの、佐々木くん？あなた、明らかに普通じゃないわ。本
当にどうしたー」

「… 楓さんは知っていますか。」カネキくん”という人の名を「
「っ！」

”彼”の名前を耳にした楓さんは思い当たった反応した。

彼女の反応を見た僕は楓さんと初めて出会った時に聞いた言葉を

思い出した。

『んー、なんででしょうね。以前、佐々木くと似ている子がいたからかも』

ああ、やつぱり。

楓さんも卯月ちゃんたちと同じだった。

楓さんは僕を”彼”だと見ていたんだ。

「カ、カネキくん…？」

「変に惚けないでくださいよ…！僕は知ってしまったんです…！卯月ちゃんや凜ちゃんなどの僕と出会って仲良くなつた346プロのアイドルたちがそう見ていたことを、僕は知ってしまったんですよ…！」

誰かに訴えるように強い口調を言いながら泣きじやくる、僕。

いくら楓さんに違うと言われても、僕は信じられないほど陥っていたのだ。

「ち、違うわよ… 佐々木くん。私はあなたをそう見ていないわ。誤解…」

「違うんだ、違うんだ！僕は佐々木琲世じゃないんです… カネキくん！僕は彼女たちに僕はもうこの世界に存在している価値なんて…」

彼女の言葉を聞かず、ただひたすら嘆いていた、僕。

その瞬間だった。

「っ！」

すると突然、僕の頬に音が聞こえるほどの痛みがきたのだ。

不安に駆られていた僕は頬にきた痛みのおかげか、悪夢から目を覚めたかのようにハッと落ち着き、叫ぶように声を出していた口を止めた。一体何が起きたのか状況を把握すると、僕の頬を叩いたのは、楓さんだった。

「いい加減にしてよ… 佐々木くん…！」

楓さんは僕の頬を叩いて手を下ろさず、視線を下に向き、体を少し震えていた。その震えは怒りと悲しみが混じったものだった。

「私は最初、あなたをカネキくんじゃないかと思ってたわ…！で

も…。」

声を震わせながら、ぽつりぽつりと涙を流す、楓さん。

彼女が見せているのは大人の女性の怒り。男性のような外観から来る恐ろしさのある怒りとは違い、胸に響く怒り。

「あなたと過ごすたびに私は気づいたの、カネキくんとは違う人だと…！だから…だから…」

楓さんは『だから』を2回言う息を少し吸った。

「だから…そう考えるのをやめてよ…！」

「…っ」

僕は楓さんの言葉に先ほどのように騒ぎに似た嘆きを出すことなく、彼女の言葉に黙っていた。

そしてしばらく公園に沈黙が漂ったのだが、僕は変に居心地が悪いとは感じなかった。大抵怒られた後に来る沈黙は嫌な気分を生み出すのだが、今の僕はその感情が湧き上がらず、なぜか言葉に言い表すことができない嬉しい感情が生まれていた。

「…あっ」

すると楓さんは我に返ると、「ごめんね、佐々木くん！」と感情的になってしまったことに申し訳ない様子で僕に近づき、頬を優しく触れた。

「突然頬をぶつちやっつて、ごめんね？」

「い、いえ…取り乱していた僕が悪いんです…」

僕は楓さんにそう言う、「ああ、よかったわ…」と安堵がこもったため息をした。

「普段の佐々木くんに戻ってよかったわ…」

「…すみません、楓さん。まさかご迷惑をかけるなんて…本当に…」

「これ以上謝らなくてもいいのよ。逆にこちらがもつと申し訳なくなるわ…それでどうして佐々木くんが取り乱した行動を起こしたのか…聞いてもいいかしら？」

「…ええ、いいですよ。秘密にしてくれるなら」

「ええ、わかったわ」

楓さんは自分に目元にあつた涙を拭き僕が座るベンチに座ると、僕は疑心暗鬼に堕ちた経緯について話した。

もちろんきっかけになった卯月ちゃんと一緒にレストランにいたことも話が、流石に喰種に關係する話題は出さなかった（眼帯の喰種など）。

「…なるほどね。卯月ちゃんを家に送って、部屋に入ったら、佐々木くんが記憶を失う前の自分であるカネキくんの写真を見たのね」

「ええ、僕はあれを見た時…知ったんですよ。卯月ちゃんはどうして僕を見て涙を流したのかを…」

「確かに佐々木くんがそう考えてもおかしくもないわね。私が佐々木くんなら、絶対一人で抱え込むわ」

楓さんはうんうんとうなづく、何か思い出したのか少し笑い出した。

「でもよかったわ」

「何がですか？」

「てつきり卯月ちゃんにフラれたのかと思った」

「…そんなことないですよ」

僕にとつてはフラれるよりも、”彼”を知ったことの方が強い。

ただどこで言うのはあれかもしれないが、今の僕は先ほどの疑心暗鬼に陥った時よりも心が軽くなった気がする。

これはもしかして、理解してくれる人がいたから軽くなったかもしれない。

「佐々木くんの秘密を聞いたお返しというか…その…私の秘密を聞いてもらつてもいいかしら」

「…え？楓さんの秘密ですか？」

「ええ、これは絶対に誰にも言っちゃいけないことなのだけど…」

すると楓さんは先ほどの僕の秘密を聞いたからなのか、自分の秘密を打ち明けると話したのだ。

楓さんの秘密は一体なんだろうか？

楓さんは芸能界にいる人間だから、それに関連した秘密なのか？それともプライベートに關係する話だろうか？

「佐々木くんなら分かると思うけど、前に20区で大規模な封鎖があったこと覚えているかしら？」

「ええ、覚えています。20区にある喫茶店が喰種の巣窟だったと」

「本当はその時の僕は覚えてもおらず嘘で言ったが、なぜ急に梟討伐戦（公では20区封鎖）の話をし始めたんだ？」

「その20区を封鎖するきっかけになった喫茶店の名前は知ってる？」

「確か……」あんていく」と言う喫茶店ですよね？」

「ええ、そうね。実は……」

「っ」

楓さんはそう言うと、一瞬悲しげな表情を見せたのだ。その表情を見た僕は嫌な予感を感じた感覚を感じた。いやまさかそんなことはないだろうと。

しかし、彼女は僕が考えた嫌な予感を的中させた。

『私、かつてそこの喫茶店で働いていたの』

楓

球世Side

「…え？」

あつけない声で答えてしまった、僕。

僕は楓さんの言葉に一瞬頭が真っ白になり、言葉を失った。

まさか梟討伐戦を実行するきっかけになった”あんていく”と言う喫茶店に楓さんが『かつてそこに務めていた』と言うなんて。

僕はあまりにも衝撃的な事実にあることを感覚で聞いてしまった。

「楓さん。つまり、あなたはー」

「ー私は喰種じゃないわ」

僕の言葉を遮り、きつぱりと言った、楓さん。

仕事柄のせいか無意識に楓さんを喰種だと捉えていた僕は楓さんのその言葉を耳にした瞬間、自分が間違った発言をしたことにハツと気がついた。

「…す、すみません、楓さん。急に変なことを言ってしまったて…」
「別にそこまで謝らなくてもいいのよ。佐々木くんならすぐに思いつくことだつて承知してたわ」

失礼なことを言われた楓さんだが、怒った口調を見せることなく、落ち着いた様子で答えた。

「そのあんていくに喰種がいたと知ったのは？」

「実は20区封鎖された時なの」

「て言うことは…直前ですか？」

「ええ、そうなるわ。でもそこにいたのはあくまで私がある程度モデルで稼げるようになるまでいたのだから…」

彼女の言うには、少なくとも楓さんが346プロのアイドルになる前にはやめている。

「あの時」とは今でもはっきりと覚えているわ…。その時の私は瑞樹さんと一緒に居酒屋にいて、そのお店にあったテレビを見ていたら、私がかつて働いていた喫茶店がテレビではっきりと写っていた。最初見たときは理解ができなかったのだけど、後から確信をしたの。か

つて自分が働いていたところは、喰種がいたことを」

そう言う少し口を食いしぼる、楓さん。その食いしぼり方は憎んでいるよりも、悔しさが強いように見えた。

「…あの、楓さん」

「ん？」

「今更な質問かもしれませんが…なぜ僕にそのことを話すのですか？」

僕が内なる秘密を言ったからと楓さんから言われそうだが、僕は他にも理由があるような気がした。

「つまり、他の理由があるんじゃないかって？」

「ええ、誰にも話せない理由が他にもあるような気がして」

「私が佐々木くんに話すきっかけなんだと、さっきの佐々木くんのことともそうだけど…実はつい先ほどプロデューサーさんと飲みに行っていたのよ」

「え？プロデューサーさんですか？」

「ええ、私のプロデューサーじゃなくて、佐々木くんがよく会うプロデューサーさんよ」

僕はその話を聞いて少々驚いたと同時に、もしやと思える問いが生まれました。

「もしかして…プロデューサーさんは楓さんの話をご存知なのか？」

「ええ、だけど彼には言わないで欲しい」

「ダメですか？」

「私があそこに働いていたことが知られるのだから」

僕は楓さんのその言葉を耳にした時、僕は更に理由を聞こうとしていた口をつぐみ、すぐに察した。

確かに楓さんがあんでいくと言う喫茶店に働いていると言う情報は全くと言っていいほど耳にしない。

もしこの話が広まってしまえば…

「なぜか知らないのだけど、私があんでいくで働いていたことについて全く知られていないのよ」

「でもなぜプロデューサーさんが知っているのですか？」

「実はプロデューサーさんはあんていくに行ったことがあるのよ」

「… え？でも、それって20区の封鎖する前じゃ」

「いや、20区が封鎖される直前に行ったのよ」

「っ!？」

僕は楓さん口から出た新たな事実にもまた驚かされた。

「ちよ、直前って…」

「プロデューサーさん曰く、あんていくで最後のお客さんだと聞いているわ。その話を聞いた時、プロデューサーさん からあんていくの店長から頂いたものを私に渡したのが知ったきっかけなの」

「その頂いたものは？」

「お店のコーヒーカーップと、私のサインが書かれたもみじの形をしたうちわ。プロデューサーさん から頂いた時、私は動揺したことを覚えてるわ。その二つは私がかつて働いていたあんていくで置いていたものだったから」

楓さんはそう言うと、どこか懐かしさに浸った目を見せた。

「話に戻って、プロデューサーさん と一緒に飲んでいた時に、私が今日佐々木くんと卯月ちゃんが一緒に食事をしていると話題を出した時にね」

「そうな… え？プロデューサーさん にその話をしたのですか？」

楓さんの話を真剣に聞いていたはずの僕は変に動揺をしてしまった。急にシリアスな空気が一変するような話題だったからだ。

「ええ、別に他の人が隣にいるようなカウンター席じゃなくて、個室だったかー」

「いやいや、それじゃなくて、プロデューサーさん に話したのですか？」

「うん、そうよ。プロデューサーさん はいろんな人に話を広げない信頼できる人だから」

確かにプロデューサーさんは約束をちゃんと守ってくれる忠実な人なのだが、僕と卯月ちゃんが一緒に食べに行っている話をするのは…

「それでプロデューサー^{武内}さんにそう話していたら、『佐々木さんはまるで以前卯月さんのお友達にいたカネキさんにそっくりですよ』と言われたの。最初私は確かにそうですよと思ったのだけど、段々と考えていくとカネキくんとはそんなに似ていんじゃないかと気がついて、それで私は佐々木くんたちにくっそりについて来たの」

「そうなんですネ…。ちなみにどうやって僕たちをみつけたのですか？」

「卯月ちゃんからお店の場所を聞いたのよ。佐々木くんと一緒に行く前にね」

「あーなるほど」

「しばらく佐々木くんたちについて行って、卯月ちゃんの家に入ったことを確認して帰ろうとしたら…。急に佐々木くんが卯月ちゃんの家から急いで出て行ったのだから、私もついて行って…。今に至るの」

楓さんと会ったときは偶然に僕を見つけたのかと思ったのだが、どうやら違った。

ここで変なドラマチックな展開を期待してしまった僕を殴りたい気分だ。

「話に戻りますが…。あんていくで働いていた人たちはどうでした…。？」

「皆さんは優しく接してくれたわ。皆さんが喰種だったんで、今考えても信じられないくらいにね」

楓さんは懐かしむように少し笑ったのだが、その笑いにはどこか悲しさが混じっているように見えた。

「あんていくをやめてからも私は時間があるたびに何度も訪れていたわ。その度に私はかつてお店に立っていた頃のように落ち着けたわ。それで何度もあんていくに訪れていた時、カネキくんと初めてあったのよ」

「っ！カネキくんですか…。？」

僕は彼の名前を聞いた瞬間、ハッと即座に反応をした。

「ええ、彼はお店の店員として立っていたわ。でもカネキくんとは一

「回しか会わなかった」

「当時の彼はどんな感じーっ！」

「僕が”彼”について更に聞こうとしたその時、妨害をするように再びあの痛みが現れた。」

（ま、また……現れた！）

ああ、これだ。目玉がくり抜かれるような強烈な痛み。

僕はすぐに痛みの発生源である左目を押さえた。

「……佐々木くん？」

すると異変に察知した、楓さん。

「い、いえ……なんでも……っ！」

楓さんに”この痛み”を知られまいとそう言ったのだが、痛みを隠しきれず彼女に苦痛を見せてしまった。

「ねえ、本当に大丈夫なの!?今すぐ、救急車をー！」

「い、いらなですよ!!」

僕は痛みに対抗するように怒号に似た声で楓さんに言う。楓さんは口をつぐんだ。

「こ、こ、これは……病院に行っても……何も解決しない痛みなんです……！ぼ、僕の奥に眠る……彼のためなんですよっ！」

「彼って……つまりカネキくんのこと……？」

「え、え、ええ……そう……か、彼です……っ！楓さんは……信じてくれないと……思うんですが……僕の中……に……か、彼がいるんですよ……っ！」

痛みを耐えながらも、断片的に話す、僕。

僕は痛みに対抗するように激しく言葉を伝える。

「ぼ、ぼ、僕は……！……か、彼と約束をしたんですよっ!!……か、彼を救おうと……！こ、こうして彼について聞こうと……！」

「でも……あなたが消えることじゃー！」

「僕は……これは運命だと受け止めているんですよ……だから……お願いします……彼が一体どんな人物だったのかを……少しでもっ！」

僕は嘆きに似た伝え方で言うと、数分、間が生まれた。その時の僕

は感情的だった。あと先考えず、とにかく知りたいた。

そして楓さんは「ごめんね、佐々木くん」と急に悲しげな声が聞こえた。

「これ以上……私は彼について言わないわ」

「っ！な、なぜ言わないのですか……？」

僕は必死な様子で楓さんに問いただしたのはのだが……

「だって……あなたに会ってから、落ち込まなくなったのよ。もし佐々木くんが消えるなら、私はまたあの時のように落ち込むのが怖いよ」

声が少し震え、弱気な声で僕に思いを伝える、楓さん。

彼のことを考えすぎた僕が恥ずかしく感じるほどに。

「卯月ちゃんたちはきつと彼の帰りを待っているかもしれないけど、私は違うわ……だって、彼と過ごした時間よりも、あなたと過ごした時間のほうが長い。私はあんでいくと言う居場所をなくしてからずっと悲しかった。そんな時に私の前に現れたのはあなたなの。佐々木琲世くんなのよ」

楓さんは一言一言震えながらそう話すと、顔を隠すように両手を目に当て、再び涙を流した。

「そんな死に行くようなことをしないでよ……佐々木くん……」

その彼女の姿を見た僕はなぜか目がくり抜かれるような痛みが消えていたことに僕はふと気づいた。

僕は“彼”を知ろうとするいつも”あの”痛みが現れるのだが、今は彼を知るような状況ではなかった。

「……心配をしてくれてありがとうございます、楓さん。しかし……」
楓さんの言葉に感傷的になった僕はそう言うと、少し間を開けた。

「僕はいつか彼に戻らないといけないと思うんです」
「っ」

楓さんの期待とを裏切る発言をしてしまった、僕。

僕は彼女を傷つけてしまうんじゃないかと躊躇をしてみただけなのに、僕は決心に至った経緯を思い出した。

「楓さんと同じく僕のことを大事に思ってくれる人たちがいるのは知っています。しかし僕の心の奥底では叶うわけないと微かに感じるので。これは先ほど楓さんにお伝えした言葉の通り、運命だとか僕は思っています」

僕は”彼”について調べていくうちに、僕はいずれ消えていくのだと心の片隅に感じていた。

たとえ僕がこの世界に長く生きようと必死に手段を考えていても、それは単なる延命治療にすぎない行動だ。

楓さんは僕の返事にしばらく沈黙をしていたのだが、数分後に「そうなのね…」と悲しさが混じった落ち着いた返事をした。

「僕は楓さんのお気持ちを聞いて嬉しいです… だけど」

「ー」だけど、これだけは覚えて欲しいの。佐々木くん」

僕の言葉を重ねるように遮った楓さんはそう言うと言った。僕の手を優しく握り、僕の目を見ながらこう言った。

「もしあなたがそう望むなら、私は反対をしないわ。でも佐々木くんが本当にこの世界に消えるなら、私はあなたのことを絶対に忘れはしないわ。誰もがあなたのことを忘れていても」

楓さんはそう言うと言った。自分の目元にわずかに現れた涙を人差し指で拭きとり、悲しさとは無縁と感じさせる微笑みを見せた。

「さつきから私は泣いてばかりで、とてもみつともないわ… 私、もうそんな頃になっちゃったのかしら…」

「… いえ、そんなことないですよ… あれ？」

すると僕は無意識に涙を流していたことに気がついた。

その涙はこの世から消えることへの恐怖から現れた涙ではなく、この世に消えてでも覚えてくれる嬉しさから現れた涙だった。

「佐々木くんも泣いているの？」

「す、すみません… なぜか、急に…」

「大丈夫よ、佐々木くん。謝ることじゃないわ」

楓さんはそう言うと言った。僕よりも小さい手でそっと僕の肩に置き、優しくさすった。

それを受けた僕はどこか懐かしさを感じた。

どんな懐かしさなのかは思い出せなかったが、暗い影のない心が安らげる懐かしさと認識できるものだ、僕は自分の知らない過去を掘り下げるのをやめた。

楓さんと別れた僕は自分の家に帰る時、どこかの本で書いてあった『人は二度死ぬ』という言葉を思い出した。

あの言葉を最初見た時はいつか受けるものと寂しさがある言葉と捉えていたのだが、今の僕は完全とは言えないが寂しさが軽くなった気がした。

僕は改めてこの世界に存在しても悪くはないと心の中で思った。

僕がこの世界から消える瞬間でも、そう思い続けたい。

報告書

それは皆が仕事を初める朝のこと。

プロデューサー^武は346プロダクションに訪れるや否や、美城から部屋に呼び出された。

そしてプロデューサー^武は美城から彼の手元に渡された書類を目を通すと、彼は思わず沈黙してしまった。

「…月山グループが、喰種…？」

「ああ、まさかあそこが黒だとはな」

椅子に座る美城はそう言うと、額に手を当て大きくため息をした。

「それって… 本当なんでしょうか？」

「あいつら^{CG}曰く、既に喰種である証拠を掴めたらしい。具体的にどんな証拠なのかは聞かされていないが、おそらくは検査の改ざんがあるだろうな」

月山グループは大企業グループであり、我々346プロダクションとは衣装デザインを依頼するなど仕事上ではかなり関係のあるグループである。

「月山グループとなると… 関連の会社も対象でしょうか？」

「ああ、関連会社も対象だ。一覧表を見るだけでも気が滅入る」

美城はそう言うを持って二十枚以上あるであろう書類を机に放り投げ、プロデューサー^武に「君は見たいか？」と尋ねた。もちろんプロデューサー^武は「いや… 大丈夫です」と断った。

「いずれにせよ、完全にイメージが回復するまでには時間がある。信用を一度失墜するほど辛いものはない」

「そうですね… しばらくは月山グループ下の企業に依頼していた仕事について、別の企業に依頼しなければなりませんね」

「ああ、おそらくは我々だけではなく、他の企業もそう考えているだろう。間違いなく今回の件で相当な経済損失が生まれるな」

美城はそう言う「まったく」と気難しい顔で頭を抱えた。何せ今後イベントの衣装を別の企業に依頼しなければならず、おそらく今回の件で多額な費用の損失と今後行う予定であったイベントの変更

を余儀なくされる。

「あと、今回企業を摘発することなのか、我々の元にまた検査の依頼が来ている」

「え？それはつい先日提出したものは別の検査ですか？」

「ああ、どうやらあいつらはもう一度検査を実施しろと言っている。まったく検査実施にどれだけの費用が出るのか間違いないわかっていない。健康診断よりもかなり費用が張るのにな」

美城はそう言う額に手をつけ、またもや大きなため息をした。

「我々には他のどの企業よりも喰種の根絶を掲げる者にもかかわらず、最近のあいつらは我々を他の企業とは同等の扱いをする。なんたることだ」

346プロダクションがCCGと提携を結んだ当初は他の企業とは先立って喰種対策をしたことにより、CCGからRC検査ゲートの無料設置や346プロダクションが置く13区の警備強化など（CCG本局が置かれている1区の警備並）をしていたのだが、最近では13区の治安改善や346プロダクション以外の企業との提携をするようになったのか、CCGにとつて346プロダクションの存在は最初の提携企業から他の企業と同等の扱いになりつつあった。

「我々の中に喰種などいないにもかかわらず、今度はなんだ？次は喰種と接触したことがある人間でも捕まえる気か？」と一人不満をたらしめた美城の言葉に、プロデューサーはわずかながらぎくりと肩が震えた。

プロデューサーが知る限りでは社内に喰種と疑われる人物などいない。

だがもし喰種と接触したことがある人間を挙げるのならば、346プロダクション内にいるのはプロデューサーも含め何人かはいる。

しかも346プロダクション内に喰種の血を受け継ぐ人間がいることなど、プロデューサーはまだ知らない。

人々が帰路につき始める、夕暮れの頃。

私は家には帰らず胸の中にある疑問を抱えながら、私がいつも訪れるバーへと足を運んだ。

そのバーは薄暗い照明にジャズが奏でるオーセンティックバーで、入り口は普通の人間からしたら気づかない所であり、雑音を嫌う私にとって憩いの場だ。

そんな場所にまさかあの女がいるのだろうかと半信半疑でバーの重々しいドアをゆっくりと開けると、一人の客がバーの席に座っていた。

「やあ、やあ、久しぶりだね♪」

「やっぱり、お前はここにいたのか。一ノ瀬」

店内には私が予想した通り、一ノ瀬志希が座っていた。

一ノ瀬の様子をみる限り少々ながらうとうととしており、おそらくは数十分前からここにいるみたいだ。

「うん、正解♪志希ちゃんはここにいました♪せつかくだから一緒にテネシーウイスキーを飲んで語り合わない？おすすめはジャックダニエルだけバー」

「悪いな、私は車で来たんだ」

私がそう言うと、一ノ瀬に自分が乗ってきた車の鍵を見せた。

その同時に私は一ノ瀬に相手をしていたバーのマスターに「すまないマスター、今日は飲みません。後日ここに訪れる予定がありますので、先に支払いをします」と財布から数万円を渡した。

「えー。あたしと会話する気ないじゃん」

「当たり前だ。私はお前に対しては信用は皆無であり、そもそもどうしてここの店を知っているんだ？」

一ノ瀬はこのお店に馴染んでいる雰囲気を感じ出しているが、この女は初めてここを訪れているのだ。

なぜそう言えるかというと、ここのバーは会員制である。

私がどうして一ノ瀬がこのバーにいると判断できたのは、最近新た

な会員が現れたと言う知らせを知ったのだ。

「このバーの会員数は5秒があれば覚えられるほど数は少なく、今まで新たな会員が入ったと言う知らせは少なくとも数年前の知らせが一番新しかった。」

「なぜあたしがここを知っているかって？そりゃ、キミには言えないよ。それにしてもここはいいお店だねー」

「悪いがここからさっさと出ろ。ここは私にとって隠れ家だ」

「へえ、キミにとって隠れ家なんだね。確かにこのお店って目立たないところに構えているよね。あたし、気に入っちゃった♪」

一ノ瀬はそう言うと、メディアで散々見た一ノ瀬のウインクを私の前で見せた。

一見すると街中に歩いている女と同じように見える一ノ瀬だが、実際は安易に油断など見せてはいけない。

「それにしても今日キミが乗ってきた車、いつも事務所に来る車とは違うんだね」

一ノ瀬に返事を聞いた私は「ああ、よくわかったな」と幼児に声をかけるように返事をした。

「キミがいつも持っている車の鍵って??が重なったマークがあるのに、今日はa m gのエンブレムがあるじゃん。もしかして、Sクラスの63?」

「正確にはS63ロングだ」

「て言うことは、右ハンドルモデルね」

「ああ、日本ここに住んでいるなら、右ハンドルでいい。私は栄えを求めて左ハンドルを選ぶような人間ではない」

A M Gと言うのはメルセデス・ベンツ内のスポーツブランドであり、通常モデルとは別物と考えていただけじゃない。

私が乗ってきたS63はSクラスのa m gモデルのことで、もちろん性能は下手なスポーツカーより凄まじい性能を持っている。

なおこの車を選んだ理由は自分で所有しているだけではなく、お嬢様の送迎用として使用しているSクラス。マイバッハが使用できない時に使うためでもある。

「キミは本当にベントツが好きだね」

「ああ、そのおかげかよく低能どもから喧嘩を売られるがな」

「あはは、想像がつく」

一ノ瀬はそう言うのと、私の下らぬ言葉ををつまみにしたかのよう
に、ウイスキーを飲んだ。

私が所有している車は名前と金額のせい、よく盗難しようとする
アホが無数にいる。

あるアホはボンネットに十円玉で傷をつけようとした貧民。

またある愚者は私が車の鍵を開けようとした瞬間に、集団で私に攻
撃を加えようとした無能どもなど、今思い出すだけで苛立ちが生まれ
るほどのことばかりだ。

「それで今回はなんだ？少なくともお嬢様の薬は渡すと言うことはな
さそうだな」

「うん、ちとせちゃんの薬はまだストックがあるでしょ？今、ここで薬
を出しても」

「じゃあなんだ？くだらない世間話をするぐらいなら、席を外させて
もらう」

「くだらない世間話？キミからしたら、つまらないお話じゃないよ」

一ノ瀬はそう言うのと、持っていたウイスキーグラスをカウンターに
置き、次の瞬間 私をゆっくり睨むように見た。

「そろそろキミのことを知ろうかなって」

「は？」

いつもあやふやに言う、一ノ瀬。

今回の発言はどうも意味があるのではないかと不自然さを感じて
しまう。

「お前は何を言っている？いつもよりはー」

「キミはどんな経歴を歩んできたのかな、というお話だよ。あたしは
キミのことをある程度調べただけど、”ひっかかること”があった
んだよね」

一ノ瀬は私の発言を遮ると、先ほどまで酒の酔いでうつろな目だっ
たにもかかわらず、酔っていたことを忘れさせるようにまっすぐと私

を見た。

「キミはちとせちゃんとは会う前、一体何していたの？」

そして無言で私を見ていると、一ノ瀬はゆっくりと笑みを見せた。

それは不気味さと言う影がかかった笑みであった。

さよならの前

志希 Side

千夜ちゃんがいつも通っていると思われるお洒落なオーセンティックバーの辿り着き、ある程度お酒を頂いた、あたし。

何杯も飲んでも千夜ちゃんが現れることなく、場所を間違えたのは？と去ろうとクレジットカードを出そうかなと思いついた時、彼女は苛立ちと共に現れた。

ちなみにどうして千夜ちゃんが通うバーを知ったかは、秘密。

「キミって北海道出身なんだね」

「それがどうした？」

「北海道出身だからキミの今まで歩んできた道を調べたの。そして、すぐに引つかかるコトが見つかったの」

「引つかかること？」

「うん、なぜか中学一年生から場所が北海道から東京に変わっていた」「は？変わっていた？なにを言っている」と千夜ちゃんはあたしを馬鹿にするように嘲りを見せた。

「別に学校の場所が移動しても変では無いだろう？」

「ここまでしか話を聞かなかつたら、そうなるだろうね。でも話はこれで終わりじゃないよ」

流石に学校が北海道から東京に移動をおかしいと言うのはない。あたしだって生まれは岩手で、東京に引っ越しているのだから。

「その転校した時、なぜかキミの住民票が抹消されているんだよね」「っ」

すると千夜ちゃんは何か思い当たったのか、急に黙ってしまった。

「ふっー、他の場所に引っ越す時って住民票を抹消することないよね？抹消する時ってホームレスになる時か、夜逃げする時だもん」

「…」

淡々と話すあたしだけど、千夜ちゃんが一向に話す様子がないから、このまま話すね。

「それにキミの経歴は学歴しか見当たらなかったよ。家族構成がどう

なっているのかまったくね。わかると言えば、ちとせちゃんの元に行った時からの記録しかない。キミは一体どんな道を歩んできたー」

「一ノ瀬」

沈黙を続けていた千夜ちゃんはやっと口を開き、あたしの言葉を遮った。

「お前は私の過去を知ってどうする？」

「どうしたいかって？あたしはただ知りたいただけ」

「ただ知りたいにしては、理由が曖昧だな。何か他の理由があつて私の過去を調べているようにも見えるが、違うか？」

つい数十秒ぶりの千夜ちゃんの辛辣な態度にあたしは思わずにやけてしまった。

そう、正解。

あたしはあることを理由に千夜ちゃんのことを調べていたのだ。

「うん、そうだよ。普段のあたしってきよーみがあるコトとしか目を向けてなくて、本当にきよーみないコトは全然触れなかったんだけど、あたしがこのめんどくさそうなコトを調べるようになったのは、ある人間があたしの元に近づいてきたんだ」

「ある人間？」

それは千夜ちゃんと会うたびに、必ずと言っていいほどあたしの前に現れる。それは変なスピリチュアルが大好きな人ようにあたしのおうちに訪れるのではなく、あたしがおうちに帰っているときに、ヤツらが現れる。

「その人間の名は？」

「えっと… その人間の名前は…」

千夜ちゃんにヤツらの名前を聞かれたあたしだが…

「名前は… えっとなんだっけ？」

「はっ」

名前を思い出せずにとぼけた、あたし。

一見するとわざととぼけているんじゃないかと思うかもしれないけど、その時のあたしは本当に名前を忘れていた。

「顔が覚えて声をかけてくるにもかかわらず、なぜ名前を思い出せない

「いんだ？」

「あれだよ。きよーみなくて思い出せない。本当だよ」

千夜ちゃんは「本当か？」と言わんばかりに眉を潜めたんだけど、「お前ならありえるかもな」と納得したようなため息をした。

「そのお前に声をかけてくるヤツの特徴は？」

「特徴としてキミと同じく黒い髪の毛で手袋をしている人なんだけど」

「…」

あたしに近づいてくるヤツらの特徴を聞いた、千夜ちゃん。彼女は特徴を耳にしても、心当たりがまったくと言ってもいいほど無反応だった。本当にこの人は感情を表に出さないんだね。

「あたしに近づく人間の特徴を知らないの？」

「知らないな。ただの思い違いじゃないか？」

「思い違い？なぜそう言えるの？その人間が現れたときは、あたしが千夜ちゃんに声をかけた時と同じ時期なの？」

「は？同じ時期？」千夜ちゃんはあたしの言葉に妙な疑いを持った目つきになった。

「まあ、こんな話を淡々としても仕方ないから話をすごくガラリと変わるんだけど、あたしはある憶測が浮かび上がるんだよね」

あたしはそう言うと少し間を開け、千夜ちゃんにこう伝えた。

「もしかして、ちとせちゃんの元に来る前に誰かの元にいたんじゃない？」

「…」

少しカツコよく千夜ちゃんに伝えたのだが、彼女は無反応だった。その微動もしない姿に思わずどっかの特殊部隊の訓練でもやってんじゃないかと思うほどに。

「…しばらく沈黙しても、キミから言葉はもらえそうもないもね」

「当たり前だ。なにせ、私には当てはまった質問ではないから」

千夜ちゃんは明らかにあたしに呆れたような大きなため息をし、席から立ち上がった。

「なんだ？先ほどの続きの話か？」

「いや、そうじゃないよ。」 明後日” って、確かちとせちゃんは21区でお仕事だよな？」

「ああ、どうやら仕事は夜まで続くとプロデューサーに聞いたが」

「その時の移動って、千夜ちゃんか？」

「ああ、そうだが？」と千夜ちゃんは言うのと、「なぜそれを聞く？」と言わんばかりにあたしに対して嫌々な目つきをした。

「そうなんだね。」 と言うかいつもちとせちゃんが移動する時って、千夜ちゃんが送迎するよね？」

「それは現場が近場の話だ。流石に東京から県を1つ以上跨ぐような場所はやらない」

「まあ、いくら車と言えど、運転するのは千夜ちゃんだけだよな」

ちなみにちとせちゃんが千夜ちゃんの車で移動する時は、プロデューサーは同乗しないらしい。

「それで、なぜそれを聞く？一ノ瀬？」

「んー？ただ、聞いてみただけだよな」

「・・・ そうか」

いつもの千夜ちゃんならば、理由を聞いただしそうな状況にもかかわらず、なぜかこれ以上言及しなかった。

「それで一ノ瀬、次は会う時は菓の時か？」

「うん、そうな感じかもね。あ、別に何かあたしと話した時があったらいつでもー」

「それはない」

千夜ちゃんはあたしの言葉を遮ると、別れのあいさつをすることなく、彼女はバーから去っていった。

千代ちゃんがあたしに辛辣な態度をするのは別に慣れてるし、あたしは構わないけどね。

(そういうえば、卯月ちゃんなんか憂鬱そうな返事だったなあー)

千夜ちゃんが去ってから、あたしはジャックダニエルのコーラ割りであるレミーを口にするのと、ふと今朝にあったコトを思い出した。それは卯月ちゃんからの電話だった。卯月ちゃんと言えば、確か昨日は

ササハイさんと一緒に食べに行っていたのだが、今朝電話から聞こえた卯月ちゃんの声は嬉しさとは程遠いものであった。その声は満足どころか誰かを傷つけてしまったかのような声。なぜそんなにテンションが低いのか、理由を聞くことができなかつたけど。

(…もしかして、ササハイさんに関係するコトかな?)

卯月ちゃんはお酒に非常に弱いコトは前から聞いているのだが、おそらくはそれが原因で罪悪感を抱いたとは考えにくい。もしそれが原因ならば、あんな暗い声を出せるわけがない。それで卯月ちゃんがあの声を出した理由なんだけど、思い当たるコトはササハイさんだ。(最近、髪色が黒っぽくなって、あの人に似つつあるしね)

これはあたしの考察なんだけど、卯月ちゃんは何からの秘密を知つたんじゃないのかと考えられる。

(まあ、ササハイさんが原因と考えるなら、当の本人に聞かないと話にならないけど)

そう思ったあたしだが、数秒後、ササハイさんに直接聞くことができなふと思ひ出した。確かササハイさんは確か明後日ぐらいに”ある作戦”に参加をする。そのためかちようど昨日にササハイさんから『今週、連絡は無理』という返事が届いた。

ちなみにササハイさんから”作戦”のことなんて一言も聞いていないよ?

”作戦”はあたしが独自で得た情報。

作戦の内容は、確か月山グループを解体する作戦らしい。

その作戦に参加する捜査官の中に、ササハイさんは入っていた。

ちなみにこの前に声をかけたジューゾーは作戦には参加しない模様。

(…)

だけどササハイさんが今回の作戦に入ると聞いてから、あたしの胸の中は妙に不安が生まれていた。

いつもならササハイさんが活躍するから嬉しく感じるのだけど、今回は違っていた。

一体なんだろう?

この根拠なき、不安というものは？
その不安を言葉で表すのなら、”消滅”だ。

異様さ

卯月Side

それは太陽の位置が真逆だった朝の出来事だ。

「……」

私がぼんやりと起きた時、自分の家にいたことに気がついた。そこは玄関でもなくリビングでもなく、私の寝室にいたのだ。

「あれ……なんでここにいるんだろう……私……」

起き始めた当初は状況が把握できなかったのだけど、時間が少し立つにつれて記憶が蘇っていった。

確か私は佐々木さんと一緒に飲んでいたんだけど、佐々木さんと飲んだ後の記憶が思い出せない。なぜ記憶が思い出せないのか考えていると、私はあるものを目を止めてしまった。

それは突然私の前から消えてしまった彼との写真を飾った写真立て。彼の姿を写した唯一の写真であり、彼と一緒に撮った唯一の写真だ。前まではリビングに置いてあったのだけど、今年の私の誕生日会の後に寝室に移動したのだ。

（……）

最初それを見た時、どうして目に止まってしまったのか自分でもわからなかった。いつもは気にすることは無いのに。だけど、その写真を見ていくと私の胸の中にある感情が湧き上がってきた。

（……まさか）

心の中でそう呟いた私は、ぼんやりとした感情から何か罪を犯したんじゃないという曖昧さのある恐怖の感情に移ってしまった。別にはつきりとした証拠もないのに、恐怖という感情が無性に現れた。どうしてこんな感情が生まれてしまったのか、また理由を探していたら、私の記憶の奥底にあった。

私がこの写真立てを移動するきっかけを思い出したのだ。それは私の誕生日会で家に上がった佐々木さんがちようど写真立てを見た瞬間、体に異変を起こしたのだからだ。初めはただの不調かなと思っただけで、後々になって佐々木さんが見た先を考えていたら、写真

立て以外考えられなかった。

写真立てに映る彼は佐々木さんとは似ている人なのだけど、ここ最近になって彼と佐々木さんは同一人物なのではないかと私は考えました。だから彼はあの時、不調を訴えて手洗い場に行ってしまったのかな？

私がそう考えていると、自分の感情が今いる部屋のようにだんだんと暗くなりはじめ、そして取り返しのつかない状況が頭の中に浮かんでしまった。

それは佐々木さんが彼が写っている写真立てを見たのではないかとということだ。

考えていくうちに、私は頭が重くなっていくことに気がついた。ああ、考えすぎた、私。そんな悪いことが起きていると断言していないのに、私は無意識にそう考えてしまう。本当に考えたくないのに。

(…電話、しなきゃ)

最悪の事態が頭から離れず、泣きそうになった私はある人に連絡することにし、枕の横にあったスマホを取り出した。数ある連絡先の中、私は迷うことなくある人の連絡先を選び、そして電話を耳元に当てた。いつもの私なら突然電話に出るような行動はせず、事前にメールなどの文章での連絡で確認をするのだけど、今の私はそんな余裕などなかった。

耳元からくる電話の呼出音が聞こえるたびに、時間の待ち遠しさが増す、私。いつも何気なく聞いている呼出音が、さらに私を焦らす。『お願い、電話に出て』と心の中で願っていると、スマホから「どうしたの？卯月ちゃん？」と志希さんの声が聞こえた。

「…あの、志希さんっ！」

今日、初めて誰かの声を聞いた私はすぐに言いたいことを言おうとしました。

「だけどーー」

「っ…」

あれほど志希さんに佐々木さんのことを伝えたかった私だったが、突然黙ってしまった。まるで全速力で走っていた車が突然急ブ

レーキをしたかのように。

突然黙ってしまった私に志希さんは「どうしたの？卯月ちゃん？」と声をかけたのだが、私はそれでもうまく口を動かすことができなかった。

これは緊張から起きる症状なのか？それとも無意識に話すのをやめた行動なのか？

そう考えていくと…

「……電話じゃなくて、直接会った方がいいんじゃないかな？」

「…え？」

何も言えずただ一人で考えていた私に、突然志希さんが直接会うことを提案してきた。

「ど、どうしてなんででしょうか…？」

「だって、卯月ちゃんの声を聞く感じ、直接聞いた方がいいかなとあたしは思うよ。悪く言いたくないけど、しばらく空気を聞くだけになりそうだし」

「ああ…：そうですね」と私は力を失ったような声で答えてしまった。

その時の私は志希さんがいう言葉に冷たさを感じただけで、それはその時の私が不安定だったかもしれない。

確かに志希さんの言う通り、今電話を続けても時間を削るだけになりそう。

「流石に今日は無理だけど、空いてる時間はあるでしょ？その時に会わない？」

「そ、そうですね…：じゃ、じゃあ…：後日メールで連絡します…：」

落胆したような声で話していた私はそう言うと、電話を切ってしまった。

あれほど電話をかけないといけないと思っていたのに、何も言えなかった自分に嫌気が生まれてしまった、私。なぜ電話をかけた時に沈黙を続けてしまったのか。まるで誰かに口を抑えられたかのように。

私は佐々木さんの話を志希さん以外に深く話すことができない。

それは安易に凜ちゃんや未央ちゃんには言うことができない。

私はあの人に”特別な思い”を抱いているのだから。

未央Side

あれは皆がお昼休みをし始める12時のことだ。

いつものこの時の私は体に任せて外に食べに行くのだが、今の私は違った。それは早朝に届いたメールのことが頭から離れられず、事務所の中で変人と思われかねないほど止まったり歩いたりしていた。

(朝のあのメール、一体なんだろう…。?)

その今朝に届いたメールと言うものは佐々木さんからのメールだ。内容は別に意味がわからない内容ではなく、普通にわかる内容が書かれたメールなんだけど、そのメールじゃどこか不審感と言うものが感じてしまうのだ。そのメールの内容はこうだ。

『ごめん、しばらく連絡はできない』

一見すると普通のメールなのだけど、私はそのメールを見た瞬間、妙におかしさが胸の中に現れた。

それは佐々木さんは昨日、しまむーと食事をしたのだからだ。今日しまむーはオフだから事務所にいないのだけど、しまむーからメールの返信がきていない。私はこの状況に今朝、佐々木さんから送られたメールと結びついてしまった。

絶対にしまむーと何かあったはずだ。私はそう思いながら、再び歩き出し考えていたら…

(あれ? 楓さんじゃん)

ふと視線を上げると、そこにはちょうど楓さんが立っていたことに気がついた、私。

確か楓さんはいつも佐々木さんと食べに行っているし、もしかしたら何か知っているのでは? と思いついた私はすかさずに楓さんに近づいた。

「どーも、楓さんー!」

「あら? 未央ちゃんじゃないの!」

久しぶりに楓さんとあったのだけど、相変わらずお綺麗な人。立派

なアイドルになった私でも（自分で言うのはあれだけど）、今でも憧れてしまう人だ。

「楓さんと会うのは久しぶりじゃないですか？」

「ええ、そうね。最後に会ったのは年始ごとじゃないかしら？」

「最近私はーって、いや、こんなことを話してる場合じゃない！」

「っ？」

自分で自分を突っ込んだように叫んだ、私。楓さんから絶対に変に感じられてしまった。

私は楓さんと世間話したいから話しかけたんじゃない。佐々木さんのことを聞きにきたんだ。そう思ってこの変な行動に出てしまった。

「わ、私！楓さんに聞きたいことがあるんですよ！」

「聞きたいこと？」

「つい早朝に佐々木さんがしばらく連絡できないって言う返事がきたんですけど、楓さんは最近佐々木さんに何か起きたか知ってます？」

「佐々木くんがしばらく連絡ができない？ああ、あれね」と楓さんは何か知っている仕草を見せた。

「何か知ってますか？」

初めは半分の確率で『知らない』と言い返されそうと思ったのだが、楓さんはどうやら知っているみたいだ。

「彼には詳しく聞いていないのだけど、どうやらお仕事でしばらく連絡できないみたい」

「お仕事？」

「うん、あまり声を大きくして言えないのだけど、大きな仕事をするらしいの」

今まで佐々木さんから仕事の理由でしばらくは連絡できないとの返事を何度もあったのだが、今回は妙に違う気がする。絶対にしまむーと関係したことだと思う。

「大きな仕事って…？なんか大規模な作戦見たいのですか？」

「どうだろうね…断言はできないのだけど、それに似たことかもね」

先ほど知っていると云っていた楓さんなのだが（そもそも曖昧に知っている感じだけど）、どうやら楓さんも本当の知らないらしいみたい。

「…もしかして、しまむーに関係したことだったり」と私が無意識に呟いたその瞬断だった。

「…多分違うのじゃないかしら？」

「え？」

すると突然、楓さんは私の言葉をすらりと遮ったのだ。

「…あ、いや、流石に変に結びつけるのはだめじゃない？確かに佐々木くんと卯月ちゃんは昨日食べに行っただけは知っているけど…」

楓さんの口から聞いた異様な返事を聞いた私は楓さんを見ると、いつもミステリアスな雰囲気醸し出している楓さんが、今は珍しく少し焦っているように見えた。

「楓さんも佐々木さんから聞いてたんですね」

「もちろんよ。だけど、これはあくまで佐々木くんの仕事の関係であって、卯月ちゃんとなんらかの出来事で送った返事じゃないと私は思うわ。未央ちゃんはあまり考えすぎないようにね」

「う、うん…わかりました…」

私がそういうと、楓さんは「じゃあ、私お昼ご飯に行ってくるわ」と言い、私から離れるように事務所から去ってしまった。楓さんが去っていく姿にネガティブな表現をしたのは、今この場でぎこちなさが生まれたからだ。

なぜ楓さんはしまむーのことをすぐの遮ってきたのか？私は不思議でしかたなかった。

それにしても私は今の感覚だけではなく、もう一つある感覚をうつつらと思いつ出した。

それは私が高校二年生の時のこと、つまり三年前のことだ。

あれは13区のス克蘭ブル交差点での出来事だった。

いつも気にすることのない東京の人混みが、あの時に限って違和感を感じた。まるで初めて東京を訪れた人のように。そんな感覚をさせたのは佐々木さんに似ている人である”彼”だった。彼は今でも

そうなのだけど、4年前の12月から行方をくらましていた。そんな彼が人々が行き交う13区のス克蘭ブル交差点にいたのだ。

(：： ああ、なんかあの時に感じた時と似ている)

だけど彼とはあのス克蘭ブル交差点で会ったのが最後だった。私は彼には詳しく聞くことができず、彼が私に最後にいった言葉は『：： ごめん、未央ちゃん』だ。あの時の彼の声は別れに悲しむ声だった。永遠の別れてしまうような声。

もしかして、佐々木さんも”彼”のように消えてしまうのだろうか？ 私はそう考えると、さらに不安になってきた。

(：： これ以上考えても：： 仕方ないよね：：)

私はこれ以上考えるのを止め、昼食をとることを決めた。今こうして考えても、今の私には何かできるかと言われると何もできないと答えてしまうだろう。

もし何かできることがあれば、私は佐々木さんにもう少し詳しくお話をしたい。

”彼”のことを知っているかなどね。

”終夜”

球世Side

月山家駆逐作戦 当日 夜

僕らは月山家当主とその一族の確保をするため、21区にある月山家の屋敷向かっていた。

前回のオークション戦では輸送車で移動をしていたのだが、今回は捜査車両（セダンなどの普通乗用車）での移動だ。

「おそらく敷地内で激戦が繰り広げられる可能性があるから、シャトーに出る前に言ったことをもう一度おさらいするねー」

そう言った僕は車を運転しており、他はクインクスのみんな（四人）が乗っている（セダンであるため、結構窮屈だけど…）。

僕は1週間前にも言った戦闘体制や起こりうるだろう事態をクインクスのみんなに何度目かわからないけどもまた言った。

みんなはおそらく耳にたこが出来るんじゃないかと心の中では思っていると思うけど、これから危険な目に会うのは間違いないため僕は念には念を推してまでそれでも言う。

そんな作戦の説明などを話していた僕だったが…

「…大丈夫か？ サツサン？」

「…え？」

すると突然不知くんが心配した顔で僕に何かを指摘した。

「大丈夫って何が？」と不知くんに聞くと…

「今言うのはあれかもしれないんですけど… サツサンの顔、なんかすっげー不安なんでスよ」

「不安そう？ 僕が？」

不知くんの言葉を聞いた僕は思わず疑ってしまった。

クインクスの誰かが不安そうと言うのはわかるのだけど、クインクスを指揮する 僕が”一番”不安がっていると不知くんは言ったのだ。

僕はしばらく時間を置いた後『いや、なんでもないよ』とみんなに

心配しないよう言ってしまった。

そう、この時の僕は言葉に反して、心の中は違っていた。

僕はまだ彼女の^{卯月}のことを考えていたのだ。

彼女と別れてからあの出来事を忘れることができず、これから危険な目に会うのに今でも無意識に考えてしまった。

彼女に最後連絡したのは、彼女の家から離れて数時間後に送った『しばらく連絡できない』と言う冷たく感じてしまう返事だけだ。

この作戦が終わった後、彼女はまた僕に話しかけてくるだろうか？
これから何が起こるかわからないのに、僕はまたそう考えてしまった。

21区方面に行く数々の喰種対策局車両とは逆の方向に向かう一台の高級車。

21区での仕事が終わった黒崎ちとせは白雪千夜が運転する車に乗り、346プロダクションに戻っていった。

普通ならば346プロが用意した社用車と運転手を使用し仕事場に向かうのだが、黒崎ちとせは白雪千夜の意向により事務所からそこまで離れていなければ千夜が運転する車で移動することになっている。

「今更かもしれないけど、今日の千夜は耳にイヤホンをつけているのね。まるでSPみたい」

「首都高は渋滞が起きやすいところですので、瞬時に別ルートに行けるようにと付けてみました」

千夜の左耳には黒のイヤホンをつけていた。それはナビからの音声情報を聴けるようにするために付けている模様。

「千夜ちゃんはいつも高速使う時はナビとか設定せずに運転してるけど、”今日は”めずらしくしてるわね」

「ええ、私は”人”ですから、すべてを完璧にこなすことなど不可能で

す。なので今日はつけているのです」

ちとせは千夜の言葉に『まあ、いいわ』と、どこか納得をした様子で答えた。

「それで今日はどんな料理が出るの？」

「今日の夕食は…あの」

すると千夜は一度口を止め、『すみません、お嬢様』と突然話題を変えた。

「ん？どうしたの？」

「料理を口にするお時間が少し遅くなります」

「あら？それはどうしてかしら？もしかして料理の下準備が終わっていないとか？」

「いえ、料理については2時間ではなく、20分以内なら出来上がりです。私が言いたいのはこの先に検問所があるからです」

「検問所？」

千夜が『この先です』と前方に指を指すと、何もなかった道路に警察車両らしき車が何台も止まっている所が見えてきた。

「その検問所って避けることはできないの？」

「無理です。なぜならその検問所を設置したのは警察ではなく、喰種対策局です」

千夜の言葉を聞いたちとせは『あーなるほどね』と何かわかった口調をした。

「なら、避けようがないわね」

「お嬢様もおわかりですか？」

「ええ、あいつらが一体何をしたいか思いついたわ。おそらく対象を逃さないようにするためにやったのね」

検問所に近づくと千夜たちが乗る車に喰種捜査官が誘導棒で停止の指示をし、千夜はその指示を見るとすぐに車を停車させた。

「あいつらの取締りだったら、少なくとも料理の一品ができるほど時間はかかりそうじゃない？」

「いえ、すぐに終わります」

「すぐに終わる？」

千夜は『私にお任せください』と言うと車をPレンジに入れ窓を開けると、一人の若い喰種捜査官が近づいた。

「止めてもらってすみません。喰種対策局です」

若い喰種捜査官がそう言うのと、喰種捜査官の証拠であるバッチを見せた。

「喰種捜査官？警察ではなく？」と千夜は状況が把握できていない”演技”を見せた。

「ええ、実は不審車両を探しておりまして、詳しくはお伝えすることはできませんですが、対象車種がありまして…」

「…不審車両」

捜査官の口から出たある単語に千夜は少し眉をひそめた。千夜が運転する車はメルセデスベンツ Sクラスマイバツハ。庶民が安易に買えるとは言えない車が止められるとは異様にも思える。

「それで私共は一度取り調べをしないといけないので、申し訳ないのですが車から降りてー」

「少し待て」

千夜は捜査官の説明を妨げて言うのと、すぐに車のグローブボックスから”無地の封筒”を取り出した。

「これを検問所の責任者に渡せ」

「え？」

突然封筒を出され、若い喰種捜査官は困惑した。

「すみませんですが…封筒を受け取るなど耳にしておりませんが」

「聞こえなかったのか？これをここの責任者に渡せと言っている。私の言う通りにやれ、二等捜査官」
「っ」

若い喰種捜査官は様子が一変した千夜の姿に言葉を失い、千夜から封筒を受け取り、すぐに情感がある検問所本部に向かった。

しばらくすると検問所責任者と思われる壮年の捜査官が千夜が乗る車にやってきた。

「大変失礼しました。白雪さん。私どもの情報不足で誤解を生んでしまい申し訳ないです」

「わかってくれるならいい」

千夜は目を合わせずにそう言うと、すぐに車の窓を閉め、即座にDレンジに入れ車を発進させた。

「先ほど不快に思わせる状況をお見せしてしまい、申し訳ございません、お嬢様」

検問所が見えなくなった距離になると、千夜はすぐにちとせに謝罪の言葉を述べた。

「謝ることないわ、千夜ちゃん。別にあの光景を見ると悪いことだけじゃなくてクリエイティブ能力が伸びるって、どこかで聞いたことあるし」

「それは上面だけ知った人間が発言した情報ではなく？」

「ええ、ちゃんとした論文から読んだ情報よ。そこらの自己啓発物とは違う信用できる情報」

「なら、安心しました」

しかし、ちとせは『でもね』と一度ため息をし、グローブボックスに指を指した。

「グローブボックスの中に封筒があるなんて、まったく聞いていないのだけど？」

「いえ、あれは私が作ったものです」

「千夜ちゃんが作ったの？その封筒には何があつたの？」

「乗車する人物や積んでいる荷物など書かれた書類が入っています」

「そうなのね…」

ちとせは外に視線を向け、どこか納得のいかない口調で言葉を返した。

「…どうかなさいましたか？」

「千夜ちゃんがあいつらと話していた時、今日はどこか手慣れているなあって感じたの。まるで千夜ちゃんがあいつらと同じ喰種捜査官に見えたわ。それで私はちよつと気分がよくないと言うか…」

「ああ、そうですね。お嬢様はヤツらを嫌っておりますね」

黒埼ちとせにとって喰種対策局の人間は憎悪の対象であり、仮にちとせに声をかけてくる喰種捜査官がいるならば、千夜が代わりに話す

くらいだ。

「先ほどお話しした喰種捜査官どもはそこらの平社員とは変わりがあり
ません」

「そこらの平社員って、千夜ちゃんはいつも例えるときは酷いものば
かりよね」

ちとせはそう言うと、ふふつと笑った。

「でも千夜ちゃんが平社員って例えるのはなんとなくわかるわ。何せ
あいつらと共通していることは、無知でいること」が一番の罪なの
よね」

「ええ、そうですね。無知のままでは愚者になりかりませんね。きつ
とあの若い捜査官はCCGの本当の事実を知っていないと思います」
「だから、私はこれから知ろうかしらね」

「…何をですか？」

「なんででしょうね？少なくとも」今の私」が知らないことをね。例え
ば、今日の料理とか」

「ああ、そういえば今日の料理を伝えていませんでしたね。今日の料
理は——」

ちとせに夕食を伝えるかたわら、片手に巻いてある高級腕時計を見
た千夜はこう思った。

ああ、もう始まった。

代々続く名家が崩れ降りる時が、と。

きつと今日は多くの血が地面に流れ落ちるのだろう。

千夜はそう思いながらハンドルを少し強く握り、車を走らせた。

すれ違い

凜Side

一步一步、ゆつくりと自分の家に帰る、私。

日はすっかり隠れてしまい、人工的な光があたりを照らす街を歩いていた。

今の時間帯なら昔だったら親に怒られるのだけど、今の私は大学生になり、親とは離れ、一人で暮らしている。

「…」

私はもう外に出る理由などなく、そのまま家に帰るだけなのだけど、家に向かう足の速さは家に帰るのを拒否しているのようにかなり遅め。

別に私は家に帰るのは嫌とは考えていないのだけど、同じ色に似たことを考えていた。

それはこの前に佐々木からの連絡。

いつもの私はいいつからの連絡はそこまで気にしないのだけど、今回は違う。

目立つほど考えるようなことではないけれど、妙にムズムズするよななこと。

返事の内容は『しばらく連絡できない』と他の人から見たら「普通の返事」だ。

だけど私にとっては「普通ではない返事」だ。

(あいつ… 卯月と何かあったの?)

その佐々木からの返事をもらったのはちやうど卯月と食事に行った翌日のこと。

返事がきたタイミングから考えてみると、何かあったとんじやないかと無意識に考えてしまう。それはネガティブにね。

もし今私が抱えている状況を今までの経験で例えるならば、金木が突然私の前に現れたことに似ている。

金木は突然私の前から消えて、そして急に私の前に現れたヤツで、

佐々木に似ている。いや、ただ似ているのではなく同一人物じゃないかと思ってしまうほど似すぎている。

まさか、本当に佐々木はあいつなんかじゃないか？

ゆつくりと歩いていた私はふとそう思うと足を止め、カバンからスマホを取り出した。

まさか今電話に出るなんてないよね？

そう思った私は”あいつ”の連絡先を選び、電話に出てみた。

「…」

数回、電波が発信される音。

いつもは何気なく聞くこの音。

こうしてじっくりと耳で聞くと、待ち遠しさと言うものが意識の中に生まれることに気がついた、私。

だけどこの発信音が途切れた瞬間、聞こえたのは私が望んだ声ではなかった。

「…」

スマホから聞こえたのは『電波が届かない場所、または電源がつかない』という感情がない機会音声。

結局は”あいつ”の声を聞くことがなかった。

「…」

私は変な期待を抱いてしまった。

他のみんなには連絡しない中、私だけ連絡してくれるだろうという考えに陥ったことを。

そんな自分だけ特別なんだという感情に浸ってしまった、私。

私は自分に対して誰も聞かれないほどの声でこう呟いた。

「なんて… 馬鹿なの、私」

普段の私なら絶対に考えないだろう、この行動。

でも今の私は行動を起こしてしまった。

ああ、なんて馬鹿なんだ、私。

そう思いながら力が抜けた足でふらふらと家に帰った。

21区にあった月山家屋敷に踏み込んだ、僕ら。

先行隊が屋敷に入った20分後、事態が急変をした。

それは月山家当主月山観母みのる観母が抵抗することなく我々に投降をし、月山家次期当主は逃走をしていたのだ。

逃走した先は8区にある月山家所有のビル『L・E』であった。

そこはヘリポートが設置してるビルであり、空での逃走の恐れがあった。

「…」

その後8区の『L・E』に到着をした僕は宇井特等の指令で赫子でビルの外に飛び出し、屋上に這い上がった。

100メートル以上の屋上に僕以外辿り着いた捜査官はいなかった。

「…っ！」

突然、“痛み”が現れた。

それは卯月ちゃんの家を訪れた時と同じ痛みだった。

(な、なぜ、また起きるんだ…?)

しかも痛みと同時に、底知れぬ恐怖が胸の中に現れた。

その恐怖苦しいことから逃れようと現実逃避に走ってしまうような感覚に近い。

いや違う。

どちらかといえば、少しでも生き延びようと、もがいているといえ
ばいいだろう。

僕はここで死ぬのか？

まだ、死ぬと断定されていないのも関わらず？

僕はまだ彼女たちから、必要とされているはず。

僕は自分のそう言い聞かしても、恐怖が一向に消えようとしな

だけど、“僕の中にいる人物”は否定する。

あたしは志希である。

どこかの本のメッセージを自分風にアレンジし、何度も口で呟いていた、あたし。

あたしは社会の冷たさを表しているような床に寝転び、自分の心がそうあつて欲しい真っ白な天井を見て、そして無音の部屋にいた。

この状況を聞くと、凡庸の人は『変人』や『普通じゃない』と言うだろう。

だけど、これはあたしにとって『変』ではなく、『普通』だ。

みんなと同じ道を歩くのは私にとってリスク。

あたしは皆が歩むだろう道には足を踏み出さず、誰も歩んでいない道に歩くのが普通なのだ。

「あのメッセージはなんだろう?」

自分しかいない部屋でそうつぶやいた、あたし。

あたしがここ最近気になっているコト。

ササハイさんから送られた考察が捗るメッセージ。

『しばらく連絡できない』

確かこのメッセージがきたのは卯月ちゃんと一緒に食べた翌日のコト。

おそらくあたしだけじゃなくて、ササハイさんと交流のあるアイドルたちに同じ連絡をしているじゃない?

推定であたし含めて6人。

その6人の共通点はカネケンさんと交流のあった人たちだ。

カネケンさんと交流していた人は他にも挙げられるのだけど、カネケンさんと深い関係(変な意味ではない)があつたのは6人だ。

今思えばササハイさんが交流しているアイドルが、かつてカネケンさんと交流していたアイドルだったという事実。

まさかなんだけど、ササハイさん卯月ちゃんと一緒に過ごして気がついたんじゃないかな?

自分が知らない過去に、あたしたちと一緒に過ごしていたコトを。

だからササハイさんはあの意味深なメッセージを送ったんだんじゃない?。

「…彼はどうなるのかな」
彼。

結局、彼はどうなるのかな？

おそらく彼は『あの人ではない』と何度も自分に唱えている。だけ
どあたしの考察だと、結局行き着く先は決まっていると思うよ？

別にあたしは彼を消したいとは思わないけど、おそらく彼と交流し
てきたアイドルたちは大多数は『消えろ』と言うんじゃないかな？

だってあたしの周りにいる人たちは、今の彼を昔の彼の代わりとし
て認識されているんだよね。

代わりは所詮、代わり。

本物が彼の中にあるのならば、皆は本物の彼を欲しがる。

そう、今の彼を消してまでね。

でも私の考察なのだけど、もし彼が帰ってくるならば、きっとその
ままハッピーエンドにはならないと思うんだ。

彼はあたしたちとの良い思い出という鮮やかな絵の具とともに、す
べてを真っ黒に染め上げる黒い絵の具のような事実を渡すんじゃない
のかな。

その黒い絵の具はどんなものなのかは詳しくはわからないのだけ
ど、あたしは薄々ながら知っている。

今のあたしは、黒い絵の具に染まられる状況が日に日に近づいてい
ることに気づいている。

具体的になんだよって？

いずれ面倒ごとになるようなコトだよ。

そう、今の職を失わざるをえないコトかもね。

Awake K

美嘉Side

時計はちょうど9時になった頃。

今日やるべき仕事が終わりに、家に帰った、アタシ。

家上がったアタシは迷わずまっすぐとソファアに向かい、そのまま体に任せるように飛び込んだ。

(はあ…いろいろなと疲れた)

ソファアに寝転んだアタシはポケットにあったスマホを見ると、つい10分前に東京で大きな事故があったとのニュースが表示されていた。

でもそのニュースは普段アタシが通ることのない知らない道での事故だったから、一通り目を通すとすぐに通知を消した。

そのニュース以外に誰からの返信などの通知はなかった。

「…さてと」

アタシはそう呟くとソファアから立ち上がろうとした。

アタシが今日やることはシャワーに入って寝るぐらいという簡単なこと

ーだけ。

「…」

だけどアタシは立ち上がらずにそのままソファアに固まったままだった。

ふと懸念していることを思い出したのだ。

(なんで今思い出すの…あれが?)

アタシはそう心に呟くと、『なぜこの時?』と額に手を置いた。

アタシが思い出したのここ最近の人間関係のこと。

別にアタシが好きな人を見つけた訳ではなく、アタシの友人の中で不穏な空気が流れている二人がいる。

それは誰かって?

それは文香さんと志希のことだ。

ここ最近、二人の間にギクシヤクした空気が生まれつつあった。

(確か…：クリスマスの時からだっけ?)

きっかけはアタシの家でやったクリスマス会のことだ。

クリスマス会を企画したのは志希で、参加者は企画者の志希にアタシ、そして文香さんの3人で集まった。

ちようどアタシが佐々木さんから電話がきたとの話を進めていたら…。

『…は？』

突然誰かが心の奥底から苛立ったような声を出したのだ。

その声を出したのはアタシでもなく志希でもなく、文香さんだった。

今思えば文香さんのあの声を聞いたのは初めて出会った。

周りの人から『最近の文香はどこか恐ろしい』とか『ときどき文香さんは普段聞かないような怖い声をする』との声が他の人から聞いたことがあったのだが、まさかクリスマス会であの声を聞くことになるとは思わなかった。

あのクリスマス会のことを思い出したアタシは考えるだけでもため息をしてしまう。

アタシは二人からは普通に仲良くしてもらっているけど、志希と文香さんだけにした場合は空気が一変する。

前までは二人だけにしても普通に仲良くしていたのだけど、最近は二人だけにしても話す様子を忘れさせるぐらいに話はしない。

それはただ話題が尽きているからではなく、一方が相手を嫌っている空気が肌を感じるほどだ。

まさかどちらかが爆発をするのではないか？とアタシは心の隅で恐れている。

志希はいつもは自由奔放にしている人間だけど、時折冷淡な態度になることがある。

アタシは直接見てなかったけど、この前の化粧品PRでイメージ

キャラクターとして出演していた志希にしつこくプライベートの質問してきた芸能記者に『キミは今それは関係あるの？いいかげんやめなよ。キミたちの仕事はゴミクズ以下の社会悪しか見えないのだけど』と切り捨て、会場の空気が一気に悪くなったらしい。（この後、司会者さんがなんとか嫌悪な空気と取り除いたらしいけど）

文香さんはアタシと話す時はいつも通りに優しいのだけど、文香さんと話すたびアタシはいつか誰かに怒りを見せてるんじゃないかと恐れてしまう。それはアタシだけではなく周りの人もそうだけど、誰も文香さんの怒りを見たことがないからだ。そのせいか周りは文香さんと話す時は腫れ物を触るかのようにぎこちなさが入った慎重な会話になってしまう。

もしかして志希から爆発するのか？それとも文香さんから？

そんな二人にアタシができることはなんだろうか？

言葉を発せずに緊迫した空気を漂わせる二人にできることは？

ただ、二人の関係が壊れるの見過ごしななんて、アタシはやりたくない。

時計の針が午後8時30分を示していた頃。

346プロダクションに戻ったちとせたちは今日すべき用事をすべて終え、ちようど事務所から出る頃であった。

「いますぐ家に戻りましょ、お嬢様」

「うん、さっさと帰ろうね♪」

二人は車に乗ると、警備員しかいないであろう事務所から出た。

「それにしても千夜ちゃんが事務所に入ったのは何気に入ったのは初めてじゃない？」

「… ええ、そうですね。今までは玄関からさらに奥に入ったことはありませんでしたね」

「千夜ちゃんなら私がいる部屋まで迎えに来てもいいけど… なぜ今まで奥に踏み入らなかったの？」

「それは簡単です。単に邪魔をしないためです」

「邪魔をしない？別に邪魔をしたっていいんじゃないの？」

「いえ、さすがに346プロダクション関係者に迷惑をー」

すると千夜は何か思い出したかのように会話を止め、左腕につけていた時計に視線を向け、『失礼ですがお嬢様』と話を変えた。

「どうしたの？千夜ちゃん？」

「また少し遅れてしまいます」

「遅れる？それはあいつらの検問所があるから？」

「いえ、”ただの事故”ですね」

「事故？」

「いつも通るルートで行きますと20分ほど遅れます」

「その情報は千夜ちゃんがつけているイアホンから情報を得たのね」

「ええ、そうです。ちょうど今届きました」

千夜はそう言うと、いつも通る道とは別のルートにハンドルを切った。

「また遅くなってしまうましたが、気分転換に別のルートに行くのもありだと思います」

「そんなこともあるよね。人生は必ずしも真っ直ぐに行くわけなし」

ちとせは不満を言うことなく『まあ、そんなこともあるよね』とつぶやいた。

「食事まで少し遠のいてしまいましたがお許しください」

「いや、別に千夜ちゃんが謝ることはないわ。私はある程度空腹に慣れないといけないし、そうしないと今の体型が維持できなくなるからね」

「了解しました。別ルートになりますが、なるべく早く向かいます」

千夜はそう言ったものの車のスピードを上げることなく、通常通りに走らせた。

だが千夜が通った道はいつも通る道は違えど、所要時間は本来通る道を使用した時と変わらなかった。

しかしちとせは指摘することなかった。

今日の千夜の行動に。

文香Side

眠れない。

就寝をつこうとベッドに数時間横たわっても、眠気というものが一向に現れない。

(…)
いくら目を閉じても、いくら眠りの訪れを願っても、私は眠ることができない。
まるで今の私のように眠気にも見捨てられたかもしれない。

(…)
眠気が訪れないせいか、思い出したくはない記憶、不安が根拠もなく現れる。

過去の失敗した出来事、誰かからの侮辱、仕事の嫌味、誰かの怒号、将来への不安、

そして彼を突き放してしまったこと。

(…)
私は彼との出来事を思い出すと、嫌なことからそらすためにシーツを握った。

私はあの行動が忘れられない。
彼を今はなきあの人だと認識してしまい、激情してしまったことを。

あの時の私は何もかも墮落していた。

とにかく彼の帰りが待ち遠しかった。

(…)

それから私は彼と別れてから連絡はしておらず、最近連絡したのは彼から『しばらく連絡できません』との返事だけ。私は彼からのあの突き放した出来事を振られるのが怖いのか、彼に返事をする気力が全く湧かなかった。

だけど私が躊躇している間に、もしかしたらあの女が行動をしだすかもしれない。

そして最後に私を嘲笑うあの女の姿が目には浮かぶ。

(…)

私は突発的にベットから立ち上がり、スマートフォンを取り出した。

私は彼に謝罪の文を送ることにした。

真つ暗な部屋に眩しく映るスマートフォンに彼宛の返信を打つ。

『先日の件、本当に申し訳ございません。私が起こした過ちをどうか許してください』

眠気がなく焦りが生まれ、今の私が思いついた文章。

前の私ならばもっと丁寧な文章が打てたのに、今の私は昔より落ちぶれている。

(…これで彼から返信が来る)

彼からの返事はおそらく朝か、もしくは翌日以降か。

そう思い、再び眠りにつこうとしたその時だった。

「…え？」

すると先ほど返信を送ったスマートフォンから突然、着信音が聞こえた。

普段スマートフォンからくるのは彼か、もしくは美嘉さんしか。

私はまさかと思いスマートフォンを取り出すと、彼からの返事が来たのだ。

「か、彼から…！」

先ほどまで否定的な思考を持っていたことを忘れるぐらいに嬉しさが生まれていた。

もしかしたら、この前にお会いした時の謝罪かもしれない。
そう期待し彼からの返事を開いた、私だけど。

『申し訳ごいませんですが、仕事の都合でしばらく連絡ができません』

彼からきた返事は、私の返事を無視した業務連絡じみた感情のない返事。

「……っ」

私はその返事を見ると手に力が入らなくなり、手に持っていたスマートフォンを床に落としてしまった。

ああ、私は見捨てられてしまった。

彼は私を見ていない。

私はあなたのことを誰よりも寄り添ってあげているのに。

(……私のせい?)

これは自分のせいだろうか?

自分の無力さなのか? 行動のなさか?

いや、これは私だけのせいではない。

あの女のせいだ。

「……っ」

あの女が頭に浮かんだ瞬間、私は自分らしくない舌打ちをした。

これは彼があんな女と結びつき、送った返事。

私はもう”用済み”との返事だ。

「……っ!!!」

そう考えた私は言葉にならない怒りの声をあげてしまった。

ただ怒りを発散するために。

あんな女に対しての怒り。

惨めな私に対しての怒り。

「…なんでこうなったの？全部、全部、あの女の仕業？」

あの女は自分一人で彼を落としたのか？

でもあの女は自分だけで行動できる性格ではない。

じゃあ、誰なのか？

あの女と手を組んだ愚か者は？

渋谷凜か？

本田未央か？

それとも…？

「…ああ、だから親しかったんだ。あんな猫被った態度をとったもの、私を陥れるため…」

私は該当する人物が頭に浮かんだ。

そう、あいつを忘れてはならない。

あの女が彼に近づかせた原因を作った女の存在を。

「…一ノ瀬志希」

いつもニヤニヤしている、あのチェシヤ猫野郎。

確かあいつはあの女といつも一緒に行った。

やっぱり、私を陥れるために私に近づいた。

そう考えていると、また私の元から眠気に見捨てられた。

眠気よりも、遺恨が私の心に根付いていた。

今日、彼は眠りについた。

あれほども生きたいともがいていたにもかかわらず、最後はすべてを受け入れたかのようにすんなりと落ちついていた。

彼の中にいた僕は久しぶりに外の空気を味わった。

最後に息を吸ったのは花が不気味に咲き誇る地下。

今では遮蔽物がなく、空が綺麗に見えるビルの屋上。

不気味に残る不味い肉を口にする、僕。

それは美味を得るためではなく、体に適応させるための行為。

昔の僕が見たら、信じることはないだろう。

不味い肉を口してると、彼女を思い出した、僕。

彼女を抱きかかえたことを思い出した。

彼女は今でも僕のことを覚えていた。

女性の記憶は上書きされるものだど、どこかで聞いた話を思い出したのだが、彼女はどうかやら違うみたいだ。

彼女を思い出し、彼女たちを思い出した、僕。

彼女たちも僕の帰りを待っていた。

彼に会いながらも、結局は僕と比較していた様子が僅かならがあった。

彼女たちはきつと今の僕に会いたがるだろう。

だけど僕は彼女たちと会うのはやめる。

僕にはまた一つ、重荷が乗っかってしまったのだから。

隠し、微笑む

卯月Side

朝に目覚め、携帯を見た時のことだった。

『申し訳(ご)ざいませんですが、仕事の都合でしばらく連絡ができません』

それは佐々木さんからの返事がきたのだけど、心の底から嬉しさがくるような返事ではなかった。

いつも私に敬語を使うような人ではないのに、今回きた返事は仕事先の人に話すような硬い文章。

私はその返事を見た時、寝起き特有のぼやけた気分が覚め、混乱が始まろうとしていた。

(まさか私のせい?)

返事を見た私はふと頭の中に思い込みが過った。

何もかも覚えていない酔いの中、私は佐々木さんに何か悪いことをしてしまったのだろうか？

まさか、私のせいだろうか？

ああ、なんて愚かなことをしてしまったんだろう、私。

無意識に考えてくうちに大切な物が失ってしまう焦りが生まれていく。

まるで窮地に追い込まれた人のように。

「...いや、違う」

無意識に悪い思い込みを吐き出す思考を止めるように、静かな部屋で一人つぶやいた、私。

追い込まれたためか、焦りの中から反くように冷静さが生まれた。

(...今日は志希さんに会う約束をしてたんだ... だからその時に聞こう...)

少なくとも今の私が置かれている状況は一人が解決しきれない思い込み。

かつて過去の私が一人で抱えこんでしまったように、一人で抱えて

はいけない。

私は少しでも早く家から出られるように出る支度をし、志希さんがいる346プロダクションに向かった。

それからして私は志希さんがいる346プロダクションのカフェテリアに向かった。

今日は仕事はなく事務所に行く必要はないけれど、志希さんが『346プロのカフェで会おう』との提案したため、休みなのに346プロに来るのは少し違和感がある。

そう思いながらも、346プロにあるカフェテリアにたどり着くと、違和感など気にするような状況を忘れてしまう人を見つけた。

「やあ、卯月ちゃん♪」

その人は今日会う約束をした志希さんだった。

私よりも先にコーヒーを注文しており、数十分前に到着したかのような余裕があった。

志希さんの姿を見た私はほんの少し安心した。

「お久しぶりです、志希さん」

「久しぶりだね。さあ、座って座って」

私は志希さんと対面するように椅子に座り、まだ飲み慣れていないコーヒーを注文をした。

「それで卯月ちゃんが話したいことはまとまったかな？」

「話したいことを含めたことなんですけど… 今日佐々木さんからこんな返事が来たんですよ」

私は今朝携帯にきた返事を志希さんに見せると『ああ、これね』と志希さんはすぐに理解した反応をした。

「あたしも同じ返事がきたよ。しかも書いていることも全く同じの」
「書いてることも同じ？」

「そうだよ。いつもササハイさんはこんな文章を送る人なんかじゃないよ。一人、一人違う表現で言葉を返すのだけど、今回は妙に変だよ」

私は志希さんの話に思わず疑ってしまった。

全く同じ文章を他の人に返事をするなんて、明らかに変だ。

つまり佐々木さん自身に何かあったのではないか？

そう考えていくと、私は今朝思い込んでしまったことを無意識に口に出してしまった。

「やっぱり…これって…私のー」

「いや、これは卯月ちゃんのせいじゃないよ」

無意識に口に出した私に志希さんは言葉を遮った。

「…私のせいではない？」

「うん。だって、証拠があるの？」

「証拠…？」

「証拠があつたなら思い込んでいいけど、ないでしょ？しかも酔つていたことの記憶なんか思い出せはしないよ。流石に卯月ちゃんはブルックアウトを抱えるような人じゃないと思うけど」

志希さんは『まったく…卯月ちゃんは…』と心配した様子でため息をした。決して呆れてため息をしたわけではなく。

「それであたしが言いたいことは、自分を責める思い込みを持たない方がいいよ」

「そ、そうですね…前にもこんなことありましたよね…」

「うん、今回は人は違うけど、前と同じような問題だけだね」

言われてみれば、前に私が一人抱え込んだ時は、彼の問題も絡んでいた（本筋はアイドルのことだけだ）。

でも今回のメインは彼。

またしても彼を失うんじゃないかと心の隅に不安がある。

そして私は店員さんが持つてくれた苦くて飲めないコーヒーを少しながらすすった。

「あたしもわからないよ。少なくともササハイさん本人に聞きたいのだけだ…」

すると話していた志希さんは段々とトーンを落としていった。

私は『どうしたのですか？』と聞くと、『なんかね。ササハイさんは返信しても電話もしても、全く出てくれないんだよね』と志希さんは

まいったなと言わんばかりに少し頭をかいた。

「電話に出てくれない?」

「うん。多分ね、卯月ちゃんもやっても出てくれないと思うよ」

志希さんの言葉を聞いた私は佐々木さんの様子に更に異様に感じ
てしまう。

「私が返事をして、来ないのでですか?」

「うん、確実に来ないよ。なんかササハイ自身に何かあったんじゃないかな?」

「まさか... 喰種に襲われたんじゃない?」

「流石に死んでなんかいないよ。少なくとも目に通しているけど、返
事をしたくない。そんな感じっぽい」

「そうなんですか...?」

「うん。ササハイさんが殉職した情報は一個もないよ。喰種対策局に
行ったけど、まったくそんな情報はないよ」

そういつた情報がない?

喰種捜査官である佐々木さんの情報はそう簡単に見れるのだろうか?
か?

私は志希さんにCCGのことをさらに聞こうとしたその時だった。

「やあ、二人とも♪」

するとタイミングよく、ちとせさんが私たちの元にやってきた。夕
イミングよく、というか、タイミングを狙っていたかぐらいに正確な
気がした。

「やあ、ちとせちゃん♪」

「あら、久しぶりに志希がいるのね? 珍しく仕事?」

「いや、今日は仕事じゃなくて、卯月ちゃんとお話するために事務所
に来たよ♪」

志希さんはそう言う『にやはは』と笑った。

志希さんは呑気に笑っているのだけど、ここ最近仕事は月に一度あ
るかないかぐらい仕事をしていない。

私は志希さんに直接聞いたことはないのだけど、噂によると志希さ
ん自身が仕事のほとんどを断わっているらしい。

「だから卯月がいるのね。初め見た時は変に感じちゃったけど、そう言うことなのね」

「はい。志希さんがここがいいって言ったので来たんですよ」

初め346プロのカフェテリアに指定された時は『お休みの時に訪れるのはどうだろうか?』と違和感があつただけけど、今思えばここに来て正解だつた。

もし志希さんに会うことなく一人で家にいたら、私は解決しきれない問題から逃れられず、自分を追い込んだと思う。

それから志希さんは『ちとせちゃんも会話に入る?』と誘つたのだけど、『私はこれから仕事で行くの』とちとせさんは断つた。

「あーそれは残念だねえ。仕事がなきやもつと話ができたのに」

今更のことなのだけど、ちとせさんに佐々木さんのことは言っていないのだろうか?

佐々木さんを知る人は346プロでは何人かはいるのだけど(ほとんどは金木さんから知っている人なのだけど)、ちとせさんは私で知る限り、佐々木さん知らない人だ。

もしちとせさんが会話に入ってしまったら、志希さんは佐々木さんのことをちとせさんに話すのだろうか?

そう考えていた私のだけど、この時の私は志希さんになぜか聞かなかった。

「私はこの仕事を趣味と言う感じで楽しんでるから、安易に外すことはできないわ。二人は二人で楽しんでね♪」

ちとせさんはふふつと笑いながらそう言うと、私たちの前から去つていった。

「うん、じゃーねー♪」

「お仕事頑張ってください、ちとせさん」

ちとせさんと笑顔で話していた志希さんなのだが、ちとせさんの姿が見えなくなった途端、『しかし... おかしいなあ...』と笑顔だつた志希さんが急にしかめ始めた。

「ん? おかしい?」

「昨日、ちとせちゃんがいつも帰る道で”事故”があつただけけど

な…。」

「『事故』ですか？」

「ちようど、ちとせちゃんが帰る同じ時間帯で大きな事故があったんだけど…。」

「なんで…。そこまで知っているんですか…。」

「たまたま、事務所から出るところを見たんだよね」

「たまたま、ですか？」

仲はいいとはいえ、流石にストーカーなのではと思ってしまうほどの細かさがある。

それに昨日は志希さんはおやすみのはずなのだが…。夜にもかからず事務所に訪れるのは変だ。

かすかに疑問が残っていたのだけれど、その時の私はなぜか詳しくは聞かなかった。

「うちの事務所から出る車って大抵安い営業車かそこそこ値段が張る送迎車くらいだけど、ちとせちゃんの車は少なくともうちの事務所の人が乗る車じゃないよ」

「つまり、結構値段がする車なんですか？」

「そう、家が建つほどかな。やっぱり黒埼グループの令嬢は違うよ」

私はそこまで車のことは知らないのだけど、家が建つほどになると結構な金額だとわかる。

「まあ、私はちとせちゃんが乗る車をよく知っているから、昨日の出来事に疑問を感じたんだよね」

「そうなんですネ…。とりあえずなんですけど…。先ほどの話に戻りましょう」

ちとせさんのことは明らかに疑問に感じてしまうのだが、その時の私は佐々木さんのことを話したいがあまりか、ちとせさんのことはこれ以上触れなかった。

「話を戻す？…。ああ、ササハイさんのことだったね」

「しばらく佐々木さんのことはお話できないのですよね？」

「まあ、そうなるかもね。でも別に離れていても、料理のようにすぐに冷めたりはしないよ。少なくとも過度ないちやつきをするカップル

よりはマシ」

「か、カップルだなんて…」

「別に恥ずかしがることじゃないよ?」

志希さんはそう言うと、目を細めて優しく微笑んだ。

私は志希さんとうとうして佐々木さんの話をすると、安心をうしてしま
う。

今、彼のことを深く話せる人は、志希さんしかいない。

もしこの話を他の人に話してしまえば、私が歩んできた道が壊され
る気がする。

それは誰かはわからないのだけど、私は志希さんが壊すなんて絶対
ないと確信がある。

もし私が彼と再び会えたのならば…

彼に告白をする。

ちとせSide

つい先ほどの話に戻ろう。

私は次の仕事の空き時間にふらりとカフェテリアに足を踏み入れた。

普段カフェテリアに訪れることがない私が”たまたまに”訪れていたら、ちょうど志希と卯月がいた。

私は彼女たちに気づかれないう、少し遠くの物陰に隠れ、耳を傾けた。

私は喰種の血が流れているおかげか通常の人間より聞こえがいい。それで二人がいる席に少し耳を向けていたら、やっぱり彼の話をしていた。

千夜ちゃん曰く、佐々木琲世と眼帯の喰種の同一性は非常に高いみたい。

だとしたら、佐々木琲世は人間喰種ヒトと言うことになる。

と言うことは卯月は彼が喰種であることは知っているのかしら？

もし知っているならば、危険を承知で知っているのかしら？
変に話を広めて仕舞えば、あいつらが嗅ぎつけてしまう。

あいつらは神出鬼没だから、油断はできやしない。

もちろんあいづらが私を監視をしていることも知っている。

「… ササキ、ハイセ、ね」

「ん？どうした？ちとせ？」

私が彼の名を無意識に呟くとプロデューサーが反応した。

これから撮影現場に向かっているところだ。

「いや、ただの独り言よ。ところであなたは志希のプロデューサーとは親しいよね？」

「ああ、そうだけど…？」

「彼女のスケジュール知ってるかしら？」

「全部とはいかないけど、多分だいぶガラ空きだと思うが… なんか用なのか？」

「いや、ただ聞きたかっただけね。あと、このことは私の僕ちゃんには言わないでね」

「え？白雪さんには言わない？」

「ええ、いつもあの子はあなたにスケジュール調整ということで聞くじゃない」

「ま、まあ… そうだけど…」

プロデューサーは私の言葉に少し首をかしげた。

ちなみに私のプロデューサーは私が喰種の血を引く者であることは知らない。

「だから、今回のことはうちの者に言わないように」

「… わかった」

プロデューサーはそう言うと、どこか納得しないもののこれ以上話を進めることがなかった。

あなたはそれでいいのよ。

もしあなたが私を知る世界を知ってしまったえば、あなたは危険に陥ってしまう。

少なくとも命の灯火が消されるからね。

（… 佐々木琲世。名前はそうなっているかもしれないけど、卯月た

ちの反応を見る限り、本当の名前じゃなさそうわね)

これは私の憶測なのだけど、彼には本当の名前が存在するかも。そう考えていくと彼について興味が湧き出る。

生まれた方法は違うけれど、同じ喰種の血を持つ人。

彼が彼女たちに連絡を途絶えさせたのはきつと月山家殲滅戦に関係する。

彼はまた何かを知ったのかしら？

そう考えるとまた胸の中に好奇心が生まれてくる。

今度、彼については千夜ちゃんにお願いしようかな、と思ったのだけど。

やっぱり別の者をお願いしようかな。

時には、うちの者以外に耳を傾けなければ。

千夜ちゃんは知りすぎているから、志希に聞いてみようかしら。

私は昔どこかで聞いた曲を鼻歌で歌いながら、仕事に向かった。

2章 目覚め

あんた

凜Side

佐々木からの連絡が途絶えて、半年。

気がつけば秋が終わりに近づく時期になっていた頃。

(さてと…家に帰らないと)

日が沈み、冷たい風が物寂しさを掻き立てる秋の夜。

私は今日の仕事が終わりに、事務所から出ていた。

今、外にいる私に残されたことは家に帰るだけで、秋の流行であるコートや羽織り、通りかかる人から声をかけられないようマスクをした。

私が歩いている通りはそこそこ人がいる場所なのだが、案外声をかけられる確率は少ない。

そんな人がたくさん行き来する通りで歩いていた、私。

そのまま家に帰ろうとしていた時、足を止める状況に出会った。

(…ん?)

それは人から声をかけられたのではなく、カバンに入っていた携帯が振動を立てながら、鳴り出したのだ。

一体なんだろうか?と私は携帯をカバンから取り出し画面を見ると、着信の主は未央だった。

私は電話の主を見た瞬間、思わず吐息を漏らし、携帯を耳にかざして「なに?」と少し不満そうに言った。

「やあー久しぶりだね、しぶりん!」

「久しぶりって…そこまで期間は空いてないよね?」

電話先に聞こえる未央の口から『久しぶり』と明るく言ったのだが、未央と最後に会ったの数ヶ月という長い期間ではなく、1週間程度。

「まあまあ、こっちに着いてから結構充実感があつたせいか、時間が早く感じるんだよね!」

「声の調子を聞いた感じ、仕事の方は良さそうだね」

「そうそう!!初め不安があったんだけど、慣れたおかげか結構楽しいし、ずーと元気でいられる感じだよ!!」

未央は今、仕事で海外にいる。

詳しくは聞いていないけど、どうやら舞台公演の練習らしい。

「もし電話で掛けてたら、未央に請求してたよ」

「流石にしぶりにそんなひどいことしないよ。今、こっちのネットで繋いでるから」

「あっちのWi-Fiで通話してるの?」

「そうそう!流石に無料のWi-Fiを使っているから、ログインをしないよう注意して使ってるけどね」

流石に電話で話しかけてたら、怒るけど(もし海外から電話をかけると、場所によっては30秒に250円取られる)。

「それで電話をしたのは、私の声を聞きたかった、にしては違う気がするけど?」

私がそう言うと、未央は「正解!」と指を向けたポーズが自然に思いついて浮かんでしまうほど元気の良い声が聞こえた。

「じゃあ、なに?今、私は人混みの中にいるから、あまり長く電話できないけど」

「そんなめんどくさそうな声をしないでよ」

未央はしつこく商品を売る店員のような口調で言葉を返した(例えば悪いけど)。

いつも未央が電話をしてくる時は大体場所が悪いことが多い。例えば今いる人通りが多い場所や電車の中だったり、あるいはトイレの中だったりなど、なぜか未央が電話をしてくる時に限って場所が悪い。

「それはね、私のわがままを聞いて欲しいんだよね」

「わがまま?」

「そう!海外の仕事は充実しているけど、やっぱり疲れが出るから、付き合ってほしいんだよね!」

「こっちが疲れるようなわがままはやめてね」

私はそう言うと、電話越しに聞こえるぐらいのため息をした。

「まあまあ、そんな嫌がらないですよ？今から言うわがまは私だけじゃなくて、しぶりんも興味が沸くことだよ」

「私も？」

未央の言葉に私はふと疑問に感じたのだが、とりあえず「それはなに？」と未央に内容を聞いた。

「最近、佐々木さんと話したくなっただよね」

「佐々木？」

「うん、もうそろそろ半年になるよね？」

「… ああ、そうだね」

理由は知らないけど、音信不通のまま。

試しに一度返事を送ってみたけど、まったく返事は返ってこない。

佐々木からの最後の返事は、おさらいするとこう言う返事だ。

『申し訳ございませんですが、仕事の都合でしばらく連絡ができません』

いつも佐々木は私に敬語が入った返事を送る人間じゃないのに、最後に送られた返事は業務連絡と思わせるほどの返事だった。

今思えば仕事にはかなり異様に感じるほどに期間が長い。

「それで、あんまり会わないから来月にやるクリスマス会に佐々木さんを誘わない？」

「クリスマス？」

「そう！今まではしまむーの誕生日しか招待しなかったけど、今度はクリスマス会も招待しない？」

今まで私たちは佐々木をクリスマスパーティーに招待しなかった（卯月の誕生日会と大体同じだけど）。

理由としては私たちが誘ってこなかったと言うより、佐々木から誘いを断っている。

でも去年のクリスマスの時の佐々木は私たちの誘いに妙に躊躇ったような様子だったけど。

「流石に24と25は無理があるかもしれないけど、近い日にクリスマス会をやったほうがいいかなーと思って」

「ああ、なるほどね」

去年のクリスマスは24日のイブにパーティーをすることができたが、今年は24日と25日には絶対仕事が入る可能性があるため、大きな予定は入れることはできない。

「具体的な内容は決まってるけど、とりあえず頭の片隅に置いてね」

「うん、わかった。流石に今決めてもしかたないから、未央が帰ってきたぐらいに決めたほうがいいね。いつ頃に日本帰れそう?」

「えつとね、予定だと12月5日だね」

「て言うことは、あと2週間ぐらい?」

「そうだね。しばらくこっちにいるよ」と未央が言うと、『まあ、私の2週間は結構短いけどね』と笑った。

(てなると... 私が佐々木に誘うか...)

未央は海外にしばらくいるため、こっちで準備ができるのは私ぐらい。

卯月も準備をするべきかもしれないけど、佐々木の誘いに関しては私しかできない。

しかし佐々木を誘うのは今は容易ではない。

携帯やメールなど繋がらない状態になれば、直接会うという選択肢しかなく、今のうちにやらないとクリスマス会には間に合わない。

「だったら私からあいつに誘うよ」

「え?しづりんが佐々木さんを誘うの?」

「どこにいるかわからないけど、少なくとも都内にいるのは間違いないから」

音信不通の佐々木を探し出すには難しいけど、少なくとも金木を探すよりは簡単(かもしれない)。

「わかったよ。とりあえずクリスマス会はやるというのは決まりだね」

「うん。じゃあ帰国したら、もう一回連絡をー」

私が未央と話していた時だった。

未央との電話で気にすることがなかった多くの人が行き交う通り

の中、一人の男性が私の横に通りかかった。

「っ!!」

私はその男性とすれ違った瞬間、しゃべっていた口が急に止まり、歩いていた足もぴたりと止めた。

「… どうしたの? しぶりん?」

「… 金木?」

私の前から消えてしまったあいつの感覚が、思い出したかのように私の横に現れたのだ。

私は横に通り過ぎた男性が進んだ方向に振り向いたのだが、男性は人混みの中に消えてしまった。

「え? 今、なんて言った?」

横に通りかかった男性を探していた私は気がつく、未央が何度も私に声をかけていたことに気がついた。

「… いや、なんでもない」

「なんでもない?」

「なんというか… この前の雑誌で気になっているモデルの子がちょうど横に通りすぎたみたいで」

「え!? マジ!? モデルの子って誰!?」

「ああ、その子は… えっと…」

私は嘘を言ってしまった。

私の横に通りかかった人物が、金木に似た人とは言わずに。

海外にいる未央に金木のことを言い出したら、早く帰国したいがあまり、仕事に集中できなくなるかもしれない。

「… まさか、帰ってきたの?」

今通りかかった人の特徴は黒い髪に黒いスーツ、そしてメガネの男性だ。

容姿だけ取り上げるなら街に似た人は歩いているのだけど、雰囲気も取り上げたら横に通った人物は金木であるとキツパリと言ってしまふほど、あいつに似ていた。

あいつは数年前から行方をくらましている。

もしあいつが現れたのなら、なぜ今現れたの?

(…でも、なんで佐々木だと思いつかなかっただろう?)

横に通りがかった人物のことを考えていくと、新たな疑問が生まれ
てしまった。

もし横に通りがかった人物が金木だとすれば、なぜその人物を佐々
木だと認識しなかったのか?

金木に似ている人物と言えば佐々木が挙げられるのだが、なぜ先に
佐々木ではなく、金木と判断してしまったのだろうか。

だけど、言えることはただ一つ。

先ほど私の横に通った人物は、金木の雰囲気を出す人物だったこと
だ。

ヒガンバナ色の糸

美嘉 S i d e

皆が昼休みで事務所から出ていく昼頃のこと。

昼食休みに皆が輝かしく出ていく中、アタシは事務所には出ず、一人頭を抱えていた。

(はぁ… まったく、どうすればいいの)

何を頭抱えているかと言うと、半年前に気づいてしまった志希と文香さんの仲の悪さだ。

志希と文香さんの関係は未だに改善せず、徐々に悪化し続けている。

特に二人が同じ部屋にやってきた時の緊張感はひどくて、二人の仲を知らない人でも仲の悪さに察知し、その場から離れるほどひどくなっている。

そのせいかアタシは二人の仲介役みたいな役割になりつつあり、苦労が絶えない。

アタシは二人の仲をなんとかしたいと考えているのだが、未だに解決につながる行動に移せていない。

二人の関係でアタシが苦労を混じったため息をしていたら…

「どうしたの？美嘉ちゃん？」

「あ、楓さん」

ちょうど頭上に声がして振り向くと、悩んでいたせいかわ楓さんがいつの間にか目の前に現れていた。

「何か困っているような顔をしたみたいだけど？」

「いや、最近仕事が忙しいもので…」

先ほどまで悩んでいたことを話さず、別に話題を振った、アタシ。

楓さんは最近の二人の事情を知っていると思うが、流石に志希と文香さんの話を今振るわけにはいかない。

もし誰かに話をしてしまえば、また一つ亀裂が出るんじゃないか

と、恐れていたんだ。

アタシの話を聞いた楓さんは「なるほど、お仕事なんですね」と少し納得した様子になり、アタシが座るソファアの隣に座った。

「……最近美嘉ちゃんが何かに悩んでいた様子だったので、私心配していましたよ?」

「え…… ええ、そうなんですよ…… 今やっている仕事は楽しいは楽しいですけど、楽しさではカバーできないところもあって」

「溜め込んでいては、元の子もありませんよ?もし何かあったら私だけじゃなくて、志希ちゃんや文香ちゃんにも相談してくださいね」

「あ、ありがとうございます…… あの、楓さん」

志希と文香さんに限っては今は相談しにくいんだけど、楓さんは話題を紛らわしたアタシに察したような様子は見られず、少しほっとしてしまった(安心してはいけない問題だけど)。

このまま楓さんと仕事の話をするのはいいのだけど、アタシには楓さんに話したい話題があった。

「そういえばなんですけど……」

「ん?」

「楓さんは最近、佐々木さんと会いました?」

「佐々木くん?」

「最近佐々木さんと会っている人がいなくて、楓さんはもしかして佐々木さんと会ったりしてますか?」

楓さんと言えば、何かと佐々木さんと一緒に喫茶店に行く機会が多く、意外とアタシより会っている。

それに佐々木さんからの最後の返事は実はもらっていないらしい。多分、楓さんの口から『会ってないわ』との返事が聞きそうと予想をした、アタシ。

しかし、結果は違った。

「…… ええ、この前に彼と会ったわ」

「え?」

楓さんの返事に思わず間抜けな声を出してしまった。

アタシの周りでは最近佐々木さんとは会ったことも連絡を貰った

こともない人ばかりいるのに、楓さんは佐々木さんに会ったのだ。

「会ったって…!?!」

「ええ、先週のお昼頃にコーヒーのお誘いしたら、彼は乗ってくれたわ」

凜や志希でも佐々木さんからの連絡は一切来なかったのになぜか楓さんには連絡ができ、それだけではなく会ったことに驚いた。

「そ、それで佐々木さんはどうでした?…」

「しばらく会ってなかったから、心配していたのだけど、彼は元気にしてたわ… だけど」

すると楓さんは「だけど」と言った瞬間、視線を落とした。

この瞬間、空気が一変したかのように楓さんから暗い感情を感じ取ってしまった。

「彼、結構変わったのよ」

「変わった?」

「そう、姿だけじゃなくて性格も変わったみたいで」

「か、変わったって… どのようにですか」

楓さんはどこか躊躇するように複雑な顔になり、しばらく間を空け、こう言った。

「一言に言えば… 黒くなったと言えはいいかしら」

「黒くなった?」

「ええ、姿も性格も黒に染まったかのように変わったの、彼は」

佐々木さんと言えば黒と白のツートンカラーの髪に黒シャツとスラックスのイメージがあるのだが、それ以上に真っ黒になったと言えば良いだろうか?

いや、容姿だけではなく性格も黒くなったとはどういうことなのか?

「性格も黒くなったって…?」

「…」

すると楓さんは口を閉し、沈黙が生まれた。

空気からわかることと言えば、少なくともこれ以上聞いてはいけない嫌な空気。

もしこれ以上言及すれば、聞いて後悔しそうな状況に出会うのではないかと。

状況を察したアタシは「… 佐々木さんとはどんな話をしたんですか？」と別の話題を振ることにした。

「彼から仕事のお話とか身の回りのこととか話したのだけど…」

先ほど口を閉じた楓さんは別の話題には口を開いたのだが、暗いオーラはまったくと言ってもいいほど払拭はされなかった。

「彼と話して感じたことは言う…」 なんと言うか… 別の人と話しているように思えたのよ」

「別の人？」

「ええ、話している人は彼ではないように感じたのよ…」

楓さんはそう言うのと再び口を閉じてしまい、沈黙がまた生まれてしまった。

(… 何があったの?)

もしかして仕事に関係しているのか？

それとも佐々木さんの人間関係にトラブルでも？

まさかだと思うけど、卯月に関係することか？

そう考えていたら…

「… でも、彼を探ろうとしないほうがいいと思うわ」

考えていたアタシを止めるように、口を閉じていたはずの楓さんはぽつりと口を開いた。

「え…？」とアタシは楓さんに振り向くと、楓さんは「あ、えっと…」となぜか言葉を詰まらせた。

「… か、彼には彼なりの問題があると思うから、関わるのではなくそっとしておくのがいいかもね」

「… わかりました」

アタシはこの時、ふと気づいてしまった。

楓さんは何かを隠すように話題を止めたことに気づいてしまった。

楓さんはアタシの考えたことに勘付いたのか「そろそろ、出ないと急いだ様子でソファから立ち上がった。

「… じゃ、じゃあね、美嘉ちゃん。またお話ができたらいいわ」

「ま、また…」

アタシがさよならの言葉を言う前に、楓さんはアタシの前から立ち去り、事務所から出て行ってしまった。

アタシの前から出る楓さんは一瞬、アタシから去っていく楓さんはどこか寂しそうな顔をしていた。

ただ寂しいのではなく、誰かと別れた悲しみが入った寂しさに見えた。

(…何が起きてるのよ?)

楓さんから佐々木さんのことは関わるなど言ったのだけど、アタシはむしろ気になってしまった。

まるで押すなど書かれたボタンを押したくなる心理に近い。

(…よし、行動を起こそうかな)

アタシは決意をした。

今まで触れなかった佐々木さんの件に触れることにした。

志希と文香さんのことは行動に移す勇氣はないけれど、佐々木さんのことならまだ行動に移せる。

一体佐々木さんに何があったのか?

アタシは何が起こるかわからない問題に踏み入れようとしていた。

佐々木Side

同時刻 CCG本局。

僕は本局のベランダでちょうど休憩に入っており、ある人と会話をしていた。

「それで、高槻先生のご自宅になにかありましたか?旧多さん?」

「いや、まったく手がかりとなる物は全然出ませんよ。あるのは散らかったゴミぐらいしか」

僕の隣にいるのは旧多一等捜査官。

かつてはキジマ準特等捜査官の元にいた捜査官だが、半年前のロゼヴァルト戦でキジマさんが殉職したため、僕の配下に入った。

「そうですか… まったくですか」

「ええ、それにしても勝手に家宅捜索してもいいんですか？」

「そうしないと、逃げられますので」

「まったく、社会人失格ですよ… おっと失礼」

旧多さんはそう言うのと嫌味を含んだ笑いをした。

僕は作家である高槻泉たかつき せんの捜査をしているのだが、上層部には許可を得ずに家宅捜査をしており、つい先ほど高槻泉のマネージャーである塩野に事情聴取をしていた。

なぜ作家の高槻泉を捜査しているのか？

それは彼女は喰種の疑いだけではなく、もう一つの疑いがあるからだ。

「とりあえず、捜査は慎重にやってください。彼女は社会的に影響力がある人ですから」

「ええ、わかりましたよ。未だに彼女はどこにいるか知りませんが」
だが一向に証拠が出ることなく、容疑者である高槻泉はなぜか現在の所在は不明であり、時間がかかるのは明白であった。

僕は持っていたコーヒーが残り一飲み程度になった時、その場から離れようと考えていたら…

「……それで準特等の女性関係はどうですか？」

「…女性ですか？」

「ええ、準特等関係をお持ちですよね？まあ、今は興味なしって感じしますけど」

旧多さんは「おっと失礼」と嘲笑に似た笑いをした。

「なぜその話題を挙げるのですか？」

「昨日、たまたま準特等が高垣楓とお話していた姿を見ましてね。ここから2キロちよいの喫茶店で見ましたよ」

「ええ、そうですよ。それがどうしたんですか？」

「もしかして、お付き合い……」

「…変な推測をやめてくれますか。僕は彼女とはお付き合いしていませんよ」

「おっと、これはこれは、大変失礼しました。あまり口を開きすぎる

と、不幸を糧にするクソ記者が寄ってきますよね」

旧多さんはそう言うのと笑ったが、またしてもふざけた態度が含んでいた。明らかにわざとらしい振る舞いでキジマさんの元にいた時は見せなかつた姿なのだが…？

「わかりましたよ、準特等。高垣楓との関係はお友達関係と言う感じで認識すればいいのですよね？」

「ええ、そうですよ。彼女とは友達の関係で付き合っています」

「そうなんですね。見た感じ、長い付き合いぽいですけど？」

「彼女とは僕が喰種捜査官になった時から知り合っています」

「喰種捜査官から…？」と旧多さんはなぜか納得のいかない顔を見せた。

「… なんですか？」

「いや、ずいぶん前から会っているように見えたんですが… 気のせいですかね？」

「… 楓さんとは喰種捜査官になる前には会っていませんよ？」

少なくとも、佐々木琲世としてはそれが正しい。

「それはともかく、僕が喫茶店で見かけた時、最近会っていないかったようですね」

「ええ、そうです。かなり期間を空いていましたから」

「あつちが誰もが知る人気アイドルだから、仕事で忙しかったと予測がつかますが…」

「…？」

すると旧多さんは意図的に間を空け、僕にこう聞いた。

「もしかして、準特等から避けていたりして？」

「… いえ、違います」

「本当ですか？ 346プロと提携を結んでいるので、彼女のスケジュールを好き勝手に見れそうですが…」

「… 旧多さん、引き続き高槻泉の捜査の方を進めてください」

「まったく、あなたはプライベートのお話をしたがないじゃないですか」

「ここは職場ですよ、旧多さん。もし僕とそんなお話をするなら、今回

の捜査から外しますよ?」

「まったく、わかりましたよ。準特等」

旧多さんはそう言う。「面白くない人だなあ」と愚痴を漏らしながら去っていった。

(彼女たちか…)

ふと気がつけば彼女たちと連絡を途絶えさせてから半年になるのだけど、僕は未だに返事を無視したまま。

着信数では志希ちゃんがトップであり、その次に凜ちゃんが多。

しかし、僕は彼女たちとは会うことは望まず、連絡することもまったく望んでいない。

もし今、彼女たちの誰かが僕を見た時、きっと気づいてしまう。

あなたは佐々木琲世ではない、と。

彼に関する聞き出し

346プロダクション地下駐車場。

駐車している車がまばらに止まっており換気扇の音が響く中、一ノ瀬志希は迷いなく停車している一台の車の後部席に乗り込んだ。

「やあ、久しぶりだね」

「なんだ、お前は生きていたのか」

志希が乗り込んだのは地下駐車場にある車の中で最も高いであろう漆黒の高級セダンであり、その車の運転席には黒埼ちとせの従者である白雪千夜がいた。

「いつものを出せ」と千夜が言うと、「はいはい」と志希は慣れた様子で薬品が入った小さな箱を千夜に渡した。

「はい、今回は5ヶ月分だよ」

「5ヶ月？頼んだのは3ヶ月分だろ」

「そうだよ。だけど2ヶ月分はおまけだから、その分のお金は要求しないよ」

「おまけか？おまけにしてはだいぶ赤字だろ？まさかお前がやっている仕事に問題か？」

「あたしの仕事？キミ、めずらしくあたしのことを心配しているの？」「心配などしてはいない。お前の芸能活動に関する話が今週の週刊誌に堂々と書かれていたから聞いたんだ」

「ああ、あのクソゴミ記者の記事？まあ、今のあたしってネタにしやすくないよ」

志希はそう言うと、誰かを馬鹿するかのように嘲笑った。

現在の志希はほとんどの仕事を断っており、今や全盛期と比べ9割ぐらい仕事を減らしてしまっている。

「そのクソ記者の名前は忘れたけど…いや、あれは覚える価値もない人間か。なんかその人間が書いた記事で一番笑った記事があったな。その記事の内容は今のあたしは今後R指定の作品に出演するんじゃないかと言う変な記事をだった気がする。ほんと、薬物をやっているんじゃないかってぐらい妄想に取り憑かれてる記事だと思ったよ」

「まったく哀れなだ。お前はそれを対応したか？」

「対応？いや、まったく。対応する価値もないよ。そんなことを気にしていたら、キリはないよ」

志希は「いやいや、やることないから」と馬鹿にするように鼻で笑った。

現在、志希の芸能活動の低下については公式に明確な理由を世間には明かしておらず、情報が行き交うネット内では今やデマや噂ごとが飛び交い放題。

「あたしの仕事態度にプロデューサーから結構言われてるよ。このままじゃ契約を切られるぞと脅しに似た口調だね。まあ、あたしはほとんど無視してるけど」

「お前らしいな」千夜はまったく興味がない返事をし、後部席に座る志希の顔を見ずに小切手を渡した。

「今後、お前ははどうしていくんだ？事務所を抜けてソロ活動か？それとも化学者になるのか？」

「ご察してください、と言う感じかな。まあ、キミだったらあたしのこの状況からしてわかるよね？」

「…これ以上聞いてもいい話が聞けそうもないな」

千夜はめんどくさそうにため息をし、話を切り上げた。

千夜が「お嬢様がくるからさっさと車から出る」と言おうとした時、

「あ。そうそう」と志希は別の話題を取り上げた。

「そういうえば、キミは最近佐々木琲世を見た？」

「ヤツか？」

「そう、ここ最近彼に連絡しても、まったく来ないんだよね。キミは

最近の彼のことを知ってる？」

「…知らないな」

千夜は曖昧な間を空け、そう言った。

「知らないかあ。なんか彼は仕事が忙しくて連絡してこないみたいだけど、仕事を言い訳に逃げているように見えるんだよね。まるで浮気相手を見つけた旦那さんみたいに」

「さあな。私はヤツのことなど知る気にならん」

「おや？この前は興味を持っていたはずですが？白雪千夜さん？」
「うるさい。私は最初から佐々木琲世など興味はない。あと顔を近づけるな」

運転席の後ろから顔を覗かせる志希を小蠅を払うように手であつた。

「そうなんだねえ…。まあキミは知っているかもしれないけど、この前に彼は出版社に訪ねたみたい」

「出版社…？」

「そう、彼が入っていく姿は直接見てはいないけど確か翔英社しょうえいしやだった気がする」

「なんだ？今度は月山グループの次は翔英社を潰すのか？」

「いや、今回は違う」猫のように何も無い天井を見続けながらつぶやいた、志希。

「…なぜキツパリと言える？」

「キツパリと言うか、これはあたしの推測なんだけど、あれは翔英社自体を疑ってなんかいないよ。おそらく翔英社に属しているある人を疑っているよ」

「はあ？」

「誰なのかは知らないけど、その容疑者の担当者を取っ捕まえて、聞き出している感じかな？」

「担当者を捕まえたって… お前はどこで知ったんだ？」

「情報の出所は教えないけど、翔英社で連絡が取れない担当者がいるみたい」

スラスラと話した志希だが、「まあ、でも」とお手挙げに似た様子のため息をし。

「と言つても、これはあたしの推測しかないから、証拠と真実はないよ」

「推測か…」

「ん？なんか気になったような返事したよね？」

「いや、お前の推測に興味を抱いていない。で、どうするんだ？」
「どうするって、何を？」

「佐々木琲世だ。半年も会うことも連絡することもできてない中、お前は何か行動をするのか？」

「ああ、それね」と志希はにやりと口角を上げた。

「今度、直接彼に会うことにするよ」

「会う？お前は佐々木琲世がどこにいるか知っているのか？」

「うん、探せば見つかるよ。それに、キミも彼に会おうとしたら会えるでしょ？」

志希は目を細めて笑ったが、千夜は返事をせずに沈黙を保った。

「まあ、そんな感じであたしは自分で探偵ごっこをしているかな。では、またね〜♪」

志希はそう言うのと車から出て、地下駐車場から去っていった。

「…まったく、あの女は」千夜は苛立ちがこもったため息をし、車内にある時計に目を向けた。

現在の時刻は主君であるちとせが来るあと5分頃。

そろそろ車を地下駐車場から346プロダクション玄関口前の路肩に移動する時間だ。

千夜はシートベルトをつけると、一人こうつぶやいた。

「探偵ごっこ…お前がやっていることは探偵ごっこではなく、自ら死に行くようなことだ」

千夜はそう言うと、志希からもらった箱をグローブボックスに入れ、車のエンジンをかけ、地下駐車場から出た。

千夜と志希が会話を始める10分前の出来事。

それは同じ346プロダクションの建物の中にある346カフェのこと。

「……ところで卯月」

「はい？」

「…ササキハイセってご存知かしら？」

「え？」

紅の瞳でじつくりと島村卯月を見る、黒埼ちとせ。
こちらにも佐々木琲世に関する会話が始まるうとしていた。

自分で歩け

それは346プロダクション内にある346カフェで一休みをしていた時だった。

私・島村卯月は午前中の雑誌の撮影のお仕事が終わわり、次の仕事までに346カフェで休んでいました。

今の時間帯はお昼休みが終わわり、私の周りには人の姿がなく、ベランダ席に座っていた私はまだ飲み慣れていないブラックコーヒーを飲んでいました。

まだ私の舌はコーヒーの苦さに未だに慣れてなくて、一飲みするたびに苦味が口に広がり、しばらく飲めなくなる。

その行動を繰り返していき、コーヒーを飲み切るのが、私がコーヒーを飲む時のルーティーンだ。

苦さで再びコーヒーに口をすることなく、しばらくコーヒーを睨めっこするようにカップを持っていると…

「どうも、卯月」

「っー」

急に声をかけられて、少し肩が上がってしまった。

誰だろうかと横に振り向くと、外国人と思わせる金色の長髪に真っ赤に染まる赤い瞳の女性が風のようにすっと現れました。

その人の名は黒埼ちとせさん。

私と同じ346プロダクションに所属するアイドルです。

ちとせさんはハツと驚いた私に『おっと、失礼』と片手を少し口にかざし、ふふつと笑った。

「あ、ど、どうも、ちとせさん」

「一人でゆっくり時を過ごしている中、急に声をかけちゃってごめんね」

「い、いえ…大丈夫ですよ」

そう言った私だけど、危うく持っていたコーヒーを手放すところだったことは、ちとせさんには内緒。

それからちとせさんは『隣に座っていいかしら?』と私に尋ね『い

いですよ』と私が了承すると、私と対面する感じに席に座った。

「それにしても周りには誰もいないわね」

「ええ、ちょうどこの時間帯は人は少ないんですよ」

今、過ごしている時間帯は346カフェは混み合っており、今は私たちだけが店内に過ごしている状態。

いつもなら、片手で数えられるぐらいの人がいるのだけど、なぜか人の姿は見当たらない。

「そうなんだね。私、あまりここに来ないからわからなかったわ」

「あれ？ちとせさんは346カフェには訪れないのですか？」

「ええ、いつも私の僕ちゃんしもけんが迎えに来てくるから、あまりここで長居はできないのよ」

ちとせは『あの子はきつちりとしすぎのよ』と困った様子でため息をした。

「僕さん？もしかしてあの黒髪の運転手さんですか？」

「ええ、運転手と言うか…なんでもこなしてくれる執事わね」

「なんでもですか…？」と少し頭を傾げた、私。

ちとせさんの執事の名前は確か”千夜さん”と言う名前なのはわかるが、知っていることといえば名前ぐらいしかなく、具体的に何をしている人なのかわからない。

「ええ、あの子は家事や料理、私のスケジュール管理だったり、金銭管理もきつちりとやってくれるのよ。あと年齢は確か…卯月ちゃんと同じよ」

「私と同じ歳ですか!？」

千夜さんのことを聞いた私は思わず席をガタツと音を立ててしまった。

執事と聞くと初老の男性を思い浮かぶのだけど、千夜さんは私とは歳が変わらない女性であり(私の年齢は22)、しかも大きめの高級車を運転し、家事もこなすなんてすごすぎる…

「ええ、意外と思ったでしょ？千夜ちゃんのことを話すと、ほとんどの人が驚くのよ」

「お、驚きますよ！私と歳が変わらないのに、完璧にこなすなんて驚く

のは当然です。千夜さんは何か執事の学校とかで学んだのですか？」
「学び・・・と言うか、私はあの子に対して何も口を出さない放任主義を取っていたから、あの子はどこで学んだかは把握してはいないわ。ただ言えることは、あの子は自分がやりたいことはやってきたんじゃないかと思うわ」

「自分がやりたいことですか・・・」

「ええ、あの子が執事を勤めるのは仕事ではなく好きでやっているのよ。それに車が好きみたいだから、私はあの子が運転する車にいつも乗ってあげているのよ」

「車がお好きですか・・・」
と言うかちとせさんが乗る車って結構高い車っぽいですが？」

「うん、私が乗る車は高いちゃ、高い。確か今乗っている車の価格は・・・新車価格で約2000万円ぐらいかしら？」

「2、2000万円っ!？」

ちとせさんの言葉に私は思わず声が上ずる。

少なくとも車についてわからない私でも驚愕してしまうほどの値段だ。

「私が乗るクラスは2000万円台は当たり前なのだけどね。なんなら上はいくらでもあるわ」

「そ、そうなんですネ・・・」と圧巻され、力が抜け切ったたのような返事をしてしまった、私。

ちとせさんが乗る車は見かけたことがあるが、それ以上にいい車があると聞くと、いったい何が違うのかわからない。

「ち、ちとせさんはそれ以上の車に乗りたいと思いますか？」

「それ以上の車？んー、私はいくつもの素晴らしい車を試乗はしたことはあるけど・・・ないかな」

「ないのですか？」

「ええ、私は車のことはそんなに気にしないから、車の選別は全部千夜ちゃんに任しているわ。あの子は車のことについて結構知っているから、適当に高い車を選ぶよりはマシかな」

「そ、そうなんですネえ・・・」

車のことはあまり詳しくない私は失礼がないよう相槌を打ったのだけど、ちとせさんは私の様子を気にするとなく話を進めた。

「最近ってロールスロイスやベントレーとかをSNSで自慢げに投稿する人たちがいるらしいけど、私は彼らの行動には理解する気ないかな。別に本当に好きな車を映すのはいいいよ？彼らが乗る車はいい車のは間違いないけど、誰かに見せびらかしてやる見栄っ張りの行動は愚者がやる行動とだと思っわ」

「ロールスロイス？ベントレー？」と話についていけない私は曖昧な口調で呟くと、ちとせさんは「簡単に言えば、英国のお高い車メーカーよ」と把握していない私の姿に微笑んだ。

車のことは正直あまり知らないため私は『そろそろ話を変えませんか？』と聞こうとしたら…

「……人も同じく言えないかしら、卯月？」

ちとせさんがそう言うのと、突然空気が変わり、私は無意識に口を閉じてしまった。

「ただ栄えを求めて付き合うだなんて、それ以上につまらないことはない。そう思わない？」

「付き合う…？」

車のお話の時心に響くことなくただ驚いていた私だけど、人付き合いの話になった途端、ぼんやりと聞いていた私は目覚めたかのようにハツ反応してしまった。

はつきりとしなくて、なぜか引つかかる。

私がそう思っていたら、ちとせさんが『ところで、卯月』と話すと、嫌な予感を察してしまった。

「… ササキハイセってご存知かしら？」

「… え？」

ちとせさんの口から彼の名が出た瞬間、私はあっけない声で呟いてしまった。

(え…？な、なんで、ちとせさんは知っているの…？)

状況が把握できず。頭の中が混乱してしまった、私。

事務所内で佐々木さんのことを知る人は限られているのだけど、ち

とせさんは私を知る限り佐々木さんのことは知らないはず。

なのに、なぜちとせさんは彼の名を知っているの？

誰かから佐々木さんのことを知ったと思うかもしれないけど、ちとせさんの口調はただ名前を知っていると断言するには知り過ぎていると言えればいい。

もしかしたら同名の別人のことを取り上げたのではと頭に浮かんだが、その可能性が一瞬にして消え去ってしまった。

ちとせさんは間違いなく私を知る人物のことを聞いている。

頭が真っ白になり、しばらく口を閉じた私を見たちとせさんは「急に驚かせてごめんね、卯月」と私の手をそつと触れた。

「卯月は、なぜ私がササキハイセと言う名を知っているか、混乱しているよね？」

「…はい」

私は恐れを抱きながら、まるで尋問される容疑者のように小さく頷いた。

「どうして私が彼の名を知っているかは詳しくは言えないのだけど、私は前から彼のことを調べているの」

「調べている…?」

「そう、調べていくうちにいくつもの壁にぶつかって、調べたいことが進めないのよ」

ちとせさんは『彼は結構難しい人なのよね』とやれやれとため息をした。

「それで彼の知り合いを調べていくうちに、私はふと思いついたのよ。うちの事務所に彼の知り合いがいるじゃないかってね。それでおそらく彼とかなり親しいはずの卯月にいくつか聞きたいことがあるの」

「…いくつですか？」

「ええ、本当はたくさん時間があればいいのだけど、生憎、私の僕ちやんが地下駐車場で待機しているから、長くは聞けないわ」

たくさんって、どういうこと？

佐々木さんに関する事だけでもたくさんある？

混乱していた私はこのままでは黙っていられないと、ちとせさんに

あることを聞くことにした。

「…その前に、ちとせさんにお聞きしたいことがあるんですが」

「ええ、いいわ。答えられる範囲なら」

「… 危害は加えませんか？」

「危害、ね」

ちとせさんはそう言うのと口を閉し、視線を落とした。

私たちの間にしばらく沈黙が漂い、私はその沈黙にじっといられずに緊張してしまっていた。

私はちとせさんを味方だと思っていたのに、なぜか味方ではないのでは？と考えてしまう。

ちとせさんは何を知りたいの？

佐々木さんの名を知り、私に彼のことを聞こうとする。

ちとせさんを本当に味方だと信じてても良いの？

そう思い巡らしていると、沈黙を保っていたちとせさんはゆっくりと口を開いた。

「私だったら… 危害は加えないわ」

「私だったら…？」とつぶやくように言った、私。

「少なくとも今は卯月に危害を加える者はいないわ」

「いない…？」

私はそう呟くと、ちとせさん『そう、今のところはね』と周りを見渡してと言わんばかりに人差し指をゆっくり回した。

今、私の周りに人がいないのはちとせさんが来る前から知っていたのだけど、なぜか人がいないことが意図的にやっているのではないかと考えてしまった。

結局、ちとせさんは私の味方だと思えばいいの？

そう思いたい気持ちはあるが、心の中にある疑いが妙に減ってくれない。

疑いが『油断してはいけない』と訴えかけるように。

「では、私の番ね」とちとせさんは私にふふつと笑みを見せた。

「まず一つ目。最近、彼と会った？」

「… 会っていませんよ。佐々木さんはお仕事の関係でしばらく連絡

はできないと」

「仕事ね。本当に仕事で連絡できないのかしら？」

「え？」

まるで状況を把握しているかのように話した、ちとせさん。

私はふいに見抜かれてしまったかのように目を剥いてしまった。

「彼は確か喰種捜査官で忙しい時期に入っているかもしれないけど・・・ 仕事はあくまで表上の理由に見えるわ」

「表上の・・・？」

「ええ、これは私の考えにすぎないことだけど、彼は別の理由を言つて何かから避けるように感じるわ。本当の理由は知らないけど、少なくとも卯月が関係しているのは間違いないんじゃない？」

「・・・」

私は思わず黙ってしまった。

信じたくはないけど、私の心情を見抜いているようで怖くて。

私の様子に察したのか、ちとせさんは『ところで・・・』と別の話題に移った。

「最近、彼と連絡したのいつ？」

「・・・ 約半年ぐらいですね」

「彼としばらく連絡してないの？」

「ええ・・・ 迷惑をかけるのではないかと・・・」と躊躇した感じに話すと・・・

「なら、連絡したら？」

またしてもちとせさんは言葉を遮るように口を開いた。

「れ、連絡ですか・・・？」

「ええ、そうよ。だったら、突然電話をかけた方がいいんじゃない？ したら彼は出てくれるかも」

「佐々木さんに迷惑じゃ・・・」と恐れを抱いた口調で話していたら・・・

「それはあなたの思い込みよ、卯月」

「っ！」

ちとせさんの言葉を聞いた瞬間、曖昧に動かしていた口が閉まってしまった。

「あまりきつく言うつもりはないけど、何もせずに過ごすことは罪の行為よ。『相手から来るかもしれないから、待つ』とか、『どうせ嫌われるかもしれないから何もしない』と言う理由で何も動かなかつたら、行動を起こして失敗するよりも後悔が来る。その後悔はいくら悔やんでも、死を迎えるまでまとわりつく傷となるわ」

ちとせさんは怒鳴るように声を大きくしたのではなく、先ほど変わらぬ穏やかな口調で話しているのだが、ちとせさんの周りに漂う空気は怒りに似ていた。

「いい、卯月？もし卯月が不老不死を持つ者だったら待つても良いけど、あなたは普通の人間でしょ？人間は約80年ほどしか生きられないのよ。100年も生きるといふ話もあるけど、大体の人間は80年じゃない？80年と言う短い時間の中、その思い込みは無駄なのよ」先ほどよりも少し早口に話し、まっすぐと私の目をみる、ちとせさん。

その話し方はどこか情が籠もった話し方で、『人間』『生きる』を強調するように話していた。

まるで余命を言い渡された人のように。

そしてちとせさんは何も言わず、ただまっすぐと私の目を見つめた。

ちとせさんの“赤い瞳”に飲み込まれるんじゃないかぐらい、私の目を見る。

しばらく沈黙が流れていると「…少し、熱が入っちゃたわ」と自嘲するように笑った、ちとせさん。

「ほら、凜や夏樹たちが歌ったあの曲を思い出してごらん？」待たなくても手に入らないわよ」

「…ええ、そうですね」

そう言うと私は自然と笑みを見せていた。

ふと気がつく、私の心に恐れというものが和らいでいた。

詳しい理由はわからないけど、先ほどの話を聞いたかもしれない。

「それで次の質問なんだけど…いや、もう時間か」

すると、ちとせさんは自分の腕に巻いていた小さな時計に視線を向

け「話していたら、あつという間に時間が過ぎちやったわね」と席から立ち上がった。

「そういえば、卯月は私の連絡先を知らなかったよね？」

「ええ、そうですね。」

私とちとせさんは別に仲悪くはないのだけど、今思えば私はちとせさんの連絡先は知らなかった。

ちとせさんは「よかったら。」とテーブルにあった紙ナプキンを取り出し、11桁の番号をボールペンで書き、私に渡した。

「あれ？メールアドレスじゃないのですか？」

「私、メールでやるの好きじゃないの。本当の感情が感じられないから。あと、もし私に連絡する時、私の僕ちゃんには連絡しないでね」

「え？どうしてですか？」

「たまには、”こういうった関係”が欲しいからね」

「こういうった関係…？」

私が意味を尋ねようとしたら『またね、卯月』とちとせさんは私の前から去ってしまった。

動きは普通の速さなのに、私は立ち去るちとせさんに聞くことができなかった。

(あ…： コーヒー)

気がつくともコーヒーの存在感を忘れていた、私。

コーヒーをぐいっと飲むと、暖かさはなく、冷えきってしまった。

冷えきったコーヒーは苦さよりも、暖かさを失った冷たさが先に感じる。

冷えたコーヒーを飲むのが良くない理由を今、知った気がした。

(佐々木さんに連絡…：)

ちとせさんから連絡するよう言われたのだけど、果たして佐々木さんは返事を送ってくれるだろうか？

何度も佐々木さんに連絡している志希さんや凜ちゃんでも未だに連絡が来ないと聞いた。

そんな状況で佐々木さんは私に返事を出してくれるだろうか？

私はスマホを開き、佐々木さんに返事を出すことにした。

流石に長文で送る気力はなかったため、短めな挨拶を送ることにした。

『こんにちは、佐々木さん』と。

(さてと…しばらくしないと返信がこないかも…)

佐々木さんに返事を出した私は今日中に返信が来るのではないだろうとスマホをカバンにしまっておうとしたら…

(…ん?)

すると、手に持っていたスマホから一瞬振動が現れた。

振動の感じ、誰かの返信を受け取ったみたい。

(…まさか)

送った人が誰なのか頭に浮かんでしまった私はスマホの画面を見たら、頭に浮かんだ人から返事がきたんだ。

『久しぶり、卯月ちゃん』

佐々木さんから返事だ。

私の周りでは誰も佐々木さんからの返信を受け取っていない人ばかりなのに、私だけ返信が来たのだ。

同時刻・喰種対策局

自分のデスクに座っていた僕はつい先程ある人に返信をした。

携帯をポケットにしまおうとしたら、「誰からですか？準特等」と旧多さんが顔を覗かせるように携帯を見ようとした。

「…いえ、なんでもありません」

「そのご様子だと…また女ですかね」

「…ええ、そうです」

開き直った様子で答えた、僕。

旧多さんは僕が楓さんと知り合っていると知って以降、なぜか僕の女性関係に興味を示している。

「誰ですか？また高垣楓ですか？それとも出会い系サイトで出会った添加物を大量に摂取したかのようなブス女ですか？」

「少なくとも、旧多さんがおっしやった人ではありせん」

「おや？なんか怒りの感情がかすかに出たような？」

確かに自分の口調が苛立った気がした。

少なくとも楓さんの時には見せない行動。

「それで、誰ですか？さつき、連絡を送った人は？少なくともCCGの者ではないことはわかってますよ？」

「旧多さんは取調室にいらっしやる塩野さんの元に行ってください」

さらっと旧多さんの言葉を遮った、僕。

旧多さんは『また別の話題に逃げた』と馬鹿にするように嘲笑した。

塩野さんは高槻泉たかつきせんのマネージャーであり、高槻泉が喰種である証言が出るまで取調室に閉じ込めている。

「しばらく放置しているみたいなので、とりあえずあの人にカツ丼でも渡しときますか？机は準特等が壊しましたが？」

「ええ、彼はおそらく空腹だと思しますのでお願いします。あと別に机がなくても食べられますしね」

「ひどいヒトですねえ、準特等は」

旧多さんは出前をするために携帯を取り出し、そのまま取調室に向かった。

(… 卯月ちゃん)

旧多さんの姿がいなくなったことを確認した後、少しため息をついてしまった、僕。

彼女から連絡が来た時、僕は驚きは隠せなかった。

彼女から返事をもらうのは半年ぶりで、一度も連絡はしてこなかった。

今、どうして連絡したのかはわからないが、僕はまだ彼女に会う気にはなれない。

彼女が今の僕の姿を見たら、どんな反応を示すのか考えたくはない。

僕はそう考えると、机に置いてあった自分の携帯をカバンの奥底にしまった。

突然現れる

346 プロダクション・連絡廊下

私・渋谷凜は難しい顔をしながら、廊下にあった長椅子のソファ―に座っていた。

難しい顔をしていた理由はこれからやる仕事のことでもなく、仕事とは関係のない私ごとではない。

それは最近の佐々木の姿がわからないのだ。

このことを頭の中で浮かび上がったのは今日で何度目だろうか？
と言うぐらいに、頭から離れられず、こうして待機している間にまた
思い出してしまう。

(まったく... なんであいつは会おうとしないの?)

そう思った私はソファ―に小指で何度も小さく叩き、苛立ちのこもったため息をした。

私は何度も佐々木に連絡をしているのだが、スマホの電源を消しているのではないか？と思ってしまう程全く返事はしてくれない。

今の佐々木の態度はまるで私の前に突然現れ、そして突然消えてしまった金木のようなだ。

おそらくあいつはまた何か考えている。

少なくとも絶対に良いことではない。

(...この前、街で見かけた人が、佐々木だったりして?)

イライラした頭の中で、以前私が街の中で偶然横に通り過ぎた人物を思い出した。

身長はあいつと同じだが、容姿は違う気がする。

佐々木は黒と白のツートンカラーをした髪で白いコートを着ていたのだが、街で見かけた人は真っ黒な髪に丸眼鏡に黒いコートをして
いた。

それに顔は一瞬しか見てなかったのだけど、佐々木とは思えないほどの暗い雰囲気を出していた。

あの顔は仕事で精根尽きたような顔だと覚えている。

(喰種対策局にいる佐々木の知り合いに聞くのもありだけど...)

そう思った私だけど、私には佐々木以外に知り合っている捜査官などいない。

それに私は一般人ではなく有名人であるため、変に聞いてしまえば怪しまれる可能性があり、佐々木の居場所を聞き出すのは容易ではないのが目に見えている。

これじゃ何もできずにお手上げ状態じゃないかと私は再び疲れ切ったため息をしようとした、そのときだった。

「…っ、…っ、…っ」

「……っ！」

すると誰かが何かぶつぶつと呟きながら私の横を通り過ぎた瞬間、私の頭に張り付いていた苛立ちがすつと消え、冷静さと同時に少し恐怖感が現れた。

「…えっ」

私は通り過ぎた人が向かった方向に振り向くと、廊下で私の前を通り過ぎたのは文香しかいなかった。

黒髪のロングヘアに青いストールを持った女性で、年は佐々木と同じ人だ。

私は通り過ぎた文香をしつかり見ると、あることに気がついてしまった。

(あれ…？文香ってこんな怖い人だっけ…？)

文香は前から暗くて嫌な空気を出していたのに(理由はわからないけど、少なくとも金木がいなくなってから始まった気がする)、今私の横に通り過ぎた文香からピリピリとした空気を感じた。

まるでほんの少し触れると爆発をしてしまうのではないかというぐらいに恐ろしい空気を出していた。

私が文香を見るのは約半年ぶり。

文香とは仕事の関係上会う機会がなかったため、直接見るのは本当に久しぶりだ。

それなのに、前よりもだいぶ変わっている気がする。

いや、悪化しているという言葉の方が似合っている。

あの空気は”誰か”に攻撃するんじゃないかぐらい危ない様子

だった。

私は文香のことを静かに恐ろしく感じていると、ポケットにあったスマホが鳴った。

「あれ…：雨？」

一体なんだろうかとスマホを取り出して画面を見ると、雨雲注意という通知が来ていた。

今日の天気予報では雨の予報はなく晴れと聞いたのだが、今では青く塗られた雲が私がいる東京都内に近づいていた。

今日やるべきことを終え、喰種対策局から一人退局した、僕・佐々木琲世。

いつもなら僕とコンビを組んでいる旧多さんがしつこく付き纏うのだが（ほとんどが僕が嫌がる飲み会の誘い）、今日は退局してからなぜか彼の姿がなかった。

（鉢川班からの連絡はなし…：か）

今日の仕事で一番の出来事は流島の件だった。

アオギリの樹のアジトとなっている東京湾に浮かぶ島・流島に先行隊として送った鉢川班が連絡を途絶えたらしい。

鉢川班にはかつて共にした六月くんがいるのだが、彼の行方は他に参加した捜査官も同様わからない模様。

（…：クインクス、か）

半年前まではクインクスの子たちと帰っていったのだが、今の僕は準特等に昇格した同時にクインクスから離れ、一人帰る日々を過ごしている。

寂しいのではと誰かに言われても、僕はその人の声など聞く気はない。

僕は一人で過ごすのは慣れている。

”彼”とは違って。

「…：？」

僕はただ自分が住む家へと向かっていると、音を立てずにぴしゃりとわずかな滴を肌を感じた。

「…雨、か」

空を見上げると、僅かに感じていた滴がだんだんと降り始めてきた。

今日の天気予報では雨は降らないと聞いたのだが、予報とは違いまあまあ強い雨が降り始めた。

おそらく通り雨だろう？

（… あそこに入ろう）

ちようど歩いていた先には雨避けにぴったりな高架下があったため、突然降り出した雨から避けるように高架下を通ることにした。

高架下に入ると、雨雲で暗くなった外とは違い人気はなく、僅かに白く光る電球が不定期に電気が途絶え、かすかに残る暗さに不気味さがあった。

大抵こういった場所は喰種が現れることが多い場所であるが、仮に喰種が現れたりしても、僕一人で対処できるため対して苦戦をすることはない。

誰もいないを高架下で恐れることなく一人で進んでいると…

「あなたが佐々木琲世ですか」

すると誰かが僕の名を言い、僕はピタツと足を止めた。

振り向くと、ちようど僕が入ってきた高架橋の入り口に人が立っていた。

その人物は誰かの葬式に行くのかと言わんばかりの黒いスーツに、ただ細い線が目元に二つに空いている顔面を隠す白い仮面。

そして手には色に深みのある黒さを持って閉じた傘を持っていた。

声は女性の声で、髪はショートカットの黒髪に、身長は約160cmぐらいの人物だ。

「ええ、そうですが。何かご用ですか」と聞くと「ただ、確認をしただけですよ」と彼女は丁寧に言葉を返した。

「確認ですか」

僕は彼女の行動にふと疑問を感じた。

普通なら聞き流してもいいかもしれないが、ただ確認をするにしては奇妙に感じるほどの冷静な様子だった。

(…喰種?)

僕は彼女を見た瞬間、ふと考えてしまった。

それは彼女から喰種のような匂いがしたからだ。

血の匂いはしなくても、喰種特有の匂いがかすかにする。

しかし雨のせいか喰種と言い切るには難しく、容易に判断することができない。

「失礼ですが、なぜ僕の名前を知っているのですか？」

「理由は簡単です。あなたは有名人だからです」

単調に話した彼女の言葉にわずかに眉をひそめた、僕。

彼女は綺麗に磨かれた黒革靴をカツン、カツンと音を立てながら、ゆっくりと僕に近づいた。

「有名人ですか、場所によりますが、少なくとも人間の中ではなさそうですね」

「人間の中? いえ、喰種だけではなくとも含みますよ。ごくわずかですが」

「どうやら彼女は喰種の話をしていることを前提に知っているらしい。」

試しに彼女にある質問をすることにした。

「一つお聞きしたいことがあります。あなたは喰種ですか?」

「唐突なお質問ですね」と彼女は一步一步とゆっくり僕の周りを歩いた。

「そういった質問をした経緯をあなたにお聞きしたいのですが、質問を質問で返すのは無礼なのでお答えします」

僕の周りをゆっくりと歩いていた彼女は艶のある黒い革靴をかつんと足を止めた。

「私は喰種ではありません」

「喰種ではない?」

「はい。そうです」彼女は何も特色なくただ、そう言った。

僕の前に立っている彼女は喰種ではないかと疑われているにも関

わらず、動じることなく非常に冷静だった。

通常の喰種は怖がるか、感情に任せて攻撃しにくる、というパターンが多いのだが、彼女は例外に分類している。

こんなに冷静に敬語で話し、攻撃される可能性があるのに僕の横にくるなんて、喰種と判断するどころか異質な人間と捉えてしまう。

僕はさらに彼女に聞こうとした時、彼女は先に口を開いた。

「こう言った人通りの少ない場所では喰種にとって襲いやすい場所でしょう。しかしそれと同時に、ここは喰種にとっては危険な場所ですよね」

「…なぜそう言えるのですか？」

「ええ、理由をお伝えしますと、ここはよく喰種捜査官がマークしている場所。この区の捜査官が重点に置いている場所であるため、喰種は近づきたがらないからでしょう。そのせいかここでの喰種に関する事件は起きていませんよね。少なくとも5年ほど前までの時間が最後。強いていうならば、人間同時のつまらない争いがよく起きる。そうですよね、”佐々木準特等捜査官”」

「……」

僕は自分の名を聞いた瞬間、目を見開いてしまった。

明らかに僕のことを知っているような様子だった。

「佐々木準特等は以前、クインクスを取り仕切っていたにも関わらず、なぜかあなたはお辞めになった。一体なぜでしょうか？おそらく何か”目的”をお持ちになったりして？」

すらすらと僕の情報を話す、白い仮面の彼女。

CCG内での情報は一般的に公開されず、他の政府機関よりは情報の取り扱いは厳しいのだが、彼女はあまりにも知りすぎている。

「…なぜそこまでご存知でしょうか？」

「すぐとは言いませんが、いずれわかります」

「いずれ？」と僕が呟いた時、気がつくや彼女が僕の横にはおらず、数十メートル先の高架橋の出口に立っており、いつの間にか彼女が持っていた閉じていたはずの傘が開いていた。

「近いうちに、またあなたの前に現れます」

「… またですか？」

「ええ、どんな形でまたお会いするかはわかりませんが、またお会いしましょう」と彼女は雨が降る街の中に消え去った。

彼女が姿を消すと、僕だけとなった高架橋下は雨音しか聞こえなくなった。

そして何十秒か経つと、先程の状況を忘れさせるかのように何人かの人が高架下に入り、高架下は普通に人が行き交う通りへと変わり、通り雨が止んだ。

ふと思い出すと、彼女からは喰種の匂いがしなかったことに気がついた。

最初は彼女は喰種なのか人間なのかわからなかったが、彼女が僕の横に立った時、人間の匂いが強くなった。

あれは一体なんだったんだろうか？

もしかして彼女は喰種の中で特殊な分類に入る者なのか？

それとも、ただの思い違いなのか？

突然現れた謎がある彼女と出会ったことを反芻していた僕は自分が住んでいる住居に戻った。

謎の人物に出会った翌日のこと。

喰種対策局に登庁した僕・佐々木琲世は自分の机に座った途端、あの人物が早速顔を出した。

「おはようございます、佐々木準特等♪」

「どうも、旧多さん」

相変わらず嘲笑じみた様子をする、旧多さん。

僕は彼のそのような態度に気にすることなく、冷酷に対応する。

「今日は気持ちの良い朝じゃないですか♪」

「ええ、そうですね。そういえば、昨日は珍しかったですね」

「昨日ですか…？何がですか？」

旧多さんのどうでもいい雑談が始まる前に、僕は早速昨日のことを話すことにした。

「あなたはいつも僕に粘り強く張り付き、飲み会に誘うのですが、昨日は珍しくいませんでしたよね？」

「ああ、そうですね」と旧多さんは思い出した仕草を見せた。

「昨日は”すぐに”帰りましたよ。お家に」

「すぐに、ですか…？」

旧多さんは不自然さがわずかに含み、あつさりど答えた。

「ええ、僕も人間ですからね。時は飽きることもありますよ。もしかして、今日は一緒に飲みます？」

「いや、結構です」とすぐに答えた、僕。

彼が普通に家に帰ることに妙に不審に感じてしまった。

彼には少し疑問はあるものの、結局僕は彼には聞かなかつた。

「それで準特等もすぐに帰りましたか？」

「…ええ、そうですね。特にやることがなかったの」

「そうですね。今僕らは待つだけですもんね。変に捜査しても何も出ませんし」

僕たちがやっている捜査は高槻泉が喰種の疑惑があるため捜査をしているが、現状やるべきことは高槻泉を見つけ出すことと、彼女の

マネージャーである塩野さんが彼女が喰種である証言が出るまで待っている状態だ。

高槻泉の所在については塩野さん曰くどこにいるかわからないと言っているため、彼女の家に捜査官を待機させ、あとは姿を現すまで待つしかない。

「準特等は家に帰ったら、何をするんですか？」

「読書ですよ。前にも同じこと言いませんでした？」

「そうですね？」と明らかにわかっていて聞いたような様子をした、旧多さん。

僕は彼には昨日出会った人物のことについては話さないことにした。

突然、僕の前から現れた人物のことを旧多さんに言っても、彼女が喰種であることは確証がなく、変に混乱させるだけだ。

そう考えていると『ああ、そういうえば、準特等』と旧多さんは何か思い出した仕草を見せた。

「なんででしょうか？雑談は結構です」

「雑談じゃなくて、つい先ほど高槻泉が姿を現したようです」

「姿を現した？」

「はい。自宅に戻ったことで、自宅前の張り付いていた捜査官から情報を得ました」

僕は旧多さんの言葉に思わず疑ってしまった。

捜査をしてからずっと姿を現していなかった高槻泉が突如現れたのだ。

「わかりました、行きましょう」と僕は机から立ち上がった瞬間、『あー僕は行けませんね』と旧多さんはぼそつと言った。

「いけない？なぜですか？」

「僕は“他の用事”があるので、準特等は先に行ってください」

「他の用事ですか？…？今じゃないとダメですか？」

「ええ、そうですねですよ。昨日提出した書類に不備があつて、結構時間がかかるとですよ」

昨日提出した書類はほとんど旧多さんに任していたため詳しくは

わからないが(簡単に言えば現在の捜査の進展についての事)、旧多さんは書類整理が得意と聞いているため、とりあえず任せたい方いいだろう。

「…了解しました。では僕は一人で向かいます。他にご報告はありますか?」

「ええ、取調室に閉じ込められている塩野さんから良い証言が出ましたよ」

「どんなことですか?」

「ええ、高槻泉の家にあった冷蔵庫にあるタッパーが彼女が喰種である証拠です。そのタッパー中に人間の体のようなものがあつたように」

「人間の体?」

「つまり、高槻泉は喰種です。あと塩野さんは聴取室にずっと閉じ込められていますので、そろそろ開放してくださいね」

旧多さんはそう言うのと、『では、高槻泉をお連れてくださいね』と僕の前から去った。

僕は彼の姿が見えなくなつたと確認すると、疲労を含んだため息をした。

これでやっと彼女が喰種である証明ができる、と。

しかし、展開が早すぎるような気がする。

今まで待っていた高槻泉が突然姿を現し、今まで確証がある発言をしなかつた塩野さんから突然喰種である証言が出る。

何か都合が良すぎる気がする。

しかし、今これらに気を取られてはいけけない。

僕はそう思いながら、高槻泉の家へと向かった。

346プロダクション 346カフェ。

朝の忙しさが終わり、ひと段落した10時頃のこと。

カフェの敷地内ではある二人の女性がいた。

「やあやあ、久しぶりだね、文香ちゃん♪」

「……」

そこには346プロダクション所属の一ノ瀬志希と鷺沢文香がお互い対面するようにテラス席に座っていた。

彼女たちがいる周辺には誰もおらず、二人だけの空間が出来上がっていた。

「こうして二人つきりになって話すのって、久しぶりかな。下手したら一年振りかもね」

「……」

しかし志希と文香には不穏な空気が流れ、全く会話が成立していない。

だが志希は黙り込む文香に気にする事なく淡々と話し、頼んで数十分が経った冷めたカフェオレを飲む。

「それで、あたしをここに呼んだ理由はなに？文香ちゃんから声をかけるなんて、本当に珍しいね。ねえ、どんなこと？」

「…… 志希さん」

ずっと沈黙を保っていた文香の口をやっと開いた。

「お、やっと口を開いた♪なにー」

「あなたは、”私の味方”ですか？」

「っ」

志希は文香の言葉にヘラヘラとしていた態度がピタリと止まった。

この時、志希は文香の言葉にふと頭の中でわかってしまった。

ああ、ついに敵意を向けられてしまった、と。

加速する、亀裂

今日仕事はなく、用もないのに346プロダクションに訪れ、敷地内にある346カフェにいる、あたし・一ノ瀬志希。

いつかは来ると思ってた、この時。

いくらか回避する手段はたくさんあったはずなのだけど、結局避けることはできなかった。

この衝突を起こすきっかけを作るのは、もしかしたらあたしかもしれないと薄々ながら予想していたのだけど（自分で言うのはあれだけど）、まさか文香ちゃんから来るとは少し驚いた。

「味方、ね」

あたしは文香ちゃんが言った単語を反芻するように呟いた。

味方の類義語は仲間、同胞、同士、友達など、良い関係を表す単語だ。

要するに文香ちゃんはあたしのコトを仲間なのか？と聞いている状況だ。

ここで関係を壊すか？

それとも維持するのか？

この状況で答えるのはただ一つしかない。

あたしの頭の中では。

「あたしは文香ちゃんの味方——」

「いや、違います」

あたしが話していた途端、文香ちゃんは食い気味にあたしの言葉を遮る。

「違う？何が違うの？」

「……とぼけないでくださいっ」

涙を流すんじゃないかと言うぐらいに声を振るわせる、文香ちゃん。

どうやらあたしとは意見が違う模様。

前髪で隠れる目は、まっすぐとあたしを攻撃するぞと言わんばかりに敵意を向けていた。

「あなたは、私を味方だと思っていないません…。」

「へえ、なぜ?」

「…あなたは、私の味方じゃないです」

「はい?理由になってないんだけど?」

何かを恐れながら必死そうに話す、文香ちゃん。

おそらく本当の感情を抑えている。

もしかしたらあたしに嫌われるんじゃないか、と。

まあ、変に嫌われないように中途半端に話すぐらいなら、嫌われる覚悟で感情を曝け出した方が、こっちとしては苛立ちがなくなるんだけどね。

「… 私はあなたを信じることができない。あなたはー」

「ねえ、文香ちゃん。何を躊躇しているの?」

「… え?」

「さっきから理由になってないし、変にぶつぶつと話しているじゃん」
本当の感情を出す方法。

それはすぐに変えるコトができないことを指摘する。

要するにコンプレックスの指摘。

あたしは文香ちゃんに容赦なく問い詰めることにした。

「な、なんですか…?志希さん?」

「まったく、とぼけないでよ。最近、自分から避けようとしているし、前髪が隠れて暗いし、変なコトを言っているし、自分が惨めだと思わないの?」

「… なんてそんなこと言うんですか?」

「ん?簡単だよ。文香ちゃんはあたしを敵だと見ているよね?実は心

の奥底でそう思っているでしょ？」

ああ、やつと開き始めた。

徐々に口調が荒くなる、文香ちゃん。

いつもなら丁寧な口調で話す文香ちゃんだけど、今は違う。

でも、まだ本当の感情は開いていない。

「て、敵……？いえ、私は志希さんのことは……」

「あれ？さっきの発言とは矛盾していない？さっき文香ちゃんはあたしに『味方ですか？』と言ったよね？それなのに、あたしを敵と見ていないの？まったく噛み合っていないんだけど？ねえ、どうしたんですか、鷺沢文香さん？」

「……っ」

あまりにも問い詰められたためか、文香ちゃんは視線を下に向き、口を閉じた。

人によつては文香ちゃんを可哀想と思うかもしれないけど、そんな甘ったるいコトをしていちやダメだよ。

時には厳しくしないと。

さて、さらに厳しくするためにあたしはある人の名前を強調するように出すコトにした。

文香ちゃんが嫌っている人の名前を。

「あたしは前から思っていたのだけど、もしかして文香ちゃんは〃卯月ちゃん〃のコト嫌い……」

「……っ!!!」

卯月ちゃんの名を出した瞬間、文香ちゃんは思いっきりテーブルを叩いた。

「なに机を大きく叩いてるのよ？駄々をこねるガキと変わらないよ？」

「…… あの女の名前を出さないで」

「あの女？誰のコトを指しているの？もしかして、あたしのコト？」

「お前のことを言ってるじゃねえよ!!!チエシヤ猫野郎が!!!」

怯えていた様子から一変、怒りの感情を剥き出した、文香ちゃん。まるで一瞬にして現れた突風のように現れた、怒りの声。

あたしは思わず『ハハハッ』と状況に反するように笑い声を上げてしまった。

ああ、これだ。

体の芯までくる、怒号。

喉から限界に出た声は、ドラマでも映画では味わえないリアルティ。

これが文香ちゃんの胸の奥底にあった本当の感情だ。

「わお。キミにそんな感情が出るんだね」

「ああ、もう。なんでいつもニヤニヤしてるの？ 気味が悪い」

「それはどうも。あたし、そう言う人間なんで」

あたしはそう言うと、冷たくなったカフェオレを一気に飲み干した。

その時のあたしはあえて余裕を出していた。

そうした方が、感情的になっている人間は自分の行為がみつともないと感じるはずだけど、文香ちゃんにはその様子がない。

「それで、どうしてあたしの友人を嫌っているのよ？」

「友人？ なんであの女と仲良くしてるのよ？」

前髪を乱れさせた様子で、まっすぐとあたしを見る、文香ちゃん。

ああ、怖い怖い。

ドラマで見るよりは臨場感がある。

「そりゃ、簡単だよ。卯月ちゃんは可愛いから。ただそれだけのことだよ」

「可愛い…？ それだけ？」

「うん、それだけかも」

「…つまらなくないの？」

「つまらない？」

あたしの言葉にうつすらと嘲笑った、文香ちゃん。

「あいつはただそれだけの存在じゃないの？ 特筆した部分もなく、街中で見かける普通の女と変わらないじゃない」

「普通の女ね。確かにそうかもね」

卯月ちゃんと言えば、笑顔を強調した子というイメージがある。

だがそれを除いてしまえば、普通の可愛い女の子になる。
まあ、ギフトツドのあたしと比べたらね。

「文香ちゃんに質問するけど。普通ってなに？」
「は？」

「普通ってなに？ふっ・っ・うってなんですか、鷺沢文香さん？」
「普通って・・・」

あたしの返事に言葉が詰まる、文香ちゃん。

先程の嘲笑いが消え、文香ちゃんの顔は答えを探していた。

「これはあたしの私感んだけど、あなたも普通じゃないですか？」
「私が・・・？」

「そう、あなたもですよ。まず普通というとおそらく世間から見た普通が一番基準に合いやすいじゃない？それで、世間で見た普通で見ると、あなたはただ本を読んでいるただの女じゃないですか？」

「・・・じゃあ、なんで普通しかないあの女といえるのよ？」

「だから、同じコト言わせないでよ。あの子が可愛いから」
「ーっ！！」

文香ちゃんはあたしの理由を聞いた瞬間、齒軋りをした。

なんであたしの質問から逃げるんだよ。

「・・・あなたは私を応援していたはずですよね？」
「応援？」

「そう、あなたは私を彼と一緒にすることを応援していたんじゃないですか!!それなのになんで私ではなく、あの女を応援し続けるの!？」

「あー、そうだったね」

ついに触れてきたかと察した、あたし。

ここで、文香ちゃんの現実を突きつけるコトにしよう。

文香ちゃんの周りで起きている”悪影響”を。

「鷺沢文香さん。あなたはと言った状況かわかりますか？」
「・・・はっ？」

「あなたは精神的に障害を持つほど危ない状態であることをご存知ですか？」

「何よ。恋愛はある意味病と同じじゃない？何が違うのよ？」

「いや、それだけじゃない。ちゃんと聞けよ。キミは恋愛だけじゃない、他も危ないって言っているの」

「他…?」

「例えば仕事を挙げよう。同じく仕事をする”ありすちゃん”が一番わかりやすいよね」

「あ、ありすちゃん…?あの子がどうしたんですか?」

「まだわからないの?ありすちゃんは、キミのコトを怖がっているんだよ。ずっと前からね」

文香ちゃんは彼のコトに注ぎ過ぎたため恋愛どころか、他の人間関係にも支障が出始めている。

例えば、ありすちゃんが一番いい例だ。

ありすちゃんは毎回文香ちゃんの横にいるたびに、わずかながら怯えている。

以前のように安心感を持っていた日が懐かしく感じるほど、状況は悪化している。

「あの子はキミのコトを憧れの存在だと認識しているの。なのに、キミはどんどんと悪い方向に向かっていくコトを知らないの?」

「何が悪いのよ…?」

「悪い?」

「私は彼のためにアイドルになったのに、突然彼はいなくなった。彼がいなくなった時、私はアイドルなんかやめようと考えていたのに、また彼が現れたじゃない!!佐々木琲世という、彼が!!!」

文香ちゃんはどうしたらいいのか変わらずヒステリックに叫び、頭を抱えた。

ああ、そうだった。

ササハイさんが文香ちゃんの前に現れた瞬間、文香ちゃんは涙を流し、彼に抱きついたんだ。

一見するとこれだけを言うと卯月ちゃんの時と同じようにも思える。

しかし文香ちゃんは卯月ちゃんの時とは違うのは、その光景を見た周りの人たちの状況だ。

卯月ちゃんの時は出会えたことに嬉しさのある空気だったらしいけど(その時の場にはあたしはいなかったけど)、文香ちゃんの時は嬉しさと言うものは真っ先に浮かばなかった。

文香ちゃんとササハイさんの周りの人間(あたしと美嘉ちゃん、ありすちゃんに奏ちゃん)は嫌な予感を抱いたかのような空気を出していた。

これから何か嫌なコトが起きるではないか、と。

「そうなんだねえー。じゃあ、キミは今すぐアイドルをやめないの?」

「アイドルをやめる...?あなたは、今までの私の行動が間違っていると言いたいのですか?」

「もし間違っていると言ったら、どう思う?」

「っ.....」

あたしは愛想な一欠片もなくそう言うと、文香ちゃんは歯を食いしばりながらも何もしやべらず黙った。

今まで歩んできた道を否定する。

大体の人間はできないこと。

費やしてきた時間が無駄であるなんて、誰も思いたがらないよね。

まあ、あたしはいつでも捨てる覚悟は持っているけど。

しばらくあたしたちの間に沈黙が漂い、ついに文香ちゃんは『「ーもうあなたと会話をしたくありません」と口を開き、席から立ち上がった。』

おや、諦めか?

あたしは軽い口調で話すことにした。

「ああ、奇遇ですね、鷺沢ー」

「これ以上、私の名前をもう言わないで!」

またしても文香ちゃんの耳に響くヒステリックな声が現れ、まっすぐとあたしに指を指した。

普通の人には見られない、今の文香ちゃん。

ああ、怖い。

「まったく...叫ばないと気がすまないの?キミーっ」

あたしはやれやれと呆れた様子で文香ちゃんを見た瞬間、突然あた

しの口から言葉が出なくなった。

それは文香ちゃんのある姿が久しぶりに現れ、驚いたのだ。

「あ、あなたのような… ひ、人と… 付き合うんじゃないかな…」
綺麗な蒼い瞳から静かに涙を流し、声を震わせる、文香ちゃん。

その姿は今懐かしき、壊れる前の文香ちゃん。

アイドルになり始めた頃の懐かしい姿だ。

その時の文香ちゃんは無茶をしてくるあたしに少し困ったものの、優しく接していた。

意見を強く言わず、何事にも優しく、静かな姿だ。

「っ…」

その一瞬の姿を見たあたしは、胸の中に後悔が生まれてしまった。

文香ちゃんに攻めてしまったことへの、後悔。

いや、罪悪感と言うものが一層強くなってしまった。

だけど、カネケンさんと出会ってしまったことで、文香ちゃんは壊れてしまった。

文香ちゃんはカネケンさんに依存をし過ぎたんだ。

今いる友達も、時間も、何もかもを彼を優先してしまっただが故の哀れな姿に。

文香ちゃんの懐かしい姿に声を失っていたあたしは『…』。そんなんだね』と不慣れな口調で呟こうとしたが、文香ちゃんは既にあたしの前から去ってしまった。

どのようなにして去ったのかは覚えていないのだけど、少なくとも涙を流しながら去っていたと思う。

「… あーやっちゃった」

一人346カフェに残ってしまい、大きいため息をした、あたし。
喧嘩の後の白けた空気。

ほんと嫌い。

これだから人間関係の亀裂は嫌なんだよ。

実験で失敗した時よりも失望感が強く、香水よりも記憶に染み込む。

先程の文香ちゃんの名がガラスの破片のように肉体に突き刺さり、そして破片が肉体の奥に残り、今でも頭の中で思い出してしまふ。あたしは文香ちゃんが一切、手をつけていなかった冷め切った紅茶を渋々ながら飲み干し、二人分の料金を支払い、誰も気づかれぬよう事務所から出た。

その後の出来事なんだけど、あたしの家に帰るまでの記憶が思い出せなかった。

いつもだったらなんとなく思い出せるはずの帰路が一ミリも思い出せず、家に帰った時にはなぜか手にはテネシーウイスキーとどこかのコンビニでウイスキーを買った時に受け取ったレシートを持っていた。

おそらくストレスで一部の記憶が消えたのだろう。

確かちゃんとした病名もある。

でも今は思い出すほど価値のある記憶はない。

そう思ったあたしは家のリビングに入ると、ウイスキーのキャップを取った。

科学的に悪いヤケ酒をしよう。

破局通知

夜に繁華街が眩しく輝く夜。

志希が住んでいるアパートに向かった、アタシ・城ヶ崎美嘉。本当なら仕事の疲れを抱えながら家に帰る予定だったけど、ちょうど事務所から出た直後、志希からの電話があった。

その電話はただ『あたしの家に来て』と言う返事だけだった。

(また変なことをしているなあ…。志希は)

アタシは電話を切るとため息をし、疲れ切った体をなんとか動かしながら志希が住んでいる家に向かった。

志希の家に行くの言い過ぎかもしれないけど、半年ぶりな気がする。

前は毎週行っていたのだけど(ほとんどはあつちが呼んでいた)、今ではなぜか急に連絡が途絶えた。

志希が住んでいるアパートに行くと、他の部屋はきつちりとドアが閉まっているのに、一つだけ半開きのドアがあった。

その部屋は明らかに志希の部屋だった。

ああ、やっぱりと確信をした瞬間ため息をしたアタシは、志希の部屋へと入った。

玄関を見ると志希が自信が体をひきづりながら家に上がったかのように床に敷いてあったマットがぐにやりと曲がっており、靴は廊下に放り出されていた。

また、いつものめんどくさいことに絡まれるのだろうと、アタシは志希がいるであろう部屋に向かうと。

「…どうしたの、志希?」

アタシは思わずそう言いたくなるような状況に出会ってしまった。

「やあ、美嘉ちゃん」

それは志希の部屋が散らかっていたのだ。

ただ散らかっていたのではなく、一人でやったのかと疑ってしまうほど部屋がめちゃくちゃになっていた。

本棚が地震で倒れたかのように倒れ、フラスコやシリンダが一つ残らず破壊され、そしていくつかの写真が「特定の人物」にボールペンで書かれた黒い丸で顔を隠されていた。

そして志希本人は机ではなく床で一人で黒いラベルが貼っているウイスキーをロックで飲んでいた。

「… 美嘉ちゃんもしかして、仕事帰り？」

「… あ、当たり前でしょ？ 志希はアタシの予定は知ってるでしょ？」

「… ああ、そうだったね。忘れてた」

志希はアタシの返事に少し間を置いて、「ああ、そうだった」と何度も呟いた。

反応は鈍く、おそらく飲んでいるお酒で酔っている。

志希は基本ネガティブなことがあっても自分で解決をするのだけど（たまにアタシに愚痴として話す）、今の志希の様子を見る限り、何か特別嫌なことにあつたみたい。

「それで、なんでアタシを呼んー」

「文香ちゃんと絶縁した」

「… はっ？」

酒で酔っていた志希の口から言い渡された言葉に、その時のアタシは理解が追いつかなかつた。

その時の志希の声は一瞬、冷静になっていた気がした。

「文香さんと絶縁って…」

「うん、そのまま意味だよ。人間関係を切ったんだよ」

志希はそういうとアタシに振り向くことなく、ただ何も無い真っ白な天井を見ていた。

いつも志希から聞く冗談はまったく感じ取れない。

明らかに本当のようだ。

「な、なんで、文香さんの縁をー」

「美香ちゃんも薄々感じてたでしょ？ 特にクリスマス会の後のあたしと文香ちゃんの間を」

「ー」

アタシは志希のその言葉に思わず言葉を止めてしまった。

凶星だ。

「あの時のあたしと文香ちゃんはお互い直接口論だったり喧嘩はしなかったけど、空気からして争っている感じだと認識していたよね？」

「え… そ、それは…」

「多分、文香ちゃんからも同じ言うかもね。あの人とは関係を切つたとね」

「なんで絶縁することになったのよ!？」

「言えない」

「… はあ?」

「お願いだから、聞かないで。これはあたしと文香ちゃんの問題なのよ。美嘉ちゃんは何も聞かないで」

「聞かないで?…」

理由はわからないけど、志希の様子をみる限りかなり深くこじれているように見える。

「… 美嘉ちゃんはわかるよね。今の文香ちゃんのこととは?」

「今の文香さんは…」

アタシは言おうとしたが、何かを拒絶するかのよういつのまにか口が動かなくなった。

自分の胸の奥底にある触れてはいけない気持ちに触れそうだったのだ。

これを口に出しているのかそう迷った時、志希はわざとらしくため息をし、アタシの言葉を待たずに口を開いた。

「美嘉ちゃんはこう言いたいでしょ。文香ちゃんはカネケンさんが消えたことで心が病んで、雰囲気も暗くなり、そして自ら孤立という道を歩んでいった」

アタシが答える前に志希が早口で答え、そして最後に『ねえ、これで合っているでしょ?』と自分を失笑するようにわらった。

志希の言葉をきいたアタシは何も言えなかった。

志希が言っていたことは、ほとんどと言ってもいいほど間違っていないからだ。

「やっぱり、美嘉ちゃんも思っている」

「い、いや…それは」

「否定したって、もう遅いよ。他人事のようにしないで。ほら、友達の会話にもあるよね？上手くいくはずがない恋愛を、誰も否定せずに上手くいくと言う流れみたいのと同じじゃない？」

「そ、そうかもしれないけど…志希も同じじゃないの？」

「じゃあ、どうしろと言うの？片方しか手に入らない状況に、どうしたら両方を持つのか？キミは知っているの？」

「っ」

「大体、あたしの苦労はわからないよね、キミは？両方大切な存在なのに、どちらか片方を切り捨てなければならぬ状況を。今、あたしはついさつき苦境に立っていて、その後に出てきた後悔を酒で浸している状態だよ？ねえ？わかー」

「ちよつと、志希!!」

志希の詰め寄った問いにアタシはついカツとなってしまうた。

普段プライベートで感情的になることがないアタシが声を上げたのだ。

「いくらアタシに問い詰めても、何も変わらない。アタシを問い詰めたら、事が治るとでも？何バカなことをしているのよ!!」

「…」

どこから聞いたことだけど、志希がやっていることはまるで誰かを責めれば事が治るようという思い込みが存在している。

良い例え方じゃないけど、政治家を叩けばなんとかなるとかのよう

に。
先ほどアタシを問いただした志希は数分ほど黙り込むと、静まった空気にしらけたかのようにため息をし。

「…おっと、感情を入れすぎた。まったく落ちぶれたよ、あたし。危うくもう一つ、大切な存在をぶち壊すところだったよ」

志希はそういうと、哀れな自分をまた嘲笑った。

「それで、志希はこれからどうするの？」

「…どうするって？」

「文香さんだよ。本当にもう話さないの？」

「おそらくこれからあたしは文香ちゃんとは声を交わすことはないよ。仮にあの子と会った時は、赤の他人のように扱うだろうね」

「… ああ、わかった」

アタシは志希が文香さんと会うことを想像したら、すぐに理解した。

今の文香さんだったら、志希を空気のように無視するだろう。

「これからは文香ちゃんの話は、頼んだよ。美嘉ちゃん」

「… 頼んだ？」

「そう、頼むよ。文香ちゃんはおそらくまだ美嘉ちゃんを敵として見ていないよ」

「まだ？」

「そう、美嘉ちゃんが文香ちゃんに変なことをしない限り」

「… わ、わかったよ」

アタシは文香さんには失礼なことではないが、志希の言葉を聞いて文香さんに接するときはさらに慎重にならなければならないと考えてしまった。

別に気を遣って会うような人じゃないのに、今後もそのように接しないと逆鱗に触れるんじゃないと。

「じゃあ、そういうことで美嘉ちゃん。あたしが話したいことはもう話したよ。まだあたしと一緒にいる？」

「いや… アタシはもう流石に帰るよ」

今の志希の様子を見る限り、しばらく一人にさせた方がいい。

絶対静かな空気をただ聞く時間が過ぎるだけだ。

「良い判断だよ。あたしと酒を飲んだって、大して美味しくないし、美嘉ちゃんは明日も仕事だよ。明後日の写真撮影の」

アタシから言っただつもりはないが、なぜ志希はアタシのスケジュールを知っているんだよ、と心の中でツッコんだ。

「じゃあ、アタシは帰るね。あと、そろそろ仕事に戻りなよ。もう半年も仕事をしていないのに」

「… 考えとく」

アタシはその志希の言葉を最後に聞くと、家に出た。

そしてガタンつと志希の家のドアを閉めた時、アタシはしばらく足が動かず、志希の家のドアの前に立っていた。

「……」

アタシの胸の中にならずと隠れていた無力さが現れたのだ。

恐れていたことが。

誰も解決策も出さず、放置していた問題が表に出ってしまった。

(……どうすればいいのよ)

これは指摘しなかったアタシも悪いが、自分だけではなく周りも責任がある。

暗くなりつつある文香さんを、触れなかったことを。

だけどそう考えた時、頭の中にぐるぐると回り続ける言葉がある。

どうすればいい？

次は何をすればいいの？

具体的な解決策は？

なぜ防げなかった？

次は”誰を嫌う”？

アタシは文香さんから嫌われるの？

自分を責めているように、アタシは考えてしまう。

答えがない、問題に。

夜中・都内某所

冬を告げる風が微小に吹く中、一人の男がとあるビルの屋上にいた。

俺の名は霧島絢都。

人間ではなく、喰種だ。

そこらの人間がこんな真夜中にビルに立つやつなんていない。いるのは喰種ぐらいだ。

いつも俺はビルの屋上にいる時は大体一人で考える時に立つ場所だが、今回は”ある人物”を待っていた。

その人物の特徴は何も特色もない白い仮面にお偉いさんが着そうな綺麗なスーツを着ていたヤツで、体つきと声は小柄な女だった。

(… 本当に来るのか?)

ヤツとの出会いは突然だった。

ヤツは何もないところから現れ、そして最初から存在しなかったように消える謎があるヤツだ。

そんなやつになぜ俺が再び会う約束をしたのか?

それはヤツから”ある提案”を受けたからだ。

(… まさか嘘の約束?)

他のビルにあるデジタル時計を見ると、あと1分で12時になる。

ヤツとの約束では夜の12時に会う予定なのだが、一向して来る気配がない。

俺はよくわからないやつに騙されてしまったか、と呆れたため息をしようとした瞬間だった。

「ラビット、だな」

声が出たに振り向くと、ずっとそこにいたかのようにヤツが現れていた。

ちょうど北と東の間に現れ、ずっとそこにいたかのように立っていた。

「… 本当に来たんだな」

「時間通りだ。お前は時計の見方がわからないのか?」

デジタル時計に指を刺した。

確かにヤツの言う通り、予定時刻12時ぴったりだった。

「本当に取引をするんだな」

「ああ、その通りだ。約束通り、”取引”をしよう」

ヤツはそう言う俺が求めている”例の物”をスーツの内ポケットから取り出した。

こうして、俺とヤツとの取引が始まった。

味方なのか、敵なのかわからないヤツとの。

取引の条件

夜中・都内某所

俺・霧島絢都はとあるビルの屋上にて白仮面をつけ、黒のスーツを着た”喰種”と会った。

「さて、お前が求めているものはこれだろ」

ヤツは俺に向けて一枚のカードをスーツから出した。

「本当にあの監獄を開く鍵か？まさかニセモノじゃないよな？」

俺がヤツに求めていた物はCCGと書かれたカード。

23区にある喰種収容所”コクリア”に入るための鍵だ。

「間違いはない。カードの裏面を見る。このカードの所有者は***

***捜査官。監獄に出入りする”ハト”だ。信用がないならこの携帯を受け取れ」

ヤツはそう言うと、俺に携帯を投げつけた。

確かにヤツの言う通り、名前を覚える価値がない”ハト”（喰種捜査官）で携帯にある情報を見れば嘘ではなかった。

携帯には登庁の記録やこの”ハト”が映った監視カメラ、それに住民票や運転免許証などの記録があった。

「このカードの所有者はつい先日”事故”で亡くなった。若者の改造車に正面衝突し、このハトが乗っていた車はすぐに炎上をした」

ヤツは簡単そうに言ったが、実際は簡単なもんじゃない。

ハト（捜査官）から監獄・コクリアの鍵を得た喰種は聞いたことがなく、仮にあつた場合ハトどもは厳重警戒をするのだが、なぜかそのような気配がまったくない。

「これで満足だろ。次は有馬貴将を暗殺しろと言うのか？」

「いや…これだけで十分だ」

ヤツは冗談を言ったと思うが、もし頼めば本当にやれるのか…？

「とりあえず、これでいい…」

それで俺は『そっちの要求はなんだ？』と聞こうとした瞬間だった。

「そういえば、最近は見なくなつたが、お前は何をしている？」

ヤツは俺の言葉を聞くことなく、突然雑談を始めた。

「…は？なんだ？」

「お前はオークションでは散々暴れたようだが、ここ最近暴れた様子はないな」

オークション。

それは喰種が開催する人間を取引するオークションのこと。

取引の目的は奴隷、食用など目的は様々。

前に俺はオークション参加者（喰種）の警護をしていたのだが、結果は失敗に終わった。

オークション参加者はハトに殺されるか、または確保をされ、生き残りはほとんどいないそうだ。

「お前らアオギリは、次は何をする？逃げ場もない島に拠点を置きながらも何も行動もせず、捜査官の上陸を待つのか？」

この時の俺が所属するアオギリはこの時、東京湾にある孤島・流島るしまに拠点を置いていた。

組織内ではハトたちの上陸作戦が近日起きるんじゃないかと言う話がざわざわと耳にする（俺は上陸は時間の問題だと認識している）。

「まさか…知りたいのか？」

つまり、こいつは俺たちの情報を報酬として得るのか？

疑念を持った瞬間だった。

「いや、お前らアオギリの情報を得ても、こちらが得することはない」
「…は？」

心を読まれたのかと思ったのだが、結果は違った。

「お前たちの動向を聞いても何一つもない。やれることと言えば、監獄に配置される捜査官を減らすことだが、そうしたら対等取引はできない。」

「対等ではないか…なら俺からやれることはなんだ？金か？」

「悪いが現金は有り余っている。お前らの金は私にとって雀の涙ほどしか価値はない」

ヤツはそう言う『お前が渡す金は、私の月の手取りだ』と煽った。

どうやらヤツはかなりの資産家らしいが、俺が知っている限り、思い当たる人物が浮かばない。

おそらく人間社会に溶け込んでいる喰種なのか？

「じゃあ、どうするんだ？この取引は時間の無駄だったのか？」

「ああ、そうなってしまふな。だが、それではつまらない」

「つまらない？」と俺がそう呟くと・・・

「・・・じゃあ、こうしよう。私からの要求は、コクリアで存分に暴れろ」

「・・・は？」

俺はそいつの言葉に一瞬思考停止してしまった。

こいつは一体何を言っているんだと。

「お前はなにをいっているんだ？」

「そうした方が“こちら側”としてはありがたい。あの要塞をもう一度混乱させろ」

かつてコクリアは喰種に襲撃されており（今回はアオギリによる襲撃）、もう一度俺たちが襲撃することになる。

「お前からのサポートはあるか？」

「大丈夫だ。ある程度対策をしておく」

「具体的にはなんだ？」

「配置捜査官を減らすことも一つに手だが・・・佐々木琲世がいると言えはどうか？」

「は？」

まさかのそいつの口からあの名前が出るとは思わなかった。

「お前は佐々木琲世と言う捜査官は知っているか？」

「・・・ああ、わかる、喰種の実力を持ったハトだろ。最近はクインクス（喰種の実力を持った捜査官たち）から抜けたと聞いたが、なぜそんなことを言うんだ？」

「ヤツはコクリアで待機する。他の半喰種捜査官どもはお前らの拠点に上陸すると聞いた」

「・・・そうか」

別にコクリア襲撃に有利になるような情報ではないはずなのだが、俺は納得したかのように頷いてしまった。

ヤツはかつて俺と戦ったことの“ある半喰種”に似ている。

まさかと思うが、あの半喰種と同一人物じゃないかと思う。

「私からは以上だ。これで取引は成立でいいだろう?」

「... ああ、わかった」

そう言うのと、俺はヤツからコクリアを開けるカードを受け取った。

「では、これで取引は終了だ。何か聞きたいことはあるか?」

「... ひとつある」

俺はこいつと会って少し気になることがあった。

「なんだ? 言ってみろ」

「... お前は喰種なのか?」

「.....」

ヤツは俺の言葉に鼻で笑った気がした。

それはヤツが喰種であるのかと言う、前提を疑うことだ。

「本当にお前は喰種か?」

「... 私が喰種ではないかと疑っているのか?」

「いや、ただ聞いてみただけだ」

これ以上深掘りしたら、良からぬ方向に行くのではないかと思い、

これ以上聞かなかつたのだが...

「なら、答えよう。今はわからなくても、いずれはわかるかもな」

「は?」

俺は「どういうことだよ」と聞こうとしたところ、ヤツは「幸運を

祈る」と言い残し、初めからいなかつたかのように姿を消した。

(姿を消しやがった...)

前にヤツと別れた時と同じ感じだ。

すぐに姿を消す。

謎大きい人物だ。

ちなみに俺がヤツに喰種である確認をしたのは、ヤツから妙に〴〵人

間の臭い〴〵がした気がしたからだ。

同時刻

僕・佐々木琲世は高槻泉を喰種収容所コクリアに送り、帰宅して
た。

気がつけば時間は深夜になっており、今の選択肢はただ帰るだけ
だ。

(…)

通常の業務はここまで時間をかけることはないのだが、今日は違っ
た。

それは喰種の容疑で逮捕された高槻泉の新作発表会に同行し、そこ
で彼女は自ら喰種であることを告白をした。

(… 楓さん)

発表会前に高槻泉から頭から離れない話を聞いたのだが、その一
つに意外な事実があった。

『君は、高垣楓と知り合っていたら。喰種捜査官になる前から』

彼女は僕が高垣楓さんと知り合っていることをなぜか知っていた。

『なぜ、知っているのですか?』

『ああ、私はあの喫茶店で高垣楓が働いていたことは昔から知ってい
る。キミもだろ?』

『…彼女には聞いていませんが、知っています』

『なるほど、今のキミとしては聞いていないんだな。まあ、いい』

高槻さんはそう言うと、僕はなぜ楓さんのことを聞いたのかと聞い
たら、彼女はこう言った。

『彼女はまるで別の世界線の私だ。喰種と言う運命がなかったもう一
人の自分。それが憎いのだよ』

彼女は恨みと寂しさが混じった笑いをした。

それは叶えられなかった夢を想うように。

僕は高槻泉のその言葉を聞いた後、しばらく彼女からの話が頭に入
らなく、彼女を喰種収容所・コクリアに収容した。

もしかして、これから高槻泉は楓さんに何か行動を起こすのではな
いか?

そう考えていた時だった。

「やあ、ササハイさん」

すると誰もいない夜道の僕の名前を呼ぶ人の声があった。

深夜であるこの時に声をかけられるのは、異様に思える。

だがその声は警察官でもなく、不審者はない聞き慣れた女性の声であつた。

振り向くと、道路の真ん中に一人の女性が立っていた。

「…志希ちゃん」

「やあ、元気？久しぶりだねえ」

にやはは、と軽く笑う彼女。

僕の前に現れたのは、志希ちゃんだった。

秘密の協力？

それは日付が変わった夜道のこと。

喰種収容所　コクリアから自分の家へと移動していた僕・佐々木球世の前に肌が少し見え、薄い寝巻きに上着を着ていた志希ちゃんを立てていた。

「久しぶりだね、ササハイさん」

「……」

志希ちゃんの返事を聞いた僕は何も答えず、沈黙してしまった。何を話そうか考えてもいなかった。

彼女と話すのはあまりにも久しぶりだからだ（約半年ぶり）。

「まったく、そんな冷たい目で見ないでよ」

志希ちゃんは何もしゃべらない僕に何も気にすることなく淡々と話し、にやははつとニコニコした顔で近づいた。

「いや、久しぶりにササハイさんの顔が見れて嬉しいよ。前は髪の色が黒寄りになっていたけど、今じゃ髪だけじゃなく容姿も真つ黒だね。やっぱり、楓さんの言う通りだね♪」

「……」

僕はそれでも沈黙を貫き、しばらくすると志希ちゃんの話の途中から耳を傾けず、ただ黙って足を止めていた。

そんな僕の素っ気ない姿でも志希ちゃんは何気なく普通にしゃべる。

「それで、ササハイさんは最近何やってるの？」

「…… 仕事だよ。さつきテレビで見なかった？」

しばらく志希ちゃんに話すことがなかった僕はやっと口を開いた。理由は単純、さつきと僕の前から去って欲しかった。

だが、彼女はそう簡単には離れる人間ではない。

「テレビ？あんな洗脳器具を見るような人間じゃないから、見てないよ？何してたの？」

「高槻泉の最新作の発表。僕は彼女から同席を求められた」

「誰それ？タカツキ？楓さんのそっくりさんなのかわからないけど、

その人はユーメーションなの？志希ちゃん興味ないからわからない」
「そうなんだね」

僕はただ興味が感じられない返事をした。

前の僕だったら志希ちゃんに一個一個の言葉に説明するのだが、今の僕は説明する配慮はない。

彼女の行動の一つ一つが鬱陶しいという感情だけ。

「それで記者会見での対応に追われ、高槻泉を23区の喰種収容所に収容して今、帰っていたんだ」

「へーそうなんだね。大変だねえ〜お疲れ〜」

話の内容にあまり興味を抱いていないようで、軽く聞き流した程度で頷いた、志希ちゃん。

ここまで冷たく接していた僕でもニコニコとした様子で話していた彼女なのだが、ここから彼女の様子が変わった。

「…別にあたしに対してそんな目で話してもいいけど」

志希ちゃんはそういうと、陽気な雰囲気冷たさにガラリと変わった。

ニコニコとしていた顔なのに、刃物を向けるかのように緊張した空気を放し、冷静な口調に変化した。

「他の子と話す時にさ、そんな目で会わないで。特に」卯月ちゃん“
に対しては」

「……」

志希ちゃんは釘を刺すように“彼女の名前”を強調した。

「なんでそんな真つ黒で冷たい性格になったかは、あたしはあえて聞かないよ。でも、もしそんな腐った目で卯月ちゃんたちと会話するんだったら、もう二度と姿を現さないで」

「……」

「また、沈黙ね。その沈黙は何か言う言葉がないと言うより、どうでもよい話題を聞いている時に見えるけど」

「……」

『ねえ、違うのかな？』とニコニコしつつ、無情な空気を出す、志希ちゃん。

この時の僕はまたしても口を開くことなく、黙っていた。

この時の僕は別に言い返す気力がなく、どうでもいいと思っ
た。

次はどんなつまらない話が来るのか、半分呆れた様子で身構えて
いたら…

「まあ、でも、あたしはキミにはついていくけどね」

「…?」

志希ちゃんはそういうと、先程出していた無情な空気が消え、少
し口角を上げた。

「話せて良かった」

「…そう」

僕らの会話風景に他の人から見たら中途半端な会話に見えるが、志
希ちゃんはそのようなことはどうでもよく笑みをみせていた。

そして志希ちゃんの口から、妙に引つかかる話が出た。

「もし何かあった時、協力してあげるからね」

「協力…?」

「うん、協力」

「何をする?」

「いや、それはお楽しみをもってことで伝えないよ。意外なコトかもね」

「…?」

何か意味ありげな笑いをした志希ちゃん。

何を言っているんだ?

「ちなみにこれはからかいじゃないよ?冗談でもないし、嘘でもない。
本当の協力だよ。まあ、どんな協力かは今は言えないけど」

「今は言えない?なんで?」

「早く答えを求めても、今はできない。キミが本当に必要な時に、あた
しは現れるよ」

一体何を言っているのか?と思った、僕。

雰囲気からすると、いつものからかいに思えないのだが…?

志希ちゃんに一体なんのことだどこの時やつと自ら訪ねようとし
た時、彼女はその場からすぐに離れて、『じゃあねえ』と去って行った。

「……」

志希ちゃんが去り、再び夜中の路上で一人になった、僕。

先ほどまで口を開く気がなかった僕は、何か言えばよかったと言う後悔に似た感情を抱いた。

協力とはなんだ？

人間関係に関する何か？

それとも？……

「……意味がわからない」

僕はそう呟くと、自分の家へと帰った。

久しぶりにあったとは言え、短く、そして何を意味するかわからない話。

彼女は何を言いたかったんだ？

久しぶりに彼に出会った、あたし・一ノ瀬志希。

どうして彼の居場所がわかったのかは教えないけど（ヒント：テレビは見えていない）、半年ぶりに見れて良かった。

彼にあった理由はその時のあたしは美嘉ちゃんと会った後、ふと彼に会いたくなったから。

半年ということもあり、彼の姿は大きく変わっていた。

白と黒のツートンカラーだった髪が真っ黒となり、来ていた服は白黒から黒へ、そしておしゃれなかのかわからない丸メガネをしていた。

だけど容姿よりも気になるコトがあった。

（……ササハイさんじゃなかったな）

彼を見た時の第一印象。

かつて出会ったあの彼と比べると明るさがあったササハイさんだったけれど、さつき出会った彼はそんな雰囲気や微塵も感じなかった。

雰囲気からして、ササハイじゃないとわかる。

別人だ。

(なにがあつたんだろ?)

そう心の中で呟いた、あたし。

答えがわかるみんなは知っているかもしれないが(見てなかったらアニメか漫画で見よう!)、あたしも含め他のアイドルたちは知らない。

彼に何かあつたのは間違いないのだが、原因がわからない。

ただ一つわかるコトがある。

(∴なんかまた隠してるし、次は何をするのかな?)

前に似たような経験をしたコトがある気がする(いや、ないか)。

これから“でかいコト”をするような気がするような、ないような。

とりあえず、彼はこれから何かアクションを起こすような空気があつた。

(∴まあ、あたしがやれるコトとえば、今後の彼の行動次第なんだけどね)

ちなみに先ほど彼に『協力』と言つたのだが、それは秘密だ。

一つ言えるコトは『彼と関係するコト』だけ言おう。

あたしは自分が住むアパートへと帰った。

さて、これからどんな展開になっていくのか?

みんなはこれから彼がどんな行動をしていくか、わかるよね?

まあ、あたしたちの行動がどう動くかはお楽しみに♪